

スーパーロボット大戦 OGs～獅子の牙～

Mk—IV

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新西暦179年。

アイドネウス島に「メテオ3」と呼ばれる隕石が落下した。

調査の結果「メテオ3」には人類にとって未知の物質と技術が封印されていた。

人類は技術を提供してきた者たちを「エアロゲイター」と呼称し、侵略の危険性を恐れて人型機動兵器「パーソナルトルーパー」等の開発を開始した。

そして、新西暦186年。

テスラ・ライヒ研究所にて一人の少年から物語は始まる。

目次

第一話	1
第二話	13
第三話	25
第四話	40
第五話	58
第六話	76
第七話	95
主人公設定	111
第八話	114
第九話	135
第十話	161
第十一話	178

第十二話	198
新キャラ&機体設定	224
第十三話	227
第十四話	254
第十五話	277
第十六話	300
第十七話	321
第十八話	330
第十九話	345
第二十話	361
第二十一話	371
第二十二話	380
第二十三話	398

第二十四話

第二十五話

第二十六話

第二十七話

第二十八話

第二十九話

エピソード



526 510 471 457 444 432 415

第一話

テスラ・ライヒ研究所

荒野を駆ける人影が一つ、だが人にしては余りに大きく20mはあるだろう。

その人影の名はパーソナルトルーパー。通称PTと呼ばれる人類が青き星“地球”を守る為に生み出した鋼の巨人である。

疾走するPT“ゲシユペンスト”の量産機をカスタムした、“量産型ゲシユペンスト Mk-III カスタム”に乗る男に通信が入る。

「こちら管制室、予定通りテストを始めるぞ」

「りよ〜かい。所長」

通信に対して軽い口調で返す男の声はまだ、幼さを感じられる。

「今回は最終調整の為にテストだ、軽く目標を撃破してくれ」

「小難しい事をしなくていいから楽チンですね」

「だが今回は実弾だへたをしたら死ぬぞ」

「今更それくらいでビビりませんよ、爺ちゃんのお陰で何回も死にかけてますし」

「それは頼もしいな。それにしてもかなり加速しているのに良く平気で話せるな……」

「そうですか？まだまだ余裕ですけど」

現在少年が乗っている機体は従来機のスペックを遥かに超えた速度をだしており、余りの振動に並みの人間では前を見ることすら困難であろう。

試しに知り合いの女性パイロットがシミュレーターでテストしてみたが、体調を崩して「こんな人間が乗る物じゃない」と人外扱いされてしまった。

失敬など思いながらシミュレーターでは、参考にならないと言ったら周りにドン引きされてしまったが。

「さすが先生に鍛えられているだけあるな、ではターゲットを出す。くれぐれも無理はするなよ」

「了解」

少年は気を引き締めてレバーを握り直した所でターゲットである〝71式戦車バルドング〟4両を視界に捉える。

「来たか、行くぞ〟レオ〟！」

機体の愛称を呼び背中にマウントされている機体の身長程の長さの鞘から、日本刀型の〟シシオウブレード改〟を抜き背面にある二つの大型ブースターが、肩まで迫り上がり進行方向と平行に向きながら火を吹き、一気にバルドングに接近する。

対するバルドングの小隊は主砲で迎撃するが、少年は機体をスケートのように左右に

滑らせながら回避する。

「おせえよ」

先頭の車両をすれ違い様の両断しそのまま突き抜け小隊の背後を取り再び突撃する。未だに反転中のバルドングの二両をシシオウブレード改で切り裂き、最後の二両は突き刺して撃破した。

「何だもう終わりか？」

「いやまださ、最後はこれだ」

所長の通信と共にレーダーに反応があり、その方向へ機体を向けると空からこちらに向かってくる機影を確認した。

「うげっ戦闘機かよ……」

接近して来る機体は“F-28メッサー”が二機、大気圏内では飛行できないPTにとつて航空戦力は天敵なのである。

メッサーからミサイルが放たれるが、頭部のバルカンで撃ち落としながら回避する。

「まっ二機なら問題ねえけどな！」

そう言つてペダルを限界まで踏み抜くと、ブースターが地面と垂直になるように向きを変え、機体を空へと持ち上げていく。

そのまま突撃するMk-III カスタムにメッサーがバルカン砲で迎撃するも、強固

な装甲に阻まれて傷一つつけられない。

メツサーの目前まで迫ったMk-IIのカスタムが、シシオウブレード改を振り下ろすと、メツサーが綺麗に真つ二つとなり爆散する。

「コイツでラストだ！」

残りのメツサーに向かって機体を回転させながら、シシオウブレード改をぶん投げると刀身や鏢、柄に設置されているスラスタが火を吹き、ブレードがブルーメランのように加速しながらメツサーを切り裂く。

投げたシシオウブレードが回転しながら戻ってきて、それを掴むと地面に着地する。

「きまったね完璧だよさすが俺」

自画自賛しながらうんうんと頷いていると通信が入る。

「ご苦労さん、帰ってきていいぞ」

「あくお腹すきましたよ帰ったら飯にしよつと」

「その前にレポートを提出したらな」

「鬼！悪魔！そんなに俺を働かせたいのか！」

わざとらしく泣き出す少年に所長と呼ばれている男性は、呆れが混じったような溜め息を吐く。

「いや、テストパイロットなら当然の義務だからな」

「そう言うのはロブさんに任せた方がいいですって」

「それでこの前押し付けられてロブの奴おもつきり泣いてたぞ」

「後でちゃんとご飯おごってあげたじゃないですか」

「飯奢られてなんでも喜ぶのはお前さんぐらいだと思っぞ」

「なんですかそれ！まるで俺が飯に簡単に釣られてしまう男みたいじゃないですか！」

「違うのか？」

「否定はしない!!」

「ハア、もういい早く帰ってこい…」

堂々と胸を張って言うのと、もう疲れたといった感じに通信を切られる。

「ふむ、やつぱり所長疲れてるな、今度栄養ドリンクでもプレゼントしよう」

テスラ研所属者に原因はお前だよと、ツッコまれるだろう事を言いながら少年、イサ

ム・トウゴウは機体をテスラ研へと向けて帰還するのであった。

テスラ・ライヒ研究所 管制室

「ハア、イサムあのマイペースぶりは少しはどうかならないもんか…」

ため息を吐く初老の男はテスラ研所長ジョンナサン・カザハラでつい先程までイサムと

話していた疲れがどつと出ていた。

「所長、お疲れ様です」

そんなジョナサンに対して一緒にいた研究員が労いの言葉をかける。

「まあ、あいつの性格は難が有るが腕は確かだからな実際助かっているよ」

「そうですね。15であそこまでPTを扱える人間なんてそうそういませんよ。特に近接戦闘なら正規軍人を軽く超えていますもんね」

「その代わりに射撃能力は驚異的酷さだけだな」

「ええ、ほぼゼロ距離でやつと命中しましたもんね…」

「本人曰く「もともと人間は殴り合って戦っていたんだから銃が使えなくても問題ない！」だったな」

恥ずかしげも無く言い張った時は逆に清々しさ感じられたものであった。

「お陰で彼の機体を調整するのに苦労して、結局外部の人に協力を要請したんですよね」

「ああ、ラングレー基地のマリオン・ラドム博士かと言うかもはや調整じゃなくて新しく開発したようなもんだな」

「要請していきなり」なら、一気に加速し接近して攻撃すればいいだけですわ」て言つて、イサム君と意気投合して勝手に進めていきましたよね」

「まあ、別に構わなかったんだがね」

実に楽しそうに笑いながら凶面を引いていた女傑と、それに便乗して勝手に資材を使いまくった少年のことを思い起こし、苦笑いをする二人。

「ただ装甲を厚くして、陸戦機に付けないようなブースターや、スラスターを付けまくったりしたせいで機体バランスが最悪になってしまったよ」

「真正正銘の彼専用機になりましたね。他の人間が乗ったら確実にお陀仏ですよ」
「本当にな…実は試しに乗ってみました」

「えっ」

研究員が信じられない物を見るような目で、ジョナサンを見る。

「好奇心がまさってシミュレーションで乗ってみました。そしたら加速した瞬間意識がブツ飛んだよ」

「正しく「好奇心は身を滅ぼす」ですわね…」

「時折アイツが人間か疑うよ、この前なんかテスラ研の壁をよじ登って屋上にたどり着いていたし」

「どこの超人ですかそれ？」

「まあ、ワシに言わせればまだまだだじゃがの」

顔を蒼白にして話す二人とは別の声だし、そちらを向くと右手に持った杖を使いな

がら、歩み寄って来る老人リシユウ・トウゴウが見えた。

「これはリシユウ先生、姿が見えませんが、どちらにいらしゃるのかと思いましたが」

「フォツフォツフォツ、何屋上からしかと見届けていたわ。壁をよじ登ってな」

左手でサムズアツプしながら、ドヤツといいそうな表情をするリシユウ。

(ホント何者だよこの人達……)

「どこにでもいる老人とその孫じゃよ」

(いや、そんなこと出来るのあんた達だけだよ……。つーか、心読まれた!?)

ジョナサン達が驚愕していると管制室のドアが開きイサムが入ってくる。

「ただいまー」

「おう、イサムお帰り」

身長は同年代の男子より少し低く、女性寄りの顔立ちをしているためよく女子と間違えられることが多く、その愛らしさで研究所や関わりのある施設の女性から絶大な人気がある(本人は男らしくしようと、努力しているようであるが……)

黒色の髪を腰まで伸ばし、根元から束ねた所謂ポニーテールを(本人は切りたいたのだが周りがさせてくれない)揺らしながら駆け寄って来るイサムを、左手を軽く振りながら出迎えるリシユウ。

「あつ爺ちゃん、ねえねえ今日のテストどうだった?」

「ふむ、最初の一太刀は良かったが、刀を無闇にぶん投げてはいかんとおもうが」
ワクワクといった感じに感想を求めるイサムに、たしなめるように己の評価を伝える
リシユウ。

「えーだつて、戦闘機が相手だしその方が確実に仕留められるもん」

「外したらどうするんじや、ただでさえまともな武装がシシオウブレードしかないのに」
両腕を後ろに組みながら特に反省している様子の無いイサムに、頭を掻きながらどう
したものかといった感じのリシユウ。

「そんな時はぶん殴る！」

「前向きなのは構わんが、相手が格上だつたら確実に詰むぞ」

「つーか親分だつて斬艦刀投げてるじゃん」

「零式には他の武装が有るし、あやつはちやんと考えておるわい」

「ここには居ない弟弟子を引き合いに出すがあつさりと切り捨てられる。

「俺だつてちやんと考えてるもん！」

「本当かの、お前は熱くなるとすぐ何かしら投げたがるからう。」

「この前レポートが終わらないでイラついて投げたペンがロボットの尻に刺さつて
おつたし」

「（ああ、だからあいつ（あの人）もうお婿に行けないって言つてたのか）」

よく少年によつて災難にあつてゐるロバートという男性に同情を禁じ得ないジョナサンと研究員。

「う、うるさいなーもう、お腹すいたからご飯食べに行こうよお爺ちゃん」

「他にも言いたいことがあつたが、まあいいお前に伝えねばならんことがあるの」

「伝えねばならんこと?」

「食事が終わつてから話そう。では行こうか」

「うん!」

実に嬉しそうに笑うイサム。

その姿はおあずけをくらう子犬が、許しを得て喜んでゐるかようである。

ちなみにその姿を見た周りの女性職員の鼻からは愛が溢れてゐた。

「では、失礼するぞジョナサン達よ」

「所長も皆さんもまつたねー!」

「ええ、私たちはデータを纏めたいのでお二人でどうぞ」

「イサム君またね」

リシュウが一礼してドアへと歩き出し、イサムはジョナサンや他の職員たちにも元気よく、手を振りながらその後を追つていく。

「仲が良いですよね本当に」

「ああ何でも先生が日本にいた頃に親に捨てられていた赤子のイサム君を孫として引き取り育てたそうだ」

「最初に知り合った時は血の繋がった家族にしか見えませんでしたよ」

「血の繋がりが家族に必ず必要ではないと言う事さ。それに比べてアイツは……」

「また、息子さんと喧嘩したんですか？」

頭を抑えて溜め息を吐く、ジヨナサンをまたかよといった目で見る研究員。

「まあな、リン君の事で励ましてやろうと思つたら「うるせえ、ほつとけ！」と怒り出してな」

「へたにからかったんじやないんですか？」

「ははは、いかにも落ち込んでますオーラが出てたんでついな」

「やれやれ、グルンガストの事は伝えたんですか？」

「ああ、そつちは後は送るだけだから問題はない」

心配無用といった感じのジヨナサンだが、正直いまいち安心感が沸かないと思つてしまふ研究員。

「さて、〃コイツ〃を早く仕上げないとな」

「そうですね、ですが〃エアロゲイター〃に対抗する為とは言え、イサム君のような子供に戦わせなければならぬとは、正直辛いです」

自分達大人の不甲斐なさを嘆く研究員。

「あの子が自分で選んだ道さ、ならば我々大人は全力で応援しようじゃないか」
「はいそうですね」

そうやってジョナサンが、PCを操作するとモニターにイサムが乗っているゲシユペ
ンストに似ているが別の機体のデータが表示されるのであった。

第二話

テスラ・ライヒ研究所 食堂

「それで、話ってなんなのお爺ちゃん？」

管制室を出た後食堂で食事を済ませイサムがリシユウに話しかける。

ちなみに彼の周りに重ねられた無数の皿は、彼一人によるものである。

小柄な体つき似合わぬ大食いなのである。

「うむ、実はお前に日本に行つてほしいのじゃ」

「日本に俺だけで？ 何でさ」

「スペースノア級は知っておるな」

「うん、連邦が建造している最新鋭艦だよね」

「そうじゃ、近い内に式番艦が伊豆で就航予定でな、その為に護衛の戦力必要なのじゃ」

「ふーん、それで数少ないPTとそのパイロットの俺に行つてほしいわけね」

納得がいったといった感じに頷くイサム。

「ラングレー基地のグレッグ指令がこの前の模擬演習での結果を見て推薦してくれての

じゃ」

「ああ、あのゲシユペンスト3機をボコツたやつね」

「まあ、あれはやり過ぎていたがの」

「だって、あいつら「刀なんて古くさいんだよ」って馬鹿にしてきたんだよ、それにお爺ちゃんの事も」

リシユウの忠告に少し不機嫌そうに言うイサム。

「気持ちがありがたいが、怒りに身を任せるのはいかんぞ、トウゴウ家家訓にある…」

「健全な肉体は健全なる魂によつて育まれるでしょ？耳にオクトパスが出来る位に聞かされてるよ」

「無理に英語で言わんでも良いが…」

首を横に振りながらボケるイサムにツツコムリシユウ。

「とにかく肉体だけでなく精神の鍛練を怠るでないぞ」

「わかつたよ、それにしても日本かこの皆と離れるのも寂しいな…」

「じゃが、お前の才能は腐らせるには惜しい、見聞を広める良い機会じゃと思うぞ」

「うくん、そうだね。イルムさんやロブさんにも合いたいし」

「それに伊豆基地のレイカー指令は懐の深い人物と聞いておる。ある程度の自由は保障してくれるそうじゃ」

「それは有難いね。軍にいれば“アイツ”を見つげられるかもしれない」

「アイツ」と言った瞬間、イサムの顔から笑みは消え怒りと後悔に彩られた。

「…イサムよ、あれはお前のせいでは無い。あ奴の本質を見抜ききれなかったワシにある」

「それに敵討ちなど」シノ「は望んではおらん」

「わかつてる。わかつてるけどあの時俺に力が有れば」アイツ「を止められたし、お婆ちゃんが俺を庇って死ぬことはなかったんだ」

「イサム…」

「“アイツ”を倒さないと俺は前に進めないんだ。」

「だから、PTのパイロットになったし、腕も磨き続けてきたんだ」

「…：わかった、これ以上は何も言わん」

「じゃが、忘れるなワシが教えた剣は“悪を絶つ剣”じゃ、決して怒りや憎しみで振るってはいかんぞ」

「うん、”アイツ”せいで苦しむ人を増やさない為に戦うよ」

イサムにリシュウは優しくも厳しさをを持った声で語りかける。

それに対してイサムも覚悟を決めた顔で頷く。

「今回の件で一番重要な事じゃがな」

「何だい？」

突然意味深な顔をするリシユウに思わず身構えてしまう。

「同じ年くらいの子が伊豆基地にいるそうじゃ、いい加減歳の近い友人を作れ」

「うるせー!!ほっとけコンチクシヨオオオオオオオオ!!」

一転して呆れたような表情で気にしていることを言うリシユウに、思わず叫びながらツツコムイサム

「じやつて、お前イルムやロブのような年の離れた者としか親しくしておらんじやないか」

「いいじゃん!別にそれでいいじゃん!」

「学校ですぐ喧嘩腰になるから誰も近づかんのじやろう?」

「仕方ないだろ!そうしないと舐められるんだよ!」

「まあ、おまえは見た目が女寄りじゃしな(後背が小さいし)」

「聞こえてんぞ!コラ!160は有るわい!まだまだ伸るわい!」

「いや、無理じやるここ数年伸びてないし」

「のーびまーすー!毎日牛乳ワンパックは飲んでるし!」

「イサムよ…、時には諦めも必要じゃぞ…」

「ヤメロー!優しく諭すなー!安○先生も諦めたら負けだつて言つてたんだー!」

一番突かれたくない所を突かれたイサムは机を強く叩きながら抗議したり、頭を抱え

てポニーテールを激しく振りながら否定する。

「あら、どうしたのかしらん？ イサム君」

声のした方を振り向くと軍服を纏ったエクセレン・ブロウニングを見つける。

彼女はラングレー基地に所属しており、以前、M k—I I カスタム開発のために立ち寄った際に、弟弟子の部下ということもあり親しくなり、それ以来姉のように慕っているのである。

「あり、エクセ姉じゃん久しぶり隣座っていいよ」

「ありがとう」

「先生もお久しぶりです」

「うむ、久しいなエクセレン」

イサムが自分の席のとなりを勧め、エクセレンが礼を言って座りリシユウに挨拶する。

「それで、今日はどうしたのさ？」

「ラドム博士が今日のイサム君のテストのデータを取ってこいって言われたのよ」

めんどくさそうにぼやくエクセレン。

「そうなんだ、親分やブリットさんは？」

「最近物騒だからボスはお留守番でブリット君は別件で居ないのよ」

「物騒って〃エアロゲイター〃の事？」

「そつ出現する回数が増えてきているのよ」

「へー何かの前触れなのかな？」

「そうかもしれないって事で各基地とも警戒してるってワケ」

「……」

「爺ちゃん？」

「ん、いやなんでもない気にするな」

「？」

リシユウの様子に疑問を感じたので尋ねるもはぐらかされてしまう。

「（やはり〃アノ〃噂に関係しているのか？）」

「それにしても俺のデータなんか役に立つのかね？」

「何でも今開発している機体ってイサム君のアイディアを基にしているそうよ？」

「まさか全部採用するとは思わなかったな……」

流石のイサムも呆れてしまう。

「博士曰く「これで歴史は変わる！」とか言ってるらしいわよ」

「フンツ、本当にあんな物が採用されると思つとるのかのう」

「爺ちゃん、斬艦刀を〃出刃包丁〃て言われた事まだ気にしてるの？」

「まったくあ奴は武士道と言う物をまるでわかっておらん！」

「近頃の若い者は…」と愚痴り出すリシユウ。

「どう見ても」出刃包丁」にしか見え無いんだけどね」

「爺ちゃんは置いといて、どんな機体になるんだらう？」

「まあ、ブツ飛んだ物になるのは確実ねえ」

「俺のレオがアレですもんね」

「さてとお仕事のお話はこれくらいにして、よいしょ！」

「わぶー！」

突然イサムを抱きしめるエクセレン、豊満な胸に顔を埋められて呼吸難に陥るイサム。

「弟分を補充しないとね〜♪」

「フガフガ（何だよそれ）」

「いや〜イサム君をこうしていると落ち着くのよね〜」

「（俺はペットか何かかかっ〜かマジで苦しくなってきた…）」

「エクセレンよそろそろイサムが限界じゃぞ」

「あら、やだんやり過ぎちやたかしら」

「ゲホッゲホッ死ぬかと思っただあ〜」

いつの間にか戻ってきていたりシユウが忠告すると、慌ててイサムを離すエクセレン。

「もろソレやめてよエクセ姉え」

「だつてイサム君抱き心地いいんだもん♪」

恥ずかしそうに言うイサムに、満足そうな表情のエクセレン。

「まあ、しばらくはお預けになるじやろうけどな」

「え？どゆこと？」

「俺しばらく日本に行くんですよ」

「え〜！何で!？」

驚きのあまり身を乗り出しながらイサムに詰め寄るエクセレン。

「軍から要請が有ったんですよ」

「そんなの断つちやえば良いじゃないの、私の安眠の為に」

「これを機会に見聞を広めに行くんですよ」

「だから、ぶつちやけ諦めてください」

「ム〜じやあ私も付いていく!」

「いや、無理でしょう…」

無茶苦茶なことを言うエクセレンに呆れ気味に言うイサム。

「定期的に弟分を補充しないと夜グッスリと眠れないのよ！寝不足は美容の敵なんだからねー！」

「あくまで自分の為か、流石エクセ姉そこに憧れるでも痺れない」

「じゃあ私今晚泊まっていくから一晚弟分を補充さ・せ・て♪」

「だが断る」

可愛らしくお願いするもバツサリと断られる。

「私がこんなに可愛くお願いしてるんだからちよつとくらい良いじゃないの〜」

「つーか、アンタラドム博士からお使い頼まれてるんでしようが、早く帰らないと吊るされますよ」

「そこは、ブリット君を生贄にして…」

「後輩いじりも程々にしなさいよ、流石にそれは可哀想でしょうが」

「これもブリット君の為よ」

「意味わからん、ホントに帰りなよでなきやレオで強制送還するよ」

「あはは…、流石にそれは勘弁」

あの殺人的加速を味わいたくないようで、冷や汗を流すエクセレン。

「おお、此処にいたかエクセレン少尉」

そこにジヨナサンが現れる。

「あら、所長さんどうかなさったの？」

「どうかなさったのって、頼まれたデータを纏めたんで届けに来たんだよ」

「いやん、そうでしたこれは失敬」

「ほら、早く帰りなよ」

いい加減にしろ的な表情で帰るように促すイサム。

「もう冷たいわねえ、そんなんじや恋人できないわよ？」

「アンタも居ないだろうに……」

「私は居ないんじやなくて、つくらないだけよ」

「いつか、白馬の王子様が来てくれるまでね」

「わーロマンチックだな〜」

乙女オーラ全開で自分の世界に入ろうとするエクセレンに、棒読みで答えるイサム。

「フン、先に恋人つくって自慢しちゃうもんね〜」

「いやさ、本当に早く帰りなよ冗談抜きで吊るされるよ」

「そうね、それじゃあ最後におまじないしてあげる」

「おまじない？」

「そつ目つぶって」

「(イ)う?」

言われたとうりに目をつぶると額に柔らかいモノが触れる感触がした。
「えっ?」

慌てて目を開けると、イタズラが成功した子供のような笑みを浮かべるエクセレンがいた。

「なっ、なっ」

「ふふ、良く効くからこれで安全よ」

そう言つて顔を真っ赤にしたまま固まっているイサムを置いてエクセレンは去つて行った。

ちなみにジョナサンも「若いね〜」とか言つて去つて行った。

「お〜い、大丈夫かいサム」

「はあっ!」

今まで二人のやり取りをお茶を啜りながら眺めていたリシユウに声をかけられて、再起動したイサム。

「うまくからかわれた気分はどうじゃ?」

「う、うるさいな〜」

「それで日本に向かうのは何時なの?」

ニヤニヤしながら聞いてくるリシユウから話題を逸らそうとするイサム。

「3日後じゃ、それまでに準備を怠るでないぞ」

「うん、わかった」

「じゃあ今から始めるね」

「レオの方はワシに任せておけ」

「よろしくねお爺ちゃん、じゃあね」

出口へ向かって行くイサムの背中を見送るリシユウ。

「(どうかあの子を見守ってやってくれ”シノ”)」

第三話

伊豆基地 滑走路

「日本よ！俺は帰ってキタアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「そういうのは、色々と危ないからやめたほうがいいぞ…」

「どうも、ロブさんお久しぶりです」

輸送機“タウゼントフェスラー”の前で叫んでいると、迎えに来たロバート・H・オオミヤに声を掛けられる。

「最近はどういうのは敏感な世の中だからさ、気を付けてくれよ」

「ヒュツケバイン問…」

「だから、ダメだつてば!!」

何か言おうとしたイサムを慌てて止めるロバート。

「いやー、すいませんね久々の日本で舞い上がっちゃったよ」

「君はいつもそんな感じだけどね…」

マイペースなイサムに思わずため息が出てしまうロバート

「それにしてもロブさん」

「何だい？」

「何ですつと尻を両手で隠してるんですか？」

「ああ、“あの時”のことがね…」

「本当、すいませんでした！」

遠い目をするロバートに思わず土下座するイサムであった。（詳しくは一話参照）

「おう、ラングレー並に広いですねこー」

基地指令に挨拶に向かうためのジープに乗りながら、興味深々といった感じに周りを見回す。

「極東の要だからな。PTを部隊規模で運用しているし、元教導隊のメンバーもいるしな」

「親分と同じ？わお、あつてみたいな」

楽しそうにはしゃぐイサムを見ながら、変わらないなど微笑むロバート。

「そういえば、今ロブさんが関わっている計画の方はどうなんですか？」

「ああ、EOTを多く使っている分、調整が難しくてな。なかなかやり応えがあるよ」
疲れが見られるが、楽しそうに話すロバート。

「無理はしないですよ？ テスラ研の皆も心配するからさ」

「ありがたいなイサム」

心配そうな顔をしているイサムの頭を撫でると、気持ちよさそうに笑顔になると疲れが和らぐロバートであった。

伊豆基地 指令執務室

「始めましてイサム君、私が基地司令のレイカー・ランドルフだ」

「始めまして！ イサム・トウゴウです！ 未熟者ですがよろしくお願いします!!」

ロバートに指令執務室に案内されたイサムは基地司令のレイカーに無駄にデカイ声で挨拶していた。

「君の話はラングレー基地のグレッグ指令から聞いているよ。何でもPTの三体一の模擬演習で近接ブレードだけで、圧勝したそうじゃないか」

「いえいえ、相手が大した事…あ、すいません」

「いや、実際君の言うとおりPTの配備が遅れており、パイロットの練度も不足している状態だ」

「今の連邦では”エアロゲイター”に対抗するのは困難だろう。だからこそ君のような力有る者が必要なんだ」

「はい！ 精一杯頑張ります！」

「うむ、期待しているよ」

元氣よく返答するイサムに満足するように頷くレイカー。

「では、こちらにいる二人を紹介しよう。私の参謀を務めてくれているサカエ・タカナカ中佐と、『SRX計画』の責任者であるイングラム・プリスケン少佐だ」

「…サカエ・タカナカだ」

「イングラム・プリスケンだ」

「イサム・トウゴウです！よろしくお願いします！」

サカエの疑念とイングラムの観察するような視線を気にする事なく挨拶するイサム。

「イングラム少佐は君が身を置く部隊の指揮官を務めている」

「それでは、少佐後は頼む」

「了解しました」

「では、部下を紹介する着いてこい」

「わかりました」

イングラムが退出しイサムもそれに続いていく。

「……」

「不満かサカエ？」

イサムを伊豆基地へ招くことを告げた時から、いまだ納得のいつていない様子のサカ

工に、声を掛けるレイカー

「当然です！ 貴重なPTを子供に任せるのは納得できません！」

「だがこれはノーマン・スレイ少将も認められた事だ」

「ですが…」

「それにこれからの結果を見て判断しても良いのではないか？ 私は彼の可能性に賭けた
いのだ」

「可能性ですか…？」

「そう、あの真つ直ぐな瞳にな…」

期待のを込めた目でイサムが出て行ったドアを見つめるレイカーであった。

伊豆基地 ブリーフィングルーム

イングラムに連れられブリーフィングルームに着くと二人の男女が待っていた。

「彼がテスラ研から派遣されたイサム・トウゴウだ」

「イサム・トウゴウです！ イサムって呼んでください！」

「アヤ・コバヤシよ階級は大尉、よろしくね」

「ライデイス・F・ブランシユタイン、少尉だ」

互いに自己紹介するもライディースからは疑念の視線を向けられる。

「どうした？ライディース」

「お言葉ですが少佐、本当にこんな子供を戦場に出すのですか？」

「ちよつと！ライ！」

「いえいえ、いいんですよ大尉」

厳しい口調で疑問を呈するライディースを、咎めようとするアヤを気にした様子の無いイサムが止める。

「イサム君……」

「こんな子供に、背中は預けられないとおっしゃりたいのでしょうか？」

「そうだ……」

「でしたら役立たずと判断されたら、見捨ててくださいった結構です」

「そんな……！」

なんの躊躇いも無く言い放つイサムに驚愕するアヤ。

「わかった、そうさせてもらおう」

「少佐!?!」

即答したイングラムに、彼を信頼しているアヤも困惑してしまう。

「レイカー指令からは極力彼の意思を尊重させるよう言われている」

「それに我々にはお荷物を抱えている余裕はない」

「…わかりました」

「まあまあ、自分で言った事なんでお気になさらず」

自分に為に落ち込んでくれるアヤに対して、慰めながら優しい人だなと思うイサム。

「それで、この部隊はどういった事をするんですか？」

「“SRX計画”と言う計画で開発された機体を扱うための部隊だ」

「確か、人型機動兵器の性能向上に重点を置き、対異星人用の人型機動兵器を開発する兵器開発計画、でしたっけ？」

「そうだ。お前には、スペースノア級の護衛やこの部隊の訓練を支援してもらおう」

「わかりました」

「では、明日からイサムも交えての訓練を行う。本日はこれで解散だ」

そう告げるとイングラムは去って行く。

「（いやー、ぶっちゃけ何か信用できん気がするわあー）」

「イサム君、よければ私たちと一緒に食事でもどうかしら？」

「いいわよね？ライ」

「ええ、構いません」

イングラムについて色々と考えていると、アヤから食事の誘いを受ける。

「おお、いいですね！さあ、行きましょう！親睦を深めましょう！お腹を満たしましょう！」

「ちよつ、ちよと変わった子かしらね…」

「え、ええ…」

イサムのテンションに戸惑う二人であった。

伊豆基地 食堂

「いやー、テスラ研ですが、ここの飯も美味しいですねー」

「それは良かったんだけど…」

「よく食うな…」

イサムの周りには五人分はあろうかという程の食器が積み重ねられていた。

「食ったら背が伸びるかなー、て思ってたらかんなになっちゃいました」

「まあ、確かに…」

「低いな…、それに最初は女の子だと思ってしまった。」

「……（泣）」

「す、すまない！泣かせるつもりは…」

「いえ、いいんです、事実ですから。それにしてもライデイス少尉は俺のこと嫌っているのかと思いましたけど」

「ライで構わない、別に嫌っているわけじゃない。ただ、PTに乗るということがどういう事かわかっているのかと思ってな」

「異星人と戦うのはもちろん地球人同士で戦う事もあるってことでしょう？そこらへんの覚悟はとつくの昔に出来てますよ」

「昔に？」

「ええ、ぶつちやけ昔に色々あつて人を本気で切ろうとしましたし」

「それって…」

「まあ、力及ばず返り討ちにあつて、その時に人が死ぬのはどういう事なのかつてのも身に染みましたよ」

「イサム…」

知り合つてからずっと笑みを浮かべていたイサムの表情が曇り戸惑つてしまうアヤとライデイス。

「ああ、すいませんね変な話をしてしまつて、どうか気にしないでください」
「…わかつた」

「だが、一人で背負い込み過ぎるのはやめておけよ」

「そうよ、もう私たちは仲間なんだから一緒に助け合いましよう」

「…はい、必要になったらお二人のお力を借りさせていただきます」

「(すいませんそれでも、”アイツ”とは自分の手で決着をつけないといけないんです」

伊豆基地 通路

居室に案内してくれると言うアヤとライについていっていると後ろから声を掛けられる。

「よおイサム、早速仲良くやってるな」

声のした方を向くとイルムガルト・カザハラとその後ろに一人の男がいた。

「わお！イルム兄だ！この基地にいたことをすっかりと忘れていたよ」

「ほおおすつかりと言うようになったじゃねえか…」

「ははは、ジョークだよジョーク。だからその握り締めた拳を降ろしてよ。ほ、ホラ！後ろにいる方を紹介してよ！」

鬼の形相で拳を握り締めるイルムに、冷や汗を流しながら両手で静止し話題を変えるイサム。

「ああ、コイツはキョウスケ・ナンブ俺の後輩だ。ホラ、キョウスケコイツがよく話してたイサム・トウゴウだ」

「キョウスケ・ナンブ曹長だ、噂は中尉より聞かされている」

「どんな噂か激しく気になりますけど、イサム・トウゴウです」

互いに自己紹介し握手する二人。

「お二人もお見知りおきを」

「アヤ・コバヤシ大尉よ」

「ライディース・F・ブランシユタイン少尉だ」

イサムと一緒にいたアヤとライディースにも敬礼で挨拶をするキョウスケに二人も敬礼で返す。

「ブランシユタイン？もしかやコロニー統合軍の？」

「ああ、そうだが、もう俺には関係の無い事だ」

「…そうでしたか、失礼しました」

ブランシユタインと言う名に心当たりがあり、確認するもライディースの雰囲気を感じ謝罪するキョウスケ。

そんな雰囲気変える為、イルムがライディースに話し掛ける。

「よお、ライ。久しぶりだな」

「ええ、お互い忙しく時間が取れませんでしたからね」

「二人は知り合いなの？」

仲良く話す二人に疑問を感じたアヤが質問する。

「ええ、以前月で行われたテストの時に知り合ったのです」

「そうだったの（月でと言うとライが左腕を失うことになった暴走事故があった…）」

その事故の事をイングラムから聞かされていたアヤだったが、口にするのはやめるのであった。

「アヤさん、この人は俺の兄貴分のイルムガルト・カザハラさんでえくと階級は」

「中尉だ。後、イルムでいいぜ」

「年下のアヤさんより低いんだ」

「うるせーこの野郎」

「ひひやいよー、いひゆむにー」

余計なことを言ったイサムの口を、思いつきり引つ張るイルムガルド。

「仲が良いのね二人共」

「イルム兄はですね、テスラ研の所長の息子さんで、暮らし始めた時から遊んでくれたんです」

「そうそう、コイツは昔っから生意気でね手を焼いたよ」

「イルム兄こそ恋人いるのにナンパしまくってるじゃないか、だからアヤさんも気を付けた方が良いでしょうよ」

「ええ、そうさせてもらおうわ」

「オイイイイイイイイイ!!彼女の視線がゴミを見るような目になっちゃまったじゃねえか!!」

イサムは襟を掴んでおもつきり揺らすイルムガルドだが、屁でもないように笑っているイサム。

「事実です中尉」

「キョウスケ、お前まで…」

「人として感心しませんね」

「ライ!？」

泣き崩れるイルムガルドを見ながら、大笑いするイサム。

「お前!しよつちゆうエロ本貸してやっただろうが!」

「知るか!人前で言うなよ!」

突然の暴露に慌てだすイサム。

「イサム君それ本当?」

「い、いやアヤさん!これはその最低野郎が!」

ものすごく怖い目で睨みつけてくるアヤに、冷や汗が溢れ出すイサム。

「オメーから借りに来てたじゃねか」

「やめれええええええええええ!!」

「ちよつとイサム君そこに座りなさい、正座で」

「え、いやここ廊下…」

「いいからー！」

「は、はいー！」

オカンオーラ全開のアヤの気迫に押され、正座するイサムを見て逃げ出そうとするイルムガルド。

「中尉もですー！」

「うげえー！」

その矛先はイルムガルドにも向き、一緒に正座させられる。

その視線は先ほどよりも冷めていた。

「いいですか！子供になんて物を……！」

「(なんて事をしてくれたんだよ馬鹿！)」

「(元はと言えばお前のせいだろうが！)」

「聞いているの!!!」

「はっはい！すいませんー！」

イサムとイルムガルドはライディースとキョウスケに目線で助けを求め。

「では、曹長これからシュミレーターでも一緒にどうだ」

「喜んでお付き合います少尉」

「(あつさりと見捨てやがった!!)」

触らぬ神に祟りなしといった感じで、そそくさと去って行く二人。

こうしてアヤオカンによるお説教は夜が明けるまで続くのであった。

「(だれかマジで助けてええええええええええええええええええええええ!!!)」

第四話

伊豆基地での生活が始まってから、一週間が経ちイルムガルドとじゃれあい、SRXチームや元教導隊出身のカイ・キタムラ率いる小隊との訓練や、戦闘指揮官のハンス・ヴィーパーと罵りあったりと忙しくも充実した日々を送るイサムであった。

伊豆基地 医務室

「いや、あれだけ派手に爆発したのに骨数本折っただけで済むなんて、何か憑かれてるんじゃないんですか？キョウスケさん」

「いきなり失礼だなお前」

ベットで包帯だらけの状態で横たわっているキョウスケに向かって、見舞いに来たイサムが思つきり失礼な事を行っていた。

なぜこんな事になったのかと言うと基地司令のレイカーが不在中、ハンス・ヴィーパーが実験機PT“ビルトラプター”のテストを欠陥が改善しないままキョウスケに命令した結果、機体が空中で大破してしまったのだ。

幸い命に別状は無かったが、安静のために入院しているのである。

「にしてもあのハンスの奴、絶対わざとですよ」

「おそらくそうだろうな」

「このまま泣き寝入りしちゃうんですか？」

「騒いだところで誤魔化されるのがオチだ」

「でも、このままだと北米のラングレーに放り投げられるんですよ！」

ハンスは実験の失敗を開発元の“マオ社”とテストパイロットのキョウスケに押し付けたのである。

結果、キョウスケは北米のラングレー基地に転属となつてしまったのである。

「悪くない基地なんだろう？それに2階級特別昇任で少尉になれたしな」

「確かにラングレーはいい所ですけど、昇任は嫌がらせですよ」

「怪我もすぐ治るんだ、昇進出来たと考えるさ」

「前向きなのは良いですけど…」

「はあ、イルム兄はラプターマオ社に送る為に帰ちやったし、やっぱアイツ殴りに行くのかな」

拳を強く握り締め、シャドーボクシングを始めるイサム。

「やめておけ、養祖父に迷惑はかけたくないだろう」

「…解りました」

しょんぼりとするイサムの頭を撫でながら微笑むキョウスケ。

「ほら、訓練があるんだらう？早く行ってこい」

「うん、キョウスケさんまたね」

渋々といった感じに退出するイサム。

「優しいな、そのままできてほしいが…」

窓の外を眺めるキョウスケ、そこには青空が広がっていた。

キョウスケがラングレーへ発ってから暫くして。

海浜幕張

市街地の道路に止めてあるPT輸送用トレーラーに懸架されている機体、“量産型ゲシユペンストMk—II カスタム”に乗り込んでいるイサムはモニターを凝視していた。

「よいしいいぞ、そこだ！あつ当たっちゃった。むくあのテンザンって奴強いな、顔はムカつくけど…」

今、イサムが見ているのは、全日本バーニングPT選手権大会決勝戦の中継である。

“SRX計画”に必要な人材をスカウトする為に、会場の近くでモニターしているイ

ングラムとアヤの護衛の為に同行していた。

「あつ、リュウセイって人負けっちゃった…」

試合終了のアナウンスが流れがっくりとうなだれてしまいういサム。

「サンプル55番からテレキネシス α パルスを検出。リンク係数、0.22…」

「あの少年か、アヤ?」

「はい、少佐。この大会にエントリーした者の中では、最も適性があると思われます」

「サンプル55番…リュウセイ・ダテか」

「…偶然とは言え、血筋は争えんな」

顎に手をあて、奇妙な縁を感じるインングラム。

「その人が“念動力”で言うの扱えるんですか?」

「他にも何人かいるけど彼が一番強力ね」

「にしても超能力って本当にあるんですか?」

説明は受けているが、未だに半信半疑ないサム。

「世間には公表してないから、知っているのは軍関係者の極一部だけね」

「無駄話はそこまでだ。アヤ、いサム、大会終了後、リュウセイ・ダテの身柄を拘束しろ」

「はい、少佐」

「別に拘束しなくても、素直に協力してくださいって言えばいいんじゃないんですか?」

「万が一もある。我々以外にも同じ目的の者がいるかもしれない」

「まあ、そう言う事なら仕方ないか…」

行動開始しようとした時、警報が鳴り響く。

「どうしたの!？」

「入間より入電! 第4警戒ラインにAGX―01の集団が出現!」

「何ですって!」

オペレータの報告に驚愕するアヤ。

「スクランブルで上がった百里の飛行隊と交戦中! この付近に接近しつつあります!」

「居住区間に現れやがったのか!」

「少佐、どうしますか?」

「サンプル55番のモニターを続ける。それから、タイプTTの機動準備を」

「了解です。私も出撃準備をしてきます」

「AGX―01が急加速! この区域に侵入してきます!」

「ん? 何だ? 外が騒がしいな…」

幕張ドームを出ようとした、リュウセイ・ダテと幼馴染のクスハ・ミズハが窓の外を

見ると、地球では“AGX-01バグス”と称されている“メギロート”と、メツサーの編隊による戦闘が幕張ドーム上空で展開される始める。

「敵機確認！これより攻撃を開始する！ミサイル発射！」

メツサーのパイロットが安全装置を外し、トリガーを引くと機体からミサイルが放たれる。

ほとんどのミサイルが回避されるが、一発だけメギロートの一体に直撃し、バランスが崩れ幕張ドームへ落下する。

「AGX-01が1機、会場へ落下しました!!」

「何ですって!?!」

「アヤ、サンプル55番の適正を試す。トレーラーのカバーを開け、タイプTTを外に出せ」

予想外の事態に動揺するアヤだが、イングラムは冷静に指示をだす。

「まさか、少佐……!」

「そう。そのまさかだ」

「おいおい！いきなりPTで戦わせる気かよ！」

イングラムの意図に気づいたイサムが、モニター越しに声を荒げる。

「構わん。そのためのタイプTTだ。…俺の命令に従え」

「わ、わかりました」

「それから付近の友軍機を下がらせろ」

「はあ!? 素人だけでやらせる気かよ!? 何考えてやがる!」

無謀過ぎると、イングラムを止めようとするイサム。

「イサム君、ここは少佐を信じましょう」

「…了解」

渋々とだが、引き下がるイサム。

「イサムはいつでも出れるように準備しておけ」

「はいはい! 了解しましたよ少佐殿!」

イングラムの真意が読みきれず、見守ることしか出来ないことに苛立ちを隠せないイサム。

「アヤは通信でサポートしてやれ」

「了解!」

その間にもリュウセイが乗ったタイプTTが、メギロートと交戦を開始するも一方的に攻撃される。

「やっぱ無理だ! 俺が出る!」

「いやまだだ」

「素人が戦えるほど世の中甘くはねえよ！」

「バグスを捕まえたの!？」

イングラムと言いつい合っている、アヤが驚いたように叫ぶ。

モニターを見るとタイプTTが、メギロートを掴んでタコ殴りにしていた。

「おいおい…、マジかよ…！」

「よし、イサム出撃しろ」

「へ、あつああ了解」

メギロートを一体撃破するも、残りのメギロートに包囲されてしまうタイプTT。

「よっしゃあ行くぜ！レオ！」

イングラムから許可が出たので、素早く機体を起動させコンテナから出すとペダルを限界まで踏む。

主の意思に応えるかのようにバイザーが輝き、ブースターが火を噴き機体を空へと押し上げ市街地を飛び出す。

タイプTTの元へ向かいながら、通信を入れるイサム。

「そこのゲシユペンスト！跳べ！」

「えっ？うおお!？」

「チエストオオオオオオオ！」

指示通り跳ぶのを確認するとシシオウブレード改を抜刀し、メギロート数体をなぎ払うMk111 カスタム。

「なっなんだ、アンタ!？」

「援軍だよ!後は任せてさがってな!」

「ダメだ!クスハが幼馴染が瓦礫に埋まって動けないんだ!」

「何?!しゃあねえ!アンタはその人を守っててくれ、こいつらは俺がやる!」

「わ、わかった!」

「さあ!バラバラになりたいヤツからかかってきな!」

挑発しながらシシオウブレード改を構えさせると、メギロート数体が飛び掛かって来る。

「チョイサア!」

連続でシシオウブレード改を振るうと、一瞬で微塵切りにされ地面へと散らばるメギロート。

残った三体がその隙を突いて口の部分から、サークル・レーザーを発射してくる。

「甘い!」

跳躍して回避すると1体をそのまま踏み潰し、そのまま隣にいた一体の角を左手で掴み持ち上げると、陥没する程の勢いで地面へ叩きつける。

「残りー！」

二体が機能を停止したことを確認すると、最後の一体が飛翔し離脱を開始する。

「逃がすかよー！」

逃走経路を予測すると、ブースターを全開にし追撃する。

瞬く間に距離を詰めシシオウブレード改で切り裂く。

「敵機反応無し、増援は見られません」

「なら救助部隊を送ってくれ、怪我人がある」

オペレーターの報告に、すぐさま救助部隊を要請するイサム。

「わかった。ではイサム、リュウセイ・ダテを確保しろ」

「要は一緒に来てもらえば良いんだろ」

するとモニターに映っていたオペレーターではなく、イングラムが応える。

「そうだ、方法は任せる」

「了解」

通信を終えるとタイプTTの方へ向かう。

「そのゲシユペンスト聞こえるか？」

「アンタはさっきの言うか子供!?!しかも女の子!?!」

自分の予想とイサムの容姿がだいぶ違ったのか、あからさまに驚いているリュウセイ

イ。

「そつちとたいして歳は違わないさ、それに俺は男だ。それよりアンタの幼馴染は？」
「男!?マジで!」

再び予想と違っていたことに先ほど以上に、驚くりュウセイ。

「んなこたあ良いから状況を教えろ!」

気になっている所を突かれたので、少しイラつきながら怒鳴るイサム。

「あ、ああ。無事だけど怪我をしているんだ。早く病院に連れて行かないと」

「もう手配している。すぐに救助部隊が到着する」

「よかった。ところで君は軍人なのか?」

「ちよつと違うけど、詳しい話をしたいから基地に付いて来てほしんだけど」

「基地に?何でだよ?」

理由がわからないのか首を傾げるリュウセイ。

「その機体を勝手に動かしてしまったからさ」

「そんな!仕方なかったんだ!」

イサムが理由を告げると、予想外の事で動揺するリュウセイ。

「それでもPT、特にその機体は軍の最重要機密でね外に漏らすわけにはいかないのさ」
「なら、俺はどうなるんだ?」

「このままならブタ箱行きだろうな」

「マジかよ！そんなのゴメンだぜ！」

躊躇うことなく言い放つイサムに、見るからに顔が青ざめていくリュウセイ。

「そうならない方法もあるけど…」

「どんな方法だ!?!」

言い淀むイサムに、藁にも縋るような感じで尋ねてくるリュウセイ。

「このまま軍に入るのさ」

「なっ!?!軍人になれってのか!?!」

「そうすれば罪に問われないだろうな」

「……」

イサムが告げると、考え込むように俯いてしまいうリュウセイ。

「残念ながら他の選択肢は無いだろうな（そう言う風に少佐が仕組んだからな）」

「俺は…」

「まあ、アンタには才能があると思うよ」

「俺にか?」

戸惑うリュウセイに、自分の思ったことを話すイサム。

「訓練も受けてないのに“バグス”を撃破したし」

「“バグス”？さっきの虫みたいのか？」

「そう、その辺も知りたければ入ることを薦めるよ」

「…わかった。君に着いていくよ」

一瞬思考すると、イサムの申し出を受け入れるリュウセイ。

「OK、着いて来てくれ。少佐これより彼を連れて帰還する」

「わかった帰還したら俺の所に連れてこい」

それを確認すると、イングラムに通信を入れるイサム。

「了解…」

あからさまに不満そうに答えるイサム。

「不満そうだな」

「いくらなんでも強引過ぎるだろ」

他に方法が無かったのかと、目で訴えるイサム。

「我々には手段を選んでいる余裕はない」

「そうかもしれないが…」

「嫌なら、拒否する権限がお前にはあるぞ？」

淡々と告げてくるが、どことなくイサムを氣遣っているようにも感じられるイサム。

「どっちにしろ彼の罪が消えるわけじゃないし従うよ」

「では、帰投しろ」

「はいよ。ふう、やになるねえ」

通信を終えたため息を吐くと、リュウセイを連れ帰還するのであった。

病院

あの後、イングラムと面会し、軍に入ることになったリュウセイは、しばらく会えなくなる母親のお見舞いに訪れていた。

イサムは彼の護衛（正確には監視）の為に同行し病院の前で待機していた。

「母親か……」

イサムは赤子の時に捨てられていた所をリシユウに拾われ、その妻シノと孫として育てられたため、親との思い出はおろか顔すらわからないのである。

「まあ、別にもう興味ないけどさ」

物心ついた頃はどんな両親でなぜ捨てたのか知りたかったが、今ではどうでもよくなっていた。

そんな事を考えているとリュウセイが病院から出てきた。

「早かったですね、もっとゆっくりしていけば良かったのに」

「いや、そうしたら決心が鈍っちゃまうからな」

「そうですか。ねえリュウセイさん」

「何だイサム？」

「これからあなたが進むのは茨の道だ」

目つきと口調が鋭くなり、リュウセイを見据えるイサム。

ただならぬ雰囲気を感じ取り、思わず唾を飲み込むリュウセイ。

「茨の道……」

「俺たちが戦うのは異星人だけじゃない、同じ地球人にも銃を向けなくちゃならない時もある」

「!!」

つきつけられた現実には衝撃を受けるリュウセイ。

「アンタにその覚悟があるか!」

そう言つて肩に担いでいる袋から愛刀“獅子丸”を取り出し、抜刀して切っ先をリュウセイに向ける。

「俺は……」

「もうアンタに逃げ場は無い、此処で覚悟を決めてもらう。今までやってきたゲームとはもう違う、命のやり取りをするな」

「正直まだ実感が湧かねえんだ…」

「……」

ゆっくりとだが紡ぎだされるリュウセイの言葉を、静かに聞き取るイサム。

「でも、俺の力でおふくろやクスハ、誰かを守るんなら。俺はその為に戦う！」
向けられる刀に臆する事なく、イサムを見据えて話すりユウセイ。

「OK、それでいいさ」

獅子丸を下げながらそう告げると同時に、何時もの和らいだ口調に戻るイサム。

「イサム…」

「誰だって他人を傷つけるのは怖いさ、まして死ぬのはもっと怖い。それでも人は、大切な物を守る為ならその恐怖に立ち向かえる。大丈夫アンタなら生き残れるよ」

獅子丸を収めながらリュウセイを勇気づけるイサム。

「なあ、イサム頼みがある」

「頼み？」

「俺を鍛えてくれ」

「え？」

思いがけない申し入れに一瞬戸惑ってしまいうイサム。

「いやあ。俺なんかに教えてもらうより、イングラム少佐辺りに頼んだ方が良くと思う

けど……」

「もちろん他の人にも頼む。少しでも早く強くなるために。だからお前にも鍛えて欲しいんだ、頼む！」

年下相手にも構わず頭を下げるリュウセイ。

その姿勢に本気であることを感じ取りるイサム。

「柄じゃないんですけど、仕方ないですね。その代わりにビシバシ行きますよ！」

「おう！頼むぜ師匠！」

“師匠”という単語に無性に恥ずかしさを感じてしまうイサム。

「いや。イサムでいいんで、くそ恥ずかしいから」

「ならよろしくな！イサム！」

「ええ！よろしくお願いしますリュウセイさん！」

互いに固く握手をするイサムとリュウセイ。

「じゃあ、まずはアンパン買って来てください」

「それパシリじゃねえかああああああああああ！！！」

「あはは、冗談ですよ冗談」

「(だつ大丈夫なのか俺?)」

背中を勢いよく叩きながら笑い飛ばすイサムに、先生きが思いつきり心配になるリュ

ウセイであつた。

第五話

伊豆基地 グラウンド

早朝のグラウンドを走る男が一人、彼の名はリュウセイ・ダテつい最近入隊したばかりの新兵である。

いや正確に言えばもう一人いる。

「なあ、イサム」

「なんです？リュウセイさん」

「これって意味あるのか？」

そう言つて彼は腰に巻きつけてあるロープを見る。

その先にはタイヤが括り付けられており、その上にイサムが乗っているのである。

「有るっちゃ有るし、無いっちゃ無いですね」

「何だよそれ……」

曖昧な返答をするイサムに呆れ気味の表情をするリュウセイ。

「まあ、気分ですよ気分」

「気分……」

「何事にも体力は必要ですよ、ホラホラスピードが落ちていきますよ。もう十週追加しちゃうぞ〜」

「だあもう！走りや良いんだろ！走りや！」

ヤケクソ気味にスピードを上げるリュウセイ、これがイサムに鍛錬を頼んでからの彼の日課の一部である。

伊豆基地 食堂

「つ、疲れたあ」

「あれしきでへばってちや、これから先持ちませんよ？」

テーブルに突っ伏してぐったりとしているリュウセイと次々と皿を積み上げていくイサム。

「あれしきってあの後、腕立てやら組手までやったんだぜ？」

「あんなのまだ序の口ですよ、それに生身でも強くなっておいて損はないですよ」

「あれで序の口って…」

知りたくない事実を知り項垂れるリュウセイ。

「おはよう二人共。今日もしごかれてるわねリュウ」

「おはようございます、アヤさん」

「おはようアヤ…」

二人の元に食事を持ったアヤがやって来た。

「イサムが今日模擬演習有るつてのに、手加減してくれないんだぜ」

「してますよ10%くらい」

「それしてなくね？」

「そうですか？」

イサムの発言に疑問を呈すと可愛らしく首を傾げるイサム。

「何事も極力全力で打ち込めが家の家訓の一つなので」

「そう言えばお前のお爺さんつてテスラ研で顧問してるんだよな」

「ええ、特機の斬撃モーシヨンパターンの作成もやってますよ」

「特機つてスーパードロットだろ乗ってみたいなあ」

「テストで何回か乗ったことがあるけど男のロマンが詰まっていますよ。ロケットパンチとか」

「マジで！いいなあ」

目を輝かせながら羨ましがるリュウセイ。

「あなただつてPTに乗ってるじゃない」

「PTもいいけど変形・合体が出来るのにも乗ってみたいんだよ！」

「私には良く解らないわ」

ロボットについて熱く語り出すリュウセイに、首を横に振りながら答えるアヤ。
「やかましいぞ、他の人に迷惑だろう」

今度はライデイスが呆れ気味な表情でやって来た。

「何だよライお前には解んねえのかこのロボット魂が」

「解らん」

同意を求めるリュウセイにスッパリと答えるライデイス。

「イサム、ライの奴が解ってくれねえよ」

「大丈夫だよリュウセイさん、演習後にバーンブレイド全話一挙鑑賞すればせんのでフンゲフン解って貰えるよ」

「不要だ。と言うか不吉な事を言わなかったかいサム？」

「ナンノコトデスカー？」

ライデイスの指摘に、目線を逸らしながらカタコトで答えるイサム。

「まあいい、それよりも今日の模擬演習では足を引つ張るなよリュウセイ」

「よくねえ！ロボット魂が解らねえとはお前はそれでも男かああああああ!!」

「いきなりどうした!?!知らなくても別に問題なからう！」

「大ありだ！いいかロボット魂つてのはだな……！」

「（最初は心配だったけどどうまくやってるわね。これもイサム君おかげね）」

知り合つた当初は、性格が正反對な事もあり險惡な雰圍氣の二人だったが、イサムが間を取り持ち今ではだいたいふ緩和されている。

「まあまあ、とりあえずそれくらいにして今は演習の事に集中しましょうよ」

「しゃあねえな、それで相手は何処なんだ？」

「何故俺が悪いみたいになつてゐるんだ……」

「氣持ちは解るけど落ち着いてライ」

余りの理不尽に拳を握り締めるライデイスをなだめるアヤ。

「今日の相手は百選練磨のハルマ隊よ、二人共氣を引き締めてね」

「了解です、大尉」

「おう、任せろアヤ！」

「じゃあ、負けたら明日の訓練メニニュー倍でいきますか」

「ぜつ、ぜつてー負けられねえ！」

イサムの発言に冷や汗を流しながら闘志を燃やすリユウセイ。

「負けてもらつては困るな」

「イングラム少佐！」

突然のイングラムの登場に驚く一同。

「お前達は俺が選び出した者達だ期待している」

「はい！期待に答えてみせます少佐！」

頬を赤らめながら敬礼するアヤ。

「（やっぱりアヤさんって少佐の事好きなんですかね？）」

「（お前もそう思うか？なあライ）」

「（俺に聞くな人のプライベートに口を出す気は無い）」

「（おいおい、気になるくせにクールぶってるぜコイツ）」

「（言えよ！気になるって言っちゃまえよ！吐いて楽になっちゃまえよ！）」

「（貴様ら…）」

「何話してるの三人とも？」

「「いえ何でもありません」」

イサムとリユウセイにからかわれ拳を再び握り締めるライデイスだが、アヤに話し

掛けられ慌てて誤魔化す三人。

「演習は時間通り行われる。それからイサム」

「何ですか？」

「食うのはそれくらいにしておけ、基地の食料を食い潰す気か？」

「えっ、これからの…」

「「まだ食う気だったのか」!?」」

話している間も食べ続けていたイサムだった。

富士山麓 連邦軍演習場

それぞれの機体に登場し待機しているリュウセイ達に通信が入る。

「アヤ、お前達は三機でフォーメーションを組み制限時間内に戦車隊を撃破せよ」

「了解！」

「ところで何で実弾まで持つてくんだ？」

今行われるのは模擬演習なので、必要の無いはずの実弾が用意されていることに、疑問を感じるリュウセイ。

「演習の最後に行われるプロセスのためだ」

「最後ですか？それは一体……」

「これ以上の質問は受け付けない」

「……了解」

これ以上は教える様子の無いイングラムに疑問を感じつつも、目の前の演習に集中することにしたリュウセイ達。

「リュウ、ライのシュツツバルトはゲシユペンストより足が遅いから、隊列を乱さないよ

うに注意してね」

「解ってる。イサムから「戦場では味方との連携が一番重要」だって、耳にタコが出来るぐらい言われてるからな」

「リュウセイ、後ろはカバーしてやるお前は前だけ見ている」

「おう！任せるぜライ！」

「それじゃ行きましょう！」

「それでは、訓練開始だ！」

イングラムの掛け声と共に前進する三機。

指揮車

「いい感じですね。待ち伏せにもうまく対応していますよ」

「ああ、リュウセイの動きも悪くない」

モニターには戦車の撃破マークが次々表示されていく。

「お前にリュウセイの指導を任せたのは正解だったようだ」

「いえいえ、元々センスが良かったんで大して教えてませんよ。終わったら褒めてあげたらどうです？」

「それで調子に乗られては困る」

「照れくさいただけでしょう」

「…そろそろお前も準備に入れ」

「りよーかい」

はぐらかすイングラムに微笑みながら指揮車を出て、トレーラーに固定されている愛機に向かうイサム。

「良しラスト！」

リュウセイの乗るゲシュペンストが放ったマシンガンが、最後の戦車に直撃し機能停止する。

「敵機反応消失これで終わりね」

「終わったか。ふう」

「気を抜くのはまだ早いそリュウセイ」

「え？何でだよライ」

「まだ終了のアナウンスがされていない」

「そう言えばそうね何が…」

アヤが言い終わる前に機体のレーダーに機影が映る。

「これは！」

「早い！通常のゲシュペンストの三倍の速度が出ているぞ！」

「それって、まさか！」

リユウセイ達がうろたえている間に、接近中の黒に金色のラインが入ったゲシュペンストがモニターに表示される。

「やはり、イサムか！」

「こつちに向かつて来るぞ！」

「全機回避！」

慌てて三機回避行動に入る間に、ゲシュペンストMk—II カスタムはシシオウブレード改を抜刀し突撃する。

「チエストオオオオオオオ!!」

すれ違い様にリユウセイのタイプTTに横一線で打ち込むMk—II カスタム。

「うわああ!!」

ギリギリで回避するがタイプTTの右腕が吹き飛ぶ。

そのまま距離を取り、包囲するように旋回するMk—II カスタム。

「リユウ大丈夫!？」

「あ、ああ。くそ！どうなってんだ!？」

「C・Cとの通信が遮断されている。どうやらあいつが最後の目標らしい」

納得のいった様子のライデース。

「まじかよ!?!?そんなの聞いてないぞ!?!」

「どうやら不足の事態にも対処しろって事みたいね」

「だから実弾を持たせたってのかよ!？」

「仕方ないわ二人共、実弾に換装を」

「了解です」

「お、おう」

換装し終わったのを見計らったように、Mk—II カスタムが突撃して来る。

「そこだ!」

シュツツバルトのツイン・ビームカノンが発射されるが、ジグザグに機動し回避される。

「何!?あれほどの速度を出しているのにあんな機動ができるのか!」

「あんなに食ってたのに吐かねえのかあいつは!？」

「そんなこと言ってる場合じゃないわ!T—L—I—N—K—R—I—P—P—」

アヤがT—L—I—N—K—R—I—P—P—で迎撃するも、シシオブレード改で弾かれてしまう。

「まずは支援機から潰させてもらおう!」

「来るか!」

シュツツバルト目掛けて突撃して来るMk—II カスタムに、両腕の3連マシンキャノンで弾幕を張るも、シシオブレード改を盾にしながら強引に距離を詰められて

しまう。

「もらったあ！」

「クッ！」

「やらせるかあ!!」

シュツツバルトにシシオウブレード改を振り落とそうとしたところで、リュウセイのタイプTTのタックルを受け体勢を崩すMk—II カスタム。

「なら、アンタから落とす！」

「うおおおおおおお!!」

リュウセイのタイプTTに攻撃しようとするMk—II カスタムに、T—LINK リッパを発射するもジャンプして避けられる。

「はああああああああ!!」

その勢いのままシシオウブレード改を振り下ろすも、アヤのタイプTTがシシオウブレード改を狙いトリガーを引く。

放たれた弾丸がシシオウブレード改に当たり、軌道が逸れた刃が地面に叩きつけられ粉塵が巻き上がる。

「そっだ！」

その隙を突きシュツツバルトが、両腕の3連マシンキャノンで追撃するも堅牢な装甲

に弾かれ、ダメージを与えられない。

「やはり堅い！」

「せいやあ！」

シユツツバルトに横一線でシシオウブレード改を振るうもバックステップで回避される。

「そんな重い機体で良く動く！」

「お前もな！」

シユツツバルトが右腕の3連マシソキヤソソで反撃する。

左へ機体を滑らしながら後退し、距離を取るMk—II カスタム。

「三体一なのにごちらが押されているなんて…」

「あれが彼の全力なのでしよう大尉」

「アヤ、ライ弾幕を張ってカスタムの動きを制限してくれ」

「何をする気なのリユウ？」

「射撃武器じゃあの装甲を抜けないプラズマカッターじゃないと」

「接近戦をする気!?!危険すぎるわ！」

リユウセイの提案に驚愕するアヤ。

「でもそうしなきゃイサムには勝てねえ」

「だからって…」

「下手をすれば死ぬかもしれないんだぞ」

「ああ、わかっている。俺を信じてくれ二人共」

「……」こはリュウセイを信じましょう大尉」

「ライ……。わかったあなたを信じるわリュウ」

リュウセイのタイプTTは右腕が損失している為、武装を取り出せないのでアヤのタイプTTが自身のメガ・プラズマカッターを取り出し、リュウセイのタイプTTに渡す。

「おう！行くぜ！」

Mk—II カスタムに突撃するリュウセイのタイプTTを援護する為、残りの二機が弾幕を張る。

「ほお、その思いつ切りは良し！ならば真つ向勝負!!」

Mk—II カスタムも弾幕をもろともせず突撃する。

「はああああああああああああああ!!」

Mk—II カスタムが先手を取り、シシオブレード改を振り下ろし、ブレードに設置されているスラストで加速される。

「うおおおおおおおおお!!」

機体を左に逸らし右肩が切り落とされるも直撃を避けるタイプTT。

「何とお!!」

「そこだあ!!」

左腕に持っているメガ・プラズマカッターで、Mk-III カスタムの両腕を切断し、コックピットに切っ先を向ける。

「勝負、有りだ…」

「参りました…」

こうして模擬演習は幕を閉じるのであった。

伊豆基地 ブリーフィングルーム

「ご苦労だった。模擬演習の結果は上々だ」

「もっと褒めてくれても良くないか?死にかけたんだぜ?」

イングラムの評価に不満の様子のリユウセイ。

「やだなー、ちゃんとコックピットは外してましたよ」

「全然そうには見えなかったんだけど。殺る気まんまんだったんだけど」

「気のせいですよー」

あははーと笑うイサムに苦笑いしか出来ないリュウセイであった。

「ですが、実戦形式で行うのならシユミレーターでも良かったのでは？」

「今後の為にも早い内に、死への恐怖をアヤやリュウセイに体験させる為だ」

「俺とアヤに？ライは」

「それは本人に聞くのだな」

「？」

「……」

イングラムの意味深な発言に、首を傾げるリュウセイと自分の左手を見つめるライ
デイス。

そしてそのまま解散となるのであった。

伊豆基地 通路

「はあーあ負けちゃったな」

リュウセイ達と別れたあとイサムは一人で歩いていた。

教え子であるリュウセイの成長を感じれて嬉しいと思う反面、悔しいと思ってしまう
心を紛らわすために散歩しているのである。

「俺もまだまだだなあ」

とぼやいていると曲がり角で誰かとぶつかってしまう。

「うわつとー！」

「きゃつー！」

イサムは踏みとどまるもぶつかつた相手は尻餅を着いてしまい、持っていた資料が散乱してしまう。

「すつすいません。考え事をしていて」

「……」

良く見ると相手は紫色の髪でメガネを掛けた自分と同じ年程の女の子だったので、思わずじつと見てしまう。

「……何?」

「あついや同い年の人と久しぶりに会つたなって、じゃなくて資料拾わないとね」

そう言つて慌てて資料を拾い集めるイサム。

「いい、大丈夫……」

「良くないよ俺の不注意なんだから」

「……」

そう答えると女の子も黙々と資料を拾い集める。

「はい、これで全部かな?」

「……」

自分の集めた分を渡すと女の子はそのまま走り去ってしまふ。

「ありや、やっぱり怒ってるのかな？迷惑をかけたぶん倍にして謝罪するのが家の家訓
なんだけど…。同じ基地にいるしまた会えるよね」

仕方なく散歩の続きをするイサムであつた。

第六話

水鳥島

「では、これより沿岸地帯の敵基地制圧作戦を想定した訓練を行う」

「了解、でもこの前みたいな乱入はゴメンだけ教官」

イングラムからの通信にリユウセイが不安げに答える。

「大丈夫ですよ、俺の機体は金が掛かるんでそうホイホイ出せないですよ」

「そりゃ良かった。あんなの何度もされた堪んねえよ」

イサムの返答に安堵するリユウセイ。

その時アラームが鳴り響く。

「どうした？」

「第3特別航空輸送隊所属のT5より：エマージェンシーコールですっ!!」

「状況は？」

オペレーターに確認を取りつつ、対応を考えるイングラム。

「南西30キロの海上で所属不明機の追撃を受けているようです」

「所属不明機…ひよっとして、エアロゲイターなの!？」

「∴訓練は中止だ。T5をこの海域へ誘導し、救助する」

「アヤ達はPTの火器を実弾を装填した後、出撃。輸送機を救助しろ」

「了解！」

「少佐俺は？」

俺も出してと目で訴えているイサム。

「お前にも出てもらう。海上では対空戦闘が出来るお前の機体は必要だ」

「了解！」

イングラムの指示を受け行動に移るイサム達。

「T5がこの海域に侵入してきます！」

「イルム中尉、所属不明機を振り切れません！」

「やれやれ、ついてないねえ。地球へ降りて来た途端にこれとは」

慌てているパイロットに対して、至って冷静のイルムガルド。

そこにイングラムからの通信が入る。

「T5、応答せよせよ。こちらは極東支部所属のイングラム・プリスケン少佐だ。今から

PTで所属不明機を牽制する。その隙にこの海域から離脱しろ」

「すみませんね、イングラム隊長。面倒をかけてしまつて」

「おまえは……」

「イルム兄じゃん」

「のようだな」

「何だ？教官達の知り合いか？」

イルムガルドのことを知らないリュウセイが、首を傾げる。

「俺の兄貴分ですよ」

「イルム…何故、お前がそこにいるのだ？」

「ちよつとワケありで、月のマオ社から出戻る羽目に…」

「イルム中尉、駄目です！所属不明機に追いつかれました!!」

タウゼントフェスラーのパイロットが告げると、“F-32 シュヴェールト”の編隊と戦闘機とPTを合わせたような外観をした機体が一機迫つて来る。

「テンザン、引き返せ！これ以上は危険だ!!」

シュヴェールト隊の隊長機が、先行している詳細不明機を止めるべく通信を入れる。
「何言ってるんだ。せっかく面白くなってきたのによ」

「お前の機体はまだ連邦軍に知られるわけにはいかない！命令に従え！」

「もう遅いつての。それに俺はビアン博士の命令でこの“リオン”のテストをしてんだぜ？」

「文句はあのおっさんと、俺を引き入れたアートルーに言えつての」

「き、貴様……！」

テンザンの物言いに激しい憤りを感じる隊長。

「……ちえつ、あんだからグダグダ言うから、腹が減ってきちまった」

「はっ、腹だと!?!」

「さつさとあの輸送機を落とすとするか」

「やめろ、テンザン！我々の任務はもう完了したのだ！」

「あくもう、うるせえな！俺はまだ遊び足りねえの！」

「馬鹿を言うな！逆にお前が撃墜されでもしたらどうする!?!」

「ま、このリオンは秘密兵器って奴だからな。そうなつちや、やばいわな」

それでも静止を聞かずにリオンを加速させるテンザン。

「あつアイツ！」

「ここでリオンを失うわけにはいかん！やむをえん援護するぞ！」

「了解！」

シユヴェールトの編隊も後を追うように加速する。

「お、おい！あの戦闘機、手と足が生えてるぞ！」

「あれ、PTなの!?!」

「現状では、単独飛行可能な機体はいないはずですが……！」

「俺のレオでも短時間しか対空戦は出来ないのに……！」

初めて見る機体に驚愕するリユウセイ達。

「各機へ。イルムの輸送機がこの海域から離脱するまで敵機を牽制しろ」

「つて事で、イサム、ライ……悪いけど、よろしく頼むわ」

「あいよ！」

「了解です、中尉」

イルムとの通信を終えて迎撃行動に移るイサム達。

「ターゲットインサイト！ ツイン・ビームカノン発射！」

射程の長いシュツツバルトが先制でツイン・ビームカノンをリオンに向けて放つ。

「おおっと！」

リオンを横に滑らせて回避するテンザン。

「おかえしだあ！」

リオンの左腕に装備されているレールガンで反撃する。

「くっっ！」

ギリギリで回避するライデイス。

「そこ！」

「行けえ！ T—LINKリッパー！」

アヤとリュウセイのタイプTTが同時にT—L I N Kリッパを発射する。

「ホッ！おもしろえ！」

回避しながらレールガンで打ち落とすテンザン。

「なんだあ、ただのゲシユペンストじゃねえみたいだな。っと！」

真下から反応があり、そちらを向くとるM k—I I カスタムが突撃してきていた。

「何っ!？」

「うおらあ！」

シシオウブレード改で切り裂こうとするも、僅かに掠るのみで避けられてしまう。

「危ねえな！コイツ！」

反撃でリオンの右腕に装備されているホーミングミサイルを、M k—I I カスタム

に放つテンザン。

「チイツ！」

頭部のバルカンで迎撃しながら回避するイサム。

「くそつ、アイツ速い！」

「あんなに自由に飛び回られたら当たんねえぞ！」

攻撃が当たらないことに悪態つくイサムとリュウセイ。

「後続が来るぞ！」

「リュウ、イサム君後続は私とライで抑えるわ！貴方たちは不明機を！」

「了解です大尉」

「わかったアヤ！」

「任された！」

アヤの指示にそれぞれ答えると、アヤとライデイスはシュヴェールトの編隊へと向かう。

「リュウセイさん俺が空から抑えるからその隙に攻撃を！」

「頼むイサム！」

Mk—II カスタムが飛び上がりリオンへ突撃する。

「速ええが突っ込んでくるだけじゃあな！」

後退しながら、レールガンで撃ち落とそうと攻撃するテンザン。

「多少くらったところで！」

被弾しながらも構わず、突撃するMk—II カスタム。

「何っ?!効いてねえのか!?!」

驚きながらも振り下ろされるシシオウブレード改を、ギリギリで回避するテンザン。

「クソッ！限界か！」

対空限界時間となり降下するMk—II カスタム。

「ひゃっはあ！PTはPTらしく地べた這いずりまわってろっての！」

その隙を逃さず攻撃しようとするテンザンだが、別方向からの攻撃に阻まれる。

「やらせるかあ！」

マシンガンを連射する、リュウセイのタイプTT。

「邪魔だつてのお！」

銃撃を回避され反撃のレールガンで、タイプTTの左肩が吹き飛ぶ。

「うわあ！」

「リュウセイさん！」

追撃しようとするリオンを止めるべく突撃するイサム。

「かかったな！」

「何っ!?!」

振り下ろしたシシオウブレード改を、背後に回るように回避しレールガンを構えるリオン。

至近距離で放たれたレールガンが直撃し、背中のブースターが破損してしまい、海へ

墜落するMk—II カスタム。

「くそおおおおおおおお!!」

「イサム！」

「後はテメエだ!」

タイプTTに猛攻を加え追い詰めていくテンザン。

「こっつ、このままじゃ!うわあ!」

タイプTTの左足にホーミングミサイルが直撃しバランスを崩してしまふ。

「これでゲームオーバーだ!」

レールガンで、タイプTTのコックピットに狙いを定めるテンザン。

「やつ、やられる!」

もう駄目かと思った時、何かがりオンのレールガンを切り裂く。

「な、何っ!」

「あれは!」

リユウセイが攻撃が飛んできた方を確認すると、アヤのタイプTTとシュツツバルトが向かって来ていた。

先ほどの攻撃はアヤ機のT—LINKリッパーである。

「リユウ大丈夫!」

「アヤ!助かったぜ!」

「クソツ他の奴等はどうした!」

連絡を取ろうとするもいっこうに繋がらない。

「やられたのか使えねえ！んっ!?」

海の方から反応があり、何かが飛び出して来る。

「うおおおおおおおおおおおおらあ!!」

それはMk—II—カスタムで、シシオウブレード改に設置されているスラストーで浮上し、ミサイルのようにリオンへ突っ込む。

「ぐあああああああああ!!」

避けきれずにリオンの右肩が吹き飛ぶ。

「リュウセイさん今だ!」

「おう!」

リュウセイ機が、マシンガンで追撃しリオンの左足が破損する。

「じよ、冗談じゃねえっ!!俺はこんな所で死ぬキャラじゃねえっての!!」

慌てて撤退していくリオンであった。

伊豆基地 リュウセイの部屋

水鳥島での戦闘後イサム達は待機を命じられており退屈だったので、リュウセイの部屋へ遊びに来ていた。

「にしてもあの人型モドキなんだっんでしょね？」

「わかんねえけど、あんな形状でどうやって飛んでるんだろうな」

リュウセイと共に今日の戦闘を振り返るイサム。

「多分EOTが使われてるんでしょうね」

「EOTって異星人の技術の事だよな」

「ええ、アイドネウス島に落下した“メテオ3”を解析して得られた技術の事です」

「そんなのを使ってきたアイツらは何者なんだ？」

「そこら辺は俺たちが考えても仕方ないんで、情報部にでも任せましょう」

「そうだな…」

「他に気になることも？」

「いや、何でもない（あの動き、バーニングPT決勝で戦ったテンザンに似ていたけど、

そんなはず無いよな）」

考えにふけっていると部屋のチャイムが鳴る。

「リュウ居る？今すぐ第3エレベーターの前に集合よ。後イサム君もいたら伝えて頂

戴」

「アヤか、わかったすぐ行く」

「お呼びですか？」

「第3エレベーターの前に集合だつてよ」

「では行きましょうか」

そう言つてリュウセイと共に部屋を出るイサム。

伊豆基地 通路

エレベーターの前でライデイスと合流し、エレベーターが来るまで談笑していると、ドアが開きイルムガルドが出て来る。

「よおイサム、ライ、アヤ大尉！」

「おっひさあ、イルム兄」

「お久しぶりですイルム中尉」

「ご無沙汰していますイルム中尉」

再開を喜ぶ四人についていけずにいるリュウセイに、イルムガルドが歩み寄る。

「で、お前さんが噂のルーキーのリュウセイ・ダテか？」

「は、はあ……」

イルムガルドが言つた事が良く解らず、困惑しながら返答するリュウセイ。

「リュウセイさん、この人はイルムガルド・カザハラつて名前でテストラ研所長の息子であり、俺の兄貴分です。後階級は中尉で年下のアヤさんよりしたの男です」

「そのネタまだ引つ張るのかよ!?もういいだろ！」

余計な事を言うイサムに思っいきり突っ込むイルムガルド。

「で、わざわざ月のマオ社に行つてたのに何で帰つてきたのさ?」

「流しやがったコイツ…。何だよ俺は元々この基地の所属だぜ? 別におかしくないだろ」

華麗に流すイサムに憤りを感じつつも、何かを誤魔化すように答えるイルムガルド。

「どうせ浮気でもしてリンさんを怒らせたんでしょう?」

「(あ、相変わらず鋭いな…)」

あつさりで見破るイサムの洞察力に、戦慄するイルムガルド。

「イサム、リンさんって?」

「イルム兄の恋人だよ。この人しよっちゅうナンパしては喧嘩してるんだよ」

リュウセイの質問に呆れたような表情で、イルムガルドを見ながら答えるイサム。

「え〜」

「最低です中尉」

「いい加減にしてください中尉」

「やつやめろおおおおおおお!! そんな目で俺も見ないでくれえええええええええ!!」

リュウセイ達の冷めた視線に悶絶するイルムガルド。

そんな時再びエレベーターのドアが開き二人の男性と小女が出てくる。

「あつ！君あの時の！」

「!?」

少女に見覚えがあつたので思わず大声を出してしまふと、驚いてしまった少女は走り去つてしまふ。

「あ、おいラトウーニ!!わりいあの子訳ありなんだ許してくれ」

そう言つて一緒にいた男性が後を追いかけていく。

「うーまたお話できなかつた…。ねえイルム兄あの子つて…」

「いいさ…。どうせ俺なんて…」

「チツ、役に立たんか」

「いやいや、ここまで追い込んだのお前でもあるからな」

地面に座り込んで負のオーラをまき散らしながら、のの字を書いているイルムガルドを見て、吐き捨てるように言うイサムに思わす突つ込むリュウセイであった。

伊豆基地 ブリーフィングルーム

「…アヤ大尉、ライデイス少尉、リュウセイ曹長に特別任務を与える。イングラム少

佐、説明を」

落ち込むイルムガルドを放置して集合したりユウセイ達に、サカエが内容を伝え呼びかけられたイングラムが説明を始める。

「昨日、俺が勧めているSRX計画の試作機の組み上げが作業が終了した。以後、お前達には機体の調整作業を手伝ってもらおう」

「教官、質問！そのSRX計画って…何ですか？」

「エアロゲイターに対抗するための特殊人型機動兵器の開発計画だ」

元氣良く手を挙げて質問するリュウセイ、その表情にはかなり期待が込められている。

それに対して何時ものように冷静に返答するイングラム。

「じゃあ、俺達がテストパイロットとして乗り込むのは…」

「そう。現在、SRX計画では“Rシリーズ”と呼ばれる3機の試作機の開発が進められている」

「では、少佐…彼らに試作機のデータを」

サカエの呼びかけに頷いたイングラムが、パネルを操作するとモニターにデータが表示される。

「さ、さいつは…パーソナルトルーパー…？しかも、3機も…」

「標準型と砲撃専用…残りの一機はゲシユペンストより一回り小さいな」

「これらがお前達にいずれ与えられることになる試作機… Rシリーズだ」

「なお、今後の特別任務遂行にあたり、お前達のチームを“SRXチーム”と呼称する」

「SRXチーム…」

「SRXって…何の略だ？」

「それはいずれわかる。では、お前達にスペックデータと操縦マニュアルのファイルを渡す」

疑問の表情を浮かべるリュウセイをはぐらかして話を進めるイングラム。

「三日以内にそれらを熟読しておけ。以上だ」

「熟読って…。睡眠学習機とか無いのかよ？」

「寝てる間に…つて奴？」

「そうそう」

「そんな便利な物があつたら、とつくに使ってるわよ」

「…：…：そうだよね」

期待するような表情で言うリュウセイに呆れたような表情で答えるアヤ。

「第一、そんな楽して得たものなんて役に立ちませんよ。日々の反復の中で得たものがいざという時に生きるんです」

「イサム君の言うとうりよ。じゃあ毎日、勉強会をしましよ。わからない所があつたら、私達で教えてあげる」

「おう！よろしく頼むぜ！」

「いいだろう。ただしやるからには徹底的に殺らせてもらう」

「泣き叫ぼうが、命乞いをしようともなあ！」

「字が違くねえかライ!?後、何をする気だいサム!？」

怪しい笑みを浮かべて物騒なことを言う二人に、冷や汗を浮かべまくりながらツツコムリユウセイ。

伊豆基地 自室

「そうか南極に行くのか…」

「うん、そこで行われる式典の警備だつてさ」

ブリーフィングが終わり自室に戻ったイサムは、久々にリシュウに連絡を取り次に行われる任務について話していた。

「スペースノア級壱番艦とEOTI機関の新型機のお披露目らしいけど…」

「何か裏があると踏んでいるのだな」

「そう、そつちで何か掴んでいるかなって思ってたさ」

「確かにジヨナサンの奴も怪しいと言っておったのう」

イサムの問いかけに、顎に手を添えながら答えるリシユウ。

「せつかくのお披露目会なんだから、もつと目立つ場所でやればいいのにさ」

「わしらも詳しいことは掴めていないが、ゼンガー達も参加することからおそらく、人に知られたくないことが行われるのかもしれない」

「親分達が？ 零式まで出すなんておかしすぎるよ」

「うむ、気を付けよイサム何やらよからぬことが起きそうじゃ」

違和感を感じるイサムに警告するリシユウ。

「わかった気を付けるよ。そういえばみんな元気にしてる？」

「うむ皆息災じゃ、お前に会えなくて寂しがっておるし、エクセレンなど禁断症状とやらが出始めておる」

「あはは、次あつたら大変そうだなあ…」

その時のことを想像して思わず冷や汗が出るイサム。

「お前さんが“ATX計画”のテストパイロットに、推薦したキョウスケもうまく馴染んでるよ」

「よかった。あの人なら親分達と上手くいくと思ったんだ」

「マリオンの奴も良いパイロットが来たど喜んでおったわ」

「ずっと不満言つてたもんね」

「一番の候補だったお前がいなくなつてしまつて、さすがのあやつもへこんでおつたよ。お陰でずっと愚痴を聞かされたわい」

「それはごめん…」

「いや、気にするなお前を送り出したのはわしだからの」

かなり堪えた様子のリシユウに思わず謝るイサム。

それに対して首を横に振りながら答えるリシユウ。

「じゃあ、もう寝ないといけないからもう切るねお爺ちゃん」

「ああ、おやすみイサム」

「うん、おやすみなさい」

通信を切りベットに横になるイサム。

「無事に終わるといいけど…」

静かに願うもその願いは大きく裏切られることとなる。

そして世界が大きく動くことをまだイサムは知らなかった。

第七話

南極 コーツランド基地

「ヘックシヨン！」

「うゝつ、ヒーターが効かねえや」

「あなた…もしかして、ハッチを開けているの？」

盛大にくしやみをしたリュウセイにアヤが呆れ気味に問いかける。

「ああ。あの新造戦艦を直に見てえからな」

「写真とか撮つちやダメよ」

「わかってるよ。機密だろ？」

仕方ないといった感じでコックピットに戻りハッチを閉めるリュウセイ。

「やれやれ、コックピットの中がすっかりと冷えちまつたよ」

「あなつたて、ホントにああいうのが好きなのね」

「まあね」

「ロボット系専門だと思ってたわ」

「そういうわけじゃねけど。でも、なんでもいってわけでもねえんだ」

「じゃ、他に好きなのは？」

「リアル系のロボットだろ、あと戦闘機とか戦車、ヘリコプター、戦艦、潜水艦、怪獣、怪人」

「(何でもいいんじゃないの?)」

「範囲の広さに再び呆れるアヤ。」

「男はそういう物に憧れを抱くんですよアヤさん」

「そうなのイサム君？」

「そういうもんですよ」

「つていうかあなたもハッチを開けてて大丈夫なの？」

「心地いいですよ。アヤさんもどうです？」

「え、遠慮しておくわ」

ハッチを開けて堂々としているイサムに、この手のことに慣れてきたアヤも別の意味で呆れてしまう。

「:とところで、ライ。イテマエ機関の新型のデータ、まだ回ってきてねえのか？」

「イー・オー・ティー・アイ機関だ。詳細なデータは来てないが:名前はわかったぞ」

「何て言うんだ？」

「“グランゾン” : : : だそうだ」

「ふくん。何か敵メカっぽい名前だね」

「パイロットがライバルキャラで、後で味方になりますよ的な感じですね」

「そうそう、実は敵の親玉に操られてましたてな」

「お前達、何をわけわからんことを…」

二人で盛り上がっているイサムとリュウセイに呆れながら突っ込むライディース。

「でもさ、どうしてこんなところで新型のお披露目をやるんだ？」

「そうね。伊豆とか、ラングレー基地でもいいのに」

「…確かに、大尉とリュウセイの言う通りだ。それに、この緊迫した雰囲気…ただの式典とは思えん。まるで、これから戦闘が始まるかのようだ」

「……」

不自然な状況に違和感を感じ始めるライディース達の中でイサムは沈黙を保っていた。

「む…？グランゾンが出てくるようだぞ」

地面のハッチが開きPTサイズのロボットがせり上がって来る。

「す、すげえ…。悪役っぽいのは名前だけかと思つたら、見た目もそうだけ」

「あ、あれパーソナルトルーパーなの？」

「外見や期待構造がPTとは違います。おそらく、我々の期待とは別系統のもですね」

「何だ？あの機体から感じる威圧感は、本当にただの新型機なのか？」

グランゾンを目の当たりにし驚愕するリュウセイ達と本能的に危機感を感じているイサム。

その時スペースノア級「シロガネ」より通信が入る。

「プラチナーより各機へ。間もなく式典が始まる。周辺の警戒を怠るな。ただし、命令があるまで一切の戦闘行為を禁止する」

「SRXチーム、了解（周辺の警戒：敵でも現れるっていうのかしら？それに：何だか嫌な予感がする…）」

シロガネ副長テツヤ・オノデラの命令に疑問を感じていると、基地上空の空間が歪み始め見たことのない艦船が現れる。

「な、何だ…あれ!?いきなり現れやがったぞ!」

「地球の物には見えん…!」

「!なら、エアロゲイターか!」

「そうだとしたら、戦闘禁止命令が出るはずがないわ」

「そ、そうか…」

「……」

「（やはりお披露目会なんかじゃなかったか…。だとしたら何が始まるってんだ?）」

驚愕するイサム達をよそに、未確認艦船より人間が降りてくる。

「お、おい、中から人間が出てきたぜ。やっぱ、地球の艦なのか？」

「出向えの人もいるみたい……」

「（……何かの会議をしているというのか……？）」

「なあ、これがお披露目式典だっていうのかよ？」

「……」

「ん？」

リュウセイ達が戸惑いを隠せないでいる中、グランゾンに向かって歩いていく男を見つめるイサム。

「（あの男、何を？）」

注意深く観察していると男はグランゾンに乗り込んでしまう。

「……では、そろそろこの茶番劇の幕を閉じることにしましょうか……」

グランゾンに乗り込んだ男が呟くと、グランゾンの胸部装甲が開き高出力エネルギー弾が形成され、未確認艦船へ発射される。

「え!？」

「グランゾンが未確認艦船を攻撃した!？」

直撃を受けた未確認艦船が墜落し、未確認機が多数出撃してくる。

「な、何だ、あれ!？」

「バグス……いや、違うぞ!」

「こちらのデータにないきたいだわ!」

「エアロゲイターじゃないのか!？」

突然の事態に混乱している防衛部隊に、未確認機が攻撃を開始する。

「プラチナーより各機へ!アンノウンを迎撃せよ!」

シロガネからの命令で防衛部隊が反撃を開始し、コーツランド基地は瞬く間に戦場と化する。

「く、くそっ!戦闘が始まっちゃもうなんてよ!!」

「やるしかない!行こうリユウセイさん!」

「SRXチーム行くわよ!」

「了解!」

アヤの号令に合わせて未確認機“ガロイカ”へと攻撃するイサム達。

「ターゲットインサイト!ツイン・ビームカノン発射!」

「行つて!T—LINKリッパ—!」

シュツバルトのツイン・ビームカノンがガロイカを貫き、アヤのタイプTTのT—LINKリッパ—が切り裂く。

「落ちろおおおおお！」

「はあ！」

リュウセイ機のマシンガンがガロイカを撃ち落とし、残りをMk—II カスタムがシシオウブレード改で両断していく。

「これで終わりか？」

「みたいだな」

数分後、最後のガロイカを撃墜し周辺を確認しながら問いかけるリュウセイに、同意するイサム。

「こんなことになっちまうなんて……」

「くそっグランゾンはどこだ！」

荒れ果ててしまった基地を見ながら呟くりュウセイと、悪態つきながら元凶であるグランゾンを探すイサム。

その時大きな爆発音がした。

「!？」

その方向を見るとグランゾンが、防衛部隊のゲシユペンストを手を持っているグラン

ワームソードで切り裂いていた。

「あ、あいつ味方じゃないのかよ!？」

「それに、あれだけの戦闘で無傷だと!？」

先ほどの戦闘でガロイカから集中砲火を受けていたグランゾンだが、まるで何事もなかったかのような程無傷であった。

「アヤさん!ライさん!応答してくれ!」

イサムがアヤ達に通信を入れるも返事が無い。

「まさか、奴に…」

「そんな、そんなはずねえ!!」

最悪の事態を思い浮かべるイサムに必死に否定するリュウセイ。

その間にグランゾンがシロガネの方を向く。

「な、何をする気だ貴様!」

「見せしめですよ。腰抜けどもに我々の意思を示すためのね」

オーブンチャンネルで呼びかけるイサムに、若い男性の声が帰って来る。

「見せしめ、だど?」

「ええ、貴方がたには生贄になって頂きます」

そう言うのとグランゾンの胸部装甲が開き、先程のようにエネルギー弾が形成されていく。

「まさか、やめろおおおおお!!」

グランゾンを止めようとイサムが機体を突撃させるも、エネルギー弾が発射されその衝撃で吹き飛ばされてしまう。

「シロガネが…」

「…やはりこれくらい抵抗しかできませんか…。ならば利用する価値も利用される意味もありませんね」

攻撃を受けたシロガネが墜落していくのを見ながら、呟くグランゾンのパイロット。

「…くそっ…!」

衝撃で仰向けに倒れている機体を起こしながら、マシンガンでグランゾンに向けるリュウセイ。

だがその銃口は震えてしまっていた。

「……フツ」

リュセイ機に歩み寄ってグランワームソードを振り上げるグランゾン。

「うおおおおおおお!!」

「!」

グランゾンの背後に回ったMk—II カスタムが、シシオウブレード改を振り下ろすも、見えない〃 何かに〃 阻まれてしまう。

「ほう、この状況でも私とグランゾンに向かって来ますか」

「うるせえよ!!」

シシオウブレード改を何度も振るうも、グランワームソードで軽々と防がれてしま
う。

「ですが、君は私の相手をするには余りに未熟!」

「舐めるなあああああああああ!!」

グランワームソードを弾き、一度距離をとりシシオウブレード改を上段に構える。

「全身全霊と言う訳ですか。いいでしょう受けて立ちましょう」

楽しんでいるかのように、グランワームソードを構える男。

「俺は剣、ひと振りの剣、奴を断つ剣!!」

極限まで集中力を高めるイサム。

「イサム…」

場が静寂に包まれる中、見守ることしかできないリユウセイ。

「うおおおおおおおおおおおおおお!!」

ブースターを全開にして、常人には視認不可能な速度でグランゾンへ突撃するMk—

「II カスタム。」

「フツ」

それをあざ笑うかのように、的確にグランワームソードを振り下ろすグランゾン。

「おらああああああああああああああああ!!」

刃が頭部を掠りながらも、さらに加速して懐へ飛び込むMk—II カスタム。

「!?!」

予想外の事態に男の余裕の表情が驚きのものへと変わる。

「チエストオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

渾身のひと振りを打ち込むも、目に見えない何かに再び阻まれてしまう。

「残念ですが、それではこのグランゾンのバリアは敗れませんよ」

「まだまだ!!まだ俺たちの限界はこんなもんじゃねえだろレオ!!!」

イサムの呼びかけに応えるかのようにMk—II カスタムのバイザーが輝き、シン

オウブレード改に設置されているスラスタがさらに火を噴き、刃がバリアーに食い込んでいく。

「これは…もしや」

「うああああああああああああああああ!!!」

さらに刃を押し込もうとするがアラームが鳴り響き、全身から煙を吹き出して機能を

停止してしまうMk-III カスタム。

「な、オーバーヒート!？」

「どうやらその機体ではこれが限界のようですね」

突然の事態に戸惑っていると、グランゾンから通信が入る。

「…負けだ。殺せ…」

「潔いのが結構ですが君はここで終わるには惜しい。ここまで私に迫れる者がいるとは、今回の茶番は無駄では無かったようです」

「……」

楽しそうに語る男に無言を貫くイサム。

「私はシユウ・シラカワ。是非君の名前を教えて頂きたい」

「…イサム・トウゴウだ…」

「では、イサム君また近い内に会いましょう」

「近い内に? どういうことだ?」

「何、すぐにわかりますよ。すぐにね…」

シユウの言葉に引っかかりを感じ問いかけると、意味深なことを言い背を向けるグランゾン。

だが、その時グランゾンのレーダーに接近する機体を捉えた。

「これは…」

シユウが眩くと一つに影がグランゾンの前に降り立つ。

「やっと見つけけたぜ!!シユウ!!」

「マサキ…こんな所まで私を追いかけて来るとは…ご苦労なことですね」

降り立つた機体“サイバスター”のパイロット、マサキ・アンドーがグランゾンに言うように返すシユウ。

「あの時の復讐という訳ですか?結構」

「ふざけるな!!このザマは何だ!?てめえ地上まで滅ぼす気か!」

「まさか…まだそんなつもりはありませんよ。私を利用した人間に身の程を知らしめてあげただけです」

「ほざくなっ!!」

グランゾンに斬りかかるサイバスターだが、あっさりと受け止められてしまう。

「いつもいつも同じ事の繰り返し…よく飽きませんね」

「うるせえ!!今日こそ決着をつけてやるぜ!!」

「残念ですがお断りします」

サイバスターを弾いてグランゾンが手をかざすと周囲の物が、押しつぶされていく。

「きつ、機体が…思うように動かねえ…!!」

サイバスターもその重さに耐え切れずに膝を着いてしまう。

その間にグランゾンが飛び去って行く。

「まっ待ちやがれシユウ!!」

「あなたと遊んでいるヒマはありません。これからビアン博士の所へ行かなければなりませんのでね」

「!?…ビアン!?!」

「では、ごきげんよう」

グランゾンはそのまま高度を上げて行き、姿が見えなくなってしまう。

「くそっ…!」

「シユウを追わニヤいの? マサキ」

「もう反応が消えちまつてる。それよりあいつが言っていたビアンってのは何者だ?」

「おいら達まだそんなに地上の情報仕入れてニヤいから…」

一緒に乗っている二匹を猫と今後のことを考えるマサキ。

「調べてみる必要があるな」

「ニヤにを?」

「あいつがいつにいたビアンって奴のことを、だ行くぞ、シロ、クロ!」

上空へと飛び上がったサイバスターは、そのまま高速で飛び去って行った。

「…終わったのか？リユウセイさん大丈夫か？」

「あ、ああなんとかな」

ハッチを開けて顔を出し、安全を確認するとリユウセイに通信を入れて安全を確認するイサム。

「サム…君。リユウ！イサム君返事をして！」

「アヤ！」

「無事だったんですね！」

静けさを取り戻した大地を、眺めることしか出来ないイサムにアヤから通信が入る。

「ええ、ライも無事よ」

「よかった…」

アヤ達の無事を確認して安堵するイサム。

「今、救助部隊がそっちに向かっているから、そのまま待機していてちょうだい」

「了解です」

アヤとの通信を終えると再び外へ視線を向けると、大破したシロガネと多数の残骸が広がっていた。

「…くそつ、またあの時」と一緒に何も守れなかった…」

自身の無力さと忌まわしき記憶を思い起こし、拳を血が滲み出るほど握り締めるイサ

ム。

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

極寒の地に少年の絶叫が響いた。

その日EOTI機関は“デイバイン・クルセイダース”通称“DC”を名乗り、地球連邦に対して宣戦布告を行った。

人類存続を賭けた戦いの幕が上がる。

主人公設定

イサム・トウゴウ（勇 稲郷）

・種族：地球人

・出身：日本

・性別：男

・年齢：15

・身長：160cm（誤魔化している可能性あり）

・所属：テスラ・ライヒ研究所⇒地球連邦軍S R Xチーム（出向中）

・階級：テストパイロット

本作の主人公。赤子の時捨てられていた所をリシュウ・トウゴウに拾われ、彼と妻のシノ・トウゴウ（本作オリジナル）の孫として育てられる。その為、二人には多大な感謝と尊敬の念を持っており、侮辱した者等には容赦が無い。

性格は明朗活発で他人をからかうのを好む。女性寄りの容姿のため年上の女性に人気がある。髪型は腰まで伸びている後ろ髪をポニーテールにしている（本人は切りたいが周りがさせてくれない）

本人は男らしくしようと一人称を「俺」にしたり、背を伸ばそうと牛乳を一日ワンパツク飲んでいるが効果も見られていない（リシユウ曰く諦めたほうがいいとのこと）

リシユウから教えられた薩摩示現流の使い手で、15にして免許皆伝の腕前を持ち見た目によらず馬鹿力である。ゼンガー・ゾンボルトやブルツクリン・ラックフィールドの兄弟子と言えるが、本人は二人を兄のように慕っている。

本編開始時の4年前に起きた事件で祖母のシノを殺め、リシユウを裏切り修羅道へ走った男を探し出して止めるためにPTのパイロットとなる。

量産型ゲシユペンストMk—II カスタム（愛称レオ）

- ・ 分類：カスタム型パーソナルトルーパー
- ・ 機体カラー：黒に金色のライン
- ・ 型式番号：RPT—007C
- ・ 全長：22.0 m
- ・ 重量：78.6 t
- ・ 動力：核融合ジェネレーター
- ・ 基本OS：TC—OS

・開発者：マリオン・ラドム

イサム専用に改造された量産型ゲシユペンストMk-IIIでテスラ研で開発が行われていたが、近接戦闘一筋に偏りすぎているイサムに合わせるのはテスラ研だけでは限界と判断したジョナサンが北米のラングレー基地で行われているATX計画との共同開発を打診し興味を持ったマリオン・ラドム博士が受託しラングレー基地で開発されることとなる（この時にイサムはエクセレン達と知り合っている）

本気は「圧倒的加速力と装甲を以て敵機の懐に接近し一撃で撃破する機体」をコンセプトとし武装は近接ブレードと牽制用の頭部バルカンのみとし、例によってEOTは使用されず堅牢な装甲と航空機に使用される大型ブースターを採用しており、短時間ながら空戦も可能で変則的な機動を可能にするためにスラスターを多数設置しており、PTとは思えない馬力を持つ（本機のデータは後のアルトアイゼンの基となる）

その加速力は通常機の3倍以上で、ジョナサンが試しに乗ってみたが加速した瞬間意識を失うほどであるが、反面オーバーヒートしやすく戦闘継続時間が極端に短くなってしまう。

※シシオウブレード改

本機に採用されている近接ブレード、シシオウブレードの刀身を機体全長の2倍にまで伸ばし背の部分にスラスターを設置している（PT版零式斬艦刀とも言われている）

第八話

伊豆基地 屋上

「連邦は苦戦し日本が戦場になるのは時間の問題か…」

DCは宣戦布告後、新型機動兵器“アーマード・モジュール”（AM）とそれを運用可能な潜水母艦、陸上戦艦、空中戦艦を投入した電撃作戦で戦局を有利に運んでいた。

「俺の力でどこまで守れるんだろう…」

南極での戦いを思い起こしながら拳を握り締めるイサム。

その時、ドアが開く音がした。

「ん？」

「あっ…」

ドアの方を振り向くと以前廊下でぶつかってしまった少女が立っていた。

「君は…」

「……」

イサムが話し掛けようとすると少女は怯えるように後ずさってしまふ。

「えーと、俺はイサム・トウゴウ。君は？」

「……」

とりあえず自己紹介をしてみるも、怯えたままの少女。

(どつどうする!?! どうしたらいいの!?! くそ! こんな時イルム兄ならどうする!?!)

同じ年の女性と話したことが殆どないイサムは、兄貴分の女たらしを思い出そうとする。

(ダメだ! これも失敗するビジョンしか思い浮かばねえ! つくづく役に立たねえな!)

悶絶しながら相変わらず酷い言い様であるが、一応慕ってはいるのである。

「大…大丈夫…?」

「え? あ、はい大丈夫です」

余りの悶絶ぶりに心配になったのか近寄って来てくれる少女。普通なら逃げられてもおかしくない。

「いやー体が丈夫なのが取り柄だから。うん、大丈夫だよ」

「そう…良かった…」

安心した様子の少女。流石に同じ年の女性と話したことが殆どないから迷っていたとは言えないイサム。

「その、君も外の景色を見に来たのかな?」

「うん…この景色、好きだから…」

「ここへ来た理由聞くと途切れ途切れながら答えてくれる少女。どうやら取っ掛りを得られたようである。」

「うんうん、ここはいい所だよね日本に帰って来て良かったよ」

「帰って…来た？」

イサムの発言に疑問を感じたのか首を傾げる少女。

「ああ、俺つい最近まで北米のテスラ・ライヒ研究所にいたんだよ」

「北米から？」

「うん、俺PTのパイロットなんだよ。それで戦力拡充のために呼ばれたんだ」

「そうなんだ…。私も…PTのパイロットなの」

「え？」

彼女がPTのパイロットとは思っていなかったので、驚いてしまうイサム。

「私には、それしか出来ないから…」

嫌なことを思い出してしまったのか、表情が暗くなってしまう少女。

「ん…何って言うかさ。自分ではそう思っているだけで、意外と生き方って色々あると思うんだよね」

「え？」

「いやそのさ、そんなことしか出来ない人間って決め付けないほうがいいと思うよ」

「……」

俯いて口を閉ざしてしまおう少女。

「ご、ごめん偉そうなこと言っちゃって」

「そうじゃないの…。そんな風に言ってくれたの…。あの二人」だけだから…」

「あの二人？」

「うん…。居場所の無くなった私に…。新しい居場所をくれたの…。だから…。少しでも役に立ちたくて…。PTに乗ってるの」

「そっか。いい人達だね」

「うん…」

徐々に心を開いてくれている様子の少女に、嬉しくて頬が緩んでしまおうイサム。

「どう…したの…?」

「い、いや！なんでもないよ！アハハ…」

少女に指摘されて慌ててごまかすイサム。

「えーえつとさそのメガネなんだけどさ」

「?うん」

「なんか合わないと思うんだよね」

「度が？」

「そうじゃなくてさ、似合わないと思うんだよね。せつかく可愛いのにさ」
!?!?」

話題を変えようと思った事を言うと、顔を真っ赤にして俯いてしまう少女。

「そつそんなこと…」

「あるよ。よつと!」

「ひやつ!?!」

メガネを外すと可愛らしい悲鳴をあげる少女。

今まで地味だった少女が一転して美少女となる。

「うん、やっぱり可愛いよ」

「あ、あううううううう」

もう一度思ったことを言うと、ますます顔を赤くして俯いてしまう少女。

「?大丈夫」

「っ!か、返して!」

様子が変なので心配になり顔を覗き込もうとすると、慌ててメガネを奪い返して掛け直す少女。

「ご、ごめん変なこと言っちゃった?」

「そ、そうじゃなけど…」

怒らせてしまったと思いい謝るイサムに、今だに顔を赤くし俯きながら答える少女。

「あ、あの！」

「は、はい！」

いきなり顔を上げて大声を出す少女に若干驚いてしまうイサム。

その時警報が鳴り響く。

「!?非常警報……」

「まさか、もうDCが攻めてきたのか!?ごめん！俺行かなきゃ！」

「ま、待って！」

走り去ろうとするイサムを慌てて呼び止める少女。

「どうしたの？」

「ラトウーニ……」

「え？」

「ラトウーニ・スウボータ……。私の名前」

顔を赤くしながら自分の名前を告げる少女。

「ラトウーニか、教えてくれてありがとう！またね！」

笑顔でそう言うトアを開けて去って行くイサム。

「……」

ラトウーニはイサムが通って行ったドアを名残惜しそうに見つめていた。

伊豆基地 格納庫

「今から5分前……佐世保基地が、DCの攻撃を受けているという報告が入った」
「本当ですか、少佐!?!」

「ああ。この基地では飛行隊の他に、PT部隊にも出撃命令が出た」

「虎の子のPT部隊をエアロゲイター戦以外で出撃させるとは……。……敵部隊の中に、例の機体がいる可能性が高いのですね」

「そうだ」

ライディースの質問に頷きながら答えるイングラム。

「……」

「確かにありや、従来の兵器じゃ相手にならにからなあ」

「険しい表情のリユウセイと思わすばやくイサム。

「我々にも待機命令が出ている。おそらく。出撃することになるだろう」

「テストチームまで出すとは、それだけ厳しい状況つてことですか」

「PTの絶対数が少ない以上、出し惜しみしている余裕は無い」

イサムの発言にやむを得ないといった感じに答えるイングラム。

「少佐！」

慌てた様子の兵士が駆け寄って来る。

「どうした？」

「基地司令よりSRXチームへの出撃命令が出ました！」

「聞こえたな、総員直ちに撃撃準備に入れ！」

「了解！」

イングラムの号令に敬礼するとそれぞれの機体に向かうイサム達。

佐世保基地

「この野郎オ！」

ゲシユペンストが放ったマシンガンがリオンに直撃し爆発する。

「クソツ！残っているのは俺達くらいなもんか!？」

ゲシユペンストのパイロットジャーダ・ベネルデイが悪態をつく

「…地上部隊の残存戦力は？」

「戦車部隊と歩兵部隊はもうそのほとんどが…！」

部隊指揮官であるカイ・キタムラが味方戦力を部下に確認すると、壊滅状態であることを告げる。

「限界か…、俺が殿を務めるお前たちは撤退して後方部隊と合流しろ」

「し、しかし!」

カイが撤退を指示すると部下が反論する。

「貴重なPTを失うわけにはいかん。ここは俺に任せろ」

「…りよ、了解です。どうか、ご武運を…」

渋々といった感じに撤退を始める部下たちを見送るカイ。

「カイ少佐!」

「ジャーダ達か、お前達も撤退しろ」

自機に接近するジャーダ隊3機を確認して、撤退指示を出すカイ。

「一人で殿をする気ですか?」

「これ以上戦力を失えば伊豆も危うくなる」

ジャーダ隊のガーネット・サンデイがカイに尋ねると、そうだと答える。

「少佐にもしもがあれば、それこそでしょう。ここは俺とガーネットが引き受けますよ」

「…ジャーダ、私は…?」

自分のことが入っていないので、ラトウーニがジャーダに問いかける。

「お前は撤退するんだラトウーニ」

「!? そんな…私、まだ戦える!」

一人で下がる訳にはいかなないと、ラトウーニは残ることを希望する。

「無茶はしないラトウーニ」

「…ガーネット…」

「恋をする前に命を落としたんじゃ…切なすぎるわよ」

ガーネットに言われて、ふと出撃前に知り合った少年のことを思い出すラトウーニ。

「そ、そんな、なの、興味、無い、から…」

「?どうしたラトウーニ?」

顔を赤くして俯いてしまったラトウーニに心配して声をかけるジャーダ。

「お前達俺の命令に従え!こんな所で命を粗末にするな!」

ジャーダ達を下がらせようと説得しようとするカイ。

そこへハリオンとシューベルトの編隊が押し寄せて来る。

「お言葉ですが少佐、もうあちらは待つてくれないようですよ」

「くつやむをえん。死ぬんじやないぞお前達!!」

迎撃しようとするカイ達だが空戦能力を持つDC部隊に次第に押されていく。

「くそっ! チョロチョコロと飛び回りやがって!」

「ぼやかないでとにかく撃つ！」

「…それだけじゃない…。パイロットの錬成度も高い…」

「機体ならまだしも、腕前の差でDCなんかにまけてたまるかってんだ」

気合と共にマシンガンを放ち、シューベルトを撃墜するジャーダ。

「その意気だ！だがゲシユペンはAMには負けん！ジェット・マグナム!!」

右腕のプラズマ・ステークでリオンを殴り倒していくカイ機。

「ええい！手こずらせてくれる！シューベルト隊は緑色のゲシユペンを抑えろ！まずは他の3機から仕留めるぞ！」

痺れを切らしたDC部隊の隊長が指示を出すと、カイとジャーダ達を分断しに掛かる。

「おい！これってやばくねえか!？」

「そんなのわかって、ああ!!」

「ガーネット!!」

ガーネット機が被弾してしまい、ラトウーニ機がフォローに入る。

「やらせねえ、やらせるかよお!!」

ジャーダ機が注意を逸らそうとマシンガンを放つも、集中砲火を浴びて被弾していく。

「ジャーダ！」

「だ、大丈夫だ。これくらい、ぐああ！」

右足に被弾して転倒してしまうジャーダ機。

「ジャーダ!! キャアアア!!」

二人を守るためにラトウーニ機が前に出るが、物量さに次第に追い詰められていき、遂にマシンガンを持つている右腕を破壊されてしまう。

「これでおわりだあ!!」

「!？」

1機のリオンがラトウーニ機に接近しながらレールガンを構える。

「ラトウーニ!!」

「逃げてえ!!」

ジャーダとガーネットを叫びも虚しく、レールガンが発射されようとする。

「(このままじゃ、ジャーダもガーネットも……。誰か!!)」

恐怖の余り目をつぶって助けを求めた時、何か空を切り裂きながら飛来し、ラトウーニ機を狙っていたリオンに突き刺さる。

「!？」

突然の事態にその場にいる全員の動きが止まってしまう。

そこへ何かが上空から猛スピードで降下してくる。

「必殺!!ゲシユペンストキイイイイイイイイイイク!!」

そのままの勢いで何体かのリオンを蹴り抜き、爆発を背に着地するゲシユペンストM
k—II—カスタム。

「なっ何だあれは!?!」

「ゲシユペンストか!?!細部が違うようだぞ!」

「か、カツコイイ!」

「ええい!怯むな たった1機だ 囲んで叩くぞ!」

動揺する部下（一人何か違ったが）を一喝し、陣形を整え直そうとする部隊長。

「よっこらせと」

リオンに突き刺さっているシシオウブレード改を引き抜き、肩に担ぐMk—II—カ
スタム。

「あなたは…」

「ん?その声はラトウーニか?」

声を聞き助けた相手がラトウーニであることを知り、少し驚くイサム。

「ここは任せて。とにかく下がってな」

「う、うん」

イサムにそう言われて機体をジャーダ達の所まで下げるラトウニ。

「さてと始めるとするか！」

ラトウニが下がるのを確認すると、機体のブースターを吹かし手近なりオンに一気に加速して、シシオウブレード改で横一線で切り裂く。

「なっ!？」

「目で追えなかつたぞ?!」

あつという間に1機落とされたことで、敵部隊全体に動揺が走る。

「悪いが一気に片付ける!」

野球の投手のように、手に持っているシシオウブレード改を振りかぶるMk—II

カスタム。

「大車輪!!」

ブーメランのようにぶん投げ、ブレードに設置されているスラストターが点火し、さらに加速する。

「そんなもの!」

散開して回避するリオン部隊。

その機動を先読みし加速し、1機に肉迫して右拳を握り締めて構えるMk—II カスタム。

「オラア!!」

そのまま殴りつけて、コックピットごと貫かれ爆散するリオン。

「キサマア!!」

味方が撃破され激昂したパイロット達のリオンが、レールガンを構えると背後から警告音が鳴る。

「何!?!」

慌てて背後を確認すると、先ほど飛んできたブレードが迫ってきており、そのまま切り裂かれる。

「ば、馬鹿な…:半数が一分も経たずに撃墜されただど!?!」

戻って来たシシオウブレード改を掴み、肩に担ぐMk—II カスタムを見据えながら恐怖で竦んでしまうDC兵達。

そこへ母艦より通信が入る。

「…了解した。全機時間だ後退する!」

DC部隊が後退して行く。

「?…この状況で撤退だど…」

敵の不自然な行動に疑問を感じていると、イングラムより通信が入る。

「各機へ。敵の戦闘原潜と思われる物体からMAPW(大量広域先制攻撃兵器)の発射が

確認された。直ちに、この戦域から離脱せよ」

「チイツ、そう来るかよ！」

敵の次なる手にたまらず舌打ちするイサム。

「クソツ！なんとかならねえのかよ！」

「…現状の装備では無理…」

諦めきれないジャーダに、打開策が無いことを告げるラトウーニ。

「…やむを得ないか、あんた達機体は動くか？」

「ええ、なんとかね」

「なら、俺達に乗って来た輸送機があるから乗せてもらおう。着いて来てくれ」

ガーネットの返答を聞き、自身の乗って来た輸送機までラトウーニ達を誘導しながら撤退するイサム。

その数分後、佐世保基地はMAPWによって壊滅した。

伊豆基地 格納庫

「クソツ！」

怒りのままに壁を殴りつけるリュウセイ。

「おーおー、えらく荒れとりますなりユウセイはん」

そこに変な口調のイサムがやって来る。

「DCの奴ら基地を潰すために民間人を巻き込みやがった！」

「まあ、戦争に綺麗も汚いも無いって言いますしね」

「それに、もしかしたら佐世保の人達を助けられたかもしれないんだ！」

「いや、無理でしょ」

壁を殴りながら怒りをあらわにするリュウセイに、冷静に現実を突きつけるイサム。

「ゼロじゃなかったはずだ！1%でもあったはずだ！」

「……」

「でも、俺達が撤退して…佐世保には1%の望みすらなくなつたんだ」

「甘つたれんなよ」

「!?!」

悔しさの余り拳を握り締めるリュウセイに、軽い口調から一転怒気のこもつた口調に変わるイサム。

「なんだ？ヒーロー気取りで死ぬ気かオイ」

「そ、そんなんじやねえけど、あのまま逃げなくてもミサイルを打ち落とすべきなんじやなかつたのかつて」

「それでお前が死んだらこの基地はどうなる？ただせさえAMに対抗できるPTが少ないんだよ」

「そうかも知れねえけどよ…」

初めて見せるイサムの雰囲気は戸惑いを隠せないリュウセイ。

「それに、お前の無謀のために他の人間が巻き込まれることを考えたか？」

「!？」

「アヤさんなんかはきつとお前のために残るだろうよ。自分の未熟さを理解しないで無茶して、そんな人達を犠牲にしているのかよ？」

「イサム、お前…」

まるで自分のことのように語るイサムに、何も言えなくなってしまうリュウセイ。

「…ごめんなさい、言いつぎました。でも、誰かを守るために死のうなんて考えないで下さい。皆が悲しみますから」

そう言つてその場を去るイサム。

伊豆基地 通路

「熱くなりすぎちゃったな」

先程の格納庫でのことを思い出し、ため息を吐き出すイサム。

そこに誰かが近づいて来る気配を感じる。

「よお、お前だよな佐世保で俺達を助けてくれたのは」

「あなた達はあの時の…」

「そつ俺はジャーダ・ベネルデイ。こつちはガーネット・サンデイ」

「あなたのおかげで生き延びられたわ、本当にありがとう」

「いえ、当然のことをしただけですよ」

お礼を言われて照れくさそうに頬を掻くイサム。

「それから、ほらラトウーニも」

「う、うん…」

ガーネットの後ろから恐る恐るといった感じに、ラトウーニが出てくる。

「そ、その助けてくれてありがとう…」

「ど、どういたしまして」

顔を赤くしながらラトウーニにお礼を言われ、ますます照れくさくなってしまい顔を逸らしてしまうイサム。

「えっと、そうだ！ねえラトウーニ俺と友達になつてよ！」

「え、友達…?」

いきなりの申し出に可愛らしく首を傾げてしまおうラトウーニ。

「うん、せっかく同じ基地にいるんだしき。嫌かな？」

「…嫌、じゃない…」

笑顔で話すイサムに、少しの間の後に頷くラトウーニ。

「ホント！ やった！ よろしくねラトウーニ！」

満面の笑みで右手の差し出すイサム。

「うん、よろしくねイサム…」

その手を恥ずかしがりながら握るラトウーニ。

「良かったわねラトウーニ」

「この子は人と接するのが苦手なんだけどよろしくな」

様子を見守っていたジャーダとガーネットが二人に話し掛ける。

「はい！ じゃあさ、まずはご飯食べに行こうよラトウーニ！」

「いいけどジャーダ達も…」

イサムの提案に頷きながらジャーダ達に確認するラトウーニ。

「俺達のことには気にすんな」

「二人で行ってらっしゃい」

笑顔で二人で行くように言うジャーダとガーネット。

「わかりました！よくし行こうラトウーニ！」

「う、うん……」

手を引いて歩き出すイサムに、恥ずかしそうに頬を赤くしながらも着いて行くラトウーニ。

「あんなに嬉しそうなラトウーニ、初めてみたわねジャーダ」

「ああ、あいつならラトウーニの心の壁を、壊してくれるかもしれないな」

イサムとラトウーニの背中を見ながら、微笑ましく見守るジャーダとガーネットであつた。

第九話

伊豆基地 通路

「うくん暇だなあ」

訓練も無く、知り合いも立て込んでおり暇を持て余しているイサムは、退屈しのぎに散歩していた。

「ラトウー二も見当たらないし、どうしたもんかねえ」

ぼやいていると見知った後ろ姿が視界に入る。

「わおイルム兄だ。おーいどこ行くのお」

これ幸いと駆け寄りながら声を掛けるイサム。

「おつイサムじゃねえか、これからリュウセイのところに行くんだ」

「そうなんだ。俺もついて行っていい？」

「ああ、いいぜ」

イサムが同行したいことを伝えると、笑顔で了承するイルムガルド。

「それで何しに行くの？」

「リュウセイが乗る新しい機体について話に行くんだ」

「新しい機体？どんなの？」

“ビルトラプター”さ」

疑問符を浮かべているイサムに、機体名を告げるイルムガルド。

「ビルトラプターで、“あの”？」

「そ、“あの”っだ」

「大丈夫なの、それ？」

イサムの脳裏に以前のテストで、パイロットのキョウスケを乗せたまま、墜落していくビルトラプターが思い起こされる。

「大丈夫さ、あの時のデータを見直してマオ社で改善されているから」

「なら大丈夫か。そういえば追い出されてから、リンさんとは連絡してるの？」

「お、追い出されたんじゃねえ、ガミガミうるせえからこつちから出ってたんだよ！」

突かれたくない所を突かれ、見栄をはって怒鳴るイルムガルド。

「逃げたんですね。わかりたくねえ」

「やかましいわ！」

呆れた視線を向けてくるイサムに、拳を振るうが軽く避けられるイルムガルド。

「チツ、あいかわらずすばしっこい奴だ」

「フフン、俺に当てようなんて百年はやあいたっ！」

カツコつけようとしたイサムにゲンコツをみまうイルムガルド。

「いったいなあ！話してる途中で攻撃すんなよ！」

「油断大敵ってやつだ！未熟者めが！」

「いったな！この！」

「でっ！やりやがった！この！」

脛に蹴りを入れるイサムに、両頬を思いつきり引つ張るイルムガルド。

こうしてじゃれあいながら、目的地へ向かって行く二人であった。

伊豆基地 ブリーフィングループ

「うーす、リュウセイさん新しい機体に乗るそうですね」

「ああ、そうだけどなんで疲れた顔してんだ？イルム中尉も」

披露困憊で入ってきた二人にそう問いかけるリュウセイ。

「いやなにこの人の駄目っぷりを再認識したんですよ」

「お前は黙ってるよ」

「イヤデース」

「このこの野郎！」

睨み合って取っ組み合いを始めようとする、イサムとイルムガルド。

「そ、それで二人は何をしに来たんだよ」

「ああ、お前さんがラプターに乗るって聞いてな」

「ええ」

「気を付けろよ。何せ、あの機体には実験中に大破したっていう過去があるからな」

「まずいと思ひ話題を変えるリュウセイに、衝撃の事実を告げるイルムガルド。」

「な、何だつて…!? ホントかよ、ロブ!？」

「あ、ああ…。あの機体は変形機構その他に問題が多くてな…」

「驚愕したリュウセイは、慌てて一緒にいたロバートに確認し、申し訳なさそうに答えるロバート。」

「俺は、あいつのテストパイロットだった、キョウスケの奴に同情するね」

「でもあの事故はハンスの野郎が無理やりやらせたからで、ラプターは悪くないよ」

「今はいないキョウスケに同情の念を送るイルムガルドに、原因はハンス・ヴィーパーにあると言うイサム。」

「ハンス・ヴィーパーって…ああ、あの陰険そうなオツサンか」

「おいおい口には気を付けろよ? その陰険に睨まれて、飛ばされた奴も多いんだ」

「顔を思い浮かべ嫌そうな顔をするリュウセイに、忠告するイルムガルド。」

「イルムもあの人にいちいち逆らわなければ、もっと出世していただろうに…」

「出世なんか願ひ下げだね。俺は気楽な立場の方がいいのさ」

「だからリンさんに尻に敷かれるんじゃないの？」

もつたないと言おうロバートに、自分の生き方を話すイルムガルド。そして容赦なくツッコムイサム。

「お前という奴は……」

「と、とにかくビルトラプターはホントに大丈夫なのかロブ？」

「一応、問題は俺たちの方でクリアしてある」

再び取っ組み合いを始めようとするので、話題を変えるリュウセイとロバート。

「一応か……」

「リュウセイ、ビルトラプターはハガネの格納庫内に置いてある。細かい調整作業をやるから、先にハガネに行っておいてくれ」

「ああ、わかった」

「俺たちも手伝おうよイルム兄」

「ああ、そうだな」

そう言つてハガネのある地下ドックへと向かうイサム達。

伊豆基地 地下ドック

「ふくん……これが私達の艦、ハガネか……。結構カッコいいと思わない？」

スペースノア級式番艦「ハガネ」を見ながら、リオ・メイロンが隣にいるクスハ・ミ

ズハに話し掛ける。

「リオはこういうのに興味あるの?」

「ん…。父様の仕事の影響かもね」

何かを思い出すような仕草をするリオ。

「これがハガネか…。艦首部分がシロガネと違ってるな」

「リ、リュウセイ君…!」

「ク、クスハ…!何でここに!?!」

思わぬ再会に驚愕するリュウセイとクスハ。

「な、何?あなたの知り合いなの、クスハ?」

「う、うん…。幼馴染みで、同じ高校に通ってたの…」

「へへえ…。私、リオ・メイロン。ハガネのオペレーターなの。よろしくね」

「あ、ああ。それより、クスハ…どうしてこんな所に…!?!」

戸惑いながらもクスハに問い詰めるリュウセイ。

「リュウセイ君こそ…突然連絡が取れなくなってる…」

「そ、それは…」

守秘義務があるため、答えることが出来ずに俯いてしまうリュウセイ。

「先に行き過ぎですよリュウセイさん。いくら新造艦が見れるからって」

「ん？何か取り込み中みたいだな」

やれやれといった表情で追いつくイサムと、取り入った状況であることに気付くイルムガルド。

「…どういうことなの？」

二人の様子が変なので間に割って入るリオ。

「これには色々とわけがあつて…」

「つて言うか、クスハ…ハガネのドックにいるつてことは、もしかして…!？」

リュウセイの言葉を遮るように、突然警報が鳴り響く。

「！な、何だ!？」

「お客さんがいらつしやつたか！」

「イサムとリュウセイは出撃準備だ！お譲ちゃん達はハガネへ行け！」

「あいよ！」

「了解！」

イルムガルドの指示に従い駆け出すイサムとリュウセイ。

「リュウセイ君！」

「大丈夫だ！心配するな！」

クスハの呼び止めにそう答えながら、走り去るリュウセイ。

「リュウセイ君……」

「クスハ！早く！」

「う、うん！」

不安を拭えないクスハだが、リオの呼び掛けでハガネへ向かうのであった。

伊豆基地

P T隊が出撃するとすでに戦闘が始まっていた。

「チツ、何て連中だ！今までのとはレベルが違うぜ!!」

ジャーダが戦況の悪さに悪態づく

「早くも正念場ってことね。こうなったらキメなきや……!」

「何をキメるんだ？」

「覚悟よ、覚悟！」

「ヘツ……じゃあ、奴らに見せてやるとするか！」

「見せてやるって……？まさか……」

「闘士だよ、不屈の闘志！」

「なあんだ、良かった。あんたのことだから、てつきり……」

「お前ら、何度言わせればわかる！作戦中は私語は慎め！！」

コントをかますジャーダとガーネットに、カイの雷が落ちる。

「す、すみません、少佐」

「…まあ、いい。この状況で軽口を飛ばせるのは、度胸がある証拠だ」

「…そりゃ、どうも」

「お前たちはハガネへの転属が決まっている。こんな所で死ぬんじゃないぞ」

「わかってますぜ、少佐」

気合いを入れてカイに答えるジャーダ。

「よし…ゴーストより各機へ！ハガネの発進路を確保するぞ！！」

「了解！」

カイの指示に返答しレバーを握りしめるイサム。

「イサム…」

「どうした、ラトウニー？」

「これ…」

ラトウニーから通信が入り、データが送られてくる。

「敵機の行動パターンを分析したの、よかったら使って…」

「おお！この短時間ですごいな、ありがとう！」

「う、うん……」

笑顔でお礼を言うと顔を赤くし俯いてしまうラトウーニ。

「お、何だずいぶんとその子と仲がいいじゃないかイサム」

イルムガルドがニヤつきながら通信に割って入ってくる。

「そりゃ友達だからな」

「友達ねえ」

「何だよ」

意味深な顔をするイルムガルドを軽く睨みつけるイサム。

「そこんところどうなんだい、お嬢ちゃん？」

「えっと、その……」

イルムガルドがラトウーニに聞くと、ますます顔を赤くして俯いてしまう。

「おい、ラトウーニが困ってるだろ」

「お前達、私語はそれくらいにしておけ」

イサムが止めようとするイングラムから通信が入り、一機のPTが格納庫から出てくる。

「イングラム少佐、ビルトシュバインに問題はないな？」

「…ええ」

カイが確認を取ると問題の無いことを告げるイングラム。

「む…？リユウセイ曹長はどうした？」

「機体の調整が済み次第出撃します」

「わかった。よし、各機迎撃開始だ!!」

「よっしゃあ！行くぜレオ!!」

先陣を切りブースターを全開にして飛翔し、敵陣へ突撃するMk—II カスタム。

「おらあー」

手近なりオンに肉薄しシシオウブレード改で切り裂く。

その隙を突いて他のリオン部隊がレールガンやホーミングミサイルを放つ。

「おっとおー」

機体を左右に滑らしたり、バルカンで撃ち落としながら回避するMk—II カスタム。
ム。

追撃しようとするリオン部隊だが、別方向からの銃撃で撃墜されていく。

「先行し過ぎイサム…!」

「この戦力差じゃ、俺がかき回すのが一番だろ」

着地したMk—II カスタムに、ラトウー二機が並び立つ。

「イサムはそのままかく乱を続ける。ラトウーニは援護してやれ」

「了解！行くぞラトウーニ！」

「わかった……！」

カイの指示に答えると機体を敵機に向けて、加速させるイサムとラトウーニ。

「ターゲット・インサイト……！」

接近してくるイオン部隊に、マシンガンを放ち散開させるラトウーニ。

「チエストオオオオオ！！」

その隙を突き機体を接近させ、シシオウブレード改で撃墜していくイサム。

「すごいなこのデータ、敵の動きを予測しやすい」

ラトウーニの送ってくれたデータに感心しているイサム。

「おい！そっちに一機向かったぞ!!」

「え、うおつと!？」

ジャードが慌てた様子で通信を入れてくるが、それに答える前に直感に従い機体を上昇させると、今までの場所に弾丸が撃ち込まれる。

「なんだ、あいつは!？」

攻撃してきた機体を確認すると

AMのようだが四肢があり黒のカラーリングをした機体であった。

「…四肢がついている…。近接・格闘戦もこなせる新型AMなのね」
機体を分析したラトウーニ通信を入れてくる。

「マジかよ、PTの取り柄が無くなっちゃまうぞ」

「でも多くは生産されていないはずだから…」

「なら、ここで落とす！」

ブースターを吹かし、新型機“ガリーオン”へ一気に突撃するMk—II カスタム。

「はあっ！」

シシオウブレード改を振り下ろすも、回り込むように回避され、背後を取られてしまう。

「なっ!?!があっ!!」

驚愕している隙に背中を蹴り飛ばされ、地面に叩き付けられるMk—II カスタム。

「イサム！」

ラトウーニがマシンガンやスプリットミサイルを放つも、すべて軽々と回避されてしまう。

「早い…！」

「こなくそお!!」

機体を起き上がりさせ、投擲モーションに入るMk—II カスタム。

「大車輪!」

シシオウブレード改を投げつけると回避行動に入るガリーオン。

その回避先を予測して肉迫し、拳を振るうMk—II カスタム。

「っ!?!」

だが、腕を掴まれ止められてしまう。

「まだだ!」

投げつけたシシオウブレード改が、戻って来てガリーオンの背後に迫る。

「よし! 動揺した隙に手を振りほどいて…」

そこで思考が止まってしまう。

なぜならあろうことか、ガリーオンは背後を見ずにバーストレールガンでシシオウブレード改を撃ち落としたからである。

「うそ、だろ…」

余りの事態に唾然としてしまふイサム。

「成程、シラカワ博士の言う通り素質は有るようだ」

「!? オープンチャンネル!?!」

ガリーオンがオープンチャンネルで語りかけてくる。

「私はエルザム・V・ブランシユタイン。コロニー統合軍少佐だ」

「まさか、教導隊の!?!」

相手の名前を聞き戦慄するイサム。

「はっ!」

「ぐあ!」

コックピット部に、ひざ蹴りを受け吹き飛び、地面に叩きつけられるMk—II カスタム。

「うあ、あ」

あまりの衝撃に意識が飛びかけるイサム。

だがガリーオンはそのまま追撃せず、ハガネの発進口へと向かって行く。

「イサム!!」

ラトウーニ機が慌ててMk—II カスタムに駆け寄る。

「なんくるないさああああああああ!!」

「!?!」

突然沖縄方言を叫びながら、機体上半身を起き上がらせるイサムに、驚いてしまうラ

トウーニ。

「痛つてえな、こんちくしよお！」

「い、イサム大丈夫なの…？」

「ちよつと危なかつたがな！」

そう言つて機体を立ち上げらせるイサム。

だが先程の衝撃で頭部を打ち付けたのか、ヘルメットのバイザーが割れ、額から流血していた。

「あいつはどこいった？」

「ハガネに向かつていったけど…」

「なら追いかけるぞ！」

「でも…」

これ以上の戦闘は危険だと、止めようとするラトウニ。

「でももへつたくれもねえ！このまま寝てても後悔するだけだ、そんなんじや死ぬまで笑つてられねえよ！」

「死ぬまで笑つて…」

「そうさ！死ぬときは後悔の無かつたつて、笑つていられるような生き方をしたいんだよ俺は！」

「…わかつた…でも忘れないであなたは一人じゃない、私や皆がいることを」

「ああ、力を貸してくれラトウーニ！」

「うん！」

笑顔で頷き合うと、戦場へと戻って行くイサムとラトウーニ。

戦場に戻るとハガネが発進しており、それを阻もうとDCが攻撃を加えていた。

「押されてるな、あの黒いのはどこだ!？」

「あそこ、ハガネに肉迫してる！」

ラトウーニの指示する方向を確認すると、ガーリオンがハガネの機銃を破壊しているのが確認出来た。

「とにかくあいつを止めるぞラトウーニ！」

「わかった！」

ラトウーニの返答を聞き機体を加速させるイサム。

再びハガネへと接近しようとするガーリオンへ、体当たりして阻むMk-II I カスタム。

「何!？」

突然のことで反応が遅れ回避できず、体制を崩すガーリオン。

「お前の相手は俺だあ!!」

「むっ!」

追撃で振るわれるシシオウブレード改を回避して、距離を取るエルザム。

「まさか、あの状態から追って来るとはな」

「はは、丈夫さが俺の取り柄なんでねえ!」

シシオウブレード改を構えながらそう言うイサムと、後ろで援護体勢に入るラトウ
二。

それに応えるように構えるエルザム。

「イサム、ラトウーニ無事だったか!」

「カイ少佐、こいつは俺達が抑えます!」

「なっ無茶だ!お前達が敵う相手じゃないぞ!」

イサムの発言に驚き止めようとするカイ。

「誰かが相手せにやならんでしようが!」

「それなら俺がする!お前達は下がれ!」

「そんな敵に囲まれている状態じゃ、無理でしょうが!」

イサムの言う通りカイ機は、多数の敵機に囲まれ身動きが取れないでいた。

「ここは彼らに任せましょうカイ少佐」

「イングラム少佐、しかし…」

「ハガネが離脱すれば敵も撤退するでしょう。それまでの時間さえ稼げれば…」

「…わかった。だが無茶はするなよお前達！」

「了解！」

カインそう答えるとガリーオンを見据えるイサム。

「待っていてくれるとは余裕だな」

「君とはいや、君達とは正々堂々戦いたいのでな」

「そうかい！」

ガリーオンに接近しシシオウブレード改を振るうMk-IIIカスタム。

左腕に持ったアサルトブレードで剣尖を逸らされ、バーストレールガンを放とうとするが、ラトウーニ機がマシンガンを放ち阻止する。

「ならば！」

ラトウーニ機にバーストレールガンを放つエルザムだが紙一重で回避される。

「良い腕だ。だが！」

一気にラトウーニ機に接近して、アサルトブレードで横から切り掛かるガリーオン。

「っ!？」

余りの速さに対応しきれず、左腕を犠牲にして回避し、マシンガンを放ちながら距離

を取るラトウーニ。

「オラアアアアアアアア!!」

背後からMk—II カスタムが、シンオウブレード改で切り掛かるも、カウンターの蹴りを受けて吹き飛んでしまう。

「私の動きを分析しているようだが、それでは甘いな」

「クソツ、なんて奴だ!」

余りの強さに思わず悪態づくイサム。

「こうなりや、一か八かだラトウーニ!牽制頼む!」

「わかった!」

ラトウーニ機が牽制している隙に、ガリーオンへ突撃するMk—II カスタム。

「甘いと言ったはずだ!」

バーストレールガンで撃ち落とそうとするエルザム。

「行つけえええええええええ!!」

背部の大型ブースターを切り離し、ガリーオンへと放つMk—II カスタム。

「何と!?!」

思わぬ戦法に動揺するもすぐに冷静になり、バーストレールガンで撃ち落とすエルザム。

爆煙が巻き上がり視界が悪くなる。

「なるほど、煙幕か」

爆煙で視界が塞がれるも、敵機を探そうと集中するエルザム。

「うらあー！」

右側の煙からMk—II カスタムが飛び出し、殴り掛かるがアサルトブレードで切り落とされてしまう。

「残念だが…」

ふとMk—II カスタムが、シシオウブレード改を持っていないことに気付くエルザム。

「まさかー！」

アームが鳴り上方を向くと、シシオウブレード改を持ったラトウーニ機が迫っていた。

回避行動をとるが、シシオウブレード改のスラスターによって加速された一撃を避けられず、左肩を切り落とされるガーリオン。

片腕で強引にシシオウブレード改を振るった反動で、左腕がもげてしまうラトウーニ機。

「我がトロンベにここまでダメージを与えるとは…」

「…エルザムハガネから離れる。今から戦術巡航ミサイルを発射する」

イサム達の健闘を称えるエルザムに、母艦で指揮を執っているテンペスト・ホーカーから通信が入る。

「ハガネを沈める気ですか？」

「こちらの戦力を分断されすぎた。敵の増援が来る前にハガネの推進部を破壊し足を止める」

「…復讐に焦るあまりに、ことを急ぎすぎではありませんか？」

「…作戦前に言ったはずだ。ハガネと試作機の奪取が難しい場合は…とな」

「…了解」

少し思案した後、撤退するエルザム。

「退いてくれたか…」

「うん…。!?これは…」

「どうしたラトウーニ？」

「敵の戦術巡航ミサイルがハガネに向かってる!」

「何だと!？」

ラトウーニから告げられた内容に驚愕するイサム。

「ハガネで迎撃出来るか？」

「先の戦闘で迎撃装置が破損して……」

「マジかよ！どうすれば……。つてあれはR—1か？」

どうするか悩んでいるとハガネの甲板で、ブーステッドライフルを構えているR—1を発見するイサム。

「ミサイルを狙撃するつもり？」

「出来るのかよそんなこと？」

「普通は無理だけど……」

「もしかしてT—L—I—Nシステムか？とにかく頼むぜリユウセイさん」

成功を祈っているとR—1から、ブーステッドライフルが放たれミサイルに直撃し爆散する。

「よっしやあ！やったぜ!!」

「うん！」

ラトウ—ニと成功を喜んでいると、帰還命令が出る。

「よう、イサム、お嬢ちゃん！無事か！」

「イルム兄！ああ無事だよ！」

「すげーなお前ら！あの“黒い竜巻”を追っ払ちまうなんて！」

「ラトウ—ニ怪我してない!？」

「うん、大丈夫だよジャーダ、ガーネット」

イルム達からの通信に笑顔で答えるイサムとラトウーニ。

「あれ、ラトウーニお前笑って…」

「え？私笑ってる…」

ジャーダに指摘されて、自分が笑えていることに気が付くラトウーニ。

「うん、笑えてる、笑えてるよラトウーニ！」

「ガーネット私…」

信じられないと言った表情で、ガーネットにつぶやくラトウーニ。

「おお！そういうえば君が笑ってる所初めて見たよ俺！」

「イサム…」

「おん、やっぱり笑ってるのが一番可愛いね」

「?!?!」

「イサムにそう言われて顔を真っ赤にして、ハガネへ向かって行ってしまおうラトウーニ」

「?!?!」

「あれ!?ラトウーニ！おーい！」

「いきなりじゃ、あの子には刺激が強すぎたんじゃねえか？」

「えー、そうかな？」

イルムの発言にうーんと首を傾げるイサム。

「イサムありがとうな」

「どうしたんですジャーダさん？」

「俺たちじゃあの子の笑顔を取り戻してやれなかったんだ…」

悲しそうにイサムに告げるジャーダ。

「あの、ラトウーニって」

「あの子はね〝スクール〟って言うパイロット養成機関の出身なんだけど…」

「そこでの過酷な訓練や精神操作が原因で、重度の対人恐怖症になったちまつたんだ。今でこそだいぶマシになってきたがな」

「…そうなんだ…」

ラトウーニの過去を知り悲痛な表情になるイサム。

「だから、あの子ことをよろしく頼む」

「これからも仲良くしてあげてね」

「はい！わかりました！」

笑顔で力強く頷くイサム。

「よし、女のことなら百戦錬磨のこの俺に任せておきな！」

「せめてリンさんとよりを戻してから言えよ尻軽野郎が」

「言つたなお前！それを……」

自信満々に言うイルムに冷たく吐き捨てて、通信を切り帰還するイサムであった。

第十話

ハガネ 格納庫

「うーんとここはこうして、これはこうつと」

「どうだ？ イサム」

M k e e I I カスタムのコックピットで、機体の整備をしているイサムにロバートが覗き込みながら尋ねる。

「よし、OSも問題無しつと」

「お疲れさん、ところでラトウーニが来ていないんだが何か知らないか？」

パネルを操作しながら異常が無いことを確認すると、体を伸ばして一息つくイサムに、ロバートが問いかける。

「ラトウーニが？ 何かあるの？」

「あの子の機体の調整作業をしたんだが…」

「OK、俺が探してくるよ」

「悪いな、頼むよ」

困ったように頭を掻くロバートに、コックピットから出て自分が探しに行くことを伝

えるイサム。

「さてと、とりあえず部屋に行ってみようかな」

リフトから降りて、いる可能性の高い場所から探す為に歩き出すイサム。

ハガネ 通路

「自分の部屋にいないならここかな？」

ラトウーニの部屋にいなかったなので、次に可能性が高いガーネットの部屋の前に立っているイサム。

呼び出そうとすると突然ドアが開き何かか飛び出してくる。

「うおおつと!」

驚きながらも咄嗟に受け止めるイサム。

「つて、ラトウーニじゃん、どうしたのき？」

「い、イサム？」

よく見てみると何時もの軍服ではなく、いわゆるゴスロリ服と言われる物を着ていた。

「わお、すごい格好してるね」

「あ、あう」

余程恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして俯いてしまうラトウーニ。

そこにガーネットが顔を出す。

「あら、イサム君ちようどよかった。こつそりと持ち込んでおいたんだけど、似合うでしょう?」

「ええ、よく似合ってますよ」

「ほ、本当?」

自信満々に感想を求めるガーネットに思ったことを告げると、ラトウーニが恐る恐る尋ねてくる。

「うん、すげー似合ってるよ」

「そ、そつか。えへへ」

嬉しそうにはにかむラトウーニを見ていると気恥ずかしくなってしまう、思わず視線を逸らしてしまうイサム。

「ふふ、よかったわねラトウーニ」

「うん!」

「えーと、そーいや何でその服を?」

ふと疑問に思ったのでガーネットに問いかけるイサム。

「イサム君以外の人とも仲良くなる切っ掛けになるかなって思ったの」

「ほうほう成程、いい考えですな。じゃあ皆にも見てもらおうよラトウーニ」

「で、でも…」

「大丈夫だよ、皆も気に入ってくれるって」

自信が無い様子のラトウーニの背中を押して行こうとすると警報が鳴り響く。

「チツ空気が読めない連中だ。先に行ってるから着替えてから来いよ！」

「でも…」

「その格好のままは不味いだろ！ガーネットさんお願いします！」

「ええ、わかったわ！」

ラトウーニをガーネットに任せ格納庫へ急ぐイサム。

Mk—II カスタムに乗り込み起動させると、ロバートから通信が入る。

「すまない、イサム！他の機体が発進出来るまで敵機を抑えてくれ！」

「あいよ、任せんさい！」

機体をカタパルトに固定させ、発進準備に入るイサム。

「進路クリア！発進どうぞぞ！」

「Mk—II— カスタム、イサム・トウゴウ行くぞ！」

リオの指示を受け、スロットルを全開にし機体が加速するに伴いGが体全体に押し掛かるが、気にすること無く発進するイサム。

続いてイルムガルドのヒュツケバイン009とリュウセイのビルドラプターも発進する。

「出れるのは俺たちだけなのかよ!？」

「いやあないでしょリュウセイさん。他の機体は整備中なんだから」

「そ、文句はDCに言えよ」

不安を隠せない様子のリュウセイに対し、落ち着いた様子のイサムとイルムガルド。

そこに量産型ゲシユペンストMk—II—が一機発進して来る。

「ん、あれはラトウーニか、って誰!？」

モニターに表示されたラトウーニの姿に驚愕するイルムガルド。

「お前着替えて来なかつたんかい!!」

「着替えるのに時間が掛かるから…」

ゴスロリ服もままのラトウーニに思わずツツコムイサムに、訳を伝えようとするラトウーニ。

「いやだからって…」

「お、おいイサムその子ってもしかして…」

「え、ラトウーニだけど何だよイルム兄」

「な、何だつてーっ!?!」

「マ、マジ!?!」

「いや、何でそんなに驚いてるんだよ」

驚愕しているイルム、ガルドとリユウセイに、呆れながらツツコムイサム。

「な、何でそんな格好してるんだ!?!」

「細かい話は戦闘が終わったらな!」

「あ、ああ…（なんてこった…。この俺としたことが、まったくのノーマークだったぜ

…）」

ラトウーニのことを見抜けなかったことに、動揺している様子のイルムガルド。

「んじやま、行きますか!」

気合を入れなおしてリオン部隊に突撃するイサム。

迎撃しようと弾幕を張られるが、シシオウブレード改と装甲で弾きながら肉迫するM

k—II—I カスタム。

「オラオラオラ!!」

シシオウブレード改で次々とリオンを切り伏せていくMk—II カスタム。他の機体が陣形の乱れたところを追撃していく。

「つと、一通り片付いたかね」

「みたいだが、相変わらずお前の戦い方は危なっかしいな」

周囲に敵機がないか確認するイサムに、同意しながらも戦い方に呆れた様子のイルムガルド。

「いいんだよ、これが一番合ってるんだから」

「だからって援護する身にもなれよ」

「無論感謝しますよ、お兄様」

「やめろ、見た目が女の奴そんな言い方されると余計気持ち悪い」

「んだとコラ!!」

いつものようにじゃれあうイサムとイルムガルド。

そうこうしている内にレーダが新たな機影を捉える。

「来たかつて、人型もいやがるな」

敵の増援の中に、この前遭遇したガーリオンの色違いを見付けるイサム。

「……。この時を……。連邦軍との戦いの場へ赴ける時をどれほど待ち望んだことか。あれから16年……。レイラ、アンナ……。お前達の無念を俺のこの手で晴らしてやる」

憎悪の炎を燃え上がらせ、ハガネを睨み付けるテンペスト・ホーカー。

「エルザム・V・ブランシユタインじゃないみたいだが…」

「それでもエースパイロットっぽいな。敵さんも次から次へと面倒な相手を送り込んでくれるもんだぜ、まったく」

ガリーオンを警戒しながら迎撃態勢に入るイサム達。

「連邦軍に与する者には死を…！我が妻と娘に対する最初の手向けとなるのは…。お前だ！」

「…来る…！」

ラトウーニ機にバーストレールガンを放ってくるが、寸前で回避する。

「その機体の動き、データで見た記憶があるわ…」

「あの機体、子供が乗っているのか…！」

自分が攻撃した機体に乗っているのが、子供であることを知り、驚きを隠せないテンペスト。

「…あなたはエルザム少佐と同じ、元教導隊のメンバー…」

「あいつも教導隊…!?!」

「へえ…」

相手が元教導隊であることを知り、驚くイルムガルド達だが、イサムだけは興味を

持ったような笑みを浮かべていた。

「（…あの声…アンナが生きていれば、同じ年頃か…？…俺は…あのパイロットを撃てるのか？）」

ラトウーニに娘の姿を重ね迷いが生じ攻撃を躊躇うテンペスト。

「いや…慈悲の心はとうに捨てた。俺は連邦軍の人間を一人で多く血祭りに上げるために…。16年目の復習を果たすために、鬼となる！」

「…復讐…！」

「ラトウーニ、その敵はヤバい！離れろ！」

テンペストがラトウーニに、狙いを定めたことを察知したイルムガルドがラトウーニに警告する。

「恨むなら、連邦軍に身を置いた己を恨め！」

「来る…！」

バーストレールガンを放ちながらラトウーニ機に接近し、アサルトブレードを構えるテンペスト機。

マシンガンで迎撃しながら後退するが、一瞬で接近されてしまう。

アサルトブレードが振るわれるが、間に影が割って入る。

「おいおい、俺も混ぜてくれよ！」

「また子供だと！腐る所まで腐ったか連邦め!!」

「少なくとも俺は好きでここにいるんだ！勘違いしてんじゃねえ!!」

子供が戦場にいる事に憤怒するテンペストに、怒鳴り返しながら受け止めていたアサルトルブレードを弾くイサム。

「イサム！」

「お前は下がってろ！コイツには言いたいことがあるんでな！」

ラトウーニに下がるように指示し、テンペスト機に向き直るイサム。

「ならばお前も家族への手向けとなれ！」

「なるかよ！」

互いに振るったブレードがぶつかり合い火花が散る。

「何が復讐だ笑わせんじゃねえ！」

「だまれ！貴様に何がわかる！」

「わかんだよ！憎しみだけで戦おうとすることの虚しさがな！」

「！貴様は……」

イサムの発言に動揺した隙に、踏み込まれ右腕を切り落とされるテンペスト機。すぐにバーストレールガンを連射しながら距離を取る。

「誰かの未来を奪うことが、あんたの家族が望んだことなのかよ!!」

「!?」

「恨むことしかしないで前に進まないあんたに、笑っていてくれるのかよ!!」

「黙れ、黙れ!!!」

激昂したテンペストは機体を上昇させ、ブレイクフィールドを展開させる。

「碎け散れ!!ソニック・ブレイカー!!」

前面にブレイクフィールドを纏ったガーリオンが、Mk—II—カスタムに突撃する。

危険を察知し咄嗟に回避するも、ガーリオンが通り過ぎた地面が抉り取られていた。

「ありや、テスラ・ドライブの圧力場を応用してやがるのか」

冷静に分析しながら再び突撃してきたガーリオンを回避するイサム。

「(AMのジエネレーターじゃ長くは続かないだろうが…。それじゃ逃げに撤されたらきついな。だったら!)」

恐れることなくガーリオンへ向かって、突撃するMk—II—カスタム。

「正面からだ?!?舐めるな!!」

「チエストオオオオオオオオオオ!!」

すれ違い様に振るったシシオウブレード改が、ブレイクフィールドとぶつかり合う。

「うらああああああああ!!」

「何?！」

咆哮とともに振り抜いたシシオウブレード改が、フィールドごとガーリオンの右肩を切り落とす。

「馬鹿な……!」

「少佐、ハガネから後続が!」

ハガネから出撃準備が完了した機動部隊が、展開されていく。

部下の報告を聞き戦況を確認すると、レーダーに友軍機が次々と撃墜されているのが映る。

「…潮時か、全機撤退せよ!」

引き時と判断し、撤退を指示し一度Mk—II カスタムを見た後、自身も離脱を開始するテンペスト。

「……」

「おい、大丈夫かイサム?」

「ああ、レオには無茶させちゃったがな…」

イルムガルドからの通信に答えながら機体の状態を確認すると、負荷が掛かりすぎて各間接部が損傷していた。

「二人で戻れそうか?」

「問題無い、これから帰還する」

ハガネ 格納庫

「驚いたわ…。ラトウーニがあそこまで変わるなんて」

「素材もいいけど…あたしのコーデイナーも中々でしょ？」

賞賛するアヤに自信満々に答えるガーネット。

「ああ。眼鏡を取った可愛い子ちゃん…っていうお約束をあそこまで地で行くとはね」

「俺もあの子を見たときは、自分の目を疑ったよ」

アヤ同様感心しているイルムガルドとロバート。

「正体がつと早くわかってたら、口説いていたんだが…」

「口説くって…あの子、まだ14歳ですよ？」

「十分、守備範囲だね」

イルムガルドの発言に若干引き気味になる一同。

「ホント、節操が無いよなアンタ」

「ん、検査終わったのかイサム」

そこに無茶な戦闘をしたので、念のために検査を受けさせられていたイサムと、付き

添っていたラトウーニが入って来る。

「皆大袈裟なんだよ、ちよつと打ち付けただけでさ」

「そう言つてこの前、怪我をしていたのを隠そうとしてた…」

釘を刺すようにイサムに言うラトウーニ。

「あんなの怪我の内に入らないって」

「……」

「やめて！その突き刺さるような視線地味に痛いから！」

無言で自身を見つめてくるラトウーニに軽く恐怖を感じるイサム。

「そういえば、ラトウーニ…もう着替えちゃったんだ？」

「…あんな格好じや艦内を歩けない…」

ガーネットが指摘すると恥ずかしそうに俯くラトウーニ。

「服装は置いといてさ、眼鏡ぐらい変えたら？目が見えるようなのに」

「イサムは、その方がいいの？」

「うん！」

「…考えておく…」

イサムが笑顔で頷くと頬を染めながら答えるラトウーニ。

「…ガーネット」

「しよ、少佐……」

「訳を聞かせてもらおう」

イングラムが現れガーネットを問い詰める。

「え、えつと……あの子に、皆と打ち解ける切っ掛けを作つてあげようと思つて……」

「……」

「す、すみません……始末書ものですよね？」

「ガーネット……」

「……イングラム少佐、格好がああでも任務はやり遂げましたし……ガーネットの気持ちも

……」

「（……一種のリハビリということか）いいだろう。今回は不問とする」

アヤが助け舟を出し、今回の件は咎めないことを告げるイングラム。

「あ、ありがとうございます！」

「では、以上だ」

「あ、少佐……あの子の服装、どうでした？」

「……」

「が、ガーネット？」

「（おいおい、それをおカタイ少佐に聞くかね）」

突然の質問に考える素振りをするイングラムと驚愕する一同。

「嫌いでは……ないな」

「そうですか。ありがとうございます！」

「（こりやまた意外なお答えで……）」

「（私も……着てみようかな、あの手の服。でも……似合わないわよね、きつと）」

イングラムの意外な一面を目の当たりにしさらなる驚愕に包まれる一同と、何かを考え諦める様子のアヤであった。

「そーいやよ、イサム」

「何だい、イルム兄？」

「いや、お前は着ないのかと思ってな」

「突然何を言い出すのこの人？」

突然の発言に怪奇な表情を浮かべるイサム。

「あ、そうそうイサム君のも用意してあるのよ」

「何で用意してんのアンタ!？」

どこからともなくラトゥーニが着ていた服の、黒色を取り出すガーネット。

「そーいや昔はテスラ研の職員に、よく着せ替えさせられてたな」

「言うんじゃないよ糞兄貴!!」

恥ずかしい過去を暴露したイルムガルドに殴りかかろうとするが、ガーネット達に取り押さえられる。

「ちよ、はな…つてラトウーニまで!?!」

「どんなの着てたんですか?」

「すごい興味津々だこの子!?!」

ラトウーニの意外な反応に戸惑うイサム。

「ああ、今度アルバム持つてきてやるよ」

「や、やめてええええええええええええええええええ!!!!」

ハガネに一人の少年の絶叫が響き渡ったのであった。

第十一話

ハガネ 格納庫

「どう、ラトウーニ？」

「もう少しで終わる」

ビルドラプターのコックピット内で作業しているラトウーニに、手伝いながら問いかけるイサム。

何をしているのかというと、飛行戦闘が苦手と悩んでいるリュウセイ用に、新しいマニューバレーターを組み込んでいるのである。

「助かったよ。俺だけじゃどうにもならなかったからさ」

「何、これくらいどうってことないですよ」

手伝いながら申し訳なきように礼を言うリュウセイに、笑顔で答えるイサム。

「終わったわ…」

「サンキュなラトウーニも」

「うん…」

「（この前の件以来、だいぶ他の人とも話せるようになってきてるな）」

リュウセイと話しているラトウーニを見て微笑むイサム。

「戦闘機やリオンのマニユーバレーターを組み込んだから、だいぶ扱い易くなってますよ」

「ああ、足手まといにならないようにしなきゃな」

「……」

「ん？どしたラトウーニ」

ラトウーニが心配そうに自分を見ていることに気が付くイサム。

「北米地区の戦況を聞いて……」

「連邦軍が苦戦してるんだよな。確かラングレー基地にお前の養祖父がいるんだっけか」

「ええ、でも簡単に死ぬ人じゃないし、親分達もいるし大丈夫ですよ」

胸を張って自信満々に言うイサム。

「親分？」

「ゼンガー・ゾンボルト少佐のことです」

「元教導隊の？」

「うん。お爺ちゃんの門下生で、“ATX計画”で運用されている部隊の隊長をしてるんだ」

「何かS R X計画と似た名前だな」

「S R X計画と対をなすんだそうですね」

談笑していると、イルムガルドが慌てた様子で走って来るのが見えた。

「F—28を回してくれ！すぐに出撃する!!」

「そんなに慌てて、どうしたんねんイルム兄?」

普段と違う様子にただ事ではないことを感じ取るイサム達。

「奴だ、奴が近くに來てるんだよ!」

「奴ってまさか所長が!?!」

イルムガルドがここまで慌てだす人物は、一人しかいないので、すぐにわかったイサム。

「そうだ!行くぞイサム!」

「あいな!」

「って待ってくれよ二人共!」

「行っちゃった…」

あつという間に、機体に入り込んでしまうイサムとイルムガルドに、置いていかれるリュウセイ達であった。

「フツ…私は運がいい。日本から引き揚げる途中で、あんな獲物と遭遇出来るとはな…」
ガリーオン・トロンのベのコックピット内でほくそ笑むエルザム。

「あれがゼンガーからの情報通りの輸送機だとしたら、中身は超闘士…。入手すれば、我らDCにとって強大な戦力となる。奴の零式のようにな…」

「エルザム少佐！この空域に接近する機体を感じしました！」

部下から通信が入り、モニターにMk-III カスタムとメッサーが映し出される。

「案の定、敵機に囲まれてやがるな。応答しろ、T3！」

「おお、イルム。待っていたぞ、イサム君も来てくれたか」

「うっ…。やつぱり、俺を呼びつけたのはあんたか」

「おひさー所長」

タウゼントフェスラーに乗っているジョナサンがモニターに映り、嫌そうな顔をするイルムガルドと笑顔で手を振るイサム。

「久しぶりだな。元気だったか？」

「元気百倍ですよー」

「のんびり挨拶してる場合か！何やってんだよあんた！」

「お前に渡したい物があってここまで来た。早く私のT3まで来るんだ」

「渡したい物……？」

「そう。とっておきのプレゼントだ」

「……何なんだよ？」

もったいぶるジョナサンに、いぶかしむイルムガルド。

「それは見てのお楽しみだ」

「……あのな、今まであんたが俺にまともなプレゼントをしたことがあったか？」

「ん？……昔の話は忘れたな」

「……俺は覚えてるぞ。ロケットブースター付きの三輪車とか変形機構付きの自転車とか……」

「仕事のついでに作ったワケのわからん物を押しつけやがって！死にかけてのは二度や三度じゃねえんだぞ!!」

「いいから、早く来ないか。でないと損をするのはお前だぞ」

「そこまで言うからには、この状況を何とか出来る代物なんだろうな？」

今までの不満をぶつけるイルムガルドだが、何食わぬ顔のジョナサン。

「チツしようがねえ、イサム援護してくれ！」

「ガッテン承知！」

Mk—II カスタム先行しその後メッサーが続く。

「各機へ輸送機に近づけるな！」

エルザム号令の元、迎撃行動に移るAM部隊。

「ところがどっこい！」

Mk—II カスタムが筒状の物体を投げつけると底の部分が点火し、AM部隊に向かつて行く。

「ミサイルか！」

リオンがレールガンで打ち落とすと視界が煙幕で包まれる。

「これは……！」

「少佐、リーダーが！」

「チャフか！」

視界とリーダーを封じられ混乱するAM部隊。

「よっしやあ！ハッチを開けといてくれよ所長！」

「もうやってるよ！」

「さつすがあ。んじや行くぜイルム兄！」

「ああ、やってくれ！」

「フルブーストだレオ!!」

メッサーを抱えて最高速で煙幕の中を突っ切るMk—II カスタム。

「グツォ」

標準的な対G装備しか搭載されていないメツサーに乗っているため、すさまじいGが
 押し掛かるが、歯を食いしぼり耐えるイルムガルド。

「どっせい！」

タウゼントフェスラーの格納庫へ飛び込み、メツサーを降ろすMk—II カスタ
 ム。

「待たせたな、親父。ご要望賭通り、来てやったぜ」

「さすが、私の息子だ。さあ…これを受け取るがいい」

「!？」

「お前へのプレゼントだ」

「こ、こいつは…!!」

イルムガルドの視線の先にPTよりも巨大な鉄人が横たわっていた。

「グルンガスト…！こいつはラングレーにあつた奴か！親父、あんたはわざわざこいつ
 を…！」

「フフフ…だから、言つたらう？とつておきのプレゼントだと」

「(だつたら、初めからそう言えつてんだ)」

隠す必要があつたのかとツツコミそうになるが、非常時なのでやめておくイルムガル

ド。

「さあ、起動させるぞ。イサム君すまんが、それまでそこらの武器で敵機を抑えといてくれ」

「つて言われても射撃はなあ…。おっこれなんかどうかな？」

とりあえず近くにある武器を持つとコンソールに“試作大型ビーム砲”と表示される。

「うっしやあ！行けえい！」

A M部隊に向けてトリガーを引くと高出力ビームが放たれ、数機のリオンが跡形も無く飲み込まれる。

「すげえな…。ん？」

適当に撃つたのにと感心していると突然アラームが鳴り出し、ビーム砲がショートし始める。

「ああ、そういえばそれはジェネレーター調整が上手くいかなくて、下手すると爆発するんだった」

「それを早く言ええええええええ!!」

慌ててブン投げると空中で盛大に爆発するのであった。

「殺す気かアンタは!？」

「落ち着け次はそのガトリングガンを使ってみるんだ」

「大丈夫なんだろうな…」

不安になりながらも指示に従い、M k—II カスタムの両手に二丁のガトリングガンを構えさせ、トリガーを引くイサム。

すると複数の銃口が回転し弾丸が吐き出される。

「しよ、少佐接近出来ません！」

「お前達は下がっている。私が抑える！」

余りの弾幕にうろたえる部下に指示し、突撃するエルザム。

「真正面から来やがった!!」

弾幕をもろともせず突き進んで来るガリーリオン・トロンベに驚愕するイサム。

弾幕をガリーリオン・トロンベに集中させようとした瞬間、ガトリングガンが停止してしまふ。

「なっジャムリやがった!？」

「ふむ、弾が詰まりやすいと…」

「落ち着いてデーター取ってんじやねえ!!」

マイペース過ぎるジョナサンにおもいつきりツツコムイサム。

「もらうー！」

「クソツッ！」

バーストレールガンを構えるガリーオン・トロンベを迎え撃つべく、ガトリングガンを投げ捨て、シシオウブレード改を抜刀しようとするMk-IIIカスタム。

「イサム、屈め！オメガレーザー！！」

「え？うお？！」

イルムガルドの指示に咄嗟に機体を屈ませるとレーザーが頭上を通り過ぎる。

「!?」

突然の攻撃を回避し距離を取るエルザム。

その間にグルンガストを乗せたトレイラーが、タウゼントフェスラーから出てくる。

「よし、いいぞイルム！」

「おう！行くぜグルンガスト！！」

トレイラーを運転しているジョナサンが叫ぶと、グルンガストを立ち上がらせるイルムガルド。

「超闘士グルンガスト見参!!!」

決めセリフと共に構えをとるグルンガスト。

「目覚めたか、超闘士が……。では、その力を見せていただこうか！」

ガリーオン・トロンベが先陣を切り、AM部隊がグルンガストに迫る。

「来たぞ。さあ、グルンガストの力をDCに示すのだ！」

「何か、上手く親父に乗せられてるような気もするが……。DCにグルンガストの実力を思い知らせてやるつてのは、やぶさかじやないんでな！」

ジョナサンのペースに乗せられやる気上げるイルムガルド。

「くらえ！ブーストナックル!!」

グルンガストの両腕がAM部隊目掛けて打ち出される。

ガリーオン・トロンベは回避するも後方のリオンが粉碎されていく。

「まだまだ！ファイナルビーム!!」

機体中央部から放たれた高出力ビームがリオンを飲み込んでいく。

「この攻撃力、流石は特機だ……。だが、運動性ならこちらの方が上だ！」

ガリーオン・トロンベがグルンガストの死角に回り込み、バーストレールガンを放つ。

その間にMk-III カスタムが割り込み弾丸を切り払う。

「あなたの相手は俺がさせてもらう！イルム兄、他は任せる！」

「おうよー！」

Mk-III カスタムとグルンガストが背中を合わせながらそれぞれ構える。

「行くぜ、黒い竜巻!!」

Mk-III カスタムがガリーオン・トロンベに接近しながら、シシオウブレード改

を振るうがごとく回避されてしまう。

「残念だがそれでは私には届かないぞ」

「チツ相変わらず早いな！」

ガリーオン・トロンベが反撃しようとするが、別方向ビームが飛来する。

「エルザム!!」

「ライディース、ハガネが来たか」

シュツツバルトの砲撃を回避しながら、反撃するガリーオン・トロンベ。

「今日こそ、貴様を討つ!!」

「出来るかな、お前に？」

「俺を忘れてんじゃねえ!!」

イサムとライディースを同時に相手にしながらも圧倒するエルザム。

だが、他の戦域ではハガネ隊が優位に戦闘を進めていた。

「これ以上は限界か、全機撤退せよ！」

「逃がさんぞ、エルザム!!」

「待ったライさん！何か来る！」

ガリーオン・トロンベを追撃しようとするシュツツバルトを、一機の“コスモリオン

”が阻む。

「おやめなさい、ライデイス!!」

「その声、レオナか!？」

コスモリオンの乗っているのが、レオナ・ガーシユタインであることに気づくライデイス。

「レオナ、何故お前とトロイエ隊がここに?」

「大気圏突入前にヒリユウ改と交戦した影響で、降下コースを逸脱しこの付近に降りたのです。ここは我らトロイエ隊にお任せ下さい」

「しかしお前達には重要な任務が…」

「あなたを見捨てたとあつては総司令に顔向けできません。どうかお任せを」

「…わかった。頼むぞレオナ」

そう言い残し撤退していくエルザム。

一方イサムはと言うと。

「落ちろや!」

「甘い!」

トロイエ隊隊長ユーリア・ハインケルと戦っていた。

「宙間戦闘仕様の機体で戦ってるこいつらはなんなんだよ!？」

「おそらくコロニー統合軍の親衛隊トロイエ隊だろう」

「何でそんな連中がこんな所にいるんだよ！」

イングラムの説明に疑問の声を上げるイサム。

「…データではトロイエ隊は女性のみで構成されたエリート部隊…」

「お、女だけの部隊?!?それを早く言えよ! だったらこのイルム、もつと手加減を…つと!!」

ラトウーニの説明に反応している際に、被弾しそうになるイルムガルド。

「初顔見せで撃墜とかマジで勘弁してくれよ馬鹿兄貴!」

「うるせえ! どんな時にでも女性には紳士的ってのが俺のモットーなんだよ!」

「そうやって女の尻追っかけてるから、リンさんに愛想尽かされるんだよ!」

「尽かされてねえよ! あれだ男と女の関係ってのは複雑なんだよ!」

「意味わかんねえよ! あんたは前から…!」

いがみ合いながらも背を合わせて互いの死角をカバーする、イサムとイルムガルド。

「つと、撤退したみたいだな」

「流石親衛隊、引き際も鮮やかだな」

「うっし。じゃあ帰ったら決着つけるとするか」

「おう、上等だ覚悟しろよ糞兄貴」

「いやいや、まだやる気なのかよ!」

拳を収める気の無い二人を止めようとするリュウセイ。

「当たり前だ。今日こそ減らず口を叩けなくしてやる」

「おもしれえ、やってみやがれ。そのひん曲がった根性叩き直してやるよ」

そう言つてハガネへと帰還して行くイサムとイルムガルド。

「少佐…」

「ほうつておけ」

リュウセイがイングラムに助けを求めるが、投げやりな答えが返ってくるのであつた。

ハガネ 格納庫

「うらあ!!」

「おらあ!!」

ハガネに戻つた後、華麗なクロスカウンターを決めて仲良くぶつ倒れるイサムとイルムガルド。

「ぶつ倒れちまつたぞあの二人…」

「どうするのこれ…」

どうしたらいいのかわからず、戸惑うジャーダとガーネット達一同。

「大丈夫、ほうっておけばすぐに目を覚ますよ」

「そうなのかロブ？」

「ああ、テスラ研の頃は良くあつたからね」

ロバートの説明にとりあえず安心する一同。

「やれやれ、相変わらずだな」

「所長……ご無事でしたか……！」

「久しぶりだな、ロバート。君も元気そうで何よりだ」

久しぶりの再会を喜び合うロバートとジョナサン。

「あの人、誰なの？」

「テスラ・ライヒ研究所の所長で、イルム兄の父親ですよ」

ジョナサンのことを知らないガーネットに説明するイサム。

「うお!? もう起きたのかイサム！」

「ええ、慣れてますんで」

驚くりユウセイ達にケロツと答えるイサム。

ちなみにイルム、ガルドも起き上がっている。

「おお、イルム、イサム君無事だったか」

「何を今さら…。グルンガストを持って来たんなら、最初からそう連絡しろっての」

「そんなことをして、スーパードロボットの登場シーンを盛り下げるつもりはない」

「あ、あのなあ…」

堂々と言いつつジオナサンに呆れ果てるイルムガルド。

「ところで、博士…。北米のラングレー基地がDCに制圧されたと聞いていますが…」

「…うむ。DC機動部隊と、彼ら側に寝返った連邦軍部隊の猛攻を受けてな…。あつと言う間に我々の基地は制圧されてしまった」

「えっ!？」

ジオナサンの告げた内容に衝撃を受けるロバート達。

「…私はグルンガストと“アレ”を持ち出し、逃げるのだけで精一杯だった…」

「でも、あの基地には親分達がいるはずでしょう…?」

「その理由の一つ。ゼンガー・ゾンボルト少佐がDC側についてたからだよ」

「親分が!?なんで…」

「それはわからないが、事実だ…」

ゼンガーのことを良く知るイサムは到底信じる事が出来なかったが、ジオナサンの表情から事実なのだと認めるしかなかった。

「では、カザハラ博士…。キョウスケやエクセレン…それにリシュウ先生は!？」

「彼らは、私達の脱出を手伝ってくれたが…その後の消息は不明だ」

「……」

「だが、心配はいらん。ATX計画の機体を乗りこなす彼らのことだ…。私は、無事だと信じている。君達ハガネのクルーがこうしてここにいるようになる」

「……」

「イサム…」

「大丈夫だよラトゥーニ。言つたら簡単に死ぬ人じゃないって」

ラトゥーニが心配そうに声を掛けるが、笑顔で答えるイサム。

「では、イサム君にもプレゼントを渡すでしょう」

「俺にも?」

「そう、先生やテスラ研にATX計画とマオ社の人達が君のために用意した機体だ」

ジョナサンがそう告げながら自身が運んで来たコンテナの一つを開放すると、中から一体の漆黒のPTが姿を現す。

「このPTは…」

「RTX—010—04R”レオーネ”イタリア語で雄ライオン、転じて勇者の意味を持つ」

「RTX—010ってヒュツケバインMk—IIですよ?そうは見えないんですが

…

レオーネと呼ばれる機体の頭部アンテナは鶏冠状となっており、フェイスカバーで覆われており、従来のヒュツケバインタイプとは異なっていた。

「今の状態は『セーフティモード』と言う形態でリミッターが掛かっているんだ」

「リミッター?」

「ああ、元々この機体は、プラズマ・リアクター搭載試験機である四号機を改修した物なんだ」

「プラズマ・リアクターって、特機用のジェネレーターだよな。大丈夫なのかよそんなもんPTに乗せて…」

説明を聞いていたイルムガルドが不安そうにジヨナサンに問いかける。

「PT用に小型化したので出力調整が難しくなっちゃってしまい、かなりピーキーな機体だがどうするかねイサム君?」

「はい!乗ります!」

ジヨナサンが問い掛けると躊躇い無く答えるイサム。

「即答だな!?!いいのかよこんな危なっかしい機体で…」

「皆が用意してくれた機体だから、大丈夫だよイルム兄」

「まあ、お前がそう言うんならいいけどよ…」

自身満々に言うイサムにこれ以上言うのをやめるイルムガルド。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。では私も調整を手伝うためにこの艦に残ろう」
「げっマジかよ…」

ジョナサンが告げると明らかに嫌そうな顔をするイルムガルド。

「どうした？不満かイルム」

「ああ、さつさと伊豆にでも行けよ」

「レオーネを中途半端のまま置いていくのは目覚めが悪いのでな。何より…」

「何より？」

「美女だらけのこの艦から離れるのが惜しいのでね」

「だと思ったよ」

予想通りの返答にハモリながらツツコムイサムとイルムガルドであった。

第十二話

テスラ・ライヒ研究所 格納庫

暗闇を照らす月が見えない程の豪雨の中、誰も居ない薄暗闇で一台のトラックに何かを積み込んでいる少年が一人。

ドイツで生まれた母から受け継いだ赤い瞳に、銀髪をショートヘアにしている。

「……」

コンソールを見つめる赤い瞳は何の感情も宿さず、ただひたすら作業を行っていた。積み込みが完了すると、シャツターを開けトラックに乗り込もうとする少年。

「ケン!!」

少年を呼ぶ声に振り向くと、ここまで全力で走ったために、息を荒げたイサム・トウゴウがいた。

「何でだよ…何でだケン!!」

訴えるように叫ぶイサムの目には涙が溜まっていた。

「……」

「答えろ!!」

今だ無言を貫く少年ケン・トウゴウに耐えかねるように叫ぶイサム。

「…俺はここを出て行く」

「出て行くって、何でだよ!？」

やっと口を開いたケンの告げる内容を信じることが出来ないイサム。

「俺は外に出て生きたいように生きる」

「生きたいように?」

「そうだ。こんな檻の中では死んでいるようなものだからな」

「檻? 檻って何だよ!？」

ケンの言っていることが理解出来ずに困惑するイサム。

「せっかくの力を振るうことを嫌う奴に、これ以上学ぶことは無い」

「お前!!」

「俺があのだジジイの教えを受けていたのは、技と“コイツ”を手に入れるためだ」

そういうとケンはトラツクに積み込まれいる布をまくり上げる。

「それはシシオウブレード!？」

「これからの時代はこいつが役に立ちそうなんだな。いただいて行く」

「よせ! 自分のためだけに力を振るうな!!」

「だったら、止めてみせる活人剣とやらでな!!」

無表情から一転、凜猛な笑みを浮かべて、腰の左右に下げている鞘から日本刀を抜き、二刀流の構えをとるケン。

「やめろ！俺はお前とは…」

「戦えない、か？だから甘いのだお前は!!」

刀を抜くことを躊躇うイサムに容赦なく切り掛かるケン。

咄嗟に抜刀し防ぐイサム。

「ハアア!!」

「つく！」

両手に持った日本刀“鷲爪（しゅうそう）”を縦横無尽に振るい、切り掛かるケンに反撃できずに防戦一方のイサム。

「どうした！反撃してこい！」

「嫌だ俺は…いぐあ！」

腹部に蹴りを受けて吹き飛ばされるイサム。

「ハッ!!」

「!?」

仰向けに倒れたイサムに、一瞬で間合いを詰めたケンが、刀を逆手に持ち突き刺そうとする。

「う、うああああアアアアアアアア!!」

突き刺さろうとしていた鷲爪を、咆哮と共に獅子丸で弾くイサム。

余りの衝撃に吹き飛ばされるが、空中で体制を整え着地するケン。

「フンツ! やつとその気になったか」

待ち望んだ様に笑みを浮かべイサムを見据えるケン。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

獣の様な咆哮と共に斬撃を放つイサム。

それに怯むこと無くケンが迎え撃ち、互いの刀がぶつかり合い火花が散る。

「ハハハ! やつぱり俺もお前も、この瞬間が一番幸せな顔をするよなイサム!!」

「違う! 俺は……!」

「なら他にどんな生き方が出来るってんだ。ええ!!」

「それは……!」

「刀で、人を殺すことしか脳が無い俺達によお!!」

「っ!?!」

ケンの言葉に動揺してしまった隙に、獅子丸を弾き飛ばされ尻もちをついてしまうイ

サム。

「……じゃあな、兄弟」

一瞬間を置くとイサム目掛けて刀を振り下ろすケン。

恐怖の余り目を瞑ってしまおうと、何かがイサムを包み込む。

「…お、ばあ、ちゃん…?」

「ババア…」

恐る恐る目を開けると、それが養祖母のシノであることに気付く。

ケンも予想外だったのか、目を見開いている。

「お婆ちゃん！お婆ちゃん！」

力無く自分に寄りかかるシノを抱えて懸命に呼び掛けるイサム。

背中を支える右手からドロツとした感覚がし良く見てみると血で真っ赤に染まっ

いた。

「そこまでだケン！」

そこに警備員を連れたジョナサンが現れ、ケンに呼び掛ける。

「！」

ハツとしたように、トラックへ向かって走り出すケン。

「逃がすな！撃て！」

ジョナサンの指示を受けた警備員が持っている銃をケンへ放つ。

銃撃を避けながらトラックに乗り込み逃走するケン。

「クソツ！止まれ、止まれよ!!」

ケンを追いかけてようとする人々の喧騒の中、イサムは必死にシノの傷口を抑えていた。

だが、出血は止まることなく溢れ出していた。

「イサム君、シノさん!!」

ジョナサンがイサム達の下に駆け寄るよるも、その惨状に絶句する。

「所長！お婆ちゃんが!!」

「ああ！すぐに病院を手配する！」

イサムにそう告げて走り去っていくジョナサン。

「い……さむ……」

「!?お婆ちゃん!!」

声を絞り出してイサムに呼び掛けるシノ。

「話さないで！今病院に連れて行くから!!」

「いいから、聞きなさい……」

取り乱すイサムをなだめる様に話し掛けるシノ。

「あの子を……恨んでは……いけませんよ……」

「何でだよ！あいつは!!」

「あの子の…心を…支え…られなかった…私達…にも…責任は…あるのだから…」
息も絶え絶えに言葉を紡ぐシノ。

「でも…これ…だけは…やく…そく…して…」

「やく、そく？」

「あの…こ…ケンを…と…めて…あげて…あなた…に…しか…でき…ない…こと…だか
ら…」

「うん！約束する、俺があいつを止めるよ！だから死なないですよ、お婆ちゃん…！」

決壊したダムのように涙を流すイサムの頬をそつと撫でるシノ。

「あなた…たち…に…あえて…しあわせ…だった…わ」

その言葉と共に頬を撫でていた手が地面へと落ちた。

「お婆、ちゃん？」

イサムが呼び掛けるも返事は返ってこない。

笑顔のまま息絶えていたのだから。

「お婆ちやああああああああああああん!!!」

「お婆ちやああああああああああん!!痛つい!!」

痛みと共に覚醒し、辺りを見回すとハガネの自室であった。

景色が逆さまになっているので、どうやら頭から床に落ちたようだ。

「いてててて。夢か…」

頭をさすりながら起き上がるイサム。

「(にしても、久々に見たな…)」

ここしばらく見なかった夢を見て胸騒ぎを覚えるイサムであった。

ウエーク島 司令室

「帰還命令ですか…」

「そうじゃ、直ちにアيدドネウス島に戻ってくるのじゃテンペスト」

アードラー・コツホから告げられた命令に、不服の表情を浮かべるテンペスト。

「このウエーク島基地で、ハガネ迎撃任務を続行するのではないのですか？」

「いや。お前には、別の任務が与えられる。」

「しかし一隻とは言え、その戦力を侮るのは危険です。今、自分が基地を離れることは

…」

「心配は無用じゃ。以降の任務はテンザン・ナカジマに引き継がせる」

「あの男に……パイロットとしての腕前はともかく、指揮が執れるとは思えませんが」
自分の後任に疑問を隠せないテンペスト。

「それに、あの男がそちらに向かつておる」

「……彼がですか？」

忌々しそうに吐き捨てるアードラーと驚いた様子のテンペスト。

「お前の帰還命令は、総帥が直々に出されたものじゃ。エルザムやシユウ・シラカワも同様の命令を受け、こちらへ向かつておる」

「(エルザムとシラカワ博士が……)」

「よいな？ 早急に総司令部へ帰還しろ。総帥がお前をお待ちじや」

通信が切られモニターには何も映らなくなった。

「まさか……私の心が見透かされたか？ ハガネの奪取ではなく、撃沈しようと考えている私の……)」

テンペストが考え事をしていて、一人の男が司令室に入ってくる。

「さーて、今日から俺がここの戦闘指揮官だからな。ちゃんと命令を聞けよ」

「……」

「！な、何だ、少佐……まだいたのかよ」

「……」

入って早々威張り散らすテンザンを軽く睨み付けるテンペスト。

「総帥があんたを呼んでんだろ？ さっさと行かなきゃマズいんじゃないの？」

「言われるまでもない」

「ま、後のことは任せてくれ。ハガネは俺が手に入れてやるからさ」

「お前では無理だろうがな」

司令室のドアが開き、そう言って少年が入って来る。

「てめえは!？」

「やはりおまえか、ケン」

「どうもテンペスト少佐。その太つちよは俺が見ておこう。安心して、総司令部に戻る」といふ

「何だとテメエ！ 年上への敬意が足りねえぞ!!」

ケンの発言に激昂し胸倉を掴むテンザン。

「お前が言うなよ。模擬戦で俺に勝てたら考えてやらんでもない」
「ぐっ!」

言い返せず言葉を詰まらせるテンザン。

彼がDCに入ってから、ことあるごとに模擬戦をしているが、一度もケンに勝てたことが無いからである。

そんなテンザンの手を払い、テンペストに向き合うケン。

「ケン、総帥がお前を向かわせたのか？」

「いえ、俺の出番はこの防衛線を抜かれたらですが、退屈なので勝手に出張らせてもらいました」

悔しそうに唸っているテンザンを無視して話を進めていく、ケンとテンペスト。

「俺を無視してんじやねえ！」

「…うるさい騒ぐな。そう言うことなので、後は任せてもらおう少佐」

「わかった。頼むぞケン」

納得したように頷き、司令室を後にするテンペスト。

「クソツ！オイ、ガキ！指揮官は俺だつてことを忘れんなよ！」

「俺は総帥から独自^{ライセン}行動権を与えられている。だから好きにやらせてもらおう」

「くっ！ああ、そうかよ!!」

怒鳴り散らしながら司令室を出て行くテンザンを、冷めた目で見送るケン。

「特務大尉…」

「…総員に脱出の用意をさせておけ」

不安そうに声をかけてくる兵士にそう指示するケン。

「は？」

「死にたくなければ、な」

「りよ、了解です」

慌てて駆け出す兵士を横目に、レーダーに映るハガネも見据えるケン

「さあ、来いイサム。おの時の続きを始めよう」

どこか待ちわびている様子で、ケンは呟くのであった。

ウエーク島 海域

ウエーク島基地攻略を目指すハガネからビルトシュバイン、ビルトラプター、Mk1

I1 カスタム、ウィングガストが発進する。

「とりあえず、砲台を潰せばいいんだよな少佐？」

「そうだ。その後ハガネと残りの戦力で一気に制圧する」

リュウセイの問い掛けに頷きながら答えるイングラム。

「にしても、静かだな…」

「ああ、とつくに射程圏内のはずだ…」

敵の迎撃が無いことに違和感を感じる、イサムとイルムガルド。

「…まだまだ…まだ撃つんじゃねえぞ…。ギリギリまで引き付けるんだ！」

「了解！」

「へへへ……さあ来やがれ！飛んで火にいる夏の虫共！今度こそ叩き潰してやるぜ！！」

モニターに映るハガネ隊を睨み付けるテンザン。

「……何だありや？」

「こつちのデータには無いぞ、新型の砲台か？」

「……もしやあれは……」

見たことの無い砲台を怪しむイサム達。

「撃つて来ねえんなら好都合だ！」

先走るリュウセイが砲台の一つに狙いを定め、ハイパー・ビームライフルを放つが、砲台が飛行し回避する。

「何!?飛んだ!?わっ!!」

予想外の事態に戸惑い背後を取られ、攻撃されるもギリギリで回避するリュウセイ。

「野郎!!」

ウイングガストがダブルオメガレーザーを放つも、軽々と避けられてしまう。

「奴は砲台なんかじゃねえ！」

「……AMか」

「シユツツバルトみたいな砲撃戦型だな！」

他の砲撃戦型AM「バレリオン」が、次々と頭部に備えられた大砲からレールガンを放ってくる。

「ん〜面倒だな。どうします少佐?」

「ここは我々で抑える。お前はここのまま司令部を落とせ」

「了解!」

進路を塞ぐバレリオンにむかって、機体を加速させるイサム。

砲撃が飛んでくるが、機体を左右に滑らせながら回避する。

「チエストオオオオオオ!!」

並んでいたバレリオン三体を、右側から左側へと纏めてシシオウブレード改で両断する。

「よし、このまま一気にって、ん?」

レーダーにこちらへ近づいて来る機影を確認するイサム。

「あれは、南極に現れた奴か!」

突然現れたサイバスターが基地の上空で停止し、輝きだすとAMのみが撃墜されている。

「何だ!?!DCだけ攻撃したのか!?!」

予想外の光景に困惑しているとハガネのエンジン部が爆発した。

「こ、これはあのアンノウンがやったのか!？」

予想外の事態に驚愕するハガネ副艦長テツヤ・オノデラ。

「あの機体の目的はわからんが、敵では無いのかもしれない」

「し、しかしそうと判断するには…」

ハガネ艦長のダイテツ・ミナセに進言するテツヤ。

「無論、警戒は怠るな。全部隊にも伝えろ」

「了解です」

リオが機動部隊と通信していると、もう一人のオペレーターのエイタ・ナダカが異変に気付く。

「っ?! 本艦真下の海面より浮上して来る機影あり!!」

「何?! 数は!」

「い、一機です!!」

「何だと!？」

ハガネ真下の海面より一つの影が飛び出し、エンジン部を切り裂いた。

「くっ、損害は!!」

「エンジン部損傷！テスラ・ドライブの出力が低下しています!!」

テツヤに叫ぶように損害を伝えるエイタ。

「もたせろ!!敵機は!!」

「直衛部隊に向かっていきます!!」

「先発隊を呼び戻せ!!」

動揺する部下を静めるように指示を飛ばすダイテツ。

「クソっこいつ!!」

ジャーダ機がハガネを強襲したアンノウンにマシンガンを放つも、その瞬間には視界から消えていた。

「な、消えやがった!!」

「ジャーダ！後ろ!!」

「うおおう!!」

ジャーダ機の背後に回ったアンノウンは、両手に持っている日本刀を振り下ろそうとする。

ラトウーニの警告で気付き回避しようとするも、左腕が切り落とされるジャーダ機。

他の機体が弾幕を張るが、それを嘲笑うかのごとく軽々と回避し、空中で停止するアンノウン。

「何て早さだあの人型!!」

「でも今までのとは形状が違う…」

「確かに鳥みたいだけど、新型なの?」

アンノウンはガリーオンに似ているが、背中には羽が付いており、足のつま先は鉤爪がになっている等、鳥を彷彿させるデザインをしている。

宙返しし助走をつけたアンノウンが、再び突撃して来る。

「これ以上はやらせん!」

シュツバルトがツインビームカノンを放つも、バレルロールで回避される。

アンノウンが、その勢いのままシュツバルトの懐に潜り込み、両手の日本刀を振り上げ両肩のキャノン砲を切り裂く。

「くっ!」

「ライ!」

アヤ機がマシンガンでカバーに入り、距離を取るアンノウンだが、回避先を予測してきたように飛来してきたレーザーを羽で防ぐ。

「チェエエンジ! グルンガスト!」

ウイングガストからグルンガストに変形し両拳を構える。

「ブーストナックル!!」

打ち砕かんと迫り来る両腕を、軽々と避けるアンノウン。

「そこだ！ファイナルビーム!!」

回避先にビームを放つも上昇して回避される。

太陽を背にししながら、降下を始め重力を得ながら加速し、グルンガストへと突撃するアンノウン。

「なっ!?ぐお!」

太陽光に視界を塞がれて反応が遅れ、胴体を切り裂かれるグルンガスト。

「その動き…。お前ケンか!!」

何かに気付いたように叫ぶイルムガルドに、反応するように動きを止めるアンノウン。

「流石ににお前には気付かれるか、イルムガルド」

「テメエ…。こんな所でなにしてんだ!!」

「何って、お前らの小手調べだが」

「小手調べだど?」

ケンの発言を訝しむイルムガルド。

「ビアンのおっさんがお前達に興味があるそうでな、代わりに俺が試してやろう」

「何よ偉そうに!」

「俺達を舐めてると痛い目みるぜ！」

ケンの言い様に怒りを顕にするガーネットとジャーダ。

「意気込みは十分か。だが、実力の方は…」

「ケエエエエエエエェン!!!」

「ムッ」

会話の途中でMk—II カスタムがシシオウブレード改を振り落ろして来たので、機体を翻し回避するケン。

「見つけた、見つけたぞケン!!」

「来たかイサム。さあ、お前の今の力を見せてみるー!」

互いに振るったブレードがぶつかり合い火花が散る。

「御託はいいんだよ!俺はお前をぶん殴るためにここまで来たんだからなあ!!」

「そのような間に合わせの機体でできると思うな。俺とこの“アリオール”相手にな
!」

気迫を乗せてブレードを打ちつけ合う両者。

だが、アリオールの機動性に着いていけず、次第にMk—II カスタムの装甲に傷
が増えていく。

「っ!」

「遅いイ！」

右手から振り上げられたシシオウブレードで、シシオウブレード改を弾かれるMk—
I—I カスタム。

追撃で左手から振り下ろされたブレードを、交差させた両腕で防ごうとするも、両腕ごと胴体を切り裂かれる。

「ぐっう……！」

辛うじてコックピットは逸れるも、ブレードが掠れた衝撃で弾けた計器が、イサムの体に突き刺さる。

「終わりだッ！」

アリオールが追撃で突きを放とうとするが、飛来したビームに阻まれる。

「そこまでにしてもらおう」

「ビルトシュバイン、隊長機か」

ビルトシュバインの左腕に装備されたサークル・ザンバーが発光し、アリオールへと振り落ろされる、両手のシシオウブレードを交差させて防ぐアリオール。だが、その隙を突かれ蹴り飛ばされる。

「流石は元PTXチームの隊長、手強いか」

ハガネ隊の集中砲火を舞うように避けるアリオール。

「ハア！」

「ッ！」

高速で迫るサイバスターを物ともせず、迎え撃つアリオール。

「テメエ！ビアンて言ったな！」

「それが？」

「なら、シユウの奴の居場所も知ってるのか！」

「だったら、どうした！」

シシオウブレードで、サイバスターのデイスカッターを押し返すアリオール。

「大人しく吐きやがれ！」

「ならば、力を示せ。戦場では強者が全てを手に入れるのだ！」

目にも止まらぬ速さで空を舞いぶつかり合う、サイバスターとアリオール。

「サイバスターに着いて来るだど!？」

「シラカワ博士の言う通り、大した機動性だな。だが！」

サイバスターの背後に回り蹴り飛ばすアリオール。

体制を立て直せず、海面に叩きつけられるサイバスター。

「クソッ！」

「消耗したままじゃ無理にやマサキ！」

「シロの言う通りよマサキ！」

頭に血が上っているマサキを、同じコックピットに乗っている白毛と黒毛の猫が人語を離し止めようとする。

「だったらこのまま引き下がってのかわよ!!」

「先のMAPWで消耗しているか？まあいい、これで…」

「そこまでです。ケン」

残念そうに呟くと、浮上して来ないサイバスターを追撃しようとするアリオール。

だが、上空の降りて来てたグランゾンに阻まれる。

「シラカワ博士か、何をしに来たので？」

「君が熱くなり過ぎたら止めて欲しいと、ピアン総帥に頼まれてね」

「チツ、あのおっさんめ…」

「総帥の指令は彼らの力を見極めることであり。イサム・トウゴウ以外は無用な犠牲は避けるよう言われていた筈ですが？」

「…了解。これより帰投する」

渋々といった様子で飛び去っていくアリオール。

「シュー!!」

「フツ」

マサキが呼び止めようとするが、そのままアリオールを追って飛び去って行くグランゾン。

「待て！ぐっ……！」

「マサキ?!」

追いかけるようとするマサキだが、体力の消耗が激しく気絶してしまう。

「退いたか…。至急部隊を収容後現宙域を離脱するぞ」

「了解です。あのアンノウンは？」

「回収しろ、パイロットの話聞いてみたい。それと格納庫に救護班を向かわせろ」

「了解しました」

ダイテツの指示に敬礼しながら返答するテツヤ。

ハガネ 格納庫

「担架急げ!!クスハ君バイタルチェック!」

「はい!」

救護班によってMk—IIのカスタムからイサムが降ろされているが、腹部から血が流れ出ており、既に意識は無い。

簡単な応急処置が施され、担架に乗せて運ばれて行く。

「イサム…」

「大丈夫、大丈夫だから」

今にも泣きそうなラトウニーを抱きしめるガーネット。

「クソツ何なんだよ！あのケンって奴は!!」

怒りに任せて壁を殴るリユウセイ。

「奴はケン・トウゴウ。イサムが探し続けていた男だ」

「では中尉、奴がイサムの…」

「ああ、養祖母のシノさんを殺め二振りのシシオウブレード持ち去ったんだ」

ライディースの問い掛けに頷きながら答えるイルムガルド。

「トウゴウと言うことは…」

「奴は10年前に孤児だったのをイサムが見付けて、トウゴウ家の養子になったそうだ」

「それがどうして…」

「養子になる前に親を強盗に殺されてな、「自分の無力さが許せなかった」って言って、力を求めていた奴だったな…」

アヤの問い掛けに、やるせない表情をするイルムガルド。

「それがあの子を狂わせてしまったのかもしれんな」

「親父……」

「悪いが悲観に暮れている暇は無いぞ」

「でも……」

やってきたジョナサンの告げる内容に、割り切ることが出来ないリユウセイ達。

「彼の乗る機体に対抗するためには、コイツ」が必要だ、すまないが手伝ってくれないか？」

ジョナサンの視線の先には漆黒のPT「レオーネ」が佇んでいた。

「私、手伝います！」

「ラトウーニ……」

涙を拭いながら告げるラトウーニを、心配そうに見つめるジャーダとガーネット。

「彼は必ず戻ってくるから、だから」

「ああ、そうだな。その時に戦えないんじゃないもんか」

「ええ」

「俺も手伝おう」

ラトウーニに続いてレオーネへと向かって行くリユウセイ達。

「さてと、俺も弟分のために一肌脱ぎますか。……だから絶対戻って来いよイサム」

そう眩くと、作業を手伝いに向かうイルムガルドであった。

新キャラ&機体設定

ケン

- ・種族：地球人
- ・出身：日本
- ・性別：男
- ・年齢：15
- ・身長：173cm
- ・所属：デイバイン・クルセイダース
- ・階級：特務大尉

デイバイン・クルセイダースに所属する少年。5歳の時に家族を強盗に殺害され保護施設に入るも周囲に馴染めずに抜け出した時に、イサムと出会いトウゴウ家の養子となる。

リシユウの教え子として薩摩示現流を習っていたが、イサムら他の門下生と違い相手の防衛ごと断ち切れるだけの力が無い為、他の流派の技も取り入れ“相手が防衛も回避も出来ない程早く切る”ことを主眼に置き二刀流を好む我流と言える剣術を用いる。

イサムとは兄弟であり、ライバルとして切磋琢磨しながら暮らしていたが、本編が始まる4年前に養祖母であるシノを殺め、二振りのシシオウブレードを持ち去る（それからはトウゴウの名は名乗らなくなった）

以後、傭兵として紛争地帯を渡り歩いていた際に、ビアン・ゾルダークの警護を引き受け彼の思想に賛同してからはDCへ参加しAMのテストパイロットとなる。

戦いを好む戦闘狂な面を持つが、非道な行いを嫌うの為、副総裁のアドラー・コツホや部下のテンザン・ナカジマとは折り合いが悪い。

逆にビアン・ゾルダークやシユウ・シラカワ、エルザム・V・ブランシユタインには敬意を払っているおり、テンペスト・ホーカーとは家族を奪われた境遇から彼の復讐を応援している。

※独自行動権

ビアンよりケンにのみ与えられたライセンス。どの部隊にも属さず独自の判断で行動が可能で、総帥であるビアンのみ指揮権を持つ。

アリオール（ロシア語で鷲）

・分類：改良型アーマードモジュール

・機体カラー：紫と白のツインカラー

・型式番号：DCAM-006VA

・全長：21.1m

・重量：30.2t

・動力：プラズマ・リアクター

・基本OS：LIEON

・開発者：ビアン・ゾルダーク

ケン専用機としてガーリオン・カスタムをベースに開発された機体で驚をモチーフとしている。

高機動近接特化型として設計されており、機体背面に羽型の大型ブースター（高い強度とビームコーティングによりシールドとして使用可能）と多数のスラスタに動力のプラズマ・リアクターによってサイバスター並の機動性を持つ。

本気に採用されているプラズマ・リアクターは20mクラス用に小型化されているが、ビアン・ゾルダークの技術力により同型の動力を持つレオーネより安定した稼動が可能である。

ケンの意向により、武装はシショウブレード×2のみである。（ビアンが色々と武装を開発していたが、すべて却下された）

第十三話

アイドネウス島 総帥執務室

室内に備え付けられた椅子に腰掛け写真を眺める中年の男。その表情には写真に写っている人物への愛情が感じられる。

そこへ来訪者を告げるベルが鳴る。

「私だ」

「おい、おっさん帰ったぞ」

「ケンか。入れ」

写真を机に置き対応すると、見知った少年が机のモニターに映し出されたので、入室を許可する。

「邪魔するぞ」

「ああ、それでハガネはどうであつた?」

まるで欲しかった物を待ちわびていた子供のように、催促してくるビアン・ゾルダークに歳を考えろよと言いたくなつたが、無駄なことはわかつているので口には出さないケン。

「アンタの睨んだ通り、中々面白い連中が揃っていたぜ」

「ふふ、そうかご苦労だった。本来であれば私が直接出向きたかったのだがな」

「立場を考えろよ。万が一ってこともあるだろうが」

「何だ、私の心配をしてくれるのか？」

「ほげげ。とにかくアンタらの願いが叶いそうなのはハガネと宇宙の“ヒリユウ改”になりそうだな」

茶化してくるビアンを軽く睨みながら、話題を変えるケン。

「うむ、これで我々が敗れようともこの星を守る剣が打ち上がる」

「礎になりますってか。たいした覚悟だな」

愉快そうに笑うビアンに若干呆れ気味のケン。

「誰かがやらねばならんのだ。誰かがな」

「それで娘に嫌われてもか？」

「……」

机に突っ伏して暗いオーラを放つビアン。僅かにすすり泣く声が聞こえてくる。

「自分で言っておいてあれだが、一々落ち込むなよ……」

「うおおおおおおおんりユーネ!!! 私は、私は!!!」

写真を抱きしめて泣き叫ぶおっさんが落ち着くまで、部屋に置いてある漫画で時間を

潰すケンであつた。

「すまない、取り乱してしまった」

「安心しろ、もう慣れた」

二人のやり取りから日常的に起こるようである。

「では、お前には今後もハガネ迎撃に就いてもらおう」

「いいが、アイツとの決着を優先させてもらおうぞ」

「構わん、元々そういう契約だからな」

不適に笑いながら去るケンの背中を、同じように笑いながら見送るピアンであつた。

「転属、だと？」

「は、はい…。あなたの指揮下に入れと辞令が…」

格納庫に向かうと一人の男に敬礼して出迎えられるケン。

「だ、第15機動部隊から本日付けで転属となりました、リョウト・ヒカワ曹長です…」

「そんな話聞いてねえぞ」

弱弱しく告げるリヨウトを訝しむケン。

「おい、その書類見せろ」

「は、はい！」

「総帥直々か…。チツあのおっさんめ、黙ってやがったな」

「あ、あの…」

書類を確認しているとリヨウトが恐る恐る尋ねてくる。

「そっぴいあお前、アードラーのジジイが太つちよと一緒に拉致った奴か」

「ら、拉致って…」

「避難のドサクサに紛れてしよつびいて来られたんだろうが」

「いえ、その…」

「成程、そういうことかおっさんめ…」

何かに気付き面倒臭そうに舌打ちするケン。

「え、あの…」

「で、お前は どう思ってた？」

「え？」

ケンの質問の意味がわからず首を傾げるリヨウト。

「今の状況に満足かってことだよ」

「そ、それは…」

答えられずに俯いてしまいうりょウト。

「不満か、当然だろうがな。後、お前はDCのやり方をどう思う？」

「……」

「いいから正直に答えろ」

「ち、力で解決するのは好きではありません」

今までより強い口調で返答するりょウト。

「そうか、ならここはお前の居場所ではないのだろう」

「それは…」

「後は自分で考えろ。これから俺達はお前の古巣の部隊と一緒にハガネに仕掛けるぞ」

「りよ、了解です」

ケンが話を打ち切ると人影が近づいて来る。

「ホッ！そんな役立たずを押し付けられるとは災難だなガキ」

「……」

「ん？何だ太つちよか」

現れたテンザンに縮こまるりゅウトと興味の無い様子のケン。

「誰が役立たずだと？」

「お前の隣にいる腰抜けだよ。折角のゲームを楽しめないな」

「げ、ゲームだなんて……」

「ひやは！そんなんだからテメエは腰抜けなんだよ」

「……」

嘲笑うテンザンに何も言い返せずに俯いてしまいうりヨウト。

「黙っている雑魚」

「あつ!？」

「コイツはお前より見所がある」

「特務大尉……」

「ハッ！笑わせんなこんな……」

「命を背負う気の無い奴よりは、ある」

「意味のわかんねえ……」

「止めておけテンザン」

横からやって来た男が、ケンの胸ぐらを掴もうとするテンザンの腕を掴んで止める。

トーマス・プラット、テンザンの所属する部隊の隊長である。

「トーマス少佐……」

「そんなことしたってお前が損するだけだぜ」

「このガキが！」

「価値観の違いって奴だ。そうでしょう特務大尉？」

「ああ、そうだな」

「そろそろブリーフィングの時間ですので、また後で」

そう言うと、テンザンを連れて去っていくトーマス。

「す、すいません僕のせいで……」

「……シツ！」

「!?」

謝罪してきたリョウトの顔面にいきなり蹴りを放つケン。

それを両腕を交差させてガードするリョウト。

「男が軽々しく頭を下げるな、見ていて腹が立つわ！」

「す、すいま……」

「そんな態度しかしねえから、あんな奴になめられるのだ！」

「で、でも僕なんか……」

「お前が本気になれば、あんな奴簡単に捻れるだろうが！」

「む、無理ですよ！」

「男が泣き言を言ってるじゃねえ！」

容赦なく連続で蹴りを放つケンに、避けながら涙目で抗議するリョウト。
このやり取りはブリーフィングが始まるまで続くのであった。

ライン諸島 スターバク島海域

空中で待機しているアリオールのコックピット内で手と足を組んでくつろぐケン。
眼下のサンゴ礁の暗礁海域に配置された陸上戦艦“ライノセラス”が二隻付近を通
過中のハガネに砲撃を行っている。

「確かに餌としては最適だな…」

一人で呟いているとトーマスから通信が入る。

「そろそろハガネが来ますんで、活躍を期待してますよ特尉」

「勝手にしている、俺は好きにやらせてもらう」

「ええ、お任せしますよ」

含みのある笑みを残し通信を切るトーマス。

「ケツ、何であんな奴にヘコヘコしなきゃなんねえんだ」

「まあ、そう言うなビアン総帥の懐刀と呼ばれてる奴だ。精々利用させてもらうさ」

「ホッ、話がわかるじゃん少佐」

「ああいう馬鹿は踏み台になるのが一番なんだよ」

「ちげえねえ」

「つと獲物が来やがったな」

嘲笑っているとリーダーが、ハガネのPT隊を捉えなのであった。

「DCの奴ら好き勝手やりやがって！」

「落ち着けリュウセイ。まずは敵の砲撃を止めるのが先だ」

焦れるリュウセイを落ち着かせるライディース。

「リオ、前に出過ぎないように気を付けてね」

「了解です！」

アヤの言葉に、量産型ゲシユペンストMk—IIにのったりリオが力強く答える。

「つて、何でリオがPTに乗ってるんだよ!？」

「イサム君がいらないんだから戦力の補強は必要でしょ! オペレート、私の分も頼むわよ

!」

驚愕しているエイタとの通信を切りレバーを握り締めるリオ。

「各機へ敵部隊を突破し敵艦を叩け」

「了解！くらえ、ファイナルビーム!!」

イングラム号令の元、ウィングガストがグルンガストに変形して胸部から放ったビームがリオン数機を消し飛ばす。

「このまま押し切る！」

「させん！」

追撃に入ろうとしたグルンガストに、急降下してきたアリオールが切り掛かる。

「計都羅喉剣！」

肩から取り出した大剣で弾き、返し刀で切り掛かるグルンガスト。

「フンツ！」

両手のシシオウブレードで受け流した勢いを利用して、逆手に持ち替えてグルンガストの頭部に突き刺そうとアリオール。

「ツ！オメガレーザー!!」

両眼から放たれたレーザーを、羽で受け止めながら距離を取るアリオール。

「どうした超闘士名は伊達か！」

「その機体、ケンか！イサムには悪いが、ここで落とさせてもらおう！」

「来い、イルムガルド!!」

切り結ぶグルンガストとアリオール。

「特尉、例のサイバスターという機体は確認出来ません」

「なら、お前は他の奴を抑えていろ」

「りよ、了解です」

ケンとの通信を終えると、自身へ向かって来る機体郡を確認するリヨウト。

「中尉がああ鳥野郎を抑えてる間に、敵艦を仕留めるぞー」

「き、来たー！」

戦闘のジャーダ機をロックオンするが、撃つことを躊躇いトリガーを引けないリヨウト。

「捉えた！当たれー！」

「うわあー！」

リオ機が放ったマシンガンを慌てて回避するリヨウトのリオン。

「反撃してこない？舐めてるの!?!」

「ぼ、僕は…」

果敢に攻めるリオと、戦うことに迷ってしまうリヨウト。

「さあて、そろそろ頃合だな。おい、ライノセラス、バレリオン隊、PT部隊に砲撃だ」

「しかし特尉の部隊がまだ後退していませんが…」

「問題ねえ打ち合わせ通りだからよ」

「りよ、了解しました」

通信を終えると不敵な笑みを浮かべるトーマス。

「ひやはははは！本当はなんも話してねえけどな!!」

「その方がいい足止め役になるからな」

まるで劇を鑑賞するかのようには戦場を眺めるトーマスとテンザンであった。

「ムッ」

「う、うわあ!!」

アリオールとリョウト機を巻き込んだ砲撃がハガネ隊を襲う。

「な、何だ!?こいつら味方にも…!」

「各機へ散開しろ!狙い撃ちされるぞ!」

イングラムの指示で回避行動に入るも何機か被弾してしまう。

「おい、生きてるかりョウト」

「と、特尉僕を庇って…」

右側の羽と腕が吹き飛び、傷だらけとなるアリオール。

「捨石にされたようだな俺達は」

「そ、そんな！」

ケンから告げられた内容に驚愕するリョウト。

「そう言うこつた！」

テンザンのガーリオンが、バーストレールガンをアリオールとリョウト機へ放つ。

「あの砲撃でくたばってくれりやあ楽だったが、まあいい！俺の手でプチツと潰してやるよおー！」

「ぼ、僕達は味方じゃ…!?!」

「てめえらは気に入らねえから、ここで海の藻屑にしてやるよおー！」

「そ、そんな…」

自身の置かれた状況に唾然とするリョウト。

「ヒヤハハハア！とっ！」

飛来してきた弾丸を回避するテンザン機。

「ちよつとあなた！味方を攻撃するなんて何考えてるのよ!!」

「うぜえんだよ雑魚が！」

バーストレールガンで反撃しギリギリで回避するリョウト機。

「そのあなた、逃げなさい！」

「え？」

「ハガネに事情を話せば回収してもらえるから！」

「で、でも君が……！」

「いいから！こんな奴、私だけで！」

「笑わせんな雑魚が!!」

アサルトブレードで右腕を切り裂かれるリオ機。

「ホラホラ！ 踊れ踊れ！」

「く、うう……」

痛めつけるように攻撃するテンザン機。

「や、やめるんだ！」

「うるせえ！ 指図すんな！」

リヨウトの言葉に耳を貸さずに攻撃を続けるテンザン。

「やめろ……」

「ヒヤハハハ!!」

「やめろって……」

「ああ!?! 聞こえねえぞ!?! ハッキリ言いやがれ!!」

嘲笑うテンザンにリョウトの中の何かが切れた。

「やめろつて、言ってるんだ!!!」

「うおおう!!」

リョウト機から放たれたレールガンで吹き飛ぶテンザン機。

「て、テメエ……!」

「もう下がれ出来れば、傷つけたくない」

「舐めてんじやねえぞ!!」

激昂してリョウト機に攻撃することがごとごとく回避される。

「退かないのなら!」

「ホーミングミサイルで牽制し、回避先にレールガンを打ち込みダメージを与えていく。」

「ここ、この俺が!」

「予想外の事態に動揺している隙にリオ機が肉薄し左腕を構える。」

「ジェットマグナム!!」

「ぐ、おおおう!!」

「頭部を殴り飛ばされるテンザン機。」

「ち、ちくしょう! 覚えてやがれ!!」

捨て台詞を残して撤退していくテンザンであった。

砲撃にさらされ損傷していくハガネ。

「損害を報告しろ!!」

「第一主砲損壊!第五、第八ブロック炎上!!PT隊の損害も増大!!」

テツヤに切羽詰まった表情で損害を伝えるエイタ。

「…やむをえん。トロニウム・バスターキャノンを使用するぞ」

「し、しかし切り札をここで…」

「活路を切り開くためにはやむを得ん」

「その前に俺を出してくれませんか?」

ダイテツが決断しようとした時、聞き慣れた少年がモニターに映る。

「イサム君!」

「どうもーって挨拶している暇は無いみたいですね」

「だが、その傷でPTに乗るのは…」

包帯だらけのイサムを見て身を案じるダイテツ。

「そうも言っていられないでしょう。ここは一つ俺に賭けてもらえませんか?」

「…わかった。その賭けに乗らせてもらおう」

「ありがとうございます！期待してて下さいな！」

イサムが笑顔でサムズアップして通信が切れる。

「いいかいサム君。まだプラズマ・リアクターの調整が十分では無い、くれぐれもリミッターは外さないように」

「OK、所長」

レオーネをカタパルトへ固定させながら、ジョナサンの説明を聞くイサム。

「進路クリアー。頼むから無事に帰ってきてくれよ、お前がいなくなると寂しくなるからな」

「大丈夫ですよエイタさん。皆と一緒に帰って来ますから」

不安そうな表情をするエイタに、笑顔で答えるイサム。

「さあ、行こう相棒。イサム・トウゴウ、レオーネ行くぜ！」

カタパルトから漆黒の機体が打ち出される。

「艦長…」

「今は託そう。彼の可能性に」

「はい」

戦場へ向かう黒獅子を見送るダイテツとテツヤ。

機体を加速させシシオウブレード改を抜刀させるイサム。

「うおらあ！」

すれ違い様にリオンを一機切り裂く。

「イングラム少佐！」

「その機体に乗っているのはイサムか？」

「ええ、俺が敵艦を叩くんで援護頼みます！」

「いいだろうやってみせろ」

矢継ぎ早にイングラムと通信し、機体をライノセラスに突撃させるイサム。

「何だ新型か？おい、バレリオン隊奴に砲撃を集中させろ」

トーマスの指示を受けバレリオンの砲口がレオーネへと向けられる。

降り注ぐ砲弾を避けきれず被弾し、立ち往生してしまうレオーネ。

「糞っ！機体が重い!!」

思うように機体を操れないことに戸惑うイサム。

「このままじゃ、カッコ付かないんだよ!!」

シシオウブレード改を盾にして強引に前進していくレオーネ。

「しぶてえな。ならコイツでどうだ、ブレイクフィールドオン!!」

トーマスのガリーオンがブレイクフィールドを纏い、レオーネへと突撃する。

「つ!?ぐおおおおう!」

シシオウブレード改で受け止めようとするも、堪えきれず弾き飛ばされるレオーネ。

「イサム!」

「ラトウーニ!?よせ!下がれ!」

ラトウーニ機がマシンガンで牽制しながら、レオーネを庇うように立つ。

「へ、獲物がノコノコ来やがったか!」

弾幕を回避しながら、バーストレールガンを放つトーマス機。

懸命に反撃するも、レオーネを庇っているために回避出来ず、次第に被弾していくラ

トウーニ機。

「もういい!俺を置いていけ!!」

「嫌!!」

イサムの呼びかけに頑なに首を振るラトウーニ。

「ずっと、ずっと守られてきたけど、今度は私が守る!!」

「お前…」

ラトウーニの姿に自分を庇って死んでしまった、養祖母のシノの姿が重なる。

「(また、守れないのか? 結局俺じゃあ…)」

イサム…

「!? お婆ちゃん?」

諦めるなんてらしくないわよ。どんな逆境にも立ち向かうのがあなたの取り柄でしよ?

「ああ、そうだねお婆ちゃん。まだ、こんな所でつまづいてられるかよお!!!」

イサムの意思に応えるかのように、レオーネの間接部が金色に輝きだす。

「しやらくせえ! 纏めて潰してやる! ソニック・ブレイカー!!!」

ブレイクフィールドを纏ったトーマス機が、ラトウーニ機へ迫る。

「うおおおおおおおお!!!」

レオーネがラトウーニ機を押し退けて前へ出る。

「へっ今更テメエに何が出来る!」

「うらああああああああ!!!」

シシオウブレード改とブレイクフィールドがぶつかり合い閃光を放つ。

だが、次第にレオーネが押されは始める。

「イサム!!!」

「大丈夫だラト!!お前は俺が守る!!!」

イサムが叫んだ瞬間、レオーネに変化が訪れる。

コンソールに“burst mode starting”と表示され各部の装甲がスライドし、露出した内部フレームが廃熱によつて金色に輝き出す。

最後に頭部のバイザーが開きツインアイと顎部分の四角い突起があらわになり、鶏冠状のアンテナが左右に別れ獅子の鬣のような形へと変わる。

「へ、変形しただと!?!」

変形したレオーネに驚愕するトーマス。

「うおらああああああああ!!」

拮抗していたシシオウブレード改が、容易くブレイクフィールドごとトーマス機の右肩を切り落とす。

「ば、馬鹿な!パワーが、桁違いだ!おい、ライノセラス!こ、コイツを砲撃しろ!!」
叫び散らすように指示を飛ばすトーマス。

ライノセラスから打ち出された砲撃が、レオーネへと降り注ぎ爆煙に包まれる。

「イサム!!」

溜まらず悲鳴を上げるラトウーニ。

「へ、へへ、これなら溜まりも…」

言い終わる前に、爆煙から無傷のレオーネが飛び出す。

「そ、そんなはずが……」

「すいっ……」

驚愕する二人をよそにライノセラスへと突撃するレオーネ。

迎撃しようと直援のバレリオンと共に弾幕を張るライノセラスだが、レオーネに達する前に展開しているG・テリトリリーに阻まれる。

「G・テリトリリー収束……」

バレリオン隊を飛び越え、シシオウブレード改を構える。

すると、機体を包んでいたG・テリトリリーがブレードへ集まり、ピンク色へと輝きだす。

「切り裂け！ グラビティ・スラッシュャー!!!」

すれ違いながら、ライノセラスの船体を紙のように切り裂いたレオーネ。

ライノセラスの爆発を背に廃熱の煙が内部フレームから漏れ出す。

「ら、ライノセラスを一撃で……」

「どうやら……ここまでだな」

余りの事態に唾然としているトーマス機にアリオールが上空から近づいてくる。

「ま、まだ前線の…」

「前線の連中は増援で現れたサイバスターのMAPW（MAP兵器）で壊滅したぞ」
「な!?!」

予想外過ぎる事態に、もはや開いた口が塞がらないトーマス。

「じゃあ、用事も済んだし俺は帰るぜ」

「!ま、まさか貴様こうなることが…」

トーマスが言い終わる前に撤退するケン。

「フツそうでないと張り合いが無い」

実に愉快そうに笑いながら撤退していくケンであった。

岩場に膝を着き、バーストモードからセーフティモードへ戻るレオーネ。

「オーバーヒートしちゃったか、ごめんね無理させちゃって」

苦労のようにコンソールを撫でるイサム。

「イサム大丈夫!?!」

ラトウニ機が駆けつけ、慌てた様子のラトウニがモニターに映し出される。

「うん、大丈夫。機体がフリーズしちゃっただけだから」

「そう、良かった…」

安堵の表情を浮かべるラトウーニ。

「ね、ねえイサム…」

「ん？何」

「さっき私のことラトつて…」

頬を染めて恥ずかしそうに問い掛けてくるラトウーニ。

「ああ、前からラトウーニつてちよつと呼びづらいかなって思ってたき。嫌だったかな？」

「そ、そんなことない。凄く嬉しい…」

嬉しそうにはにかむラトウーニ。

「うにやあ…よかったあ…」

「イサム？」

可愛らしい声と共に静かになるイサム。

何事かと慌てて自分の機体の手を足場にコックピットを出て、レオーネのコックピットハッチを開け覗き込む

すると、寝息を立てているイサムが目に入った。

「寝てる…」

コックピットに入りイサムのヘルメットを取ると、幸せそうな寝顔である。

「ふふ、お疲れ様…」

頭を優しく撫でると「ふにゃあ」と鳴くイサム。

「っ!？」

鼻から何かが溢れそうになり、慌てて手で押さえるラトウーニ。

深呼吸して落ち着ける為に別のことを考えようとする。

そこでふと、イサムに庇われた際の言われたことを思い出す。

大丈夫だラト!!お前は俺が守る!!!

恥ずかしさと嬉しさが胸の奥から込み上げてくると同時に、イサムと出会ってから抱

き続けた想いに気付く。

それは…

「大好き、イサム…」

そう言つてイサムの頬に口付けをするラトウーニ。

その瞬間物音がする。

「え…?」

恐る恐る音のした方を向くと、ハッチから覗きこんでいるイルムガルドと目が合う。

「やべっ」

「……」

「や、やあ二人とも大丈夫かな？お兄さんが助けに来たよ」

明らかに口調がおかしいイルムガルド。

「見ました？」

「い、いや覗き込んだばかりだから何も見てないよ」

顔から冷や汗が流れ始めるイルムガルド。

「見ましたよね？」

「ちよ、胸倉掴まないで、苦しい、から……」

右腕でイルムガルド胸倉を掴み持ち上げるラトウーニ。

「中尉ちよつと来てもらえますか？」

「で、デートの、お誘いなら、また、こん、どで……」

「大丈夫です、少し記憶を消すだけですから」

「それ、ぜんぜん、だい、じょうぶ、じゃない……」

どんどん青ざめていくイルムガルドだが、構うことなく引きずっていくラトウーニ。

ラトウーニサンハナシアイマショウ。ボウリヨクジャナニモ…#%、%&I、) &%

&%\$\$”
!!”
!!
!!!

「うにゆうくヲトく」

断末魔が響き渡る中でも気持ちよさそうに眠っているイサムであった。

第十四話

スターバク島での戦闘後、医師から「こんな体で動けるとは、人間じゃない」という実ありがたい言葉と、絶対安静を言い渡されたイサム。

涙で枕を濡らしながら、心の傷も癒す為に数日寝込んだのであった。

ハガネ 食堂

「じゃあ、あなた達も一緒に戦ってくれるんですか？」

「おう！マサキ・アンドーだよろしくな！」

「オイラはシロだよ！」

「私はクロにやよろしくね」

「僕はリョウト・ヒカワだよ、よろしくね」

驚異的な回復力で復活したをイサムは（再び医師からありがたい言葉を頂いたが）、新たに仲間となったマサキとリョウトにシロ、クロを加えて食事をとっていた。

「にしてもしゃべる猫っているんですね」

「正確にはファミリアって言うんだが、まあ使い魔って思ってくれ」

イサムが撫でると気持ちよさそうに唸るシロとクロ。

「あつさりと受け入れ過ぎる気もするが…」

「実際にいるんだし、いいんじゃない？」

今だ怪訝そうなライディースともう慣れた様子のリュウセイ。

「……」

「どうしたのリュウトくん？」

少し戸惑った様子子のリュウトに声を掛けるリオ。

「その、DCにいた時と大分雰囲気が変わって思ってたよ」

「まあ、俺は民間からの出向でリュウセイさんは民間上がりですからね」

「俺も軍人じゃねえしな」

「マサキはここに来たばかりじゃいやいの…」

ボケをかまますマサキに呆れながらツツコムクロ。

「艦長が度量が広いし、イングラム少佐もそこら辺うるさくないしな」

「そうね、でも意外と天然のけがあるわよねあの人」

ジャーダに同意するガーネット。

「個性が強すぎるだけとも言おう」

「イサムにだけには言われたくないけどね」

「何か厳しくありませんラトウニさん？」

「手懐けるにはムチ打った方がいいってこの本に」

“男を手懐ける百の方法”って何!?怖いんですけど!?”

ラトウーニが見せる本に戦慄するイサム。

「カザハラ所長がくれたの」

「あのオツサンが…」

だからそそくさと伊豆に飛んでつたのかと拳を握り締めるイサム。

「お前達、参謀本部からの指令が降りた」

「指令ですか? ハガネは現在アイドネウス島攻略を目指しているはずですが…」

やって来たイングラムの告げた内容に、疑問を感じるアヤ達。

「現在、コロニー統合軍がジュネーブへの降下作戦を実施すべく、地球衛星軌道上に部隊を展開中だ」

「それを叩いて来いって言うてきたんですか、上の連中は」

「そうだ。宇宙にいる”ヒリユウ改”との協同で作戦を行う」

「ヒリユウですか、無事だったんですね」

「ああ、通信衛星コルムナを奪還したのもその部隊だ」

イサムやライディースの問いに頷くイングラム。

「その流れに乗ろうって訳か、よっしゃあやってやるぜ!」

「勢いに乗り過ぎて尻拭いだけはさせるなよ」

「何時も申し訳ありませんライディースさん」

ひたすら土下座するリュウセイ。

「ひたすら突撃してるからなりユウセイさん」

「そうだよね、イサム」

「いやね、俺はちゃんと考えてですね…」

「そう、じゃあもう援護しなくてもいいよね？」

「すいません。何時も感謝しておりますラトウーニ様」

強い口調で釘を刺すラトウーニにひれ伏すイサム。

「そーいやイルム中尉は？」

「何でもラトウーニとイサムを迎えに行った時に負傷したらしい」

「負傷って大丈夫なのか？」

「何かに脅えてみたいだけど少佐の話では次の作戦には問題無いそうよ」

「ラトウーニも話してくれないしね」

「一体何が…」

「天罰でも下ったんだろう」

「まあ、自業自得って奴か」

さほど心配していないリユウセイ達であった。

大気圏を離脱し衛星軌道上で、ヒリユウ級汎用戦闘母艦ヒリユウ改と合流したハガネ。

ハガネから機動部隊がヒリユウ改の格納庫へ収納されていく。

ヒリユウ改 格納庫

「この造りってハガネと同じなんだな」

「スペースノア級の基となった艦ですからね。他のところも似てると思いますよ」

「確か初の外宇宙調査艦だったんだよね？」

「ええ、冥王星宇宙域でエアロゲイターに襲われて大破したのを改修したんですよ」

各々の機体から辺りを見回しながら呟くりユウセイに、隣を歩きながら説明するイサム。

すると見知った顔が目に止まる。

「あつキョウスケさん、ブリットさん」

「イサムか。久しぶりだな」

その人物の名を呼びながら手を振ると、それに気が付いたキョウスケと共にいたブ

ルックリン・ラックフィールドが歩み寄って来る。

「イサムすまない。先生を守ることが、出来なかった…」

「ああ、お爺ちゃんのことなら大丈夫ですよ。その内ひよっこり現れますって」

ブルックリンが頭を下げて謝るが、気にしていない様子で笑うイサム。

「でも…」

「ほら、後悔するより前を向きましようって」

ブルックリンを励ますように背中を叩くイサム。

「つーか、エクセ姉は？」

「お前を探しに真っ先に飛び出したぞ。目が危なかったな」

「うわあ…」

その姿を想像し冷や汗が流れ出るイサム。

「イサム、この人達は？」

「前に話したATXチームの人達ですよ」

「ちなみにキョウスケさんはあなたが乗っているラプターの、テストパイロットだったんです」

「あーじゃあ奇跡の大脱出したパイロットてあんたのことか！」

イサムの説明に興奮気味になるリュウセイ。

「脱出してないです」

「え」

「脱出出来ずに、そのまま墜落したんですよ」

「何で生きてんだあんな…?」

「……」

話し合っているとイサムの背後に人影が忍び寄る。

「ゲツチュー!!」

「ぬぎゃあ!?!」

エクセレンがイサムを抱きしめ撫で回す。

「ふふふ、この感じ肌触りこれぞイサム君よお!」

「ちよつエクセ姉やめてよお!」

「よいではないかあ、よいではないかあ」

「うにゃあ!?!くすぐりたいよお」

突然の事態に固まるリュウセイに慣れているのか呆れているキョウスケとブルツクリン。

「はにゃ!?!」

ただならぬ気配を感じて振り向くとそこにはラトウーニが立っていた。

「ら、ラトウーニさん？」

「何かなイサム？」

「いや、怒ってる？」

「別に怒ってないよ」

笑顔だが眼鏡が反射していて見えないが、恐らく目は笑っていないだろう。

「じゃあ、私はこれで」

「あ、待ってよおラトウー!!」

立ち去っていくラトウーニを慌てて追いかけるイサム。

「わお、これぞ青春？」

「お前は反省しろ」

可愛らしく首を傾げるエクセレンの頭に、キョウスケのツツコミが入る。

ヒリユウ改 通路

「待てよラトー！」

「……」

一向に止まらないラトウーニの腕を掴み、振り向かせるイサム。

「何怒ってるんだよ」

「怒ってない」

「そういうのを怒ってるって言うんだ。お前のそんな顔は見たくないんだ」

「……あの人と付き合ってるの？」

「え？ 違うけど」

恐る恐る尋ねられた内容に一瞬呆気にとられるも、すぐに否定するイサム。

「本当？」

「ああ、あの人は北米にいた時にお世話になった人であって姉みたいなものさ」

「そう、なんだごめん」

申し訳なきように俯くラトウーニの頭に手を置き、優しく撫でるイサム。

「いや、判ってくれたならいいよ。それに拗ねてるラトも可愛かったし」

「〜」

顔を赤くして俯くラトウーニの手を引き歩き出すイサム。

「そろそろブリーフィングの時間だから行こう」

「うん」

微笑みながら手を握り返すラトウーニであった。

アイドネウス島から打ち上げられたシャトルが、統合軍の艦艇の中を進んで行く。

シャトルの座席に座っているケンは、流れていくをじっと見ていた。基幹艦隊の中心へ近づくとやがて旗艦アルバトロス級マハトがのハッチが開き、アリオールがスラスターを吹かしながら宇宙空間へ飛び出す。

今回ビアンから与えられた指令は、連邦の心臓部であるジュネーブへの統合軍の降下作戦、“オペレーション・ユグノー”の支援である。

やがて旗艦アルバトロス級“マハト”が視認出来る距離までシャトルが接近する。

更に接近するとマハトのハッチが開き、ガイドビーコンに従いシャトルが格納される。

「ふむ、やはり軽く感じるな」

シャトルから降り無重力を感じながら、愛機であるアリオールの搬出作業を眺めているケン。

「おーいケン!!」

声のした方を振り向くと、一人の女性が抱きついて来る。

「久しぶり!」飯にするお風呂にするそれともワ・タ…」

「ブリーフィングだ」

言葉を遮りながら女性を引き剥がすケン。

「チッ」

「お前は相変わらずだなエール」

「そういうアンタは恋人に再会したんだから、もっと喜べよ」

「あー嬉しい嬉しい」

「……」

投げやりに答えるケンにヘッドロックを決めるエール。

メキメキと骨が軋む音が鳴っているが、喰らっている当人は涼しい顔をしている。

「落ちて着けハグぐらい後でいくらでもしてやるよ」

「本当!? 絶対だかんね!」

呆れた様子で告げるケンに腕を放して喜ぶエール。

「ん、あれは零式か」

そんなエールを置いて、格納庫に格納されている“グルンガスト零式”へ視線を向けるケン。

「そういやアンタ前はテスラ研にいたんだっけ」

「ああ、パイロットは元教導隊だったか」

「そうだ」

零式を見て複雑な表情をしているケンに、一人の男が歩み寄って来る。

「アンタがゼンガー・ゾンボルトか。」

「ああ、よろしく頼む」

握手を求めるゼンガーに応えようとしないケン。

「…ジジイ達から俺のことは聞いていないのか？」

「いや、聞いている」

「ならば…」

「裏切り者と言うならば俺も同じこと。今は志を共にする同士だ」

「…そうか。なら、よろしく頼む」

ゼンガーの意思を読み取り手を取るケン。

「では、また後で会おう」

そう言って立ち去っていくゼンガー。

「ハグまだー」

「せつかち過ぎだろ、戦闘が終わってからにしろ」

「ぶー」

頬を膨らませて不貞腐れるエール。

「それより、お前の機体を持って来たから後で確認しておけ」

「お、マジで改造したバレリオンじゃ物足りなかったんだよねえ」

喜び勇んでコンテナに向かおうとするエールの首根つこを掴むケン。

「だーかーらーブリーフィングだつてんだろ！」

「あーそっか」

「たつくこのアホは」

そのまま引きずっていくケンであった。

ヒリユウ改 格納庫

「本艦はまもなく戦闘宙域へ突入します。機動部隊格機は出撃準備に入つて下さい」

ヒリユウ改の艦首に鎮座するレオーネ。そのコックピット内で、オペレータであるユン・ヒョジンの通信を聞きながら機体のチェックをするイサム。

「にしても本当に二隻だけでやることになるとはな」

「まあ、他の部隊がいても焼け石に水ですしね。上の方も余計な損害は出したく無いんでしよう」

ヒリユウ改の前面に展開している“ジガンスクード”のパイロット、タスク・シングウジのぼやきにしようがないと言った感じに答えるイサム。

今回立てられた作戦は、ハガネとヒリユウのブレイクフィールドを、ジガンスクードで束ねて盾とし、敵の攻撃を凌ぎながら敵陣を突破し途中で二手に別れる。

その後、ハガネは降下部隊をヒリユウは旗艦マハトを叩くという、傍から見れば無謀と思われるも仕方の無い作戦である。

「向こうさんの歓迎が始まったか」

イサムがそう呟くと、進行方向から無数の輝きが迫って来る。

敵艦隊からの砲撃であり、フィールドにぶつかる度に衝撃がコックピットを揺らす。

「これは……グルンガスト零式来ます!!」

砲撃が止むと一筋の光が迫って来るのが見えた。

徐々に近づいて来るにつれて、その姿が浮き彫りとなってくる。

P Tの倍以上の、見るものすべてを威圧せんが如し漆黒の体を持ち、グルンガストシリーズの祖となる機体グルンガスト零式。

なにより目を引くのは、その手に持っている自身の体をも上回る巨大さを誇る、“零式斬艦刀”である。

すべてを一刀のもとに切り伏せるべく、イサムの養祖父リシュウによって生み出された刃が、ヒリユウへと向けられる。

「タスクさん、頭部借りるぞ!!」

「おう！頼むぜ!!」

ジガンスクードの頭部に飛び上り、シシオウブレード改を構えながら勢いをつけるべく、回転し始めるレオーネ。

零式も斬艦刀を構え、ジガンスクード目掛けてさらに加速して来る。

「G・テリトリ！収束!!グラビティ・スラッシュャー!!」

「斬艦刀!!疾風怒涛!!」

互いの刃がぶつかり合い激しい閃光を散らす。

「うおおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

相打ちとなりジガンスクードの頭部から弾き飛ばされ、甲板を転げ回るが直ぐに体制を立て直すレオーネ。

零式も体制を立て直し追撃しようとするが、零式を抑える為に出撃したキョウスケが駆る“アルトアイゼン”と、エクセレンが駆る“ヴァイスリッター”に阻まれる。

「イサム君大丈夫!」

「問題無い!このまま突き進め!!」

心配するユンに答えている間にも、敵の防衛線を突破しマハトを捉えるヒリユウ改。

「重力衝撃砲ツ撃てツ!!」

艦長のレフィーナ・エンフィールドの号令と共に、重力衝撃砲が放たれるも身を挺し

た護衛艦に阻まれてしまう。

「防がれたか！」

「敵砲艦来ます！」

「このまま進めエエエエエエエエ!!！」

迫り来るビーム砲艦をジガンスクードが弾き飛ばす。

「PTカタパルト開放！サイバスタースタンバイ！」

開放されたカタパルトからサイバスターが飛び出す。

「アアアカシツクバスターアアアアアアアアアア!!！」

魔方阵を展開して、サイバードに変形し魔方阵を潜ると炎に包まれるサイバスター。

マハト目掛けて突進するも、直援のガリーオン部隊のソニックブレイカーとぶつかり合い、相打ちになる。

「まだまだ!!！」

その隙を突き、レオーネが続いてマハトへ突撃する。

「グラビティ・スラッシュ part 2!!！」

マハトの艦橋へと、シシオウブレード改を振り下ろそうとした瞬間、影が割って入る。

「ブレイク・フィールド収束！ソニックスレイヤー!!！」

割り込んだ影、アリオールの持つシシオウブレード改が青く輝き、シシオウブレード改

を弾く。

「チイツ！」

「ハツハア！いい機体だなあこれなら楽しめそうだ!!」

そのまま打ち合いを始める両者。

「おーおー、殺ってるねえ」

レオーネとアリオールのぶつかり合いを、離れた場所で見つめる人型に搭乗しているエール。

「エール聞こえるか？」

「ユーリア隊長、聞こえてますよ」

そこにトロイエ隊のユーリアから通信が入る。

「そこからヒリユウを狙えるか？」

「モチのロン。この“デイバイソン”ならね！」

そう言つてバックバックと一体かしている17門突撃砲を構えるデイバイソン。

「んじゃあ、艦橋を吹き飛ばしますか」

密接しているマハトを傷つけないように、ヒリユウ改の艦橋を狙撃すべく17門の内

の2門を起動させトリガーを引こうとするエール。

その瞬間飛来してきたビームが直撃し、明後日の方向にビームを打ち出すデイバイソン。

「痛つあ……。つて機動部隊を出してきた!」

ヒリユウ改から出撃した部隊が、敵の追撃を阻むように展開される。

「ビームキャノンに耐えるとは、ビームコーティングされているのか!」

デイバイソンを砲撃したライデイスが思わず舌打ちする。

「全隊散開ここで敵機動戦力を阻止する!」

『了解』

「敵部隊を突破する!全機続け!」

『了解』

ヒリユウ改を追撃しようとするようにするトロイエ隊と、それを阻もうとするヒリユウ・ハガネ部隊の攻防が始まる。

「クソツなんだコイツ効いてないのか!?!」

ヒリユウ改所属、オクトパス小隊長のカチーナ・タラスクの搭乗する赤色の量産型ゲシユペンストMk-IIIが、デイバイソンへマシンガンを放つも、機体に届く前に何かに弾かれてしまう。

「中尉！あの機体ブレイク・フィールドを長時間展開できるようです！」

僚機の量産型ゲシユペンストMk-IIIに乗る、ラッセル・バグマンが解析内容を告げる。

「お返してね！」

ディバイソンの両腕に保持しているジャイアント・ガトリングから、大量の弾丸が吐き出される。

「うおッおぶね!!？」

慌てて回避するカチーナ機、ラッセル機。

「もういつちよ！」

装甲の各部が開きミサイルが打ち出され、突撃砲から高出力ビームが発射される。

「ツその声、この間の弾幕女か！」

「あの時はどうも！お礼に纏めて吹き飛ばしてやるよ!!」

余りの弾幕に防戦一方になるカチーナ、ラッセル機。

「いけ！リープ・スラッシャー!!」

カチーナ機らへ攻撃している隙を突き、リョウトの搭乗するヒュツケバイン009が、扇型のブーメランをディバイソンに射出するも、装甲に弾かれてしまう。

「攻撃の間はフィールドを張れない見ただけど、なんて堅牢なんだ」

「だったら俺に任せろ！ファイナルビーム!!」

グルンガストが胸部から高出力ビームをデイバイソンへ撃ち出す。

「なんのお！」

突撃砲一斉射で迎撃しビーム同士がぶつかり合い閃光を放つ。

「もらったあ！計都羅喉剣！」

閃光の中を突き進み、肉薄し計都羅喉剣を振りかぶるグルンガスト。

「させないわ！」

レオナの搭乗するガーリオン・カスタムの、ソニック・ブレイカーで弾き飛ばされるグルンガスト。

「エール！」

「OK！」

デイバイソンの突撃砲の先端からビーム状の刀身が形成され、刀身以外の機体全面がブレイク・フィールドに包まれる。

「ぶっ潰れな！クラッシュ・ホーン!!!」

そのままグルンガストへ突撃するデイバイソン。

「っ！スパイラル・アタック!!!」

ウイングガストへ変形し機体をエネルギーフィールドで覆い、機体をバレルロールさ

せながら迎え撃つ。

互いのフィールドがぶつかり合い弾き合う。

「やるなお嬢ちゃん、敵にしておくには惜しいぜ！」

「あはは！何、口説く気？悪いけどアイツ以外の男には興味無いから！」

デイバイソンの突撃砲が火を噴き、その弾幕の合間をトロイエ隊が進軍する。

「二機でいい！ヒリユウ改に取りつけ!!」

ユーリアの搭乗するガリオン・カスタムのアサルトブレードと、ビルトシユバインのサークル・ザンバーがぶつかり合う。

「お前が指揮官機か」

「邪魔だ！どけえい!!」

互いの獲物が何度もぶつかり合い、ユーリア機が左手でバーストレールガンを構えながら蹴り落とされてしまう。

「まだだあ!!」

「これ以上は構ってやれん」

右手のアサルトブレードで刺突しようとするが、右腕を切り落とされた後、胴体を両断され爆散するユーリア機。

「ゆ、ユーリア隊長う!!」

「っ！マハトが、沈む…」

ユーリア機が撃墜されるのと同時に、マハトがヒリユウの重力衝撃砲に貫かれ爆発し、大気圏に突入していく。

「マイヤー総司令!!」

「駄目！レオナ！」

マハトに向かおうとするレオナ機を押しさえ込むディバイソン。

「離して！総司令が、マイヤー伯父様が…」

「あなたは生きなきや駄目よ、あの人もユーリア隊長もそれを望んでいるから」

泣きじゃくるレオナの機体を牽引しながら、他のトロイエ隊と共に撤退を開始するディバイソンであった。

「マハトが沈んだか…」

「俺達の勝ちだケン」

互いに距離を取り、大気圏に突入していくマハトを見据えるイサムとケン。

「だな、今回はここまでとするか」

「逃がすかよ！」

「慌てるな。続きは地上でだ」

アリオールへ迫ろうとするレオーネだが、別方向から飛来したビームに阻まれる。

「ケン！」

「ああ」

合流したダイバイソンらと共に撤退していくアリオール。

「…地上、アイドネウス島、か」

眼前に広がる地球を見つめるイサムであった。

第十五話

ハガネ 格納庫

先のオペレーションブレイク・アウトで辛くも勝利したハガネ・ヒリュウ改だが、損傷した機体が多く、次の作戦に備え整備兵が休むことなく格納庫内を駆け回っていた。

「俺達だけでアイトネウス島への大気圏からの強襲か、また貧乏クジか」

「現状他に打つ手が無いからな連邦は」

「艦隊が包囲網を敷いてはいるそうだけど」

「そんなもん形だけだろ。手柄を独占されたくないだろうよ」

自分達の機体の整備がひと段落しコンテナに腰掛けながらぼやくイサムに、壁に寄り掛かりながら肩をすくめるイルムガルド。

「仕事熱心だねえ。ま、やるしかないけどさ」

「ああ、そういやラトウーニはどうした？」

「なんでおどおどしてんのさ……。ラトなら今回からラプターに乗るからその調整だよ」

「そ、そうか。リュウセイがR―1に乗るからな」

「（なんで安心してんねん……）にしてもまだ調整中のはずだけど大丈夫なのかな？」

「変形しなけりや問題は無いそうだ」

「(リユウセイさんの潜在能力に賭けるってことか、イングラム少佐は)」

「つーか、あんまり他人を気にしてられねーんじゃねえかお前は？」

考えにふけるイサムにそう指摘するイルムガルド。

「わかってるよ。次はケンも全力で来るだろうしね」

「…今更だけど、どうしてこうなっちゃまったんだろうな。同じ道を見ていると思っただのにな」

「なんとなくだけでも、今でも目指している先は一緒じゃないかって思うんだ」

天井を仰ぎ見るイサム。

「どうしてそう思うんだ？」

「変わって無いんだよね、アイツの剣が昔とさ。だから、アイツなりにこの星を守ろうとしてるんじゃないかな」

「イサム…」

「だから、俺も全力でぶつかりたいんだよ。どんな結果になろうともさ」

「そうか…。なら、絶対に勝てよ！」

そう言つて拳を突き出すイルムガルド。

「ああ、もちろん！」

コンテナから降りて拳を合わせるイサムであった。

アイドネウス島 DC本部屋上

太陽が沈み夜が訪れていても、DCの総本山であるこの島では来るべき敵に備えて戦闘員、非戦闘員問わずに慌しく人が行きかっていた。

そんな喧騒の中でも夜空には星々が光り輝き幻想的な光景を映し出していた。

「……」

フエンスの上に立ちながら夜空を眺めているケン。

「美しいな」

「おっさんか」

やってきたビアンに視線だけ向けるケン。

「いいのかよ、決戦前にこんな所をうろついてよ」

「私のやるべきことは終わった後は他のものがやってくれる。お前こそいいのか？」

「ああ」

そっけない返事をするケンだが、ビアンは気にすることなく言葉を続ける。

「マイヤーのことを気にしているのか？」

「……」

「あ奴も覚悟していたことだし、お前もやるべきことはやった。誰もお前を責めたりはせん」

「…エルザム少佐も同じことを言いやがってよ、俺一人だけ馬鹿みてえじゃねえか」
夜空を眺めながら自嘲的な笑みを浮かべるケン。

「ケンよ明日の戦いで私が敗れたならば…」

「わかつている。それも契約の内だからな」

それからは無言で夜空を眺める二人の頬を夜風が心地よく撫でる。

少ししてケンが口を開く。

「アンタと出会って4年くらいになるか。まあ、なんだ色々面白かったぜ」

「私もだ。息子が出来たようだったよ」

照れくさそうに言うケンに、実に楽しそうに笑うビアン。

「お前はお前の道を進め、自分の信じた道をな」

そう言つて去っていくビアン。

振り返ることなく夜空を眺め続けるケン。

「自分の信じた道、か」

目をつむり明日の戦いに思いを馳せるケンであった。

太陽が昇り始め朝日が差し込み鳥が鳴き始める中、突然とサイレンが鳴り響き轟音が静寂を打ち破る。

アイドネウス島を包囲している連邦艦隊が、ミサイル攻撃を開始し島の迎撃システムが稼動した為である。

アイドネウス島 司令室

「対空システム正常に作動中、地上施設への損害は極軽微」

「“グレイストーク” アードラー副総裁より通信です」

「繋げ」

オペレーターの報告にビアンが指示するとモニターにアードラーが映し出される。

「ビアン総帥、あの程度の封鎖艦隊、我らの戦力にとつてももの数ではありませぬぞ？」

「この程度なら防空システムのみでシャットアウト出来る。今少し待て」

「待つと申ししてもこの期に及んで何を…」

「本命の一矢を、だ」

再びサイレンが鳴り響き、レーダーに大気圏から突入してくる艦影が映し出される。

ハガネが大気圏からの突入を完了し艦首をアイドネウス島へと向ける。

「トロニウム・バスターキャノン、エネルギー充填完了！」

「基準砲撃座標までカウント300、照準アイドネウス島軸線クリア！」

エイタラオペレーターらの報告を聞き、トロニウム・バスターキャノン用のトリガーを起動させ握り締めるテツヤ。

「重力ブレーキスタンバイ！カウント…」

「待て！」

ダイテツが何かに気がつきテツヤのカウントを遮る。

ハガネの眼前に広がる雲を何かを突き破り迫り来る。

「スペースノア級参番艦“クロガネ”！」

その正体に気づき驚愕するテツヤ。

「艦首超大型回転衝角起動、対艦格闘戦用意」

クロガネが艦首に装備されているドリルを回転させながら、ハガネへ突撃して来る。

「急速転舵！かわせ…」

「ならん！進路このまま！照準維持カウント続行！」

ダイテツの指示に慌ててカウントを再開するテツヤ。

「カ、カウント3……2……1……」

「トロニウム・バスターキャノンツてえい！」

ダイテツの号令と共にテツヤがトリガーを引くと、ハガネ艦首モジュールから高出力エネルギーが解き放たれ、クロガネのドリルとぶつかり合い互いに軌道が僅かに逸れ片翼をもぎ取り合いながら交差する。

ハガネが放ったバスターキャノンは、本来狙っていた司令部から外れた部分に着弾する。

「て、敵艦の砲撃射線北東へずれました！ひ、東部地下研究ブロック被害甚大！」

「指揮管制機能を『ヴァルシオン』へ移せ、その後戦闘員、非戦闘員問わず本部施設より退避せよ」

指示し終わると席を立ち格納庫へ向かうピアンであった。

クロガネとハガネが交差した際の格納庫内

「うわあ!?何かにぶつかった!!」

「そのようだな」

「いやいや、冷静すぎるでしょうキョウスケ!？」

「慌てたところで何も変わらん。艦長達を信じるのみだ。何なら賭けるか？」

「いえ、結構です」

突如襲った衝撃に動揺するブルックリンとエクセレンだが、いたって冷静なキョウスケ。

「大丈夫だ最終決戦にピンチはつきものだからな！」

「アニメと一緒にしないの…」

「というか涙目になってるぞリユウセイ」

痩せ我慢しているリユウセイに呆れながらツツコム、アヤとライデイス。

「あ、何か昔の思い出が頭の中を駆け巡ってるぅ」

「それ、走馬灯ですよタスク曹長!？」

「男がこれくらいでピーピー泣いてんじやねえよ！」

悟りを開いたような表情のタスクを心配するラッセルと、活を入れようとするカチナ。

「やつぱり、僕達だけじゃ無理なんじや…」

「何弱音はいてるのよ！前の作戦も上手くいったじゃない大丈夫よ！」

弱気になっているリョウトを励まそうとするリオ。

「そうだぞリョウト。男たるものどっしりと構えていればいいんだ」

「いやイルム中尉、そんな如何わしいもの見ながら言われても…」

「失敬だなりオ君、これは男の精神を高める神聖な物であつてだな…」

「コックピットにそんなものを持ち込むな。後で没収だ」

「そんな殺生な少佐!?!」

グラビア本を読みながら偉そうに言い放つイルムガルドに引き気味のリオと、容赦なく宣告するイングラム。

「俺、この戦いが終わったら…」

「やめてジャーダ! それフラグだから!」

不吉なフラグを立てようとするジャーダを、全力で阻止するガーネット。

「うぷっ」

「大丈夫かにやマサキ?」

「クスハのドリンク飲んだかにやね。よく倒れなかったにや」

「これも、シユウを倒す為だ…」

「だからってあんにやに飲まにやくてても…」

顔色はいいのに今にも倒れそうなマサキと、マサキが飲んだ量を思い出し身震いしているシロとクロ。

「フフツ」

「どうしたんですかギリアム少佐？」

「楽しそうに笑うギリアム・イエーガー（オペレーションブレイク・アウト前に情報部から合流した）に疑問に感じ話し掛けるラトウーニ。

「いや、いい部隊だと思ってるね。これならきつと成功するだろう」

「確信に満ちた表情で言うギリアム。

「うえぷつ」

「つてお前も大丈夫かイサム？」

「具合が悪そうないサムを心配するイルムガルド。

「うく食い過ぎたかな」

「やっぱりな！だから止めとけていったんだ！ここぞとばかりに食いやがって！」

「いやいや大丈夫、大…丈…夫…うえ」

「さらに顔色が悪くなっていくイサム。

「大丈夫じゃないだろう」

「ちよ、ちよ本当に出そうなのイサム君!？」

「待て！早まるな！深呼吸するんだ！」

「そ、そうだ。ハイ！ヒツヒツフー！」

「ジャーダ違う！それ出ちやうからああああああ!!」

予想外の事態に慌てふためく一部のメンバー。

「う、もう…」

「諦めんなよ…」

「イルム兄…」

「諦めんなよ、お前!!どうしてそこでやめるんだ、そこで!!もう少し頑張ってみろよダメダメ！諦めたら！周りのこと考えよ、応援してる人たちのこと思ってみろって！あともうちよつとのところなんだから！もつと、熱くなれよおおおおおお!!」

「お、俺はうおおおおおおお!!」

「おい、茶番はもう終わったか？」

「はーい」

どこぞの炎の妖精のようなことを言い出すイルムガルドと、それで復活したイサムを冷めた目で見るイングラムだが、それは決して彼だけではないだろう。

「()は、いつもこんな感じなのかな？」

「…はこ」

「流石に苦笑いのギリアムに恥ずかしそうに俯きながら答えるラトウーニ。

「良し、各機ジガンスクードを盾に出撃。ATXチームとイサム、ラトウーニが先頭にな

り一気に司令部を制圧するぞ！」

イングラム指示の下、ジガンスクードが敵の攻撃を防いでいる間に突撃していく機動部隊。

「さあ！ 派手に行くぜえ!!」

G・テリトリーで弾幕を弾きながら、シシオウブレード改でリオンを切り裂いていくレオーネ。

「馬鹿が！ 背後ががら空きだ！」

レオーネの背後を地上の“ランドリオン”が狙おうとするが、その瞬間機体を影が覆う。

咄嗟にパイロットが上を向くと、飛び上がったアルトアイゼンが両肩のハッチを開いて迫って来ていた。

「クレイモア、持って行け！」

両肩のハッチから打ち出されたベアリング弾が、豪雨の如くランドリオン部隊の降り注ぎ粉碎していく。

ハッチを閉じ、着地したアルトアイゼンが残ったランドリオンに、右腕に装備されたリボルビング・ステークを突き刺す。

「打ち抜く!!」

「そう言う場合碌なことがないんで遠慮します」

「もう、最近可愛げがないんだから」

「前方、高エネルギー反応。砲撃来ます！」

何時ものようにトークをかますエクセレントとブルックリンに、ラトウーニが警告する。

「散開しろ！」

キョウスケの指示通りに回避行動に入ると、先ほどまで自分達が居た場所にビームの雨が降り注ぐ。

「うおっと、あぶねっ！」

砲撃で出来たクレータを見ながら冷や汗をかくイサム。

「あら、避けられちった」

砲撃を行ったデイバイソンのコックピット内でエールが残念そうに言う。

「ま、あれ位は避けてもらわんとな」

デイバイソンの横に並び立つアリオールに乗るケンはさも当然といった表情である。

「あらら、強敵登場ね」

「エクセレン後続の部隊は？」

「他の増援に足止めされてるわね。流石悪の総本山わんさか出てくるわね」

「…今、ハガネから連絡があった。プランBに意向だ」

「敵をおびき寄せて、サイバスターのMAPWで一網打尽か」

作戦前のブリーフィングを思い返すイサム。

「ならあいつらを足止めしないと」

「イサム、羽つきはお前に任せるぞ」

「おうよ！」

「俺とエクセレンは砲撃型の相手をするぞ」

「倒しちゃってもいいのよね？」

「不吉だからやめろ。ブリットとラトウーニ少尉は他のを任せる」

「了解！」

散開しそれぞれの目標へ向かって行くイサム達。

「まずはこれをどうぞ！」

ヴァイスリッターがダイバysonに、オクスタン・ランチャーをEモードで発射するも、ブレイク・フィールドに阻まれる。

「ステーク、行け！」

その隙に接近したアルトアイゼンがリボルビング・ステークを突き刺そうとする。

「ととっ！」

機体を逸らしながら、抱えているジャイアント・ガトリングを格納し右脇で、アルトアイゼンの右腕を挟み込むデイベイソン。

そのまま力比べの状態となる。

「ならば、クレイモア！」

両肩のハッチが開きスクエア・クレイモアの発射体勢に入るアルトアイゼン。

「うおりゃあ!!」

発射される前に力づくでアルトアイゼンをぶん回し、放り投げるデイベイソン。

追撃で左側のジャイアント・ガトリングを放とうとするが、ヴァイスリッターの狙撃に阻まれる。

「鬱陶しいってのー！」

ジャイアント・ガトリングと装甲各部からミサイルをヴァイスリッターへ放つデイベイソン。

「ちよちよ！多い多い！」

弾丸を避けながらミサイルを打ち落とすヴァイスリッター。

アルトアイゼンとヴァイスリッターがデイベイソンと対峙している頃、レオーネとア

リオールも地上でぶつかり合っていた。

「はああああアアア!!」

シシオウブレード改の推力を利用し叩きつけようとするレオーネ。

「おおおおおオオラア!!」

機体を逸らしながら回避し、右手に持ったシシオウブレード突き立てるアリオール。

それを左腕で受け流しながらタックルをするレオーネ。

「うらああああああ!!」

そのままスラスターを吹かしかち上げ、勢いのままに回転切りを放つレオーネ。

「チイツー!」

バク転の要領でレオーネの顎を蹴り上げ、距離を取るアリオール。

「はは!やはりお前と闘り合っている時が、一番心躍るなあイサムう!!」

「なんだかんだでそうみたいだな、ケン!!」

再び距離を詰め互いに持つブレードがぶつかり合い、火花を散らす。

「そらよー!」

鏢競合っている状態からアリオールが力を抜き機体を退る。

「うおっと!?!」

突然押し込んでいた相手がいなくなったことで、つんのめるレオーネ。

「らあー！」

そこへ右膝を思いっきりレオーネの胴体に叩きつけるアリオール。

「ぐ、おおうラア!!」

膝が当たると同時に左腕で膝を抱え、スラスターを吹かしながらアリオールを押し倒すレオーネ。

「もらう!!」

右腕でシシオウブレード改を持ち上げ、突き立てようとするレオーネ。

「なめんなあ!!」

スラスターを吹かしながら空いている左足で、レオーネの横腹を蹴り飛ばし強引に引き剥がすアリオール。

左手を支点に体操選手のような機動で、体勢を立て直すレオーネ。

両足で地面を蹴り上げてバク転しながら起き上がるアリオール。

体勢を立て直したまま睨み合う両者。

「強く、強くなつたなあイサム」

感慨深そうに呟くケン。

「ああ、あの日からお前を倒す為に、な」

「そうだ。それでいい!もつと強くなれイサム!!」

「っ!?あれはサイバスターのMAPW!？」

ハガネがいる方角からあふれ出す輝きに、思わず動きを止めてしまうデイバイソン。そこにヴァイスリッターが放った弾丸が、両腕のジャイアント・ガトリングを破壊する。

「しまっ!」

エールが言い終わる前にアルトアイゼンが懐へ潜り込む。

「もらったぞ!」

突き刺さろうとするリボルビング・ステークを、両腕を交差させて受け止めるが、続けて放たれた衝撃に耐え切れず、両腕が破損し吹き飛ぶデイバイソン。

「マサキ君が上手くやってくれたみたいね」

「そのようだな」

作戦が成功したことに安堵するキョウスケとエクセレン。

「キョウスケ少尉、エクセレン少尉!」

そこへブルックリン機とラトウーニ機が合流する。

「サイバスターのMAPWで敵部隊の半数を撃破、まもなく後続と合流出来ます」

「そうか。イサムの方は…」

「待てよ、何もう勝った気にいるんだよオイ」

イサムと合流しようとするキョウスケ達を阻むように、立ち塞がるデイバイソン。

「まだ立ち上がるか…」

「見た目通りのタフさねえ」

半壊している状態でも稼動しているデイバイソンに、驚嘆するキョウスケとエクセレン。

「行かせない、ケンの邪魔は誰にもさせない」

「あいつ、あんな状態でも戦う気か…」

エールの気迫に押されるブルックリン。

「何故、そこまであの男に尽くす？あの男は…」

「知った風に言うな！ケンのことを何も知らないくせに！それにあいつは変えてくれた！何もなかった私の世界を！生きる意味を与えてくれた！」

「あなたは…」

「この気迫本物ね…」

キョウスケの言葉に激怒するエールに、その愛が本物だと感じ取るラトウーニとエクセレン。

「どちらにせよ邪魔をする気は無い。確認しに行くだけだ」

「ケンの戦いの邪魔をさせることは何もさせない」

「あらら。どうするのキヨウスケ？」

「……」

頑なに道を塞ぐ、ディバイソンの対応を思案するキヨウスケ。

「キヨウスケ少尉、私達は先に司令部を目指しましょう」

「ラトウーニ少尉？だが……」

「彼女がケンという人を信じているように、私達もイサムを信じましょう」

「……わかった。ハガネにもそう伝えよう。エールといったな、それでいいか？」

「ええ、それならいいわ」

「いいのか、本陣に敵を通して？」

「キヨウスケの提案をあつさりを受け入れたエールに、疑問を投げかけるブルツクリン。」

「あんた達なら、最後の試練」を受ける資格があるからね」

「最後の試練って何なのよ？」

「行けばわかるわ」

エクセレンが問い掛けるも、これ以上答える気は無いようである。

「なにがあろうとも進むだけだ。行くぞ」

「あ、待つてよキヨウスケ」

先行するキョウスケを追い掛けていくエクセレン達であった。

「行ったか……」

キョウスケ達が去ったのを確認するとヘルメットを脱ぎ頭を抑えるエール。
すると手に赤色の液体が付着する。

「あーあ……派手に出てるわねえ……」

先ほどアルトアイゼンの攻撃を受けたさえに、頭部を計器に打ち付けており、大量に出血していたのである。

「ま、取り合えず……役目は……果た……したし……いっつか……」

自分のやるべきことは終わった。

後は愛する彼の勝利を願って、エールは意識を手放すのであった。

第十六話

DC本部アイドネウス島攻略のため、大気圏から降下したハガネは、トロニウム・バスターキヤノンによる司令部制圧を試みるも、DCが保有するスペースノア級参番艦クロガネの妨害により失敗に終わる。

次なる策として機動部隊による直接攻撃に移り、ATXチームやラトウーニと共に先陣を切るイサムは立ち塞がるケンとの一騎打ちに挑む。

死闘の末に待つものは…。

交差すると同時に、互いの刃がぶつかり合う。

一瞬の間の後、アリオールのシシオウブレードが碎け散り、膝を着く。

「敗れた、か」

自身の敗北を認めるケン。

だが、その表情には清々しさを感ぜられる。

「ケン…」

「さあ、お前の勝ちだ。首を取れ」

「断る」

「何?」

予想外の返答に、呆気にとられるケン。

「何故だ!?!何故!」

「四年前、あの日お前は止めを刺さなかった」

「あれは、邪魔が…」

「それでも、お前なら俺を切ってから逃げることなんて容易かった。だから、その借りを返す」

「…また、敵として立つとしてもか」

「その時は遠慮なく切る」

不敵な笑みを浮かべるイサム。

「ならば行け。最後の試練へな」

「ああ」

そのまま立ち去っていくレオーネ。

「ホントに強くなりやがったよ、ばあさん」

満足げな表情で呟くケンであった。

「ここが、地下司令部への入り口か」

「誰もいないなんて無用心ねえ」

地下施設へのゲートを見上げるキョウスケと、周囲に敵機の反応が無いのを訝しむエクスレン。

「罨、でしょうか？」

「その可能性が高いかと」

エクスレント同じように警戒しているブルックリンとラトウーニ。

「先程のメールという女の言った、最後の試練がどういうものかは分かんが、今はハガネが到着するまで待機だ」

「ふー、やっと一息つけるわねえ。そういえばラトウーニちゃん聞きたいことがあるんだけど」

「何でしょう、エクスレン少尉」

「イサム君のどこに惚れたの？」

「ふえ!!？」

突然の不意打ちに、すつとんきような声を上げてしまうラトウーニ。

「な、なななな何をし！」

「いやー、だってお姉ちゃん分としては、そこん所知っておきたいし」

「そ、それはその…」

「ほらほら、プライベート通信にしてあげるから吐いちゃいなさいな！」

カモン！と手をわきわきと動かしながらと迫って来るヴァイスリッターに、じりじりと退がるビルトラプター。

「…止めなくていいんですか？キョウスケ少尉」

「…かまわん」

あ、面倒くさいんだなと思ったブルツクリンだった。

暫くしてハガネと合流し、各機突入準備に入る。

「よし、全機突入…」

イングラムが突入を指示しようとした瞬間、地下施設へのゲートを赤と青の螺旋状のビームが吹き飛ばし、蛇のようにうねりながらハガネを掠める

「よくぞここまでたどり着いた」

ゲートから舞い上がった砂塵を払いながら、一体のロボットが歩き出てくる。

赤を強調し、相手を畏怖させんが如しデザインの50メートルクラス機体である。

「歓迎しよう。剣たる資格を持つ者達よ」

その名はヴァルシオン、DC総帥ビアン・ゾルダーク自らが造り上げた機体である。

「久しいな、ビアン」

「フフフ、まったくだ。ヒリュウの進宙式以来かダイテツ?」

互いに懐かしそうに名を呼び合う。

「単騎で我々と闘う気か?」

「いやその前に。我が軍門に降れいッ!」

ダイテツが問い掛けると、堂々と言い放つビアン。

「お前達の力は見させてもらった。私が認めようお前達はこのホシを守る力たり得る。

我が下に降り民草を守る剣となるのだ」

「ばっ、戦いを始めて無関係な人間を巻き込んだ張本人の言うことかよ!!」

自信満々に言いビアンに、リュウセイが仲間が思ったことを代弁する。

「力を持つ者の無知は罪だ。お前達は知らねばならん」

ビアンがそう言うのと、それぞれの機体にあるデータが送られてくる。

「これは南極式典の会談記録か」

「EOTI特別審議会の議事録もだな」

イングラムとギリアムの言う通り、送られてきたデータには、南極で行われた会談についての詳細が記されていた。

「あの時、あの場所で我々が行動を起こさねば、この地球は一部の思慮浅き為政者によって、異星人へ売り渡されていた」

「地球人同士が戦争する理由にはならねえ！」

DC蜂起の理由を語るビアンに、それでも同じ星の人間同士で戦う必要は無かったと、否定するリュウセイ。

「この戦わなくば、高次の技術と知識を持つ異星人と、対抗し得る力は地球人類には育たなかった。それはお前達自身の存在が証明しておる！」

「……」

ビアンの言葉に、敵となり立ちはだかったゼンガーを思い起こすキョウスケ。

「ごたくを並べちやいるが、お前自身が世界を手に入れたかった、支配者になりたかったってだけじゃねえのか!？」

「私は連邦とは違う自覚がある！この世界をこの手で守りたいという自覚、この星を愛しているという自覚が！」

マサキの言葉に自身の思いを語るビアン。

その時、空からレオーネが降りて来る。

「なら、俺達がとるべき道は一つ、アンタを倒すのみだ」

そう言って、シシオウブレード改をヴァルシオンへ向けるレオーネ。

「その機体、お前がケンの言っていたイサム・トウゴウか。ここに来たということは、ケンを打ち倒したか見事だ」

「ああ、次はアンタを倒す。それで、この戦いも終わりだ」

「あくまで連邦に順ずるか、それもよからう」

「関係ねえ。ただ、アンタのやり方を認めたく無いだけだ！」

そう言ってレオーネがヴァルシオンを指差す。

それに呼応するかのように暗雲がアイトネウス島を覆いだす。

「交渉は決裂か。だが、その決意あればこそこの場へ辿り着けたのだろう。それは好ましいものだ。しかしスペースノア級戦闘母艦。それはこれからの戦いに必要な船だ。」

ヴァルシオンの左腕に装備されている砲口が展開される。

「我らのものとするために、おとなしくしていてもらおうか」

「ツ！全機散開！」

攻撃を予測したイングラムの指示に従い、回避行動に入る各機。

「クロスマツシャアアアアアアアア!!」

ヴァルシオンの左腕の砲口から、ゲートを破壊したのと同じ、赤と青の螺旋状のビー

ムが発射され、地面を抉り取りながら迫り来る。

機動部隊は回避出来たが、そのままビームがハガネの艦首へ向かっていく。

「どっせい!!」

ジガンスクードが射線上に割り込み、辛うじて受け止める。

「VLSホーミングミサイル全管射て!」

テツヤの号令と共に、ハガネからミサイルが発射される。

ミサイルがヴァルシオンの周囲に着弾し、砂塵が舞い上がり視界を塞ぐ。

「(間合いを詰めてあの大砲を封じる!)」

砂塵に紛れてクロスマツシャーを破壊しようと、リョウト機の援護を受けながらブルックリン機が切り掛かる。

迎え撃つべく、ヴァルシオンが右腕に保持している大剣を振り上げる。

「ディバイン・アーム!!」

大剣が振り下ろされて、リョウト機が左足をブルックリン機が右腕を切り飛ばされてしまう。

そこにRーウィングとフライヤーモードのビルトラプターが、通り過ぎて上昇していく。

「うおおー!」

P T形態に変形した二機が、ヴァルシオンの頭上からG・リボルバーとハイパー・ビームライフルで攻撃する。

だが、当たる前に弾道が不自然に曲がってしまう。

「油断大敵、大胆不敵！」

ヴァイスリッターや他の機体も射撃武器で攻撃するが、すべてヴァルシオンに当たる前に弾道が不自然に曲がってしまう。

それによりビアンの意識がヴァイスリッターらに向いている隙に、ヴァルシオンの後に回ったアルトアイゼンが、突撃しながらスクエア・クレイモアを発射する。

クレイモアが爆発し、ヴァルシオンが爆煙に包まれる。

「ー」

だが、無傷のヴァルシオンが爆煙を払い、デイバイン・アームをアルトアイゼンに横薙ぎに振るう。

「ほう」

ビアンが感心したような声を上げる。

アルトアイゼンが左腕を犠牲にして、刃を受け止めていたからである。

「…イルム中尉」

「おう！」

アルトアイゼンの背後から、グルンガストがヴァルシオンに殴り掛かる。「グルンガスト！カザハラの息子か！」

ヴァルシオンがアルトアイゼンごとグルンガストを殴り飛ばす。

「うらああああああアアア！」

今度はレオーネが空中から降下しながら、シシオウブレード改を叩き付けるも、見えない何かに受け止められてしまう。

「ぶち破れええええええええええ!!」

機体とシシオウブレード改のスラスターがさらに噴射され、徐々に刃がヴァルシオンに迫っていく。

「むうー！」

レオーネを右腕で掴み地面に叩き付けるヴァルシオン。

「その物言い！上から見下している奴に世界は救えねえ！」

空中からサイバスターがハイ・ファミリアを召喚し攻撃する。

「気分で世界は、救えぬ！」

クロスマツシャーでサイバスターを叩き落とすヴァルシオン。

「ほう……」

今までの戦闘データを分析し、何かに気付くイングラム。

「歪曲フィールドだな」

そこにギリアムの乗るゲシュペンストRタイプが歩み寄る。

「ハガネのトロニウム・バスターキャノンが使えるならともかく、手持ちの火力であれば破れんぞ」

「エクセレン、ラトウーニ今の打ち込みの測距データをまわせ、トリガータイミングの口グもだ」

「りよーかーい」

「了解」

イングラムが送られてきたデータを解析している間にも、ヴァルシオンの攻撃で行動不能に陥る味方機が増えていく。

「全機割り当てられたマーカーに従い、フォーメーションを変更。摺座（かくぎ）した機体も使える兵装があればタイミングを合わせて打ち込め。始動タイミングは本機に合わせろ」

「待ってくれイングラム教官！突貫するならRー1の方が耐久力が高い俺が…」

「それでは最大効果時間を得られん。ミッションマニュアルに従えこれが最適のフォーメーションだ」

「教官…」

イングラムの指示通りに各機が配置に着いていく。

「まだ心は折れておらんようだな、それでこそだ。ならばこれを受け生き残って見せよ！」

ヴァルシオンの背部に設置されているユニットが展開される。

「我が意を識れ！メガ・グラビトンウエーブ!!」

ヴァルシオンを中心に重力が増大し、周囲の物を押しつぶしていく。

「何…だ…これ…くそっ」

「空間が…ゆ…がむ…」

「重…い…動かね…え」

「重力…衝撃派が…発生…する…。この…ままじゃ…」

誰もが諦めかけた時、何かが飛び出し、ヴァルシオンのフィールドのぶつかる。

「がらあああああアアアアアアアア!!」

レオーネがシシオウブレード改を、歪曲フィールドに突き刺しながらスラストを吹かしていく。

「良い思い切りだな。だが、押し切れるか？」

「やったらああああアアアアアアア!!」

イサムの意思に応えるかのように、出力が上がっていき間接部の輝きが増していくが、

想定外の廃熱量に機体が溶解し始める。

徐々に刃が歪曲フィールドに食い込んでいくと、機体を束縛していた重力が緩んでいく。

「今だ！行けアルト!!」

他の機体より高い馬力を持つアルトアイゼンが拘束を抜け出し、歪曲フィールドにリボルビング・ステークを打ち込んでいく。

「アサルター換われ!」

他の機体も拘束を抜け出し、ビルトシユバインがアルトアイゼンと位置を換える。

「サークル・ザンバー!」

「G・テリトリーカーツト!押しつぶせジガン!」

ビルトシユバインが右腕の光輪を歪曲フィールドに叩き付け、ジガンスクードが上空からのしかかる。

さらに他の機体も同時射撃を開始する。

「食い破れ!レオーネ!!」

レオーネがシシオウブレード改をさらに食い込ませる。

「T—L I N K ナツココ!!」

R—ーが念を纏った右腕で殴り付ける。

「力を持つ者には責任がある！理想だけでは世界は救えぬ!!」

“それを”捨てても、世界は救えねえ!!」

拮抗していたエネルギーが大爆発を起こし二機を包む。

「正義の味方にでもなるつもりか」

「なるー!」

爆発が止むと、左腕を失い傷だらけのサイバスターが、瓦礫を押し退けて右腕でディスプレイを支えに立ち上がる。

その視線の先には、コックピット以外の上半身を失い、両膝を地面に着いているヴァルシオンが映る。

「くつくつくつくつ、かっかっかっかっかっか!!」

剥き出しとなったコックピットで、傷だらけになりながらも実に愉快そうに笑うピアソン。

「私にか勝った責任は取ってもらおうぞ。世界をこの星を守ってもらおう」

「言われるまでもねえ」

損傷が限界を迎えたヴァルシオンが、小規模の爆発を起こし始める。

「おい！脱出しろ今なら…」

「寄るな!!!」

助けに向かおうとするマサキを制止するピアノ。

「戦を始めた者の責任というものがある。それがどんな理想の果てであろうともな」

「……」

ピアノの言葉を噛み締めるマサキ。

「——何と目覚めるばかりに自然の照り映えていることよ」

旧西暦に詠まれた詩を紡ぎ出すピアノ。

「何と大地の輝いていることよ」

「木々からは花が吹き出て、心からは歓喜が湧き溢れる」

「おお太陽よ黄金成すその美しさよ、お前は祝福するこの香しい大地を」

「私はどんなにお前を愛していることだろう。どんなにお前の目に輝いていることだろう」

「いつまでも幸せであれ、私がお前を」

「愛する限り」

最愛の者を思い浮かべながらピアノの意識は光に飲み込まれていった。

「……」

ピアノと共に爆発したヴァルシオンを見つめるイサムだが、勝利したはずなのに素直に喜べないでいた。

他の者も同様なのか誰も言葉を発せずにいた。

「…任務完了。全機帰投せ…」

「まだまだ！」 奴が「いねええ！」

やがてイングラムが帰還を指示しようとするが、マサキがそれを遮る。

「何処かで見ている筈だ！出て来いシユウ！」

するとイサム達がいる場所の空が歪み始め、一体の人型機動兵器が姿を現す。

「!?」いつ今までどこに…」

「重力の井戸の底に身を隠していたか、重力の魔神グランゾン」

「シユウ・シラカワ…！」

突然現れたグランゾンに、驚くりユウセイと推論を述べるギリアム。

南極での出来事を思い起こし鋭く睨みつけるイサム。

「…何故、ビアンを見殺しにした？シユウ！」

「私はこの戦いの一部始終を、見届けるよう頼まれたまで。ビアン博士から一切手出し

無用とね」

「とうとう捕まえたぜ！今度こそお前…を…」

グランゾンに仕掛けようとするが、ふらついてしまうサイバスター。

「およしなさい、ビアン博士と戦った後です。そんな元気が残っているはずは無いで

しょうっ！」

「マサキ！プラーナの使いすぎニヤー！これ以上は無理ニヤー！」

「ぐ……」

それでも動くこうとするマサキを止めようとするシロ。

「どの道あなた達と戦うつもりはありませんよ。あなた達には博士とした約束があるのでしよう？」

シユウがそう言うと、徐々に上昇を始め暗雲を裂きながら、遠ざかっていくグランゾン。

「ま……て……」

「闘いに備えなさい、見も心も緩めることなきよう。その日は、ほんのすぐそこまで来ています」

サイバスターが手を伸ばすも、空の彼方へと消えていくグランゾン。

「グランゾンの反応完全に消えました。どうしますか艦長？」

「帰還だテツヤ大尉、それから休憩だ。今の我々に出来ることは何もないよ」

「そうですね……」

「……」

次々と味方機がハガネに帰還していく中、イサムはセーフティモードとなった、レ

オーネのコックピット内で空を仰ぎ見ていた。

「(次なる戦いか…、アンタの想いはしっかりと受け取ったぞビアン博士)」
「イサムどうしたの？」

考えにふけっていると、ビルトラプターがレオーネの隣に歩み寄り、モニターに心配そうな表情をしているラトゥーニが映し出される。

「何、ちつとばかり誓いを立てたところさ」

「誓い？」

「そ、このこの星を必ず守り抜くってな」

「うん、そうだねこの戦いで散っていった人達に分まで、頑張らないとね」

「ああ、だからこれからもよろしくなラト」

「こちらこそ、よろしくねイサム」

そう言つて笑い合いながら帰還していく二人であった。

アイトネウス島が陥落し、ビアン・ゾルダークを失ったDCの大半が連邦に降伏した
ことにより、後に「DC戦争」と呼ばれる戦いは終結した。

だが、それはこれから巻き起こる動乱のほんの始まりに過ぎなかったことを、イサム

達は知る由もなかつた。

第十七話

“DC戦争”が終結してから一カ月後、DCの大半は連邦に投降するも、今だ一部の戦力は残党化し抵抗を続けていた。

アフリカ地区 砂漠地帯

強い日差しが降り注ぎ熱砂が吹きすさぶ中、断続的に爆発と砲撃音が鳴り響く。

DC残党の、ランドリオン部隊が張り巡らす弾幕をもとせす、レオーネが突き進む。

時折砲撃が直撃するが、機体に周囲に張り巡らせたG・テリトリーによって阻まれる。ランドリオン部隊は、キャタピラを全開にしながら後退しようとする。

その内の一機はレオーネの後方から飛来した弾丸によってキャタピラを破壊され
擱座^{かくざ}する。

「今だイサム！」

「おう！」

ランドリオンを擱座^{かくざ}させた、ジャーダからの通信に答えながら、レオーネにシシオウブレード改を構えさせるイサム。

かぐざ
擱座したランドリオンをすれ違い様に両断し他の機体を追撃するレオーネ。

「うわあああああ！来るなあ！」

ランドリオン数機が接近を阻もうとマシンキャノンを放つが、装甲の硬さに任せて距離を詰め次々斬り裂いていく。

「おのれえ！」

「怯むな！囲んで仕留めるぞ！」

三機のランドリオンが、レオーネの周りを旋回しながらレールガンを撃ち込んで行く。

シシオウブレード改を盾にしながら回避に専念するレオーネ。

「よし…このまま押しこ…がっ！」

レオーネを包囲していたランドリオンの一機がコックピットを撃ち抜かれ横転する。

「カーク!?ぐあっ！」

味方機が撃墜されたことに動揺し、動きを止めてしまったランドリオンが被弾し行動不能に陥る。

「うくん狙撃って苦手なのよねえ」

「文句を言わずに撃てガーネット！」

ブーステッドライフルを装備した、量産型ゲシユペンストMk—IIに搭乗している

ガーネットがぼやくと、同じ装備の機体に乗っているジャーダに一喝される。

了解と答えながらランドリオンを狙撃するガーネットと、それに続くジャーダ。

「貴様ら連邦なぞにい!!」

右腕を狙撃によって破損しながらも、反撃しようとしたランドリオンを、投擲されたシシオウブレード改が貫く。

ランドリオンが機能停止したことを確認し、シシオウブレード改を引き抜くレオーネ。

「地上は片付いたか。後は…」

イサムが撃破したランドリオンから上空に視線を移すと、ラトウーニの駆るフライヤーモードのビルトラプターがリオンと空戦を繰り広げていた。

と言つても、あちらももう直ぐ片付きそうだが、手を貸さないと小言を言われるので援護するために機体を飛翔させるイサムであった。

アイドネウス島での戦闘後、ハガネは伊豆基地へ帰還し、船体と艦載機の修復も含めて搭乗員には一週間の休養が与えられた。

そして、休暇が終わるとパイロット各員に召集が掛けられた。

伊豆基地　ブリーフィングルーム

「全員揃ったな。これより今後の作戦について説明する」

モニターの前に立っているイングラムがモニターを操作すると、世界地図が表示される。

「DC、コロニー統合軍共にその殆どが無条件降伏したが、戦後残党化し地下に潜った主幹クラスの部隊も少なくない。我々は今後これらの対応に当たることになるが、潜伏拠点の判明するまでは小規模戦力の鎮圧を行う」

再びイングラムがモニターを操作すると、モニターの世界地図に赤いマーカーが表示される。

「小規模とは言え残存勢力はいまだAM部隊を有しており、即存の連邦戦力では対処が困難だ。イスルギ重工により、連邦軍にリオンシリーズの生産ラインが提供されたため、順次連邦の機動戦力も拡充されるが、機種転換訓練も含めて暫くの間が必要だろう」

「リオンシリーズって、敵が使っていたのを連邦も使うのか教官？」

「そうだリュウセイ。リオンシリーズの量産主力機としての優秀性は、先の連邦軍の敗退ぶりによって証明されている。形の上では外部のイスルギ重工によって生産ラインが敷設されたため、連邦による増産体勢への移行も障害は少なく、生産コストも低い」

らだ」

「そのイスルギはお咎め無しなんですか？」

「連邦議会での案件には上がったが、戦力拡充への協力を優先して取引が行われた様だ」
「背に腹は代えられないですか……」

イサムが手を上げながら質問をすると、止むを得んといった感じで答えるイングラム。

他の面々も不満はあるが、それ以上は言ってもしょうがないと、口に出すのを止めた様である。

それを確認してイングラムが説明を続ける。

「PT部隊はハガネ所属と言う形のまま小隊単位でローテーションを組む。編成は……」

「周囲に敵影無し、作戦終了」

周囲を索敵し、敵影が映らないことを確認してラトウニが告げる。

それを聞きヘルメットを脱ぎ、肩の力を抜くイサム。

「うっし、後は現地の部隊に任せて引き揚げるとしますか」

「そうしましよ。ここ紫外線が強くてお肌に悪いし」

この小隊の隊長であるジャーダが撤収を支持すると、早く伊豆に帰りたいような表情のガーネット。

確かに日光が容赦なく降り注ぐこの地域は女性としては長居はしたくないだろう。

「にしても、残党で言っても結構な数があるよね」

「指導者を失っただけで、組織全体の戦力は健在だから。大半が投降したと言っても、十分な戦力が残ってるの」

「それだけ、連邦への不満が溜まってるとして諷か。俺達の活躍も持つてかれたしなあ」

ラトウーニの説明に、呆れ混じりに溜め息を吐くイサム。戦後、ハガネ・ヒリユウ隊の戦果は、EOT特別審議会が派遣した部隊によるものとされてしまったのである。

「今ならアイツが飛び出して行ったのもわかるねえ」

「アイツってケンって人のこと？」

「ああ、素直に投降する奴じゃないから、今頃は何してるかなあ……」

コックピットから見える空を見ながら、そう呟くイサムであった。

???

D C 残党が潜伏している拠点の一つの内の部屋に、複数の人物が囲んで話せるように

テーブルと椅子が並べられており、二人の人間が向かい合つて腰掛けていた。

「では、行くのだなエルザム少佐」

その内の一人、この拠点に潜伏している残党指揮官バン・バ・チュンが、向かい合つている人物に問い掛ける。

「はい、ピアン総帥から託された使命を果たすために。まずは、アードラー・コツホの暴走を止めねばなりません」

向かい合つている人物エルザム・V・ブランシユタインが答える。

「我々も協力したいが……。体勢が整っていないのだ。すまない少佐」
「いえ、補給を受けさせて頂けただけで十分です大佐」

申し訳なきように告げるバンに、感謝の念を込めて言うエルザム。

「君も頼むぞケン特務大尉」

バンの視線の先には、壁に背を預けて立っているケンがいた。

「ああ、ピアンのオツサンから貰った報酬分の仕事はさせてもらう」
バンの問い掛けに、腕を組んだまま視線だけを向け答えるケン。

「それでは、我々はこれで」

「君達の健闘を祈っているよ」

互いに敬礼し合うエルザムとケンにバンであつた。

クロガネ艦橋

バンと分かれた後、クロガネに乗り込み艦橋へと入るエルザムとケン。

艦橋ではクルー達が発進に備えて動き回っていた。

「お二人さんお帰りんさいな」

作業を手伝っていたエールが二人を出迎える。

「病み上がりが何やってんだよ。寝てろって言っただろうが」

「医師から許可貰ってるし、いいじゃん。じっとしてんのは性に合わないし、リハビリも兼ねてさ」

半目で軽く睨みつけるケンに、おどけた様子で答えるエール。

「たくつお前という奴は……。もう元気になったのはわかったから、大人しくしている」

「えー。つまんなーい」

『えー』じゃねえよ。ドアホウが」

不満そうに頬を膨らませるエールに溜め息を吐くケン。

そんな二人のやり取りを微笑ましく見守るエルザム。

「では、行こうか艦長」

「は！クロガネ発進っ!!」

今だ戦火の渦巻く世界の中、黒き鋼の艦も新たな戦いへと飛び立って行くのであった。

第十八話

伊豆基地の滑走路

アフリカでの作戦を終えたイサムらに乗せた輸送機が、伊豆基地の滑走路へと着陸する。

「うくん、やつと帰って来られたねえ。アフリカもアフリカで面白かったけど、ラクダ見れたし」

「うん、楽しかった」

輸送機から降りたイサムが、体をほぐすために柔軟運動をしながら、一緒に降りたらトウニーとアフリカでのことで談笑していた。

「何だかんだで、日本に帰って来て落ち着くんだから、私達も日本の生活に慣れたもんよねえ」

「そうだな第二の故郷ってやつだな」

イサムの後から輸送機を降りてきたガーネットとジャーダが、感慨深そうに呟く。

伊豆基地に配属されてそれなりになる二人は、日本を故郷と言えるくらい気に入っているのである。

「んじゃあ、報告とかは俺とガーネットでやっつくから、お前達は休んでいいぞ」「分かりました、お願いします。」

そう言つて、ジャーダやガーネットと別れるイサムとラトウーニ。

少し歩いたところで、猛烈な勢いで人影がイサムに迫つて来た。

影が飛びかかった瞬間、体を逸らして避けるイサム。

「きゃん!？」

可愛らしい悲鳴を上げて、地面に倒れこむ影ことエクセレン。

「よ、避けるなんて酷いじゃないイサム君……」

「ごめん、エクセ姉。つい反射で」

結構痛かったのか、涙目で起き上がるエクセレンに謝るイサム。正直そこまで悪いとは思っていないが。

「いきなり飛びかかるからだろう。自業自得だ」

「どうも、キョウスケさん。ブリットさんは落ち込んでますけど、どうしたんですか」

「いや、何でもないよイサム。はは……」

どんよりとしたオーラを纏いながら、いかにも無理して笑っているブルックリン。今にも泣き出しそうである。

「ほらこの子、療養している間、看護していた衛生兵の子がいたじゃない？で、その子に

見事に恋に落ちたわけよ」

「ちよ、少尉!？」

「ああ、クスハさんですか」

「そ、でも悲しきかな、その子の側には既に別の男が……」

「うわあああああああああッ!!!」

わざとらしい演技をしながら説明するエクセレンに、崩れ落ちて両手と両膝地につけ号泣するブルックリン。その目からは赤い涙が溢れていた。

「あれ?あの二人って幼馴染だけど、別に恋人って訳じゃないですよ?」

「本当かあ!!!」

「うひゃあ!？」

物凄い形相で詰め寄ってくるブルックリンに怯えてしまい、ラトウーニの後ろに隠れて子犬の様に震えているイサム。

「あ、あくまで、兄妹みたいなもので、れ、恋愛感情は持つてないと思いますよ、あの二人」

余程怖いのか声と思いきり上擦っているイサム。今にも泣き出しそうである。

「な、なら、俺にもまだチャンスはあるのか?」

「は、はい」

「よつしやあ！頑張るぞ俺！ファイトだ俺！オツーーーーー！！」

自分を鼓舞しながら一人で盛り上がるブルックリン。体から炎が燃え上がったいるようだ。

「あらあら、青春ねえ」

「そうだな」

「うゝゝ怖かったあ」

「よしよし」

そんな彼を温かい目で見守っている上司二名と、ラトウーニに頭を撫でてもらいながら慰められているイサムであった。

伊豆基地 司令室

伊豆基地に戻つて来て数日後に、イサムとラトウーニは司令室に呼び出される。

部屋には基地司令のレイカーとその腹心のサカエに、豪勢なドレスを身に纏つた見慣れない少女に、その執事と見られる老齢の男性がいた。

「警護、ですか？」

「そうだ。こちらにおられるリクセント公国王女殿下、シャイン・ハウゼン氏の身辺警護

を君達二人にしてもらいたい」

レイカーから紹介されたシャインが、座っていたソファから立ち上がりイサム達に歩み寄る。

「始めまして、わたくしがシャイン・ハウゼンです。どうぞよろしくお願いいたしますわ」

両手でドレスの裾をつまみ、軽く持ち上げて頭を下げるシャイン。流れる様な動作に、高貴な身分だと言うことを感じさせられる。

「わたくしめは、シャイン王女にお仕えしておりますジョイス・ルダールと申します。どうぞお見知りおきを」

続いてシャインの後ろに控えていた執事の男性が、礼儀正しく頭を下げて名乗る。

「自分はイサム・トウゴウと申します。テスラ・ライヒ研究所から出向しております」

「私はラトウーニ・スウボータと申します。階級は少尉です」

民間人であるイサムは、両手を腰に合わせて深々と頭を下げて礼をし、軍人であるラトウーニは敬礼をしながら自己紹介を行う。

「そのように畏まらなくても大丈夫ですわ。普段通りに振る舞って下さいな」

「王女それは…」

「よいのですジョイス。お世話になる身ですし、何より彼らとは友達…いえ、友人になり

たいのですわ」

「…分かりました王女がそう望まれるなら」

執事と見られる男性と話終えると、改めてイサム達と向き合うシャイン。

そして、緊張した表情で、何か決意したように大きく深呼吸する。

「あの、実はわたくし友を言える親しい人がいなくて、皆わたくしが王女だからと遠慮してしまふんですの。だ、だから、どうかわたくしと友達になつて下さいませんか！」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら、たどたどしい口調で告げるシャイン。

彼女なりに精一杯勇気を出しているのだろう。

「うん、いいよ！俺からもお願いするよ。ね、ラトー！」

「そ、そうだけど。いきなり馴れ馴れしすぎイサム」

普段通り過ぎるイサムの態度に、思わず注意してしまうラトウーニ。

「ふふ、構いませんわ。これからよろしくお願いしますすわ、イサム、ラトウーニ！」

「こつちこそよろしく、シャイン！」

「よ、よろしくお願ひしますシャイン王女」

余程嬉しいのか今にも踊りだしそうなシャインに、完全に素の態度になつているイサム。そして、生来の生真面目さに軍人であるため、馴れ馴れしい距離感に戸惑つてしまつているラトウーニ。

「あら、シャインで構いませんわよラトウーニ」

「いえ、流石にそれは……」

「ちよつと真面目すぎるよねラトつて」

「あなたが軽すぎるだけ。普通は王女を呼び捨てにしないから。もう少し常識を身に付けてもいいと思う」

「せ、正論だけどヒデエ」

ラトウーニの厳しいツツコミに項垂れるイサム。そんな二人のやりとりに思わず微笑むシャイン。

そんな三人を、温かく見守っている大人達であった。

伊豆付近の海岸

シャインと知り合つてさらに数日が過ぎ、イサムを始めとする一部のメンバーは海水浴に訪れていた。

天候にも恵まれ、照り出す太陽が夏特有の熱気を生み出していた。

そんな中、海岸の一角がより激しい熱気に包まれていた――

「ぬうおおおおおおおおお!!」

「はあああああああああああ!!」

主に二人の人間によって…。

一人はイサム・トウゴウ。もう一人はイングラム・プリスケンだ（ちなみにイサムは黒のトランクス型の水着にパーカーを羽織っており、イングラムは黒のブルーメランパンツ型である）

ネットを挟んで、激しく交互にボールを打ち出している。

俗に言うビーチバレーである。

正確にはイングラム側にはSRXチーム、イサム側にはラトウーニ、エクセレン、ブリットがいるのだが、ひたすら二人がスパイクを打ちまくっているので、余り目立っていないのだ。

「にして意外だよな。イングラム少佐ってこういうの参加しないと思ってたのに」

試合を観戦していたタスクがふと、隣にいたリオに話しかける。

「ああ、イサム君が誘って連れて来たのよ」

「へ〜どうやって?」

「それがねー」

伊豆基地 通路

『今度の休暇に皆で海水浴に行くんですけど、少佐もどうですか？ビーチバレーとか』
『いや、そのその翌日にマオ社とテスラ研から届く機体の搬入準備があるので、遠慮させてもらおう』

『少しくらい遊ぶ時間はあるでしょう？ああ、負けるのが怖いのならしようがないですよねえ。部下の前で惨めな姿を晒したくないですもんねえ』

『（ピクツ）いいだろう行こう』

「ーって」

「…スツゲーな、怖いもの知らずかあいつ」

イサムの恐ろしいまでの胆力に、感心するタスクら話を聞いていた一同であった。

「さすがは少佐、やりますね…」

「ふっお前もなイサム」

激しい点の取り合いの末、遂にイングラム組がマッチポイントとなり、エクセレンのサーブから始まる。

「エクセ姉エー！」

「まっかせなさいイサム君。我が魅惑のサーブを受けよ！」

軽い言葉とは裏腹に、コート端に突き刺さる様な鋭いサーブが放たれる。

「リュウセイ！」

「うおおおおおおおおお！燃える俺の何かあ!!」

撮り損ねたら何をされるか分からないので、必死にレシーブするリュウセイ。

「少佐！」

「ハアツ！」

そして、リュウセイが上げたボールをアヤがトスすると、助走をつけてジャンプする
イングラム。

「デット・エンドシユウウウウウウウトオ!!!」

イングラムが打ち出したボールは弾丸の如き速度で――

「ギャン?!?!」

イサムの顔面に突き刺さった。

「む、無念……」

そう呟いて仰向けに倒れるイサム。

「ゲームセット！イングラム組の勝利！」

審判を務めていたジャーダの宣言に合わせて、観戦組から喝采があがった。

「お、終わった…」

「やれやれだな…」

無事に試合が終わったことに安堵するリユウセイとライディース。

ライディースは本来、日焼けが嫌なので参加しない予定だったのだが、イングラムに命令されて連れて来られたのである。

「では、俺は戻る。もう暫くしたらお前達も戻れよ。その後SRXチームはミーティングだ」

そう伝えて立ち去ろうとするイングラム。その表情はどこか、充実感を得られたように感じられる。

「了解です。あの、少佐…」

「何だ？」

「いえ、何でもありません。すみません、引き止めてしまって」

イングラムを引き止めるアヤ。

だが、伝えたいことを言葉にすることが出来ず、諦めてしまう。

「アヤ」

「は、はい！」

「その水着は、悪くないと思うぞ」

「!あ、ありがとうございます!」

アヤの水着を褒めると去っていくイングラムだった。

「う、うゝん」

暗闇の中で目を覚ますイサム。

かすかに聞こえてくる波の音で、自分が海にみていたことを思い出す。

ああ、そういえばビーチバレーで、顔面にスパイクされたボールが直撃したんだっとなあと、意識を失う前のことを思い出した。

そして現在、自分は寝かされているようだ。体から砂浜の感触がある。

でも、何やら頭の後ろ側から柔らかい感触と程よい温もりが伝わってくる。昔、おばあちゃんに膝枕してもらった時の感覚に似ているなあとぼんやりと考えるイサム。

「イサム?目が覚めた?」

不意に頭上から声がしてくる。心配してくれているラトウーニの声だ。

「うにゃあラトお?」

ゆつくりと瞼を開けると、思いがけない至近距離でラトウーニが自分を見下ろしていた。

「うにゃあ!？」

予想外の距離で見つめ合っていたので、思わず起き上がろうとしたら、ラトウーニに両手で頭を掴まれて固定された。

「ちよ、ラト!?!痛い、痛い!ギリギリいつてるから!めっちゃ痛いから!」

「いいから、じつとしてる」

「あつハイ」

いつになく強い口調で言われたので、大人しくなるイサム。

それを確認すると手に込めていた力を緩め、イサムの頬に両手を添えるラトウーニ。くすぐりたいが心地よい感触に、自然と落ち着きを得るイサム。

「そう言えばラト」

「何?」

「その水着似合ってるよ」

「うん、ありがとう」

イサムが水着を褒めると、ラトウーニが顔を赤くしながらも嬉しそうに微笑む（ラトウーニが来ているのは、フリルをあしらった白色のワンピースタイプである）

そんなラトウーニを見ると、不意に顔が赤くなって、心臓の鼓動がうるさく感じる程早くなっていった。

そのまま、話すこともなく無言だったが、気まずさは無く寧ろずっとこうしていたいと思えた。

「平和だね」

ふと、ラトウーニがそつと呟いた。

その視線の先には、他のメンバーが水遊びをしたり泳いだりと楽しんでいた。

「うん、そうだね」

「ずつと、このままだったらいいのにね」

本当にそうだったらいいなと考えるイサム。

しかし――

「アイドネウス島で、シラカワ博士が言っていたこと覚えてる？」

「うん、『戦いに備えなさい』って言っていた」

アイドネウス島での決戦の後、シュウ・シラカワが告げた内容を思い返す二人。

「まだ、戦いは終わってないんだ。だから――」

そう言いながら頬に添えられていたラトウーニの手に、自身の手を重ねるイサム。

「君は俺が守るよ。何があっても」

「私もあなたを守るから」

見つめ合いながら、重ねていた手を握り合うイサムとラトウーニであった。

今、人類の新たな試練が始まろうとしていた…。

第十九話

DC戦争が終結して間もなくL5宙域に突如として天体規模の人工物が転移出現し、連邦軍はそれを“ホワイトスター”と呼称した。

そして、ホワイトスターは世界各地にバグズの大群を送り込んで来たことにより、エアロゲイターが遂に侵攻を開始したことを地球人へと告げたのである。

空間転移による波状攻撃により苦戦を強いられる連邦軍。そんな中ハガネは攻撃を受けている北京への救援に向かっていた。

ハガネ格納庫

「R-3とR-GUNも実戦投入するのかあ」

格納庫にはR-1と同列機であるR-3とR-GUNに、DC残党掃討時にロールアウトしていたR-2が並んで配置されていた。

その側でリュウセイらSRXチームが話し合っており、そこから少し離れた位置でイサムやキョウスケ達が機体を眺めていた。

「わお、ここうして見ると壮観ねえ」

「これでSRX計画も本格的に始動する訳だな」

RシリーズにはEOTの他に最新技術がふんだんに取り入れたれているが、その調整に手間取り先のDC戦争では、比較的調整しやすかったR-1のみがロールアウトするに留まっていた。

「あたしらの方にも新型の試作機でも回して欲しいぜ」

「今の状況だと、ゲシュペンストに乗れるだけ幸いだと思いますよカチーナ中尉?」

現在主力PTであるゲシュペンストはEOT特別審議会の妨害により、30機程度しか量産されておらずAMの配備も始まったばかりなので、連邦軍の主戦力は今だに戦闘機や戦車と言った現行兵器が担っているのである。

「何ならレオに乗ります? 中尉なら相性いいと思いますよ?」

「いや、あんなの乗りこなせるのはお前かキョウスケくらいなもんだろ…」

イサムの提案に苦笑いしながら遠慮するカチーナ。

DC戦争時大破した以前のイサムの愛機、量産型ゲシュペンストMK-II・カスタムことレオは、予備戦力として修復されハガネに配備されていたのだ。

流星のカチーナもあのぶっ飛んだ仕様は扱いきれないと判断した様である。ちなみに以前にたコンセプトのアルトアイゼンに、ブリットがシュミレーターで搭乗したらGに耐え切れず体調を崩したそうである。

「それにしても、ここら辺は全然被害を受けていないな」

「各地の首都への攻撃は、今の所殆ど確認されていないみたいだよブリット」

リヨウトの言う通りエアロゲイターが目標としているのは、地方の都市を中心としており、軍事基地やホワイトスターに近いコロニーと月は攻撃を受けていなかった

「それって普通逆じゃね？」

「タスクの言う通りだがエアロゲイターは、意図的にこちらの戦力を削らない様にして
いると見るべきだろう」

「つまり手加減してるってことですか？何のために…」

「占領後のことを考えているのか、あるいは別の目的があるのかもしれないが…いずれに
せよ」

「舐められてるってことか！クソッ！」

怒りにまかせて左の手の平に右拳を打ち付けるカチーナ。他の者も同じ様な気持ちなの
だろう、皆怒りを滲ませた表情をしていた。

「お前らそろそろ戦線に着くぞ！出撃準備に入れ！」

イルムの号令にそれぞれ己の機体に搭乗していく。

「（遂にエアロゲイターとの戦いが始まったんだ。敵がどんなに強くたって、皆で力を合
わせて生き残るんだ！）」

レオーネに乗り込んだイサムはそう願った。仲間と共に無事戦い抜くことを。

しかし、その願いは最悪の形で裏切られることとなるのだった――

北京

戦場へ到着したハガネを中心として機動部隊を展開し、それぞれにエアロゲイターを
迎撃していた。

その中でイサムはATXチームと共に先陣を切っていた。

「うらああああああー！」

レオーネがブレードで、蜘蛛型の陸戦機“スパイダー”と呼称されている機体を次々と
薙ぎ払っていく。

アルトアイゼンやヴァイスリッターを始めとするATXチームや、他の機体も次々と
撃破していくが、次々と敵機が転移によって現れ続けていた。

「くっまだ増えるのか!？」

津波の様に押し寄せてくる敵に疲労の色を滲ませるイサム。

戦闘を開始してからかなりの時間が経つが、今だに敵の勢いが衰える気配は無かつ

た。

「これは、ちよつと敵しいわねえ」

「覚悟はしていた。やるだけだ」

「右から敵群体来ます！」

今まで正面からのみ敵が来ていたが、新たに右からの攻撃に晒される先陣部隊。

「私が迎撃します！マキシ・ブラスター！」

援護のために合流していた、クスハの乗るグルンガスト式が胸部から放った高出力ビームが、敵の群体を焼き払う。

「ラトウーニ少尉、戦況はどうか！」

「敵が我々を包囲する様に展開し始めています。また各部隊の損耗率も増加しています」

「空はマサキさんとタスクさんがM A P Wで抑えてくれますけど…」

「流石にそろそろ限界よねえ」

エクセレンができるだけ士気を下げないために軽い口調で言うが、このままでは全滅の可能性が高いことは皆理解していた。

それでも諦めずに奮戦するが、敵に変化が見られた。ブルックリンが駆るヒュツケバインMk-IIIが放ったフォトン・ライフルが、スパイダーに当たる前に何かに弾かれ

たのだ。

「!? バリア・フィールドだと!」

「そんな情報なかったぞ畜生が!」

「奴らめ新たなカードを切ってきたか」

「わお! そんなサプライズお断りよお!」

敵が見せた新たな機能にも即座に対応するも、次第に押し込まれていってしまふ。

『ステイル2より各機へ! これよりSRXチームがパターンOOCを実行する、可能な機体は援護せよ!』

「パターンOOC? 確かSRXチームの特殊フォーメーションか!」

「各機聞こえたな。ここが賭けどきだ行くぞ!」

「了解です! キョウスケ中尉!」

SRXチームの進路を確保するためにルート上の敵機を撃破していくイサム達。援護を受けたR-GUN以外のRシリーズが変形し合体を開始した。

だが途中でフォーメーションが崩れ、三機共墜落してしまふ。

「ツ! 失敗したのか!?!」

「エクセレン。SRXチームのフォローに入る先行しろ」

「おーらいッ」

リュウセイらを援護するために急行するイサムら――

――そこでR―GUNがR―3を撃つのを目撃した。

「何だ？ R―GUNがR―3を撃った様に見えたが、誤射か？」

「いえ、違います」

「こつちからは見えてたわ。確実にロックオンしてから撃った」

「故意よ、あれ」

「そんなツ！ そんなのある訳ない！ だってあんなにアヤさんのこと大切に……！」

イサムの脳裏には不器用ながら、アヤのことを気にかけていたイングラムの姿が思い起こされていた。

そんなイングラムアヤを傷つけたことが、イサムには信じられなかった。

「俺がこちら側でやるべきことは終わったか。状況を次の段階に進めるとしよう」

イングラムがそう言うと、R—GUNの背後に未確認の人型機動兵器が多数転移出現し、R—GUNの合図と共に一齐に射撃を開始した。

イングラムの裏切りに動揺してしまっていたイサムは回避できず、G・テリトリーでかるうじて受け止める。

「ぐうあああああー」

「イサムー」

ラトウーニのビルドドラプターが援護射撃を行うも、人型もバリア・フィールドを展開し防がれる。

一方でアルトアイゼンがステークをR—GUNに打ち込もうとし、後方に飛び退き回避させた所をヴァイスリッターが狙撃するがこれも機体を回転させながら避けられる。

「敵対異星勢力に、交渉が可能な人型生命体が存在することは、南極会談の時点で分かっていた。地球側の技術の分が悪いこともだ。異星勢力に寝返ろうと言うのか、イングラム・プリスケン」

「——薬が効き過ぎたか、読みが足りんぞキョウスケ・ナンブ。まだお前達に与えられてない情報は多い。例えば——」

「そもそも俺は、地球側へ潜入してきた異星人のスパイであるとか、だ」

『！』

イングラムが放った言葉は、聞いていた者全てに衝撃を与えるには十分過ぎるものだった。

「そんな、教官が……異星人？それじゃ俺に……俺達に強くなれって地球を守る力をつけろって、教えてくれたことは全部嘘だったのかよ!？」

「いいや、それは本当だ。お前達をそれだけの力を持った兵器として完成させようとしていたのは事実だからな。だが——」

言葉の途中で飛来したビーム・チャクラムを避け、R—2の右腕を切断するR—GU
N。

「そう言った試作兵器に失敗作はつきものだ。アヤ・コバヤシがそうであったように。ライデイス・F・ブランシュタインがそうであるように」

「少佐ツあなたはッ」

「ヒュツケバインのブラックホールエンジン機動試験をしくじり。テクネチウム基地をその職員共々消滅させた負い目が、貴様を奮起する糧となると踏んだのだがな。やはり念動能力者でもない貴様に、R-2のシートは荷が重すぎたようだ」

イングラムの言葉に言い返せずに、齒を噛み締めるしかできないライディース。
「くツそおおツ」

リュウセイが叫びながら、G・リボルバーは放つも碌な狙いが定まっていなかったため、簡単に避けられてしまった。

「だがリュウセイ。お前にはまだ見込みがある。作動不良を起こした部品を廃棄し、新しい部品を集める。念動能力者の候補にはこの部隊でなら困らない筈だ。そして俺を追って来い。今度は敵として俺がお前を鍛えてやる。お前をよりハイクラスの念動駆動兵器として完成させてやる。そして——」

「イングラムウウウウウウウウウウツ!!」

レオーネが上空からR-GUN目掛けて、ブレードを振り下ろすも読まれていたかの様に回避されてしまう。イサムの怒りに比例する様に、叩きつけられてブレードによって、地面にクレーターができていた。

「イサム、貴様も非念動能力者として興味深いサンプルだ。お前もリュウセイと共に鍛えてやろう」

「オオオオオオオオオオオオ!!!」

片手になってもブレードを振るおうとするも、重量のあるシシオウブレード改を片手ではまともに振るえる筈も無く、あっさり左腕を切断されてしまう。

「いいぞ、その獣のような闘争本能は実に興味深い。もっと怒れ、そして俺を憎め。それがお前の力となる」

「イングラム・プリスケンツツ!!!」

武器を失ってもイングラムへ迫ろうとするイサム。だが敵人型が進路を阻むように並び、一斉に銃口をレオーネへと向けると発泡した。

「イサム、だめ!」

レオーネに迫るビームをビルドラプターが身代わりとなって大破してしまった。

「ラト!?!」

崩れ落ちるビルドラプターを受け止めて呼びかけるも、返事は返ってこなかった。

「ラト! 返事をしてくれラト!」

いくら呼びかけても返ってくるのはノイズだけだった。

「俺の、せいだ…。怒りに任せて戦って、ラトを傷つけて…。守るって約束したのにツ!」

悔しさの余り、歯を噛み締めて操縦桿を握り締めるイサム。

その間にも2機の人型が、ゆっくりとした足取りで二人へと迫って来ていた。

そして人型がレオーネを抑え込むと、1機のバグズがビルドラプターを抱えだした。

「ツ!?何…してんだよ…オイツ!!」

「サンプルをいくつか回収しておこうと思つてな。ラトウーニ・スウボータは、お前にとつていい起爆剤になるので適任だな」

「ふぎ、けんなあ!!」

人型を振りほどこうとするも今のレオーネにその力は無かった…。

ゆっくりとビルドラプターを抱えながら、浮かび上がるバグズ。イサムにはそれを、ただ見ているしかできなかった。

「やめろ、ヤメロオオオオオオオオオオ!!」

イサムが叫んだ瞬間。ビルドラプターを抱えていたバグズが、飛来してきた影に両断された。

支えを失い落下しようとしたビルドラプターを影が片手で掴んだ。

「アリオールだと?」

イングラムが訝しげに影の名を呼んだ。流石にこの展開は予測していなかった様である。

アリオールはレオーネとR—GUNの間に降り立ち、ビルドラプターを地面へと降ろ

した。

「無様だなイサム。全くもって情けない」

アリオールから不機嫌そうなケンの声が響いた。今のイサムの姿に苛立っているの
 だろうか？

「ケン、どうして？」

「ビアンのおっさんに頼まれた仕事をしにきただけだ。こいつらを潰せつてな」

エアロゲイター

ケンがそう言うのと周囲で激しい爆音が響く。イサム達から少し離れた場所で、デイバ
 イソンが持ち前の火力でエアロゲイターの機体を殲滅していたのだ。

R—GUNが手で指示すると、レオーネを抑えていた人型がサーベルを構え、左右か
 らアリオールへと襲いかかった。

「フンツ」

ケンがつまらなさそうに息を吐くと、同時に振り下ろされたサーベルを、その場でコ
 マの様に回転しながら両手のブレードで弾いた。

そして一体目を、回転の勢いを利用し振り上げたブレードで両断すると、もう一体の
 頭部を右足の鉤爪で鷲掴みにしたら、地面へと勢いよく叩きつけてR—GUNへと投げ
 飛ばした。

飛んで来た人型を躊躇いなく切り落とすR—GUN。すると目の前にアリオールが

両手のブレードを振り上げ様としていた。投げ飛ばした人型を目くらましにして接近したのだ。

迫る刃をバク転して飛び退いて回避したR—GUNはそのまま距離を取った。

「チツ」

攻撃を外したことに舌打ちしたケンが、再びR—GUNに突撃しようとするも、上空から降ってきたエネルギー弾に阻まれる。

上空から先程戦っていた人型の上位機種と見られる機体が、R—GUNを守るように降り立った。

「イングラム。サンプルの確保は完了した戻れるわよ」

「そうか。ならばもうこの場に用は無いら」

イングラムがそう言うのとR—GUNが飛び上がり、高度を上げていく。

「奴め、させん！」

イングラムが何をしようとしているか気がついたケンが追撃しようとするも、上位機種がライフルで足止めをしてきた。

「フフフ…。R—GUNメタルジェノサイダーモード…」

戦場を見渡せる位置まで上昇したR—GUNが変形を始めた。

「トロニウム・エンジン、フルドライブ」

機体そのものが銃と言える姿となったR―GUNが、銃口を真下の戦域へと向ける。

「デッド・エンドシユート…」

ハガネのトロニウム・バスターキャノンに匹敵するエネルギーが銃口から放たれ、イサムらのいる戦場が閃光に包まれた。

「う、うわアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

衝撃からビルドラプターを庇う様に抱えていたレオーネだが、耐え切れずに吹き飛ばされてしまう。

閃光が収まると、エアロゲイターの姿は無く。甚大な被害を受けたハガネ隊のみが残されていたのだった…。

第二十話

クロガネ 個室

「ねえ。あのまま帰ってきてよかった訳？」

艦内に割り当てられた部屋の椅子に腰掛け、背もたれに両腕を乗せ、その上に顎を乗せているエールが部屋の主に話しかける。

「構わん。ビアンやマイヤーのおっさんを倒した連中が、あれくらいで潰れるものか」

話しかけられたケンは、頭の後ろで両手を組みベットの上で寝転びながら、気楽そうに答える。

彼らは北京での戦闘後、甚大な損害を被ったハガネ・ヒリュウ隊に、最低限の支援をしただけで離脱したのである。

「それでもイサムって子くらいには、声かけてくべきだった思うけどなあ。家族なんですよ？」

「昔の話だ。あの日俺が過ちを犯した日から、俺はトウゴウの名を捨てた」

「それはあんたが思っているだけで、他の人達はどう思っているのかは聞いてないんですよ？」

「……」

エールの言葉に口をつぐむケン。

『あの人』はもう話せる状態なんだから、いつペン話してみなよ」

「不要だ。何も話すことはない」

そう言つて姿勢を変えて背を見せるケンに、軽く溜息をつくをエール。

「ホントは話したいんでしょ？ やれる内にやつとかなないと後悔するわよ」

「……」

返事をする気が無いケンにヤレヤレと言つた顔で、もう一度溜息をつくど、椅子から立ち上がりベットに近づき潜り込んだ。

そんなエールを上半身を起こして億劫そうな目を向けるケン。

「…何をしている？」

「疲れたからもう寝る〜」

「なら出て行け」

「嫌です。人の話を聞かない奴の言うことは聞きませ〜ん」

エールの言い分にぬう、と言いつ返せないケン。そんなケンを他所に1つしかない枕を占有してくつろぐエール。

「知るか。狭いんだよボケ。さっさと…」

「zzz」

「もう寝やがったこいつ」

相変わらず早いなと呆れているケン。こうなったら最早何をしても無駄なので、放置することにする。

「たくつ、ホントにお節介な奴だ」

呆れ顔で軽く溜息をついて呟くと、横になるケン。しかしその口元は笑っているのであった。

伊豆基地 医務室

「ぐうう…」

イサムが目を覚ましたのは医務室のベットの上であつた。

「イサム！」

「ラト…。ハイハイ。」

ベットの側に設置された椅子に腰掛けていたラトウーニが、イサムが目を覚ましたことに気がつき安堵した顔をしていた。だが、身体の所々に包帯を巻いており、痛々しい姿をしている。

「ここは伊豆基地の医務室。北京での戦闘後、あなたは気を失っていたの」

「北京……」

ぼやけていた意識が覚醒していく中で、ラトウーニの言葉によって意識を失う前の記憶が呼び起こされていく。

エアロゲイターとの激戦の中。戦況の打開を図りSRXチーム『パターンOOC』を実行するも、失敗してしまう。

そして、イングラムがアヤを撃つ瞬間を思い出す――

「ツツツ!!」

急速に意識が覚醒し、反射的に上半身を起こすイサム。動悸が激しく呼吸さえまなならず、苦しみの余り胸を強く抑えるが。身体はふらつき今に倒れてしまいそうであった。

「イサム！大丈夫!？」

そんなイサムの様子に、慌てて身体を支えるラトウーニ。

「大丈夫。大丈夫だから……」

ゆつくりと深呼吸しながら息を整えるイサム。そしてある程度落ち着いたところで、ラトウーニと視線を合わせながら口を開いた。

「それより、ラト……。イングラム少佐は……？」

イサムの問いに言葉を詰まらせるラトウーニ。真実を告げるべきか迷うが、イサムの真つ直ぐな瞳に、誤魔化しは効かないと悟った。

「イングラム少佐はエアロゲイターと共に、私達を攻撃した。彼はエアロゲイターのスパイだった」

「やっぱり。あれは夢じゃなかったのか……」

「うん」

ラトウーニの言葉に俯くイサム。そんなイサムの手に、ラトウーニは自身の手を重ねた。

「あの人はぶつきらぼうだったけど、アヤさんや皆のことを大切にしてくれていた」

夢であってほしかった――

「どんな時でも俺達を信じて一緒に戦ってくれた」

信じていた――

「あの人となら、エアロゲイターにだって勝てると思っていたんだ」

仲間だと思っていた――

――なのに、それは偽りのものだったの？

拳を握り締めているイサムの言葉を、静かに聞いていたラトウーニ。涙を流したイサ

ムを彼女はそつと抱き寄せた。

「なの…：。なんで、なんでだよおおおおおおおお!!」

ラトウーニの胸に顔を埋めて泣くイサム。そんな彼の頭を優しく撫でるのであった。

暫く泣いた後、イサムはラトウーニから離れると。みつともない姿を見せてしまったと思っているのか、気まずそうに視線を泳がせていた。

「変なところ見せてごめん…：。それと、ありがとうね」

「ううん。大丈夫」

照れくさそうに頬を掻くイサムに、微笑むラトウーニ。

「そう言えば皆は？」

「負傷者はいるけど、皆無事よ。でも、エクセレン少尉とクスハ曹長が連れ去られてしまったの…：」

「エクセ姉とクスハさんが!？」

ラトウーニから告げられた内容に驚愕するイサム。

「そんな…：。俺のせいだ…：」

「イサム？」

「俺があの時イングラムを止められていれば、こんなことには……！」

「それは違う！イサムは精一杯のことをした！あなたのせいじゃない！」

再び拳を握り締めて苦悶の表情を浮かべるイサムを、どうにか宥めようとするラトウニ。

「それに、君を守るって約束したのに。俺が我を忘れたせいで君を傷つけてしまった……。俺にもっと力があれば！」

「お前だけのせいじゃないさ」

不意に聞こえてきた声のした方を向くと、イルムガルトが部屋の入口に立っていた。

「イルム兄……」

「今回の件は、イングラム少佐……。いや、イングラムの正体の見抜けなかった俺達にも責任がある。俺なんか奴の部下だった時もあったのにな……」

イサム達の側まで歩み寄ったイルムガルトは、そう言っただけで自嘲気味に笑った。彼はかつて、イングラム・プリスケンが隊長を務める、PTXチームと呼ばれる特殊部隊に所属していたのだ。

「俺達大人がもっと早くに、イングラムの奴の正体に気がついていれば、こんなことにはならなかった。だからそんなに自分を責めるな」

「でも……！」

「イサム」

イサムの言葉を遮ったイルムガルトは、目線を合わせながらイサムの頭に手を置く。

「お前の責任感の強いところは悪いとは言わん。けどな、俺達はそんなに頼りないかく見えるか？」

「そんなことない！そんなことある訳ないじゃないか！」

「だったら一人で背負い込もうとするな。俺達仲間にも責任を背負わせろよ」

言いながらイサムの頭を、多少乱暴にだが撫でるイルムガルト。

「うん、そうだね。ありがとうイルム兄」

「ま、たまには兄貴分らしいことをしないと」

撫でていた手を話して二カツと笑うイルムガルト。それに釣られて笑うイサム。そんな2人の姿は、血の繋がりは無くともまさしく兄弟であると、見守っていたラトウニは思うのであった。

「お取り込み中のところ申し訳ないが、失礼するよ」

そう言つて部屋に入つてきたのは、アイドネウス島での戦いの後、本来の所属である情報部へと戻つていたギリアム・イエーガーであった。

「ギリアム少佐。なんであんたがここに？」

「ああ。彼に用があつてね」

ギリアムの登場に訝しんでいるイルムガルトに答えると、イサムの元にまで歩み寄り、一枚の用紙を懐から取り出すギリアム。

「イサム君。連邦軍参謀本部の命令によつて、スパイ嫌疑で君を我々情報部の監視下に置かせてもらう」

ギリアムの口から放たれた言葉に、イサム達は言葉を失った。

第二十一話

「スパイ容疑？」

ギリアムから告げられた言葉にラトウーニが驚愕していると、イルムガルトが険しい顔つきでギリアムに詰め寄る。

「ちよつと待つてくれ少佐！リユウセイやライはまだ分かるが、イサムはSRX計画には深く関わっていないだろう！」

「確かにイサム君はSRX計画との関連性は薄い。しかし、彼がイングラム・プリスケンと個人的に親しくしていたとの報告があつてね」

確かにイサムは休暇中や作戦中でも、時間を見つけてはイングラムの元を訪ねていたのだ。

「公的な関わりしか持とうとしていなかった彼が、イサム君とだけは私的にも関わりを持つていた」

「それはそうですが。だからって監視対象だなんて……」

「普通ならそこまでしないのだがねラトウーニ少尉。イングラム・プリスケンは、SRX計画だけでなく、PTやAM、特機と言った対異星人兵器開発の要でもある、EOT解

析や他の分野にも深く関与している。そんな彼がエアロゲイターのスパイであったことに、上層部はかなりの衝撃を受けたこともあって、少しばかり神経質になっているのさ」

「だから、少しでもイングラムに同調する疑いがあるイサムを監視するど？」

「そうだ。とは言つても、私も彼が同調するとは思つてはいない。監視もあくまで形だけのものさ。何も監禁する訳ではないよ」

憤りを感じているイルムガルトやラトウーニを宥める様に言うギリアム。

「それなら、また戦場に出ることはできませんか？」

今まで沈黙していたイサムがゆっくりと口を開いた。スパイ容疑に関してより、そのことを一番気にしている様であった。

「リュウセイ曹長やライディース少尉同様、ある程度制限はつくがね。貴重な戦力を出し惜しみしている余裕はないのね」

「だったら問題無いです」

「おい、イサム!？」

あつさりりと監視されることを了承したイサムに、慌てるイルムガルド。

「ギリアム少佐は命令に従っているだけなんだから、文句を言つても仕方ないよ。皆と戦えるなら俺はそれで構わない」

「イサム……」

当人であるイサムにそう言われては、この件に対してイルムガルト達から、これ以上何も言うことはできなかつた。

ジュネーブ近海

アースクレイドルのDC残党と合流していたコロニー統合軍精鋭部隊『トロイイ隊』から投降してきたレオナ・ガーシユタインと、その部下からもたらされた情報から。DC残党がジュネーブの連邦政府の本部へ進行すると言うことを察知したハガネ・ヒリュウ隊は迎撃するために出撃していた。

レオーネを駆って出撃しているイサムの右腕には、見慣れない腕輪が装着されていた。戦域外か機体の外に出た場合、内蔵されたセンサーが反応し、脱柵と見なされるのである。最もイサムにとってはする気がさらさら無いので、問題にはならないが。

正面に捉えたシーリオンからレールガンとミサイルが放たれるが、スラスターを巧みに操り回避する。

『遅い！』

ブースターを全開にして一瞬で間合いを詰めると、シシオウブレード改で両断した。

『うおっとー!』

飛来してきたミサイルが至近で爆発したため、爆風でレオーネの体制が崩れた瞬間を狙いレールガンを構えたシーリオンだが、ライディースの乗るシユツバルトが放った、ツイン・ビームカノンに撃ち抜かれて爆散する。

『前に出すぎだぞイサム!』

『すいませんライさん。助かりました』

援護してくれたライディースに礼を言いつつ。レオーネの防御力に頼り過ぎているなど反省しつつレールガンをブレードで弾く。

『サークル・ザンバーア!』

イサムがシーリオン注意を引きつけている隙に、リュウセイの乗るビルドシユバインが左腕の光輪で切り裂いた。

リュウセイとライディースは、イングラムの裏切りによってSRX計画が凍結されたため、Rシリーズが使用できなくなったので。代わりの機体で出撃しているのである。

『ん? うお!』

イサムが真下の海中から殺気を感じ、機体を真横に跳ばすと。先程までいた地点の海を割いた、赤と青の螺旋状の閃光が、上空のヒリュウ改を掠めた。

『ぐっ大出力のエネルギー兵器!? それにあれば…!』

見覚えのある攻撃に驚愕していると、海面を割って巨大な影が飛び出してきた。
『やっぱり、ヴァルシオンか!!』

現れたのはDC戦争終盤に、DC総帥であるビアン・ゾルダーク自らが駆り、自分達を苦しめた機体であった。

機体色こそ赤ではなく青であるが。その姿は紛う事なきヴァルシオンであり、それが3体も同時に現れたのである。

それぞれのヴァルシオンが左手首のエネルギー兵器『クロスマツシャー』や右腕に持った大剣『ダイバイン・アーム』。さらにオリジナルにはなかった背部ユニットからのミサイルで攻撃してきた。

イサム達は散開して回避すると。1体のヴァルシオンがレオーネへと大剣で斬りかかってきたので、ブレードで受け止める。

『このパワー。見せかけだけじゃないか!』

機体の出力を上げて押し返すと、蹴りを入れて間合いを離すイサム。

お返しと言わんばかりに斬りかかるも。ヴァルシオンは、まるでこちらの動きを読み取っているかの様に、軽々と回避した。

『何?! ガアツ?!』

ブレードを振り下ろして動けない隙に放たれたクロスマツシャーを、G・ウォールの

出力を最大にして受け止めるも。完全には防ぎきれず弾き飛ばされる。

海面に叩きつけられた機体を起こそうとするも、追撃してきたヴァルシオンが目前まで迫ってきていた。

『マズッ!』

大剣を振り上げたヴァルシオンだが。真横から飛来してきたビームを、見えているかの様に回避した。

『イサム!』

『無事か!』

援護してくれたラトウニのビルドラプターと、ライデイスのシュツツバルトが弾幕を張ってヴァルシオンを牽制する。

『速い!』

『機体の性能…いや、パイロットの技量なのか?』

特機とは思えない俊敏な機動で、攻撃を回避していくヴァルシオンに違和感を感じる面々。

『目標…優先順位…変更…。イルミネーターリンク…』

『その声!』

『まさかッ』

『シャイン王女!』

対峙しているヴァルシオンから聞こえてきた声に、驚愕するイサム達。

その声は北京での戦闘中に、離反したハンス・ヴィーパーによって連れ去られた、シャイン・ハウゼンであったからである。

『コマンド〃殲滅〃。。。アクシオン：スタート』

シャインの乗るヴァルシオンが、イサム達へとクロスマツチャーを発射する。

『やめろシャイン!俺だ、イサムだ!分からないのか!』

複雑な軌道を描きながら襲いかかる閃光を避けながら、イサムが呼びかけるも。シャイン機は止まる気配が無いどころか、背部ユニットのミサイルを放った。

『クッ!王女、洗脳されているのか!』

濃密な弾幕を辛うじて回避しながら、ライダーイスが苦悶する。

『クソツ攻撃があたらない!どうすりゃいいんだよ!』

どうにか機体を止めようとするも。シャインが持つ予知能力を利用されているのか、一向に有効打を与えることができないことに歯噛みするイサム。

するとイサムの耳に、真下の海中からロツクオンされたことを告げるアラートが鳴り響いた。

『何!』

咄嗟にG・ウォールの出力を最大にして回避行動を取るが、真下からせり上がってきた金色の螺旋状のエネルギーがフィールドを掠めて機体が激しく揺れた。

『ツ！新手か!!』

機体を立て直してエネルギーがせり出してきた場所を睨みつけると、何か海面を割りながらゆっくりとせり上がってきた。

『ふっふっふっふ。お主がケンを打ち倒したイサムとか言う小僧じゃな?』

『何者だテメエ!!』

『ワシの名はアードラー・コツホ。新たなるDC総帥にしてこの星の覇者よ。そしてこれこそが我が力の象徴、ヴァルシオン・ザ・キングじゃ!』

アードラーの高らかか雄叫びと共に姿を現したのは、全身が金色に塗装と派手な装飾が施され、右手には先端に宝石の様な物が埋め込まれた杖を持ち、頭部は王冠を被っているかの様なパーツに変更されており、背部のユニットにはマントがかかっているヴァルシオンタイプであった。

その姿を見たイサムは言葉を失っていた。

『さあ。お主をこの手で倒し、ワシのことを散々見下しおったケンの糞餓鬼を見返してくれるわ!!』

フアーハッハッハッハッハッハッ!!と高笑い上げているアードラーに対して、イサム

は俯いて身体を震わせていた。

『ぬっふっふっふっふ。この偉大なる姿を見て言葉も出んか。まあ、それも当然のことよの』

イサムが戦意を喪失したと思い込んだアードラーは、再び高笑い上げ始める。

『……え』

『ん？なんじゃ小僧、命乞いかあ。よく聞こえんぞお？』

『めっっちゃ、ダッセエエエエエエエエエエエエ!!』

勝ち誇った笑みを浮かべるアードラーに、イサムは力の限り叫んだのであった。

第二十二話

『だ、ダサイ!?ダサイじゃと!貴様、ワシの考え抜いてデザインしたザ・キングをダサイと言いおったな!!』

『他になんて言えってんだよ!原型の良さが台無しじゃねーか!!』

乗機を貶されたことに激怒するアードラーに事実を突きつけるイサム。

『それとテメエ。アードラーって言ったな?パイロット養成機関『スクール』にいたのは間違いないな?』

『そうじゃ。それがどうした?』

『そうか。お前がラトを苦しめた元凶の1人か!!』

そう言つてレオーネのブレードをザ・キングへと突きつけさせるイサム。その表情はかつてない程の憤怒の色に染まっていた。

『テメエのせいで、ラトやどれだけの人間が苦しんだと思つてやがる!』

『フンツ知らんな。スクールにいた奴らなど、ワシの研究のための道具に過ぎんわ。寧ろ使い道を見出してやったのじゃ。感謝こそされど、恨まれる筋合いはないわ!』

『ああ、そうかい。だったら容赦しねえ。ここで叩き潰す!!』

『やれるものならやってみるがいいわ。ワシの邪魔をする愚か者は死ねえい！クロス
マツシャー!!』

ヴァルシオン・ザ・キングが、手にしていた杖の先端をレオーネへと向けると。先端
に埋め込まれていた宝石から、赤と青の螺旋状をエネルギーが放たれる。

スラストアーを吹かし機体を横に逸らすことで回避すると、攻撃後の硬直を狙って突撃
するレオーネ。

『おらあー!』

下段に構えていたシシオウブレード改を振り上げ、切りつけようとするも、刃がザ・キ
ングに触れる前に見えない何かによって弾かれてしまう。

『何ッ!?!』

予想外の防がれ方に一瞬戸惑うも。反撃に振るわれた杖を機体を屈めて避けると、一
旦距離を取るレオーネ。

『この感じ。歪曲フィールドってヤツか!?!』

『その通り!このザ・キングは量産性を重視した改型とは違い、オリジナルと同様の機
能を搭載しておるのじゃあ!』

ガハハハと得意げに語るアードラーに、舌打ちするイサム。

歪曲フィールドの強固さは、オリジナルとの戦いで味わっており。ハガネ・ヒリユウ

隊の総力を持って、ようやく打ち破ることができたのである。

しかし、今は他の仲間がそれぞれの敵と戦っている状態で、イサムだけで打ち破らなければならぬのだ。

『四の五の言つてられんつてな!』

突破口を見つけようとして機体を踏み込ませるイサム。それを迎撃しようとザ・キングがクロスマツシヤーを放つ。

機体を僅かに横に逸らすことで軽々と回避すると、間合いを詰めてブレードを振るうもやはりフィールドに阻まれてしまう。

それでも相手が特機故の機動性の低さを突き。張り付きながら何度もブレードを振るっていくレオーネ。

『ええいネズミがちよろちよろと、鬱陶しいわ!!』

ザ・キングがレオーネを引き剥がそうと杖を振るうも、一向に掠る気配もしない。

「(動きが素人だな…)」

確かに機体性能はオリジナルのヴァルシオンと同等だが、パイロットの技量は雲泥の差であった。

これなら単独でもどうにかなるか?とイサムが考えていると。上空からクロスマツシヤーと同様のエネルギーがレオーネとザ・キングの間に降り注いだ。

『ぬお!?!』

『何だ!?!』

エネルギーが降ってきた方へ視線を向けると。改型やザ・キングでもない、ヴァルシオンタイプそれもPTサイズの機体が、こちらを見下ろしていた。

敵味方の識別信号が出ていないので、警戒していると所属不明のヴァルシオンタイプから戦場全域に通信が入る。

『あんだ達。ビアン・ゾルダークを倒したハガネ部隊で間違いないね?』

声からして、ヴァルシオンタイプに乗っているのは若い女性のようなのである。

『あたしはリユーネ・ゾルダーク。ビアン・ゾルダークの娘だ』

女性の言葉に通信を聞いていた者達に衝撃が走る。特にビアンに止めを刺すこととなったマサキは人一倍であった。

「リユーネじゃと?では、あれがヴァルシオーネか。ビアン総帥から行き先が聞いていらなんだが、丁度良い」

ザ・キングのコックピット内で、邪な笑みを浮かべたアードラーは、ヴァルシオーネと呼んだ機体に通信を繋いだ。

『リユーネ・ゾルダーク。いい所に来たわしらと協力してビアン総帥の敵を…』

『黙ってなじじい!』

リユーネ・ゾルダークを味方に引き込もうとしたアードラーだが、途中で遮られてしまった。

『あたしは親父の仇とケジメをつけに来たんだ。DC総帥の仇を討ちに来た訳じゃない。それにヴァルシオンの量産どころか、その悪趣味なのを造らせるとは思えないね。どう言うつもりだい!』

『あ、悪趣味じゃと!?!』

アードラーがシヨックを受けている間に、ヴァルシオーネはサイバスターと一騎打ちを始めるのであった。

『お、おのれおのれおのれ!どいつもこいつもワシを馬鹿にしおって!このワシへの無礼の報い思い知るがよいわ!ゲーム・システム起動!!』

アードラーが何かをしたのかと身構えると、ザ・キングの姿が消えた。

『ッ!?!』

咄嗟にブレードを殺気のした方へ構えると、踏み込んできていたザ・キングの杖とぶつかり合う。

『なんだこいつ。急に動きが!?!』

『ふはははは!見たか、これがワシが開発したゲーム・システムの力よ!』

次々と振るわれる杖をブレードで受け流すレオーネ。隙を見て反撃しようとするも、

軽々と防がれ逆に攻撃されてしまう。

先程までとはまるで、別人の様な動きに翻弄されるイサム。ガードを弾かれ、無防備な胴体に膝蹴りを受けて機体を浮かされて、頭部を掴まれてしまう。

『クソツこんの!』

『ケケケケたわいもない。このまま捻り潰してくれるわ!』

レオーネの頭部がミシミシと悲鳴をあげていく。ザ・キングの手を剥がそうとするも、ビクともしなかった。

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア!』

ザ・キングが杖の先端をレオーネの胴体に向けると、クロスマッシャーを放とうとする。

『死ねえイ!!!』

エネルギーが放たれようとした瞬間。飛来してきたビームが、ザ・キングのフィールドとぶつかり合う。

その衝撃で拘束が緩んだ瞬間。ブースターを全開にし、拘束を振りほどき機体を離脱させ様とするも。離脱と同時に放たれたクロスマッシャーに左腕が飲み込まれ消し飛んでしまう。

『そこまでですアードラー・コッホ』

『リリー・ユンカース。なんのつもりじゃ?』

ザ・キングを攻撃したのは、味方である筈の統合軍参謀リリー・ユンカースが搭乗するストーク級であつた。

『これ以上、あなたにDCを好きにはさせません。マイヤー司令から託された使命を、今こそ果たします!』

『フン。やはり裏切るつもりであつたか。しかし貴様如きには、このワシとザ・キングが倒せるものか!』

ストーク級が砲撃を加えるも、フィールドに阻まれてしまう。そして、お返しと言わんばかりに放たれた、クロスマツシャーによって大破してしまう。

次々と爆発を起こし高度を落としていくストーク級。艦橋で起きた爆発に巻き込まれたリリーは、床に叩きつけられる。

アードラーに攻撃する前に退艦命令を出していたので、艦には彼女一人だけとなつていた。

「うう……」

懸命に顔を上げて、艦橋に備え付けられているモニターを見るリリー。

アードラーと戦っていたPTは左腕こそ失っているも、無事であることに安堵する。出血が酷く、もはや助からないだろう。それでもマイヤー司令とピアン総帥が託した、希望の1つを守れて死ぬるのなら本望であった。

DC戦争末期。コロニー統合軍がハガネ・ヒリユウ隊に敗れた日——
『急げリリー。生存者を纏めて脱出せよ。そして使命を果たすのだ』

沈みゆく旗艦マハトの艦橋で。リリーを庇って致命傷を負ったマイヤーは、そう言つて彼女に希望を託した。

生き延びたリリーは。DCを私物化するであろうアードラーに従うふりをして、彼に合流したのであった。マイヤーとピアンの残した力を悪用する者を止めるために。

『フアー——ハッハッハッハッハッ！愚か者めが。ワシに逆らつたことを死んで後悔するがよいわ！』

通信機からアードラーの高笑いが響いてきた。

確かに自分はこちらまでだ。しかし何も問題は無い。『彼ら』とハガネ・ヒリユウの者達力が合わせれば、あの男ひいてはエアロゲイターからこの母星を守ってくれるだろう。と言う確信がリリーにはあった。

「最後まで見守ってくれたことを…感謝します…。…後はあなた達に…託します…」
『戦を起こしたものの責任』を果たさせてくれた『彼ら』に感謝の念を述べる。もはや思

い残すことはなかった。

「(ああ…マイヤー様…。今、お傍に…参ります…)」

敬愛する者を想いながら。リリーは、爆発の炎に飲み込まれていったのであった。

『…後はあなた達に…託します…』

通信機から聞こえてきた声を最後に、爆散してしまつたストーク級を見ながら啞然としてしまうイサム。

『あの人。俺を助けるために…?』

自分を庇つて死んでいった祖母の姿が思い起こされていく。後悔と己の無力さが怒りとなつて、操縦桿を強く握り締める。

『フヒヒヒヒヒヒ！死ぬ死ぬ死ぬ！ワシに逆らう者には死あるのみじゃああああ
!!!』

『デメエエエエエ!!』

狂つた様に高笑いを上げるアードラーに、怒りのまま機体を突撃させようとするイサム。
ム。

そんなレオーネを遮る様に、前方の海面から3つの影が飛び出してきた。

『ソニック・スレイヤー!』

飛び出してきた影の1つ——ケンの駆るアリオールが、フィールドを纏わせた両手のシシオウブレードを振るい、ザ・キングのフィールドとぶつかり合う。

ダメーじこそ与えられなかったが、その衝撃でザ・キングの動きが止まる。

『射てトロンベよ!』

『こいつもプレゼントオ!』

続いて、エルザムの乗るヒュツケバインMk—II 2号機をカスタムした『ヒュツケバインMk—II・トロンベ』が。腰の股間ブロックに接続したキャノン砲から重力弾と、エールの乗るダイバイソンが背部の16連装砲から放った大出力ビームがザ・キングへと殺到する。

『ぬうおおう!』

ザ・キングはこれもフィールドで防ぐも。今までのイサムの攻撃によって、負荷がかかっていたこともあってか。流石の歪曲フィールドも限界が近く、発生装置から火花が散る。

『グッ! フィールドが!?! エルザム、貴様もワシに歯向かうのか! DC総帥: いや、地球圏の覇者たるこのアードラー・コッホに!』

『ハッ。貴様が地球圏の覇者? 笑わせるな。ビアンのオツサン達の威を借るだけのクソ

野郎が』

憤慨しているアードローを、汚物を見るような目で吐き捨てるケン。

『ケン、貴様ア!!』

『アードロー副総帥。あなたは力を振るう相手を間違えている。今はエアロゲイターの驚異を払うために人類が力を合わせる時なのです』

『だからこそワシが軟弱な連邦の代わりに、地球圏を統一するのじゃ!』

『いたいげな少女を、無理やり戦わせている奴には無理でしょ』

『黙れ小娘がア!』

エールの言葉に反論できないのか、ザ・キングがクロスマツシャーを放った。

散開して回避した間に、アリオールに通信を繋ぐイサム。

『ケン! 助けられたんじゃないのかお前なら、リリーつて人を!』

『…ああ。できた』

『! だつたらなんで…!』

『あの人…それを望んだ…。それだけだ…』

冷徹に振舞おうとしている様だが。自分自身納得しきれていないのか、その声は僅かに震えていた。

『俺が仇討ち云々言う権利はないが。それでも奴は放置しておけん。だから力を貸せイ

サム!』

『ああ、分かった。行くぞケン!』

アリオールが先行し、持ち前の機動性を活かしてザ・キングをかく乱すると、その隙に接近したレオーネが正面から切りかかる。

ブレードと機体のスラスターを合わせながら、機体全体を巧みに動かし、片腕だけで長大なブレードを振るうレオーネを、杖を振るって迎撃するザ・キング。

レオーネに気を取られている間に、背後から仕掛けるアリオール。ザ・キングを挟み込んだ2機の一糸乱れぬ連携を、ザ・キングは杖とフィールドで防御する。

『カアツ!!』

薙ぎ払う様に放たれたクロスマツシャーを避けるために、回避行動を取るレオーネとアリオール。

『隙だらけってねえ!』

『ターゲット・インサイト』

デイバイソンがミサイルとガトリングを、Mk-II・トロンベがフォトン・ライフで牽制し動きを抑える。

その間にレオーネとアリオールが攻め込み、ザ・キングのフィールドに負荷を加えていく。

『ぐうぬああー!』

痺れを切らしたのか、ザ・キングがクロスマツシャーを海面に向けて放ち、海水を巻き上げ目くらましをする。

レオーネらが警戒して一瞬動きを止めた隙に、マントを外して背部ユニットを露出させるザ・キング。

『死ぬ死ぬ死ぬええ!消えてなくなれエエエエエエイ!!』

背部ユニットが展開されると、エネルギーが放出されていき。周囲の大气が乱れ海が荒れていく。

『重力兵装!?!不味い!』

危険を察知して止めに向かおうとするレオーネを、アリオールが手で制した。

『フンツ、メガ・グラビトンウェーブか。切り札を使ったな。なら、こちらもジョーカーを切るまでだ』

ケンの言葉に合わせる様に、ザ・キングの背後の海面を割って巨大な影が飛び出してきた。

『斬艦刀…!』

『なッ!?!』

現れたゼンガーの駆るグルンガスト零式が。零式斬艦刀を構え、重力制御のために、

無防備となつてゐるザ・キングへと突撃していく。

『疾風怒濤ッ!!』

機体と刀身のブースターを噴射し、神速の速さで振り抜かれた斬艦刀が、ザ・キングのフィールドとぶつかり合いせめぎ合う。

だが、これまでの戦闘による負荷によつて、遂に限界を超えたフィールド発生装置が破損する。

これによつてフィールドが消失し、阻むものが無くなつた斬艦刀が、ザ・キングの背部ユニットを両断した。

『ぬアアアアアアア!?!』

『我が斬艦刀に、断てぬもの無し!』

ユニット爆発によつてバランスを崩し、うつぶせで海面に倒れこむザ・キングを背に、残心をするゼンガー。

『親分!』

『久しいなイサム。宇宙で刃を交えて以来か…』

予期せぬ再開に喜ぶイサムに対して、ゼンガーは敵対したことに、後ろめたさを感じている様であつた。

『ぐ…ぐおおう…。ゼンガー、貴様も…貴様もワシに齒向かうのか…。なぜ理解せん

：ワシが地球圏を統一せねば、人類に未来が無いことを…』

『黙れアードラー・コツホ！今こそ我らの使命を果たす時！』

『使命、じゃと!?』

ゼンガーの言葉に、機体を起き上がらせながら驚愕するアードラー。

『そう！我らの使命とは、異星人に対抗しうる戦力を見出し、鍛え上げること！』

『そして、アードラー副総帥。あなたのように本来の目的を見失い、私欲に走るDC残党を止めること』

『しかる後。見出した者達と力を合わせ、この星を守ることだ』

ゼンガー達の言葉に、ぬううと唸り声を上げるアードラー。

『親分、それにケン。やつぱり、そうだったのか…』

そしてイサムの中での疑惑が、確信へと変わったのであった。

『力を合わせると言っても、馴れ合う気は無いがな』

『素直じゃないね。本当は仲直りしたいくせに』

突き放すように言うケンに対して、呆れた様子に言うエールだが、ケンは無視した。

『アードラー副総帥。どうか投降を。最早勝負は着きました』

エールザムの言う通り。切り札である重力兵装とフィールドを失ったアードラーには、最早勝機は無くなっていた。

『ま、まだじゃ…。まだ、ワシは負け、負けておらララララララララララ
 なおも抵抗しようとしていたアードラーに、突然変化が訪れた。
 !?!?!?!』

『わ、ワシ…わしが。ワシが、この星の…し、シシシシシシ…しは、支配者しやしやしやしやしやしやし!!』

『な、なんだ!?!何が起こったんだ!?!』

狂った様に話すアードラーに、不気味さを感じるイサム。

そんなイサムを尻目に、ケンはずんずんと鼻を鳴らした。

『奴め、ゲーム・システム・システムの限界を迎えたか』

『ゲーム・システム?なんだよそれ?』

心当たりがある様子のケンに、問いかけるイサム。

『あの糞ジジイが開発していた、パイロットの情報把握能力の拡張を促し、戦闘能力を向上させることを目的としたMマン・マシ・インターフェイス M Iだ。最も脳への負担が強過ぎるため、使い続

ければ廃人になるがな』

『それじゃ、あいつは…』

『ああなつたら、手遅れだろうな』

自業自得だと哀れむ気も無い様子のケン。

『フヒヤ、フヒヤヒヤヒヤヒヤ!!し、シネー!シネシネシネシネ…シネエエエエエエエエ

エエイ!!!』

狂った様に笑いながら、クロスマツシヤーをでたらめに放つザ・キング。弾道が不規則なため逆に回避しずらくなっていた。

『ええい、メンドくさいんだよ!』

イラついたエールのダイバインが放った突撃砲が、ザ・キング胴体に直撃し体勢を崩す。

『そこだ!』

その際にMk—II・トロンベが放ったライフルの光弾が、ザ・キングの杖を破壊する。

『アアアアアア!!!』

アードラーが最早言葉にならない叫びを上げて、ザ・キングが両腕を突き出しながら突撃してくる。

『往生際が悪いんだよ!』

『滅せよ、アードラー・コッホ!』

アリオールと零式がそれぞれのブレードで、ザ・キングの両腕を切り落とした。

『これで、終わりだアアアアアア!!!』

レオーネが全てのスラストターを全開にし、ザ・キングへと突撃する。限界まで捻った

腰部を戻す反動と、スラストターの推力に機体を回転させた遠心力を用いた一閃が、ザ・キングを左肩から右斜めに両断した。

『ば、馬鹿な……。わ、ワシの野望が……こんな所でエエエエエエエ!!』

上半身と下半身が両断されたザ・キングは、最後に正気を取り戻したアードラーの断末魔と共に、爆炎に飲み込まれていった。

『この勝負。俺達の勝ちだ!』

爆炎を背に、残心するイサムであった。

第二十三話

伊豆基地 医務室

ジュネーブ近海での戦闘から数日が経過し、救出されたシャインは伊豆基地にて検査を受けていた。

「……とりあえず今の所……。深刻な障害は確認できないわ。きちんとした施設で専門医の精密検査を受けるまで安心できないけれど」

「王女よかった」

「だね」

ラーダの診断にその場にいたイサムとラトウーニは安堵する。

他にもライデイスとシャインの執事であるルダールもおり、彼らも安堵した表情をしている。

「了解です。医師の手配は国元に任せるとして退艦手続きを用意してきます。よろしいですかルダール卿」

「よろしくお願ひします」

ルダールが頷くのを確認すると、ライディースの言葉は退室しようとするがシャインに呼び止められる。

「ライディ様…ラトウーニ…全部覚えています。呼びかけてくれた声も全部。ありがとうございます」

「当然のことをしたままでです。失礼」

そう言つて部屋を出て行くライディースを見送ると、イサムがバツの悪そうな顔をしていることにラトウーニは気づいた。

「どうしたのイサム？」

「いや、結局俺つてシャインを助けることに関われなかつたからさ…」

どうやらアードラーの乱入によつて、ライディースとラトウーニに任せてしまったことを気にしているらしい。

「しかし、イサム殿はアードラー・コツホめを成敗なされました。気に病む必要はないかと存じますが」

「そうです。わたくしのような目に遭う者がいなくなつたのは喜ばしいことですわ」

「ありがとうございますルダールさん。シャインも」

2人のフォローに気が軽くなるイサムであつた。

「でも、あいつの助けがあつたからでもあるんだけどね」

「ケンって人のこと?」

「うん。戦いが終わってすぐにどっかに行っちゃったけど…」

アードラーを撃破後。ケンらDC残党の者達は何も語らずに去っていったのである。

「その方はイサムの兄君なのですわよね?」

「まあ。一応ね」

シャインの言葉に、どこか懐かしむような様子で頷くイサム。

イサムとケンは年齢は同じだが。生年月日から見るとケンの方が先のため、形式的にはケンが兄となるのだ。

子供の頃は、よくどちらが兄か弟かでちよつとした喧嘩をしていたものだ。まあ、弟であることに納得できていなかったイサムの方が、一方的に突っかかっていただけなのだが。

「彼と話がしたいの?」

「…そうだねラト。できれば話して、みたいかな」

彼がなぜ家族を捨ててDCに身を置いたのか。本当に家族の絆を捨ててしまったのか。北京やジュネーブで自分を助けてくれたのは、使命のためだけだからか。本当に家族の絆を捨ててしまっているのか。直接会って聞きたいことが山程あった。

もう、昔のように笑い合うことはできないのだろうか…。そんな思いを馳せるイサムであった。

ハガネ 格納庫

「今度は南極行きか…」

レオーネに搭乗しているイサムが、機体のチェックをしながら誰にともなく呟く。

ジュネーブ近海での戦闘からさらに数日が経過していたが、その間エアロゲイターの攻撃は一部の軍事施設のみ限定されており、まるで何かを待っているかのようであった。

対する連邦軍はL5宙域に出現した構造体『ホワイトスター』攻略作戦を立案し、起死回生の一手とすべく行動を開始していた。

ハガネ・ヒリユウ改の面々もこの作戦に参加すべく準備に邁進していたが、伊豆基地指令レイカーの要請により、ハガネは急遽南極のコーツランド基地へと向かっていた。ちなみにヒリユウ改は月のマオ・インダストリー本社に向かっており補給物資の受け取り後、現地で合流することとなっている。

『確かあそこってシユウ・シラカワとグランゾンに破壊されたんじゃないか？』

『レイカーのおっさんの話だと、あそこはイスルギによって復旧されたんだそうだ』

イサムと同じく疑問に思っていたリュウセイに、事情を知っている様子のマサキが答えた。

彼はジュネーブでの戦い後協力を申し出た、リュウネ・ゾルダークの処遇を決める場につき添っており。その場で今回の事態の詳細を知らされたのである。

ちなみに。リュウネ・ゾルダークがジュネーブでハガネ・ヒリュウ隊に戦いをしかけたのは、父であるビアン・ゾルダークの後を託すに足るかどうかを自分の目で確かめたかったからであった。

マサキとの戦いを経て、ハガネ・ヒリュウ隊のことを認めた彼女は最終的にDC残党との戦いに協力し。そのまま行動を共にすることを決めたのだった。

『さらに、スペースノア級壱番艦シロガネの修復も行われていたらしいぜ』
『シロガネの?』

イルムの補足に驚きの声をあげるイサム。

今では『南極事件』と呼ばれることになって戦いで、グランゾンの攻撃によって大破した艦の姿が思い起こされる。

『貴重なスペースノア級を直すつてのはおかしなことではないが。そこにEOT特別審議会議長殿がいるつてのは穏やかじゃないね』

「エアロゲイターに降伏しようとしていた連中か。もしかして自分達だけ逃げようとしていたのか？」

『そこまではわからんが、レイカー指令は何かが起きると踏んで俺達を派遣したんだらう』

確かに目的地に近づくことに嫌な感じが強まっていた。レイカーも似た者を感じたのだろうかと思得するイサム。

そんなことを考えていると、艦内に警報が鳴り響いた。

『コーツランド基地がエアロゲイターの襲撃を受けている模様！総員第一種戦闘配備！繰り返す、総員第一種戦闘配備！』

アナウンスが流れると整備員達の動きが慌しくなり、待機していた機体らが次々と起動を始め発進準備に入っていく。

「嫌な予感の中か。さて、イングラムは出てくるか…」

愛機を起動させ、懸架されているシオウブレード改を持たせるイサム。

北京でイングラムを取り逃がしたことを気にしてか、その表情はいつもより険しかった。

『例え出てきても熱くなるなよ？』

「わかってる。そこまで馬鹿じゃないよ」

どこか心配そうなイルムに、落ち着いた声で返すイサム。

北京では我を忘れて危うく取り返しのつかない事態になりかけたのだ。同じ轍を踏む気は毛頭なかった。

『レオーネ、発進どうぞ！』

「了解！イサム・トウゴウ、レオーネ行くぜ！」

カタパルトによつて機体が射出されると素早く体勢を整え、周囲の戦況を見渡すイサム。

コーツランド基地のドッグに係留されていたシロガネの艦橋は既に破壊され火を噴いており。少なくともそこに者は誰も生き残つてはいないだろう。

その周囲では、防衛部隊とエアロゲイターの機体との一進一退の攻防が展開されている。

イサムは着地と同時に勢いを殺さず、地面を削りながら機体を滑らせエアロゲイターの人型兵器、コード名『ソルジャー』の一体をすれ違いざまにブレードで胴体を両断する。

続いてライフルからビームを撃ってくるソルジャーの集団に、回避あるいはG・テリトリで防ぎながら接近に斬り伏せていく。

『ッ!?!』

殺気を感じ取り。咄嗟に機体を跳び退かすと、レオーネが立っていた地面が襲い掛かって来た人型の手刀によって粉碎される。

『あれは、ゲシュペンスト?!』

襲い掛かって来たのは、黒色のカラーリングをしたゲシュペンストタイプであった。

『気をつけるイサム! そいつはタイプSだ!』

『タイプSって初期型の?!』

極秘任務名目で徴発され、コーツランド基地の守備隊に加わっていたカイ・キタムラの言葉に驚きを隠せないイサム。

タイプSは、人類初の人型機動兵器『ゲシュペンスト』シリーズの1機であり。特殊戦技教導隊隊長であるカーウエイ・ラウ大佐による宙間運用試験中に、機関暴走によって行方不明となった機体である。

また、プラズマ・ジェネレーター搭載試験機であり。その開発データはレオーネに生かされており、縁の深い機体でもあるのだ。

そんな機体がないエアロゲイターと共にいるのか考える暇も無く、タイプSは胸部の装甲を展開させ内蔵されている高出力ビームを放ってきた。

『ぐっ!?!』

機体を横に跳ばし回避するも。近場に着弾したため衝撃でコックピットが激しく揺

れる。

その隙を突くように、北京で鹵獲されたグルンガスト式式が殴りかかってきた。

『オオ!』

右手でブレードを持ち、左手を添えた腹の部分で式式の拳を受けとめると押し合い状態となる。

『ターゲット、破壊する』

『その声、クスハさん!?!』

式式から聞こえてきた声は間違いなくクスハ・ミズハのものであったが。生気を感じられず、まるで人形のように冷たかった。

そして上空から数発の実弾が降り注ぎ、テリトリーで防ぐも負荷によって機体が悲鳴をあげた。

『この攻撃はッ!』

弾が飛んできた方を確認すると。なんと、ヴァイスリッターがオクスタン・ランチャーをこちらに構えているではないか。

『はあい。皆お久しぶり』

ヴァイスリッターの通信からエクセレンの声が聞こえるも。クスハ同様、その声には違和感があつた。

それを裏付けるかのように、ヴァイスリッターがランチャーをバトンのように回すと、味方である筈のハガネ・ヒリユウ隊へと銃口を向けた。

『再会を祝って…。お土産…受け取ってね』

躊躇いも見せずにランチャーのトリガーを引くと、実弾の雨がハガネ隊へと襲い掛かる。

『エクセ姉まで！どうなってんだよ!?!』

何がどうなっているのか分からず、混乱するイサムだが、容赦なくタイプSが電撃を纏った右手の手刀を振りかざして接近してくる。

式式と押し合い状態となっているため回避は出来ず。威力から察するにテリトリで防ぐこともできないだろう。

万事休すかとイサムが冷や汗を掻くが、割って入ったカイのゲシユペンストが左手で手刀をいなし、カウンターで膝蹴りを放つも軽々と回避される。

さらに、ギリアムのゲシユペンスト・タイプRが式式にニユートロンビームを放つが、念動フィールドに阻まれるも僅かに隙ができたのでレオーネは後ろに跳び距離を取る。『恐らく。エクセレン少尉とクスハ曹長はエアロゲイターに洗脳されているのだろう』

『じゃあ、もしかしてあのタイプSも?』

ギリアムの言葉にタイプSの方へと視線を向けるイサム。あの機体もエクセレンら

と同じ状態ならば、パイロットを助け出せるのではないかと考える。

『仮にそうだとしても、年月が経ち過ぎている…。助け出せる可能性は…』

『出来るとしても、殺さずに止められるかどうかだ』

『そ、そんなに強いんですか？』

『ああ。ゼンガーとレーツェルがいても勝てるかどうか分からん』

カイの言葉に弱気になりそうな心を奮い立たせると、レオーネにブレードを構えさせるイサム。

『それでも、負けるわけにはいかない！ピアン・ゾルダークに託されたんだ！この星を護れって！』

『その意気だイサム！戦いは怖気づいた方が負ける！いくぞー！』

『はいー！』

ブースターを吹かし、カイ機と共にタイプSへと向かって行くレオーネ。対するタイプSは胸部の高出力ビーム砲——プラスチックキャノンを放つ。

レオーネとカイ機は左右に別れて回避する。そして、レオーネは発射の反動の隙を突いて一気に加速して接近すると、ブレードを下段から振り上げるも上体を逸らして避けられる。

そこから上段からの振り下ろしに切り替えるも、後ろに跳んで回避されるが。振り下

ろした勢いを利用して機体を回転させながら追撃し、横薙ぎへと繋げるもブレードの腹を膝で蹴り上げられる。

その反動で両腕が持ち上げられ、無防備となったレオーネの胴体へと右手の手刀で貫こうとするが。ブレードを手放したレオーネは、突き出されたタイプSの右手を右脇の部分で挟み両手で右腕を掴んだ。

『今です！カイ少佐！』

『おう！』

動きを止められたタイプSへと、カイ機がジェット・マグナムを打ち込もうとするが。タイプSは右足でレオーネの左足を払い、体勢が崩れたレオーネをカイ機へと投げ飛ばす。

『うわあ?!』

『ぐツ?!』

互いに回避することができず、ぶつかり合うレオーネとカイ機。追撃に入ったタイプSが、左手に持ったプラズマカタールで纏めて貫こうとするも。タイプRが放ったビームを跳んで避ける。

『まだまだア!!』

直ぐに体勢を立て直したレオーネとカイ機がタイプSへと向かって行った。

コーツランド基地上空に、鳥類を思わせるエアロゲイターの大型機動兵器『ヴァイクル』が佇んでおり。搭乗者である指揮官のアタッド・シヤムランは、コックピット内で戦場を俯瞰しながら思考を巡らせていた。

戦闘はハガネとヒリユウ改の到着により膠着状態へと陥っており。捕獲した地球人の1匹はイングラムが収集したデータにあるアルトアイゼンと、もう1匹はデータに無いがグルンガスト初期型と同タイプの機体と交戦している。

そして、新たに手にした人形のゲーザ・ハガナーは、SRXチームの1人に執着し始め若干の暴走状態となっており。ガルイン・メハベルのタイプSは優勢ではあるが押さえ込まれている状態となっていた。

「どうも場が膠着してきたね。ここらで一回すつきりさせるかい？」

にたりと嗤ったアタッドは、自機の側に地球側ではフラワーと呼称されている母艦『ブルー』を転移させると主砲の発射体勢を取らせる。

これはコーツランド侵攻前に連邦議会のあるジュネーブを壊滅させた戦法であり、現状の連邦軍では対抗策は無いに等しかった。

フラワーの出現に気がついたサイバスターとヴァルシオーネが迎撃しようと向かっ

て来るが。アタッドはヴアイクルから無数の小型砲台『カナフ・スレイブ』を射出させ、オールレンジ攻撃によって阻む。

その間にフリーレの発射準備が整うと、これから起こすことを想像してアタッドは笑みをさらに歪める。

『レギオン・イレイザー撃…』

発射を命じようとしたまさにその時——氷海を突き破り何かがフリーレ目掛けて飛び出してきた。

『…氷海の下から!?!』

アタッドは一瞬ミサイルの類かと思ったが、それにしても大きい。まるで戦艦のようないや、戦艦そのものが特攻してきたのである。

スペースノア級参番艦クロガネの艦首超大型回転衝角によってフリーレは粉碎されてしまう。

『フリーレが…。こいつら馬鹿か、なんて野蛮な…。!』

予想外の事態に動揺するアタッド。そんなヴアイクルに、クロガネから出撃したゼンガーのグルンガスト零式が迫る。

『キョウスケ達の邪魔はさせん!』

回避の間に合わないヴアイクルに、零式は斬艦刀を振り下ろすが念動フィールドの阻

まれる。

だが、咄嗟のことだったためか、十分な強度はなくフィールドが砕け、浅くだが機体を傷つけることに成功した。

『くっ！調子に乗るな！』

カナフ・スレイブによる弾幕を張り零式を後退させると、アタッドは体勢を立て直すとする。

『それはこちらの台詞なのだがな』

男の声が聞こえたかと思えば、人型の影がヴァイクル周囲を飛び回り、両手にそれぞれ保持したブレードでスレイブを斬り裂いていく。

『なッ!?!』

アタッドが慌てて残りのスレイブに迎撃させるも、アリオールは落ち着いた動作で回避すると距離を取る。

『この原始人共が、よくもッ!』

『先程までと動きに余裕がないな？もっと足掻いてくれると思っていたのだがな』

忌々しげにアリオールと零式を睨みつけるアタッドに、挑発的な口調で話しかけるケン。

『まあ。もつとも、これ以上貴様の遊びに付き合ってやる気はないがな。やれ、エール

！』

『あいなく！』

エールがハツラツな声で応えると、クロガネのハッチが開放され、固定された状態の
デイバイソンが姿を現す。

『うへへへへへへ。いい感じに固まつてるじゃん！』

何やら女性がしてはいけない笑い方をしながらも、エールは眼下に展開されているエ
アロゲイターの集団をマルチロックオンしていく。

『メ〜ガ〜ロ〜マー〜ックス!!!』

ロックオン完了と同時にトリガーを引くと、チャージしていた機体背部の17門突撃
砲から高出力のビームが発射された。

撃ち出されたビームは空中で拡散し、空に展開していたバグズの集団を飲み込みなが
ら地上のソルジャーら人型の密集していた地点に降り注ぎ、大爆発を起こして跡形もな
く消し飛ばしていった。

ちなみにハガネ・ヒリユウ隊らと基地防衛部隊は、事前に勧告がされていたので安全
圏に後退していた。

『あ、あたしの人形達が…』

目の前で繰り広げられて光景が信じられず啞然とするアタツド。たった一撃で戦力

の大半が壊滅すれば無理もないが。

『すっげえ……』

それはイサムら友軍も同様であった。数えるのも億劫な数がいた敵部隊が少数を残し消え去り、変わりにクレーターとなった大地が広がっていた。

『ツ！ガルイン退くよ！残った部隊を纏めて転移座標に集結させな！』

『リョウカイ……』

無事であったガルインに撤退を指示すると、アタツド自身も残ったスレイブと胸部か高出力のビームを使いアリオールと零式を牽制しながら後退していく。

『覚えておきな原始人共！次には纏めて叩き潰してあげるよ！』

アタツドが吐き捨てるように声を張り上げると、数体のバグズが、球体状の物体を集結したエアロゲイターの機体の頭上に投下すると光に包んでいく。

光がすぐに収まるが、同時にエアロゲイターの姿は戦場から消えてなくなっていたのであった。

第二十四話

南極 コーツランド基地近郊

戦闘終了後。ハガネ・ヒリユウ隊はコーツランド基地に留まり、クロガネと接触していた。

「……」

「……」

互いの艦を挟んだ雪原で、それぞれの代表が対話しており。そこから少し離れた場所で、イサムとケンはい互いに向き合う形で立っており、沈黙を保ったまま視線を交わしていた。

「……2人だけで話がある」

最初に沈黙を破ったのはケンであり、その目には何らかの決意を宿していた。

「俺もだ。と言いたいけど……」

その目を真つすぐに見返したイサムは頷く——も、手に嵌められた発信機を見た。

現在イサムは、内通者疑惑で情報部の監視下に置かれているのだ。

「情報部の人間。こいつを借りるぞ」

「ああ、構わんよ」

ケンが側にいたギリアムに向けて言うと、彼はすんなりと了承した。

「そんなあつさり、いいんですか？」

「言っただろう。私としては命令でしているだけだからね。個人的には君達は白だと
思っているのさ」

そういつて微笑むギリアムからは、心の底からそう考えていると読み取れた。

「では、いくぞ」

「あ！待てよケン！」

足早に移動するケンを、イサムは慌てて追いかけるのであった。

南極 コーツランド基地近郊

基地から少し離れた場所で、氷海を眺めながらイサムとケンは並び立っていた。

互いに黙ったまま景色を眺めていたが、ケンが不意に口を開いた。

「…まさかお前とこうして話し合う日が来るとは。人生とは分らんものだ」

腕を組んだ状態で感慨深そうに語るケン。

「そうだね。…ねえ。どうしてあの時俺達の前からいなくなつたの？」

当初は祖母を手にかけて家族を捨てた彼を、ただ止めることしか考えていなかった。

だが、DC戦争で剣を交え。その後のエアロゲイターや、DC残党との戦いで共に戦う内に。自分は本当に兄弟のことを理解していたのかと考えるようになった。

だから、今は純粹に彼の気持ちを知りたかったのだ。

「俺の親が強盗に殺され、その強盗を俺が殺したのは覚えているか？」

ケンの父親は警察官であった。正義感に溢れ誰からも愛される人物で、ケンも大好きであった。

だが、その職業故に恨みを買うこともあったのだ。

ケンが生まれるより前に父が逮捕した一人男が、服役後復讐のために一家の住む家に押し入った。父も母もケンを守ろうとするも、強盗の手によって帰らぬ人となってしまう。

そして最後に残されたケンは、咄嗟に台所にあつた包丁を手にし強盗に立ち向かった。

残すは、まだ幼なかつたケンだけとなったことで油断もあつたのだろう。不意を突かれた強盗は、無我夢中で突き出したケンの包丁が急所に刺さり絶命した。

「うん。それで身寄りが無いから施設に入ったんだっけ？」

「ああ。だが、そこに俺の居場所はなかつた」

事件後一人残されたケンを、誰が面倒を見るかが問題となった。

身を守るためとはいえ。人を殺めてしまったケンを、親族は誰も受け入れようとせず。最終的に保護施設で暮らすこととなった。

だが、施設の大人達もケンのことを恐れ気味悪がった。そんな大人の態度は施設で暮らす他の子供にも伝わり、ケンは孤立し邪魔者として扱われたのだ。

「施設で暮らす中で、俺は自分の無力さを呪った。あの時俺に力があれば、父も母も死なずに苦しい思いをしなくて済んだとな。そして、俺はお前と出会った」

誰も味方のいない施設での暮らしに嫌気がさしたケンは、施設を抜け出しあてもなく彷徨った。

やがて疲れ果てたケンは、とある空き地で身をうずめた。

『ねえ、君どうしたの?』

そんなケンに声をかけた同い年の少年が現れる。それがイサムであった。

彼は何も話そうとしないケン側に寄り添い続けた。やがてケンが帰る場所がないことを知ると、強引に自分の家まで連れていった。

そこでケンはリシユウと彼の妻シノと出会う。ケンの事情を知ると、イサムの願いもあつたが、彼を引き取り家族として迎えてくれたのだった。

「そして、リシユウの元で剣を学ぶようになって強くなれると思った。だが、そこでお前という壁が立ちはだかつた」

「え？」

ケンの言葉に驚愕の声漏れるイサム。彼が自分をそんな風に見ていたことが意外だったのだ。

「どれだけ努力してもお前を超えられないことに、次第に焦るようになっていった」

「そんなこと……」

「お前はそう思っていないか。当時の俺は、どうしようもない才能の差を感じていたのさ」

表情こそ変えないが、自嘲するような様子でケンは空を見上げるた。

「でも、あの頃手合わせしても君がよく勝つてたじゃないか？」

「…お前、本気出してなかっただろ？」

「それは…」

ケンの問いに言葉を詰まらせるイサム。確かに昔の自分は人を傷つけることに躊躇いがあり、無意識に力を抑えていた。それを、ケンは感じ取っていたのだ。

「本気のお前を倒すことで、弱い自分を捨てたかった。だから、どうやってお前に本気を出させるか、ない頭を使った結果があんなことさ。つくづく馬鹿だったよ」

そういつて、今度こそ自嘲するような笑みを浮かべるケン。

「でも、今はなんていうか…。俺が知っている以上に丸くなったよね。あれから何があつたのさ？」

再会してから感じられていたが。姿を眩ませた時に感じられた危うさは消えており、イサムが知るケンよりも丸くなった印象を与えていた。

「……」

どこか遠くを見るかのような目をして黙ってしまうケン。初めて見る兄弟の姿に、思わず目が点になるイサム。

「…ある奴と共にいる内に、いかに自分が矮小であつたか気づいてな。まあ、そこから生き方を変えていくことにしたのさ」

「そっか。その人ってどんな人なの？」

「大馬鹿な女さ。こんな俺にどこまでも着いて来ようとする、な」

言い方こそ辛辣だが、その口調はどこか暖かみを感じさせるものであった。

「大切な人？」

「そうだな。退屈はせん」

「じゃあ、その人にお礼を言わないとね」

「喧しくなるから止めろ」

辟易した様子で釘を刺すケンに、本当に丸くなつたと思わず笑みをこぼすイサム。

「ねえ。これからは一緒に戦ってくれるの？」

「ビアンのおっさんの依頼が終わるまではな。その後は好きにやらせてもらう」

暗に再び敵対する可能性も示唆するケンだが、今だけでも肩を並べて戦えるのなら、

イサムにとっては十分であった。

「じゃあ、今だけはよろしくね」

そう言つて閉じたままの右手を、スツと差し出すイサム。

「…おう」

ケンはその手を気恥ずかしそうな目で暫し見つめると、意を決したように閉じたままの左手を突き合わせるのだった。

南極 コーツランド基地近郊

「ジ―」

「…」

「ジ―」

「…」

「ジ―」

「…あの、何か？」

イサムを探していたラトゥーニは、突然現れた女性にジツと視線を合わせられて見つめられて困惑していた。しかも、わざわざジ―という擬音を言いながらである。ハツキリ言つて、不審者以外の何者でもなかった。

「へー、お嬢ちゃんが弟君のお気に入りかあ」

「弟、君？」

やつと口を開いた女性――エール・エンフェリートという言葉に、疑問符を受かべるラトゥーニ。

「ん〜。ケンの奴が自分の方が兄だつて言つてたけど？」

「ケンって、アリオールのパイロットの?」

ラトウーニは、そう言えばイサムが兄弟同然に育ったという話をしていたことを思い出し。目の前の女性が言いたいことをおおよそは把握した。

それと同時に、彼女の声には聞き覚えがあった。

「あの、あなたはガリーオンの重装カスタムタイプのパイロットの?」

「ああ、ごめんごめん。自己紹介してなかったっけ? あたしはエール・エンフェリート。えっと、階級は特務中尉ね。で、あなたラトウーニ・スウボータであってる?」

「あ、はい」

軍人とは思えない余りの軽さに、困惑の色を深めるラトウーニ。そんな彼女のことなどお構いなしに迫っていくエール。

「いやくにしても、こんな可愛い子が連邦さんにいるとはねえ。どう、あたしの妹にならない?」

「ええ…」

撫でまわされながらの突然過ぎる提案に、完全に置いていかれているラトウーニ。はたから見ると、酔っ払いに絡まれているようにしか見えなかった。

「お、どうしたラトウーニ。DCの奴にいちやもんつけられてんのか?」

そんな彼女に。たまたま通りがかったカチーナが、どこか嬉しそうに声をかけてき

た。

「そんな中尉じゃないんですから…あいたあ!？」

共にいたラッセルがツツコミを入れると、カチーナに尻を蹴り上げられる。

「ありや、そういうお姉さんは。ヒリユウんところの、タコさんの赤ゲシユさんのパイロットじゃないですか」

「オクトパスだ!てか、テメエはあの弾幕娘か!!」

エールの正体に気が付いたカチーナは、これでもかというくらいに威嚇して睨みつける。

「落ち着いて下さい中尉!クロガネには何回か助けてもらってるわけですから!」

「だからって、こいつらを信用すんのかよラッセル!」

「ですが、エアロゲイターに対抗するには今は協力するしか…」

なにやら2人で口論を始めてしまったカチーナとラッセル。

「なんか面白くなってきたねラトちん」

「はあ…。つてラトちん?」

それは自分のことなのか?と問いかけようとすると、別の声がかげられた。

「エール!」

「お、レオナじゃ〜ん!元気だった?」

「ええ。あなたも…元氣そうね」

声をかけてきたのは、コロニー統合軍トロイ工隊の生き残りであるレオナであった。彼女はラトウーニを後ろから抱きしめているエールを見て、相変わらずといった様子で苦笑する。

そんな彼女らの（主にカチーナらの）喧騒につられ、他の者達も集まってきた。

「どつたのレオナちゃん？」

「タスク・シングウジ…」

興味深々といった様子で話しかけてきたタスクを見たたん、レオナがそわそわしだす。

そんな彼女を見たエールの目が怪しく輝いたように見えて、ラトウーニは不穏な気配を感じた。

「ほう」

「？」

「ほうほうほう」

ニタニタと笑いながらレオナの肩に腕を回すエール。その不気味さに冷や汗が出始めるレオナ。

「な、何よエール…」

「Oh, yes!」

「え、何この人？」

やたらハイテンションエールに、不審者を見る目を向けるタスク。

「少年！」

「え、はい!？」

突然タスクの肩をガツチリと掴んで絡みだすエール。だが、その目は真剣そのものであった。

そんな彼女の目を見たタスクは、無意識に背筋を正してしまう。

「レオナは料理は非常に残念である。でも、それ以外は文句のつけようはない。大事にしたまえ！」

「は、はあ……」

「エール?!?!」

まさかの暴露に、レオナが慌ててエールの肩を掴む。

タスクはエールのテンションに着いていけず、目が点になっていた。

「あなた何を!？」

「友の青春を応援して何が悪いかあああああ!!!」

「もう少しやり方があるでしょう!?!じゃなくて!か、彼とはそういうことではなくって

よ!!」

肩を激しく揺すりながら捲し立てるレオナ。普段の彼女ではまず見せることのない姿であろう。エールという女性の恐ろしさの一端を垣間見たラトウーニであった。

「で、結局何しに来たんだお前は？」

カチーナが腕を組みながら、疑わしそうに睨みつけてくるも。意に介した様子もなく、ラトウーニを後ろから抱きしめた状態で、彼女の頭に顎を乗せてくるエール。正直そろそろ離してもらいたい。

「ケンの奴が弟君と話に言っちゃって暇だから、せっかくなんで遊びに来ました」
「イサムと？」

エールの発言に、ラトウーニは一抹の不安を覚える。これまでの行動から敵対することはないだろうが、彼にどのような意図があるのか読み切れないからだ。

ラトウーニの不安を感じ取ったのか、優しく語り掛けるエール。

「だいじよぶだいじよぶ。仲直りしにいったただだから」

「仲直り、ですか？」

「そつ。ようやく決心したみたいねえ、あのツンデレ」

やれやれと溜息を吐くエール。何やら色々と苦勞したようである。

「あの、あなたは彼の…」

「うい？妻です」

「っ、妻?!」

予想外の返答に、思わず目を見開いて素っ頓狂な声をあげてしまうラトウ二。

「Yes!ん?なぜそうなったか知りたい?あれは1億と2千年前:でもなく、4年前に遡って——」

「なんか、勝手に回想に入ろうとしてるツ?!」

「そう。その頃のあたしは清く正しい乙女として——」

なにやらよく分からない芝居口調と、手振り身振りで語りだすエールに、タスクのツッコミが入るも。知ったこつちやないと言わんばかりにスルーされた。

「流された、だと?!」

「無駄よ。ああなつた彼女は簡単には止まらないわ……」

強敵と対峙した時のような戦慄を走らせるタスクに、レオナはヤレヤレといった様子で首を軽く振りながらフオローする。

「そしてあたしとケンハ、世界の中心で愛を叫んであうちー!」

周りの者の反応など気かけず、熱く語り続けていたエールの尻を、いつの間にか背後に立っていたケンが軽く蹴りを入れた。

「お、お尻が…お尻が2つに割れる!!」

「元からだ。まず、貴様に愛を叫んだことなどない。それに貴様に清く正しい乙女時代があったのなら、今すぐに真実の口に手を突っ込んでみせる。そして、噛み千切られる」
ボケかますエールを、冷めきった目で見降ろしながら言葉で責め立てるケン。

「……」

「頬を赤らめるな」

なぜか嬉しそうにしているエールの尻に再び蹴りを入れるケン。蹴られたエールはあふんツと、少なくとも乙女が発すべきでない声を漏らした。

「特務大尉！」

騒ぎを聞きつけてきたリョウトがケンの姿を見つけると、嬉しそうに声をかけた。

「リョウト・ヒカワか。もうお前はDCではないのだから、その呼び方は止めろ」

「ですが、特務大尉にはお世話になりましたし……」

「俺は何もしていない。ただ、ビアンのおツサンから回された面倒ごとを処理しただけだ」

「ビアン総帥が？」

腕を組んで不満そうに話すケンの発言に、引っかかりを覚えるリョウト。

「お前は、そっちにいた方が本領を発揮できるだろうって考えたんだらうよ。ま、正解だったようだ」

リヨウトを見比べるような視線を向けるケン。

「なんやねん。せつかく慕ってくれてんだからもっと可愛がってやれよ、やれよ」

「はいはい。そうだな」

「あしらうなよー!」

エールが背中にもたれかかりながら茶化してくるのを、慣れた様子であしらうケン。

「(エクセ姉より凄い人っているんだなあ…)」

ケンと共にやってきていたイサムは、エールの予想以上のインパクトの強さにある意味関心していた。

「お、弟君じゃん! ひやつほう!!」

「にやあああああ!!」

イサムの存在に気が付いたエールが肉食獣のような目で跳びかかってきたので、思わず可愛らしい悲鳴をあげてしまうイサム。

「シッ!」

「あびや?!」

イサムを庇うように立ちはだかったケンの放った手刀が、エールの頭部に炸裂しビターンと地面に叩きつけられる。

「世話をかけた、ではな」

「あ、うん」

倒れ伏しているエールの片足を掴むと、さも当然のように引きずりながら去っていくケン。

「あく弟君モフモフしてないのにイイイイイイイイ!!」

エールはジタバタとしながらあがくも、その姿は遠ざかっていく。

「なんか。嵐みたいな人だったなあ」

暫く唾然としていた一同だったが、タスクが絞り出すように呟いた言葉に、皆無言で頷くのであった。

第二十五話

南極から伊豆へ帰還したハガネ・ヒリユウ隊は次の作戦へ備えて補給と整備を受けていた。

キヨウスケとブルックリンによって、救出されたエクセレンとクスハは後遺症もなく戦線に復帰し、一同はエアロゲイターとの決戦に備えていた。

伊豆基地 格納庫

「どうだろう状態は？」

「装甲換装はいつも通りですが、サーボモーターがどうにもいけません」

キヨウスケの問いに、整備員が難しい顔で答える。

先の戦闘でエクセレンを取り戻すために無理をした結果、アルトアイゼンは中破してしまったのだ。

「G系アクチュエータとしちゃ、これ以上のトルクは望めないんですが……」

「ないものねだりしても仕方がない、今の仕様で進めてくれ」

DC戦争末期より、キヨウスケの技量に機体が追い付かなくなってきているのだが、現状では改善策がなく妥協せざるを得ないのだ。

「ないものねだりとは、また消極的だこと」

「あなたは……!」

格納庫に現れたのは、ラングレー基地陥落時に行方不明となっていたマリオン・ラドムとリシユウ・トウゴウであった。

マリオンは右足に包帯を巻き、松葉杖を使って歩いており。リシユウは右腕に包帯を巻いているも、以前と変わらず健康そうであった。

「ラドム博士!リシユウ先生!」

「わお!こんな昼間から化けて出たの!」

「失敬なっ!もし死んでも、わたくしわそんなあやふやなものに身をやつつもりはありませんッ!」

足があるか、確かめようとするエクセレンの頭を抑えながら怒鳴るマリオン。

「よくもまあ、わたくしのMK-IIIをここまで使いつぶしてくれましたこと」

アルトアイゼンの様子を一瞥したラドムが、感想を述べる。

「すみません」

「誉めているんです。限界まで性能を引き出したからこそ、次の上を目指せるというものの」

「この難儀な口と性格は、ちよつとやそつと寝付いた程度では直らんかったの」

相変わらずのラドムに、やれやれといった様子を見せるリシュウ。

「先生、その怪我は？」

リシュウの右腕に巻かれた包帯について、キヨウスケが問いかける。

「：グレッグに諭されてな。マリオン達を連れてラングレーから脱出する時の立ち回りでちつとな。その後はクロガネに匿われとったので連絡もできんと不義理をしたな」

「いえ、よく生きていて下さりました。ブリットも喜びます。何より…」

キヨウスケが言い切る前に、ドドドドドと足音が近づいてくる。

「おじいちゃん~~~~~ん!!!」

突進の如き勢いで飛び込んできたイサムを、難なく受け止めるリシュウ。

「よかった、よかったよお…」

「心配をかけたのイサム。許しておくれ」

「うん、いい。また会えたから…」

抱き着きながら胸に顔をうずめ、掠れ声で話すイサムの頭をそつと撫でるリシュウ。

「ラドム博士もよかったよお…」

「あらあら、この子たら」

リシュウから離れると、今度はラドムに抱き着くイサム。そんな彼の頭を、慈愛に満ちた顔で抱きしめるラドム。

「うう…よかったわねえイサム君…」

そんな光景を見て号泣するエクセレンは、キヨウスケがハンカチを差し出すと、鼻をかむ。

「かつかつかつ。まあなお前達に不義理を託びにやらんならまずこやつからじゃの」
リシュウの言葉に合わせるように姿を現したのは、ゼンガー・ゾンボルトであった。

「…隊長」

「俺をまだ隊長と呼ぶか。…再び…お前とこうやつて話すことがあるとはな」

互いに感慨深そうに向き合うキヨウスケとゼンガー。

「トウゴウ顧問やラドム博士まで無事だった。出来過ぎと言えば出来過ぎです」

「だが、俺は一度お前達を裏切った男だ。生き恥を晒すことは覚悟の上だが。今少しの間この星を守る力となることを…」

ゼンガーが深々と頭を下げると、キヨウスケは一步步み寄る。

「…隊長、失礼します」

「む？」

顔を上げたゼンガーの頬に、キヨウスケが拳を叩きつけ鈍い音が響いた。

その衝撃で軽く仰け反ったゼンガーの口から、血が僅かに流れ出る。

「我々が今必要としているのは、この星を護ると悪を絶つただひたすらに愚直な男で

す。過去に迷い弱音を吐く男ではありません。未だに目が覚めないというのなら、覚めるまで叩かせて頂きます」

殴った拳を見せつけるように言うキョウスケに、ゼンガーはフツと笑みを浮かべた。

「そうか……そうだな、その通りだ。これは貸しにしておくぞ」

吹っ切れた様に口元の血を指で拭うゼンガーに、キョウスケは満足そうに頷いた。

「ちよつと貸しつったわよあの人。返せんのかしらアレ？」

「殴った方がダメージでかいって、流石親分と言うべきか……」

拳を痛めているキョウスケを見て、冷や汗を流すエクセレントイサムであった。

伊豆基地 格納庫

ラドムと共に、SRX計画用のブロックに移動したイサムは辺りを見回す。

伊豆の整備員と共に作業をしているマオ社のスタッフが見えた。

「なんか人が増えましたね。あれってマオ社の人かな？」

「ええ、補充物資と共に先程到着したそうです」

そんなことを話していると、見知った顔を見つけたイサムは声をかける。

「サカエ副指令ー！」

「む、イサム君か」

「もしかして、Rシリーズの凍結が解除されてんですか!」

「ああ、レイカー指令の独断だが。次の作戦は、使えるものは全て使わねば活路は拓けんと判断されたのだ。だから、マオ社の協力の元修復作業を行っている」

Rシリーズは北京での戦闘の直後に凍結が言い渡されたため、破損したままの状態で保管されていたのである。

「でも間に合うんですか?」

「問題ない、私もサポートするからな」

「カークさん!」

不安そうなイサムに、ロバートと共にいた男性が声をかける。彼の名はカーク・ハミル。ラドムと共にPT開発第一人者として活躍しているマオ社のスタッフである。

思わぬ再会に喜ぶイサム。

「それでカーク、先程の話だが…」

「ああ、パターンOOCは現状ではリスクが高すぎる封印すべきだろう」

「え、合体できないんですか?」

カークから放たれた言葉に、イサムは衝撃を受けた。

「トロニウム・エンジンのフルドライブ出力が概算でも高すぎる。念動フィールドの補正を入れても、ゾル・オリハルコニウムの装甲が保った所で関節サーボモーターが負荷

に耐えられん」

「そんな…」

説明を受けたロバートとイサムが落胆していると、成り行きを見ていたラドムがやれやれといった様子で溜息をついた。

「みつともない有様ですこと。得体のしれない技術にほいほい興味本位でとびつくからそういう目にあうんです」

「ラドム博士!?!生きていいたんですか!」

ラドムの存在に気がついたイサム以外の失礼な反応に、どいつもこいつもと言いたそうな顔で端末を見せつけるラドム。

「∴MK―Ⅲとレオーネ用に改良した新型サーボモーターです。今クロガネから搬出させていますが、念のため多少多めに製造させてあります」

「クロガネから? 行方不明の間にこれ造ってたんですか」

「歩くのには難儀しましたが、頭を使う方は支障なかったものですから」

ふん、と鼻を鳴らしながら包帯が巻かれた右足を見せるラドム。

「こんなこともあるうかと、PT系共通規格のパーツです。これならRシリーズの要求スペックにも十二分応えられる筈です。あなた達がどうしても言うのなら、分けてさしあげないことはありません」

「マリー……」

カークの呼び方にムツとするラドム。

「あなたにマリーと呼ばれる理由はもうない筈ですわよ！この件はあくまでついでの話です！さあ、おっしゃいなさい助けて欲しいと！」

「あれが『元夫婦』だってんですから、人間には無限の可能性があるなあ……」

2人のやり取りを見たロバートが、しみじみとした様子で作業に入り。イサムは仲良しだなあと、微笑ましく見ているのだった。

クロガネ 格納庫

伊豆基地に秘密裏に駐留しているクロガネの格納庫にて、ケン自身は自身の機体を見上げながら考えに耽っていた。

そんな彼に歩み寄る人物がいた。

「この機体、親父が考えたんだろ？いかにも好きそうなデザインだ」

「リユーネ・ゾルダークか」

隣に立ったリユーネに、ケンは視線だけを向けた。

「何か用か？」

「ん、この子があんたに会いたがってさ」

彼女の言葉に合わせるように一匹の大型犬がケンに近寄ると、懐くように足へ頭を擦

りつける。

ラッシーという名のビアン・ゾルダークの愛犬である。

「お前か。もう俺に構うなど言つただらうに」

構つてほしそうな顔をしているラッシーに、眉を顰めるケン。

「あんたのことが気に入つたのさ。気難しいこの子がここまで懐くのは珍しいよ。それと礼を言いたくてさ、エルザム少佐から聞いたよ。親父が死んじまつてから、この子の面倒を見てくれていたつてさ」

「勝手に寄つて来るから、仕方なく相手してやつただけだ」

ヤレヤレといった様子で視線を逸らすケンだが、まるで照れ隠ししているようでもあつた。

「それで、用はそれだけか？」

「いや、あんたの相方らさ、あんたが親父を守れなかつたことを気にしてゐるつて聞いてね」

「……」

「あたしとしては、別にあんたを責める気はないよ。寧ろ親父のワガママにつき合つてくれて感謝してるよ。だいたい死ぬことになつたのも自業自得だからね。だから、いつまでも引きずることはないんだよ」

リユーネの言葉を受けても、納得した様子のないケン。

「あんたのこともあったが。…あの人は、もう一人の父のような人だった。だから、例えば本人が望んだ結果であったとしてもな…」

「そっか。それなら、あたしとあんたは姉弟つてことになる訳か。ふふ、あたし一人ついで弟か妹が欲しいって思ったこともあったから、悪くないね」

「ム、それは…」

「よし、今度からあたしのは姉つて呼びなよ」

「いや、待て。勝手に話を進めるな」

首に腕を回しながら頭を撫でてくるリユーネに、困惑しながらも口元に笑みを浮かべているケンであった。

伊豆基地 通路

「ん〜と次はどこに行こっかなあ」

考え込んだ様子で歩いているイサム。自覚はないが、どこか落ち着きがないようであった。

「イサム」

「うんにや、ラトどしたの?」

「こつち」

背後から声をかけられて振り返ると、ラトウーニがおり。イサムの手を握ると近くに
ある休憩スペースに連れていき、椅子に並んで座る。

「作戦前で落ち着かないのは分かるけど、休める時に休むことも大事だよ」

「ん〜そうなんだけど。エアロゲイターとの決戦だし、元々ジツとしてるのつて苦手な
んだよねえ」

ラトウーニの言葉に、頬を掻きながら答えるイサム。

「イルム中尉が『あいつは昔からそそっかしい』つて言つてた」

「え、何。昔のことを聞いたの?」

「うん、罰ゲームで女装した時の…「いにやあああああ?!?!?」とか」

笑顔でその時の画像が表示された端末を見せてくるラトウーニに、イサムは悲鳴を上
げながら消そうと端末に手を伸ばすも軽やかに避けられる。

「他にも『色々』貰った」

「…嬉しそうですぞいませぬ」

ホクホクした様子イルムのラトウーニに、破棄することを諦め元凶をとつちめることを決意
するイサム。

「えへへ」

「どうしたの？」

「ん〜やつぱり、ラトとこうしていると落ち着くなつて」

「…うん、私もだよ」

笑顔のイサムに、頬を赤らめながらはにかむラトウーニ。

「…ずっと、こんなに日が続けばいいのにな」

「そうだね。きつと、そうなる日がくるよ。そのためにも、できることをしていこう」

「うん、一緒に頑張ろうね」

イサムの手に自分の手を重ねるラトウーニ。そんな彼女の行動に、嬉しさを感じると手を握るイサム。手から伝わる温もりが心地良かった。

突然のことに驚いたのか。ラトウーニはビクツと体を震わせるも、顔の赤みが増しながらもそつと握り返してくれた。

それからは何も語ることなく、時間の許す限り温もりを感じ合うのであった。

第二十六話

L5宙域に突如出現したエアロゲイターの拠点『ホワイトスター』を攻略すべく、連邦政府ならび軍は作戦名『オペレーションSRW』を発動す。

指令である、ノーマン・スレイ少将が座乗したアルバトロス級グレートアークを旗艦とした艦隊が総攻撃を開始し、これを迎え撃ったバグスの大軍と激突した。

その中で、ハガネ・ヒリユウ隊は左翼前方へ突出し、敵陣の誘因・攪乱を行っていた。
『オラァー!』

レオーネの振るったシシオウブレード改が、バグスを軽々と両断していく。

群れの中心に突撃したレオーネを他のバグスが包囲しようとする、飛来したビームは実弾に叩き落とされていく。

『相変わらず数だけはい多いぜ!』

『でも、人型は見えないわね。様子見かしら?』

次から次へと押し寄せてくるバグスに、ジャーダが辟易していると。ガーネットが疑問に思ったことを口にした。

作戦が開始してから遭遇したのはバグスのみであり、ナイトはおろかソルジャーや

ファットマンといった人型の姿が見られないのだ。

『でも、敵には転移技術があるから。その気になればいつでも好きな場所に戦力を投入できる』

『何であれ、前に進み続けるしかないさ！』

ラトウーニの懸念を吹き飛ばすように。イサムは機体を新たなバグスの群れに突進させ、ブレードで数体を纏めて突き刺すと、そのまま振り回し他の個体諸共なぎ倒す。

『うおっとー！』

新たに現れたバグスが放ったレーザーをレオーネは回避するも、その隙に1体が組み付こうと肉薄してきた。

『T—L—I—N—K—ナツココオ!!』

そのバグスをR—1が念を纏った拳で破壊した。更に、それに続くようにR—2の砲撃と、R—3のミサイルが残りのバグスを撃破していく。

『ありがとうございます、助かりました』

『いいってことよ』

『リュウ、ライ私達はこのままハガネ前衛の敵陣を切り崩すわよ』

『了解です大尉』

『ガーネット、ラト、イサム、俺らも続くぞ！』

S R Xチームと共にハガネ進路上の敵を撃破していくイサムら。

北京での戦いから意識不明で療養していたアヤは本作戦から復帰しており。目が覚めた当初は、イングラムの離反を認められず錯乱してしまうも、リユウセイとライデイス、他の仲間らの励ましによつて立ち直り、イングラムと決着を着けるべく強い決意と共にこの戦いに挑んでいた。そして、それは他の2人も同様であり、立ちほだかるバグスの群れをもつともせず蹴散らしていく。

『アイアン2より各機へ、これよりフェーズ2へ移行する！射線上より退避せよ！』
機動兵器による露払いである、フェーズ2が完了したことを告げるエイタからの通信に、各機が回避機動に入っていく。

本隊から発射される核ミサイルがホワイトスターに殺到していき、眩い閃光に包まれた。

『やったか!?——なッ!?』

閃光が収まると、幕のような輝きに包まれた無傷のホワイトスターが姿を現す。

『無傷だど!?!』

『あんたが余計なこと言うからでしょジャーダ!?!』

『俺のせいとかガーネット!?!』

『そんなこと言ってる場合じゃないですよ！ラト、あれつて…』

『うん、ホワイトスターを覆っているのは、念動フィールドよ』

『でも、直径40kmの念動フィールドなんて…』

驚嘆の声を漏らすアヤ。念動力者である彼女には、それがどれだけ途轍もないことか理解してしまえるのだろうか。

『ツ！艦隊後方より転移反応！』

『転移戦術に移行したか！』

ラトウーニに警告に、ジャーダが思わず舌打ちする。

次々と出現するソルジャーとファットマンが、背後から艦隊へと襲い掛かり。人型の攻撃により被弾した本隊所属の機体らに、バグスが取りついていく。

『ヒッ！た、助け…！』

コックピットをこじ開けたバグスが、パイロット拉致していく。

『くそっ！サイフラッシュで纏めて蹴散らすぞ！』

『ダメニヤ！敵は味方機に取りついてニヤ、サイフラッシュで虫共を攻撃したら、味方機が爆発に巻き込まれるニヤ！』

悪化していく戦況に、誰もが焦燥感を募らせる中。ダメ出しと言わんばかりにフラワー——敵艦が現れ主力艦隊側面へと迫っていく。

『おい、アレってヤバーんじゃねーか!?どうするッ追うか!?』

『貴様らの役目を忘れるなドアホウ共』

焦れるリユウセイの言葉を遮るように、アリオールを駆るケンがシシオウブレードでエアロゲイターの機体を斬り伏せていく。

他にも、ゼンガーのグルンガスト零式が斬艦刀でフラワーを一刀で両断し、エールのデイバイソンが一斉射でバグスらを吹き飛ばす。それに続くようにクロガネを中心としたDC、統合軍残党部隊が連邦軍に加勢していく。

『アイアン2、ならびにドラゴン2所属の機動部隊は母艦へ帰投せよッ。本遊撃艦隊はこれよりフェイズ4を実行する！』

本来であればフェイズ3——艦隊機動部隊がホワイトスターに接近し、内部に核を撃ち込む予定だったが、フィールドによって阻まれ実行不可能となり、最終手段であるフェイズ4——少数精鋭による敵中枢への電撃戦へ移行したのだ。

『進め、貴様らに許されたのは前進のみだ』

『でも…』

ケンの言葉に、躊躇いを見せるイサム。こうしている間にも、友軍が拉致されておりそれを見過ごせないのだ。

『俺達に構わず行けッ！ハガネ、ヒリユウ！』

『こうなったら、あんたらが頼りだ！行ってくれ！』

躊躇うイサムらの背を押すように、正規兵らが果敢に敵部隊に立ち向かっていく。中には敵機を巻き込んで自爆していく者もいた。

『ッ！』

『行くぞイサム。彼らの想いを無駄にするな』

『…はいッ』

ライディースの言葉に意を決したように答えると、他の機体と共にハガネに帰還するイサム。

『でも、突撃するにしたって、どうやってフィールドを破るんだろう？』

『テストラドライブ搭載艦で並列陣形を構成して、収束されたブレイクフィールドを先頭のクロガネの艦首回転衝角で旋穿尖スパイラル・エネルギー・フィールドに変換、敵要塞のフィールドを貫通させるみたい』

『艦隊そのものをドリルにするって感じか、ん？なんか覚えがあるような…』

『オペレーション・ブレイクアウトでお前らがコロニー統合軍に使った戦法の応用だ。エルザム少佐が提案した』

イサムの疑問に、ラトウーニとケンが答える。

『やられた側が言うのも何か因果やね、ダーリン』

『——ハッ』

『うわ、こいつ人の愛情表現を全力で鼻で嗤いやがった!』

『使えるものは使う、それだけだ』

『しかも完全に無視しやがった! ふええええん、ラトちんウチの彼氏が酷いよ!』

『えつと、頑張つて下さい』

『でも、そんなところが好き』

『ええ…』

『面白い人だなあ』

そんなやり取りをしていると、クロガネ船体に強い衝撃が走つたのだった。

『ふん、またあの黒いのか。2度も通用すると思つてんのかい原始人め。アウレフ!』

『了解、メタルジェノサイダー起動』

ヴァイクルに乗つたアタッド・シャムランの指示に、イングラムはR—GUNを変形させチャージを始める。

その砲口はホワイトスターに突撃している遊撃艦隊に向けられた。

『デットエンド・シユートツ』

チャージが終わると同時に放たれた高出力ビームは、艦隊を覆うブレイクフィールド

ドごとクロガネ右舷を貫いた。

『いい仕事をしたねアウレフ。誉めてやるさね。さあ、後は足を止めた奴らをいたぶつて——ん?』

失速し艦列から離脱していくクロガネを見て。目論見通りにいったとほくそ笑むアタツドの意に反し、遊撃艦隊は止まることなくハガネ、ヒリュウのみでホワイトスターを覆うフィールドへと激突した。

『足掻きやがって。アウレフ!』

『メタルジェノサイダーの次砲発射には時間がかかる』

冷却中のR—GUNを見て、アタツドは舌打ちする。

『使えないねえ。それなら、ガルイン!』

『リヨウカイ』

本隊と交戦していたゲシユペンスト・タイプSが、標的を遊撃艦隊へ変更し接近していく。

そんなタイプSへと複数のビームが飛来し機動が阻害される。

『カーウアイ隊長、あなたを縛る呪いは我々が断ち切る』

タイプSの前に、ギリアムら元教導隊の面々が立ちはだかった。

南極での交戦記録の分析と、エクセレンとクスハの事例から。タイプSに搭乗してい

るのは特殊戦技教導隊の隊長であるカーウアイ・ラウ大佐であることが判明したので。

だが、彼女らと違い拉致されて年時が経ち過ぎていること。そして何より、相手の技量からして救出することは不可能との見解で一致された。

ならばせめて、自分達の手で敬愛するかつての上官を解放すべく、彼らは戦いを挑むのであった。

『ステージの真ん中でフリーズとかッ。ホ！脳みそバグってんじゃねえのかッアハハハハハッ！』

ゲーザ・ハガナーが駆るヴァイクルが率いる部隊が、ガルインとは別のルートで遊撃艦隊へと迫っていた。

それを迎撃すべく、レオーネら機動部隊が出撃していく。

『いけエー！』

レオーネが投擲したブレードを80mはある巨体にも関わらず、俊敏な機動で回避するヴァイクル。

『ホッ！甘えてのオー！』

お返しと言わんばかりに、ヴァイクルが放ったビーム砲を回避するとブーメランの要

領で戻ってきたブレードを手にし斬りかかるレオーネ。

だが、小型砲台から放たれる無数のビームに阻まれてしまう。

『加勢するよ弟君！』

そこにダイバイソンが一斉射で援護に入り、迫る弾丸やビームを回避しながら小型砲台でミサイルを撃ち落としていくヴァイクル。

その隙にビルドラプターが、ハイパー・ビームライフルで背部の推進系を狙撃してダメージを与える。

『こんのツ雑魚共がさっさと落ちグお!!』

『邪魔だデカブツ』

被弾の衝撃で動きの鈍ったヴァイクルに、肉薄したアリオールが顎を蹴り上げると。ブースターを全開まで吹かし両手を水平に広げ独楽のように回転しながら、蛇が這いまわるように斬り刻んでいく。

更にレオーネが追撃に入り、放たれた斬撃を回避しようとするも、鳥の翼を模したブースターが片方切断された。

『グオオオオおおおお!!?この俺が、ゲーザ・ハガナー様が猿なんかには押されるだどオ!!』
『チツ無駄に頑丈だな』

流石に堪えたのか、一度距離を取るヴァイクル。各部がショートし火花を散らしてい

るも、未だ健在な姿に鬱陶しそうに舌打ちするケン。

『リユウ！ライ！やるわよッ。機動エリア確保！』

『おうよ、俺達の力見せてやろうぜ！』

『了解！ハイゾルランチャー、シューッ！』

イサムらがゲージを抑えている間に。他の敵機を蹴散らし、Rシリーズが加速している。

『パターンO・O・Cプロテクト解除ッ。T—LINKフルコンタクト！』

『トロニウム・エンジン、フルドライブ！』

『念動フィールドON！各機変形開始！』

『行くぜッ、ヴァリアブル・フーメーション！』

Rシリーズが変形を開始し、合体を始めていく。

『舐めてんのかッ。全部見えてるっての！』

それを見たゲージが、被弾を無視しながら強引にRシリーズに接近し。放たれたビーム砲をフィールドで逸らし本体への被弾は防ぐが、脚部となるR—3のプラスチックが弾き飛ばされてしまった。

『しまった、R—3のプラスチックが！』

『振り切れ！宙間戦闘なら脚はなくても何とかなる！』

動揺するリュウセイをライディースがフォローしつつ、不完全ながら合体は継続される。

『潰れるよおっ！プチっとツ!!』

リュウセイの声に激しい頭痛に見舞われたゲーザは、錯乱気味に小型砲台と合わせビームを乱射していると。ヴァイスリッターによって砲台が次々と撃ち落とされていく。

『ホ!?!』

『合体中は手出し無用のお約束よ、学校で習わなかった?』

『いい加減大人しくしてろこの鳥イ!』

追いついてきたレオーネに蹴り飛ばされるヴァイクル。その間にR-3のプラスパーツを手にしたアルトアイゼンが駆け付ける。

『キョウスケ中尉!』

『初見せで半欠けでは格好がつかん。見せつけてやれSRXチーム』

プラスパーツが装着され、合体を完了させたSRXへ敵機の大軍が迫る。

放たれた攻撃を回避しつつフィールドで防ぎながら、全ての射撃武装を開放していくSRX。

『S・R・Xツフルバーストツ!!』

放たれたビームとミサイルが、眼前一面に広がる敵機を飲み込み吹き飛ばしていく。

『天下無敵のスーパードロ봇！SRXここに見参!!』

大軍の背後に控えていたR—G A N——イングラムと対峙するSRXチーム。

『人類の、俺達の力を見せてやる!!』

ついに人類の英知の結晶たる巨人が誕生し、戦いは次なるステージへと進んでいくのであった。

第二十七話

『潰れる、潰れる虫ケラ共オ、ヒヤハハハハア!!』

正気とは思えない様子でビームを乱射してくるゲーザ。その攻撃は味方すら巻き込んでいた。

『お前らは、俺の経験値になるためだけに生まれたモブキャラなんだよオ!』

『ツこいつ無差別に!それにこの言動って…』

『テンザン・ナカジマだろうな。エアロゲイターの奴ら、ジュネーブでの戦いの裏でも暗躍していたんだろう』

DC戦争後、テンザン・ナカジマはアードラー・コツホの元に身を寄せており。ジュネーブでの戦いではヴァルシオン改を駆り参戦していたのだ。

結果として、ゲーム・システムの負荷に耐えられず精神が破壊され、最後はリュウセイの手によって撃墜されることとなった。

『あれでは最早救いようもないな。最もそんな気はないが』

アリオールが小型砲台を切断すると、弾幕に切れ目が生じ。すかさずヴァイクル本体へ肉薄すると、ビーム砲へブレードを突き刺し離脱す。

『ホッ!?』

ビーム砲が爆発しその衝撃で動きが鈍ったところに、ビルドラプターとデイバイソンが火器で追撃をかけたいく。

度重なるダメージに限界が近いのか、各部から小規模の爆発を繰り返すヴァイクル。全ての小型砲台も落とされ、満身創痍であるのも関わらずゲーザは戦いを止めようとはしない。

『楽しい、楽しいなアこのゲームは！ゲームの中だけは！アヒヤツアヒヤハハハハハハハ!!』

剥き出しになったコックピットから見えるゲーザの体は、至る所から金属のフレームが剥き出しになっており、最早人の身ではないことを告げていた。

『…………ツ！』

「おい、まさか助けようなんて言うなよ。奴の場合は自業自得なんだぞ」

そんなゲーザの姿に、思わず攻撃の手を止めてしまうイサムへ、ケンが釘を刺すように話す。

『確かに碌でもない奴だったけど。こんな、こんな人形みたいに扱われて言い訳ないだろッ！ふざけるな、エアロゲイターア!!』

目の前の理不尽に憤慨するイサム。そんな彼の感情に反応するように、レオーネの出力が高まる。

『プチプチプチプチップチィィィ!』

『オオオオオオ!』

突進してくるヴァイクルへ向け、ブレードを構えながら突撃するレオーネ。

『チエストオオオオオ!!』

交差する間に振るわれるブレードは、袈裟切りにヴァイクルを斬り裂いた。

『ひ、ヒは…リセットだ。りせつと、そうさ…俺様は、ム…てき——』

切断面から爆発が起ると。それに続くように各部から小規模の爆発が続き、最後は機体全体を覆う程の大爆発がゲージごと飲み込んでいくのであった。

『……』

『イサム、大丈夫?』

言いようのないやるせなさに、歯噛みするイサム。そんな彼に寄り添うように、ラトウーニは機体を寄せる。

『ありがとう大丈夫だよ。行こう皆、こんな戦い終わらせるんだッ』

『うん、行こう』

『立ち止まる気など元よりない』

『にしし、さくって何が出てくるかねえ』

決意を新たにイサムはラトウーニらと共に、ハガネとヒリユウが切り開いた進入口よりホワイトスター内部へ突入するのであった。

ホワイトスター内部は閑散としており、迎撃を受けるでもなく一同は隔壁を破壊しながら中心部へと進んでいき、いくつかの障壁を破壊すると、開けた空間へと出た。

『何だこゝ…?』

『中枢エリアではないようだが』

『大気構成は地球と完全に一致している…』

イサムとケンは訝しげに周囲を観察し、ラトウーニが分析結果に眉をひそめる。

『なくんか牧場って感じがしないでもないわねえ』

エールがそんな感想を漏らしていると、別の隔壁がいくつか吹き飛び他の面々が姿を現す。

「おめでとう。地球人種の中でも選ばれた者達よ」

突如響いた声に視線を辿ると、空間の中心部にある丘。その上に玉座のような椅子に腰かけた、イサムらと同年代の少女が一同を見下ろしていた。

「お前達はクラス・ギボルたる資格を得た。この園はお前達のための檻である。そのヒトガタから降り、来るべき時まで寛げ。心安らに我が踵かか下に跪かくがよい」

尊大な態度で語る少女に、一同は困惑や疑念の目を向ける。

『女の、子？』

『随分プリティーな妖精さんだこと』

『何であれ、敵なら潰せば一緒だ』

『君がエアロゲイターの統率者なのか？』

問いかけるイサムに、少女はまるでペットを愛でるかのように視線を向ける。

「いかにも。我が名はレビ・トラー。この自動惑星ネビーイームを統べる者である」

『…で、手前らは降伏しろと、そうぬかしやがるか』

そんな少女——レビの態度にマサキが不快感を隠さず問う。

「フ…。お前達の性能を評価し、我らの尖兵として闘う場を与えてやろうというのだ」

『性能…』

「そうだ、我らと言葉を交わらせる程度には発達した知性を持ちながら、蟲毒の如くたった一つの惑星上で飽くことなく殺し合い争い発展させてきた旺盛な繁殖能力と闘争本

能。そして、我らが与えたお前達には本来オーバーテクノロジーである技術の種を闘争のためとあらば解析し応用を可能とする異常な順応性」

『技術の種……メテオ3か……』

レビの言葉に、ラトウーニは眉を潜ませライディースは思い当たる節を連想する。

「先行収獲したクラス・エヴェッドのサンプルは、そのデータをこの自動惑星ネビーイムの中枢システムジュデッカに記録された後自立兵器用サーキットとして加工されるが。このネビーイムへの攻略戦という試練をくぐり抜け、この場この私の面前に辿り着いたお前達は、クラス・ギボルとしてその姿のまま我らに仕えることが赦される歓べ」

『地球を狙ったのは侵略のためなんかじゃない、私達を家畜として狩るため……』

『うわ、牧場って表現当たっちゃったよ、適当に言ったのに』

完全に自分達を人として見ていない言葉に、レオナが怒りさえ感じ、エールは自分の勘が当たったことに舌打ちした。

『最初からこの戦争はお前達の手の上だった、そう言いたいのかッ』

「事実だ」

『よもやこの人工惑星が全構成戦力という訳ではあるまい。お前達の属する勢力の規模は……』

「答える必要はない」

『あらん、ヘッドハンティングしようっていうなら、説明責任があるんじゃない？そもそも私達を使つて誰と戦おうつてのかしら』

「答える必要はない」

「（…何だ？答える気がないのか、答え自体を持っていないのか…？）」

タスク、キョウスケ、エクセレンの問いに答えていくレビだが、途中からこれまでの尊大ない態度でなく、まるで機械のように決められたパターンに従っているかのように淡々と語る様子に。イルムは違和感を覚える。

「貴様達に許されるのは恭順の言葉のみだ。さあ答えよ、我らの軍門に降りその力を我らに捧げるか」

『断るッ。我らはこの星を護り悪を絶つ剣。貴様らに屈する膝は持たぬ！』

レビの勧告をゼンガーが問答無用に両断する。そして、それはこの場に皆の気持ちを代弁するものである。

「フツ…この期に及んでもまだ己らを篩ふるいにかけることを選ぶか。勤勉なことだ、よからう」

そういつてレビが立ち上がりローブのような衣服を脱ぎ捨てると、その下からパイロットスーツが露わになる。

それと同時に背後の隔壁が開いていき、R—GUN、タイプS、アタツドのヴァイクル、そしてそれらの背後に上半身が4本腕の人型で、下半身が大蛇を思わせる異形の特機クラスの機体が姿を現す。

「この時を以て最終審判と成す。なるべく多く生き残ってほしいものだな」

異形の特機が4本の掌からビームを放ち、一同はそれを回避するも、着弾の衝撃で外部まで押し出されてしまう。

『何、だこいつはッ!?!』

『一瞬で追い出されたッ』

『『ジユデツカ』この自動惑星ネビーイームーの中枢機関である』

振るわれた腕をレオーネは回避するも、その隙を突いてタイプSがプラズマ・スライサーを突き出してきた。

『させんッ!ブースト・ナックル!』

零式が撃ち出した左腕を、タイプSは攻撃を中断して回避すると、胸部の装甲を展開させブラスターキャノンで反撃しようとする。

『フンッ!』

頭上からカイの駆るM型ゲシュペンストが、ステークを起動させた左腕で殴りかかる。

タイプSは裏拳で軌道を変えて逸らすと、プラズマ・スライサーを振り下ろし、カイ機も片手で軌道を変えて逸らしてその勢いを利用し機体を横回転させながら裏拳を放ち、タイプSはタックルで吹き飛ばして防ぐ。

『このッー！』

そこにレオーネが蹴りを放ち、タイプSは片腕で受け止めるも、態勢が崩れていたこともあり押し出される。

『射抜け、トロンベー！』

ヒュッケバインMk-III・トロンベがフォトン・ライフルで追撃を加え、両腕を交差させて耐えるタイプS。

『ぬうんッッ』

背後から零式が斬艦刀で斬りかかり、迎え撃ったプラズマ・スライサーと交差する。

『！』

零式の背後に隠れていたギリウムが駆るゲシュペンストMk-III・タイプRが迫る。この時機械的に淡々と動いていたタイプSに、初めて動揺らしき人間らしさが見えた。

タイプSはプラズマカッターで迎撃し、タイプRは身を屈めて避け、光刃は手にしていたライフルのみを切断するに留まる。

そして、タイプRは左手に保持していたプラズマカッターをタイプSの胸部へと突き立てた。

だが、寸前でタイプSは上半身を逸らし、タイプRの一撃は胸部を掠れ右肩部に刺さった。

『ッ！浅いか!?!』

タイプRを殴り飛ばしたタイプSは、ブラスタークャノン放とうとし、そうはさせまいとレオーネがブレードを構えながら突進する。

そんなレオーネにタイプSは標的を変え、ブラスタークャノンを放った。

『ぐアッ!?!』

G・テリトリー展開し受け止めるも、勢いに押されていくレオーネ。

『負け、るかアアアア!』

出力を上げて徐々に押し込んでいくレオーネ。それに対抗しようとタイプSも出力を上げようとすると、発射口がスパークしビームの勢いが弱まっていく。先程のタイプRの一撃がエネルギー伝達系にダメージを与えていたのだ。

『！そっこだアアアアアア!?!』

好機と捉えたイサムは、機体を加速させてビームの奔流を突き進んでいき、ブレードを発射口へと突き刺すと、タイプSの上半身が爆発を起こし吹き飛ばす。

『…機体、大破…。戦闘、続行…不可能…。——手間、ヲカケタ…皆…』
『！大佐、意識を…!?』

辛うじてコックピットは残っており、発せられたガルインの言葉にギリアムが反応する。

露出したコックピットから見えるガルイン——カーウアイの姿は頭部と胴体以外は人としての姿を残しておらず、埋め込むようにして納められており、完全に機体を動かす部品として扱われていた。

『アリガ、トウ少年…コレデ、私ハ…眠ル、コトガ…デキ、ル』
『カーウアイ大佐ッ!』

スパークが強まり、今にも機体が爆発しそうになり、イサムは彼をコックピットから引き出そうとすると、タイプSは残った片腕でレオーネを突き放す。

『ソ…ノ勇氣、アル…心ヲ、忘レズ…アノ、青キ…母、星ヲ…マモツテ、クレ——』

その言葉を残し、カーウアイは機体の爆発に飲み込まれていったのだった。イサムには、彼が最後に穏やかな笑みを受かべていたように見えた。

『く…う…うう…!』

『カ、カーウアイ大佐!!』

『やはり…この方法しかなかった…なかったが…!』

『…大義のための犠牲…受け入れるしかないのか…！我が妻の時と同じように…
！！』

敬愛する上官の死に、元教導隊の面々は覚悟していたとはいえ、沈痛な面持ちとなる。

『カーウアイ大佐、あなたの分まで戦います。どうか安らかに…』

イサムは戦士の安息を願い黙祷を捧げるのであった。

第二十八話

『イングラムムッ』

イングラムと交戦しているSRXチームは、R—GUNを捉えようとするも、合体したことで大型になった機体を上手く操れず翻弄される。

『鈍いぞリユウセイ。合体したSRXの機動はR—1とは別物だと教えた筈だがな』

両手に持った、実弾とビームを同時に発射できるツイン・マグナライフルで牽制するR—GUN。

『少佐ッ私はあなたを…あなたの影から脱してみせます!』

『フ…できるのかアヤ、お前に。妹の顔さえ忘れたお前に?』

『え…』

予想外の言葉にアヤに動揺が走る。その間に、バグスの群れに取りつかれ動きを封じられてしまう。

『いい子だアウレフ。さあ、そのまま料理してやるよ』

ヴァイクルが小型砲台からビームを浴びせていき、SRXは念動フィールドで防ぐ。

『いかん、このままでは大尉の負担が』

『ライ！これだ！攻撃系のT—LINKナーヴを俺に！』

右腕に張り付いていたバグスを強引に振り払うと、手の平に念の球体を生成していく。

『ドミニオン・ボオオル！』

放たれた球体は、進路上のバグスを吹き飛ばしながらヴァイクルへ向かっていくも、ヴァイクルが放つビームに阻まれ届かない。

『鳥野郎には届かねえかッ』

『念動兵装？結界兵器か。うッ?!』

突如アタツドの脳裏に、見覚えのない場所、人の記憶が浮かび上がってくる。知らない筈なのに、それらがどこか懐かしく感じるのであった。

『フツ…。T—LINKシステムに引き寄せられたかアタツド』

アタツドに起きた異変に、心当たりのある様子のイングラム。そんな彼の背後からバグスの塊が迫って来た。

『クレイモア』

塊が弾け飛ぶとベアリング弾が散布され、R—GUNの動きを制限する。そして、塊

の内部からアルトアイゼンが襲い掛かる。

『初手は譲った。後は早い者勝ちだリユウセイ』

リボルビング・ステークを繰り出すも、紙一重で躲される。

『フ…。特異能力を持たない個体としては破格の性能だ。だがまだ足りんな。あの女を生きたまま取り戻したことで腑抜けたか？キョウスケ・ナンブ』

アルトアイゼンの加速力を活かさないショートレンジを保ちながら、ライフルを浴びせていく。

『やはり死体にしなければ、あの女はお前の起爆剤には『黙れ』』

言葉を遮えぎりながら、再びステークを繰り出すキョウスケ。

『フ…。』

隠しきれぬ激情を見せるキョウスケを、嘲笑いながら回避するイングラム。だが、ステークの陰から迫る弾丸がR—GUNの頭部アンテナを抉り取る。

弾道の先には、アルトアイゼンの背後に隠れていたヴァイスリッターが、オクスタン・ランチャーの銃口を向けていた。

『はあい♪』

狙いを定めるエクセレンは、口調こそ普段のものだが、その目はどこまでも冷え切っていたのだった。

『動けるかイサム?』

『…無理させすぎちゃいましたから、暫く冷却させてあげないと』

ゼンガールの問いに、機体のコンディションを確認しながら答えるイサム。

これまでの戦闘で負荷がかかり過ぎたため、リミッターが作動しレオーネはセーフティモードに戻ってしまっていた。

『今は時間が惜しいですから、俺に構わず皆の所に行って下さい』

『いや、敵地に1人にはしておけん。せめて誰か残るべきだ』

『それなら私が引き受けますカイ少佐』

カイの言葉に、合流してきたビルトシュバインのパイロットである女性が答える。

『君は確かマオ社の…』

『ヴィレッタ・バディムです。SRXチームらの援護に向かう途中でした。できれば、イサム君もそちらに回ってもらわうべきかと…』

『わかった、俺達は敵司令官撃破に向かう。イサムはそれで構わないか?』

『はい、大丈夫ですカイ少佐』

ヴィレッタからの提案に賛同するイサム。イングラムとの決着を望む彼からしても、

断る理由はなかった。

ホワイトスター表面をなぞるように巨体を這わせるジユデツカは、結晶体を生成させる。

『第二地獄アンティラノ』

結晶体が弾けると、破片が雨のように対峙する一同に襲い掛かる。

『チッ！』

迫る破片をブレードで斬り払うアリオール。他の機体も回避に専念して耐える。

『第一地獄カイーナ』

次に、サソリのような形態に変形したジユデツカが前足を振り上げる。

その下には、元トロイエ隊所属でレオナと共に加わったシャマルのガリーオンがいた。

『！シャマル回避ッ！』

エールが叫ぶも、破片の回避に意識を取られていたシャマルは反応が遅れてしまい、振り下ろされた足に無残に踏み潰されてしまった。

『シャマル！』

『デメエー！』

友とも呼べる付き合いの長い同僚の死に、激怒したレオナとエールが、機体にフィールドを展開させて突貫する。

『クソツたれ！』

『シッ！』

タスクとケンもそれに続きシールドとブレードで仕掛けるも、ジユデツカの周囲に展開されたフィールドに弾き返されてしまう。

「(念動フィールドか。ホワイトスターに張られていたのはこいつのか…)」

ジユデツカからの攻撃を回避しながら、得られたデータを分析するケン。そして、あるファイルを開いた。

ファイルに納められた画像には、レビと同じ顔をした少女が映し出された。

「(特脳研被験者…五番マイ・コバヤシ。ピアンのおっさんの読みは当たり、だな)」
これまで得られた事象から、予想が確信に変わるのだった。

『はッ、何だい今のは…』

『…今視えたのは何だ…誰の記憶だ』

突如触れた何者かの記憶に、困惑するアタツドとリユウセイ。

『私は今の記憶を、あなたを知ってる…。あなたはジェニファー・フォンダ地球人よ』
『嘘だ…あたしが、下等な地球人な筈が…！』

アヤの言葉に激しく狼狽するアタツド。自分と言う存在が足元から崩れていきそうな恐怖に、今までの威圧的な姿はなくなっていた。

『思い出して特脳研で一緒に居た頃のことを。私や私の妹のマイと一緒に…妹…？私…顔…』

妹の顔を思い出そうとして、激しい頭痛に襲われるアヤ。

『黙れッ！まやかすなアツ！』

錯乱したようにビームを乱射するアタツド。アヤが不調に陥り、満足に動けないSRXは辛うじて防御することしかできない。

すると、ブーメランのように飛来したシシオウブレード改が、小型砲台を斬り裂いていった。

『どっせいいー！』

『グあ？！』

レオーネの加速を乗せた蹴りを受け吹き飛ばされるヴァイクル。その先には、ビルトシユバインがサークル・ザンバーを構えて待ち受けていた。

『あなたのアレンジ・ペルソナは、もう引き剥がすことができない…。せめて苦しまないように一瞬で送ってあげる』

『ヴェート・バルシエムツ!』

『デッド・エンド・スラッシュ』

振るわれた光輪がコックピットのある頭部を切断し、巻き起こった爆発はアタッドを飲み込んでいった。その表情は事実を受け入れられず、憔悴しきったものであった。

『あんたは…』

『リュウセイ、今の内に機体に強制冷却をかけなさい。ライデイスはアヤのバイタルチェックを。イサムは私と周囲の警戒を。手遅れになる前に』

リュウセイの問いに答えることなく、的確に指示を飛ばすヴィレッタ。何かを知っているのか、どこか焦りのような緊迫さを感じられた。

『さつき聞いた、あの人が地球人だって言うのは本当なんですかりユウセイさん?』

『ああ、間違いないと思う。どうなってるんだ一体?』

『…これまで倒したエアロゲイターの主要な人物は皆元は地球人でした。もしあのレビって子もそうなら、ホワイトスターにいる人間はイングラム以外は操られていただけってことになるのか?』

「(そうではない、彼もまたジユデッカの枷の犠牲者…。それを解くためにはあなた達の

力が必要になる。だから私は……」

イサムの言葉を心の内で否定するヴィレッタ。その目には、悲哀と確かな決意が宿っていた。

3連マシンキャノンで牽制しつつ接近しようとするアルトアイゼンを、後退しながらライフルで牽制するR—GUN。

『お前は潰す』

『フ……ハハッ。いいぞ、お前等は予想以上の高性能サンプルだ』

キョウスケ、エクセレンの技量にイングラムは歓喜するように笑う。

『わお、おだてても何もでないわよ少佐？』

エクセレンはオクスタン・ランチャーのEモードで狙い撃ち、R—GUNの機動を制限する。

『こないだの一軒じゃ私、そりやお死んじやうぐらい恥ずかしい思いしたのよ？だ・か・ら代わりに少佐が死んでね』

すかさずWモードを起動させると、実弾とビームを連射していく。

的確に回避先を潰していき、片足に被弾させ吹き飛ばし動きを止める。

そして、アルトアイゼンが残る脚を掴み両肩のクレイモアを展開させる。
『一瞬で死ねるとは思っなよ』

撃ち出されたベアリング弾が、R—GUNのボディを削り取っていく。

『うッ!?!』

その瞬間、イングラムの脳内に衝撃は走る。

——枷を解くんだ。奴に力を利用されるぞ

誰かは分からないが、どこか聞き覚えのある男の声が響く。

だが、そのことを考える間もなく、ステークとランチャーがR—GUNに突き立てられる。

『終われイングラム・プリスケン』

『バイバイ少佐』

ステークの連打とBモードの連射が叩きこまれ、R—GUNが粉碎されていく。

『フ：ハハハハハッ』

突如謎の力によってR—GUNから引き剥がされる両機。

R—GUNの周りには、まるで魔法陣のような奇妙な紋様が展開されており。コック

ピットから出ているイングラムが不敵な笑みを浮かべていた。

「お前達の兵器としての成長に敬意を表し。その魂に枷をかける好敵手を用意してやろう」

イングラムが手を掲げると。魔法陣がR—GUNを包み込んでいき、卵のような形状を形作っていく。

そんな異常事態を訝しみながらも、キョウスケは攻撃を加えようと構える。

『待て！今あの『門』に近づくな！何が起ころるか分からんぞ！』

だが、駆け付けてきたギリウムによって制止される。彼の声には驚愕と動揺の色が含まれていた。

「(間違いない、あれはクロスゲート！ならば奴も俺と同じ、並行世界の放浪者だということか!?)」

魔法陣に亀裂が入ると、中から『何か』が這い出して来る。

それは50mはあろうサイズに各部が禍々しきを感じる異形の人型であり、その頭部にはイングラムとR—GUNが納められていた。

『ちよッ、でつかくなっちゃった!?!成長期ってレベルじゃないでしょ!?!』

「(R—GUNに異界の存在を憑依、変貌させたのかイングラム・プリスケン)」

予想外の事態に驚愕するエクセレンと、この事態に心当たりがある様子のギリウム。

『この機体の名はR—GUNリヴァーレ。今からお前達を…『喋るな』』

イングラムの言葉を遮るように。突貫したアルトアイゼンが、頭部にいるイングラム目掛けてステークを打ち込む。

『!』

『解き放たれたお前の内なる感情、確かに見せてもらった』

満足そうに話すイングラム。ステークは彼の喉元に触れる寸前で止められていた。

『ッ』

リヴァーレが銃砲と化している両腕から、エネルギー状にの手を発生させる。

キョウスケは本能的に機体を後退させると、振るわれた両腕の爪に両脚を切断されてしまう。

『フ…装甲固着前を狙うなどよくもやる』

リヴァーレの損傷個所が、まるで何もなかったかのように再生されていく。

『もう十分だ。お前達は現レベルのままキブツに保管する』

リヴァーレから怪しい光が放たれると、周囲にいた機体に異変が起きる。

『機体のモーメントがコントロールできない?!』

『奴が周辺空間を湾曲させているんだッ』

『…サマ師め。ならばもう2枚コール、だ』

他の2人が焦燥感に駆られる中、キヨウスケが冷静に呟くと。リヴァーレの頭上かた
ら、SRXとレオーネが突撃してくる。

『ツイン・クラッシュ・キイック!』

同時に放たれた蹴りが、リヴァーレへと炸裂する。

『フ、来たか』

だが、周囲に展開されているフィールドによつて、さしたるダメージは与えられてい
なかつた。

『イングラムッ!』

『もう逃がさん!ここで決着を着けるッ!』

今、鋼の巨神と黒獅子が裏切りの銃口と対峙する。

蛇のようにホワイトスター表面を悠々と這うジユデツカ。対するアリオールらは消
耗し、追い詰められていた。

『…ふむ、もう少し焦燥してもらおうか』

突如本隊へと向かっていくジユデツカは、大量のバグスを繰り出す。

『劣等サンプルに存在価値は最早ない。第三地獄トロメアに沈め』

波のように押し寄せるバグスの群れに飲み込まれていく本隊。これまでの戦闘で疲弊していた艦隊にとって、致命的なまでの損害が出てしまう。

『む?』

ジュデツカ目がけて無数の拳が迫る。フィールドによって弾かれるも、ジュデツカの動きが止まる。

弾かれた拳は、グルンガスト各機の元へ戻っていく。

『大黒落としは城攻めの常道。奴が要塞中枢であるならば、いかに守りが堅かろうと斬り倒すのみ』

『ああ、ここでケリを着けさせてもらおう』

ゼンガーの言葉に、ケンも同意する。

『ビアンのヴァルシオンと戦った時のフォーメーションだ。ミッションマニュアルの記録はあるなラトウニ?』

『!はい、アレンジ可能ですイルム中尉』

『そういうことなら、とっておきを喰らわせてやるぜクロ!シロ!』

『マサキ、それは!』

何かをしようとするマサキを、シロが慌てて止めようとする。

『るせえ!ここでやるつきやねえだろうが!!』

『魔装機神！お前は特に面白いサンプルだ。特別に、先に、確実に解体して保管してやる乗り手も共にな』

チャージを始めたサイバスターへと迫っていくジユデツカ。

『各機サイバスターを援護しろ、奴を近づかせなな！』

カイの指示に、各機がジユデツカの前に立ちはだかりながら攻撃を加えていく。

『ハッ！』

だが、ジユデツカはフィールドを張りながらもともせず押し寄せるのであった。

『ハイフィンガーランチャー！』

S R Xが両手指からビームを放つと、リヴァールは回避しながら小型砲台からビームを撃ち反撃する。

そこへ、レオーネが懐に飛び込んでブレードを振るい、腕の爪と交差した。

『隙間だらけのお前の心を操るのは実に容易かつたぞ。もう一度俺に身も心も預けてみるかアヤ？』

『少…佐…マイは…妹は…』

頭痛を堪えながら問いかけるアヤ。その問いに答えたのはギリウムであった。

『マイ・コバヤシは特脳研爆発事故で死んだと見せかけ、お前が拉致し『レビ・トラー』として操心した。そうだな？イングラム・プリスケン』

『…その通りだ、ギリラム・イエーガー』

『そして、ジェニファー・フォンダも同じく。…このホワイトスターにエアロゲイターは一人もいないそうだな？』

その言葉に一同に衝撃が走る。対しイングラムは不敵に嗤っていた。

『ならば、お前は何者だ？』

『フ…お互い様だ。だがここでお前の放浪も終わる。行けガン・スレイヴ』

リヴァーレがタイプRへと小型砲台からビームは放つと、SRXが間に入って防ぐ。

『…何者だ？そうだ、お前は一体誰だ？いつからイングラム・プリスケンじゃなくなったんだ』

『ハ！』

リウウセイの言葉に、イングラムの中から漏れるように不快な声が響く。

リヴァーレが手の形状をサーベルのようにし斬りかかると、レオーネがブレードで弾くと蹴り飛ばした。

『その機体に化けてから感じてた気持ち悪い気配。カーウアイ大佐達から感じてたのと同じだッ、お前が全ての元凶か！』

『それは素質開花の片鱗か？それとも幼さ故の直感か？面白い、我が元に来い。お前達の力は我らが先遣に相応しい』

『断るッ』

『で、あるか。ならば滅びよ。枷無きまま荒ぶる魂、それはいずれ十重とえ二十重たえの我が計画を妨げる存在になりかねん』

不良品を捨てるかのように言い捨てると、腕と小型砲台からビームを浴びせてくるリヴァール。

『クソツ熱量が！』

『計画だと？お前は一体!?!』

余りの弾幕に防戦一方になるレオーネとSRX。機体の負荷が増していくことに焦りが募っていく。

『リュウ、ライ、イサム君！念動フィールドであの機体の歪曲フィールドを中和するわ。接近して最大出力であの敵を斬って！あれは私達が倒さなければいけない敵よ』

『…大尉』

『了解だアヤ』

『ガッテンだ！』

一同が覚悟を決めていると。リヴァールは自身の前に小型砲台を展開させると胸部

から砲身を露出させ、小型砲台は五芒星のような紋様を描く。

『アヤ、ライ！』

『T-LINKフルコンタクト！』

『トロニウム・エンジンフルドライブ！Z・Oソード！刀身形成！』

対しSRXは、胸部装甲を展させしゾル・オリハルコニウム・ソードを取り出す。

『G・テリトリイ収束、出力最大！』

そして、レオーネはフィールドをブレードに収束させていく。

『この一撃で冥府へ堕ちよ。アキシオンバスター、デッド・エンド・シユート』

砲身から放たれた閃光は、五芒星を押し出しながら迫ってくる。

『天上天下ツ無敵剣！』

『グラビティ・スラッシュャー！』

リヴァールへと突貫したレオーネとSRXは、紋様へと互いの刃を突き立てる。

最初は拮抗するも、徐々に押されていってしまう。

『ぐッ』

『こんのおおおおおおお！』

『貴様らには斬れんよ。虚無へと還れ』

リヴァールが更に出力を上げようとした時、アルトアイゼン、タイプR、ビルトシュバインが小型砲台を破壊していく。

『歪曲フィールドで、本体には届かなくとも』

『子機が開いている。パワーゲートのバランスを崩す』

『イングラム。あなたに託された使命、今果たすわ』

紋様に亀裂が入っていくと同時に、突き立てられている刃が押し進んでいき。遂には紋様が碎け散り、刃がリヴァールの胴体を貫いた。

『『おおおッ!!!』』

そのままレオーネとSRXは加速していき、リヴァールをホワイトスター表面に叩きつけた。

リヴァールはエネルギー状の腕を発生させて振るい、両機を弾き飛ばす。その際にSRXのソードの刀身が折れる。

『念動、爆砕!!!』

リユウセイが念を送ると、折れた刀身がリヴァールを巻き込んで大爆発を起こすのであった。

どことも知れぬ空間にて。死神、あるいは悪魔のような2体の機動兵器がぶつかり

合っていた。

『お前は俺という存在を拒絶することはできない。俺達は1つになるのだ』

『そして数多の世界を彷徨えというのか。多くの者を失って!』

片方の機体に乗るイングラムの言葉に、もう片方の機体に乗る——リヴァーレが出現する直前に、彼に語り掛けていたのと同じ声を持つ青年が拒絶の意を示す。

『この運命を拒むというのなら、その呪われた機体を抹消するまでだ! 虚無へと帰れ!!』

『デイス・レヴよその力を開放しろ! テトラクテユス・グラマトン!!』

それぞれ胸部から魔法陣と砲身を展開させる。

『インフィニティ・シリンドラー——!』

『デッド・エンド・シュー——ツ!』

放たれた閃光が両者はおろか、空間までをも包み込んでいき——

「う……ん……は……？」

次にイングラムが目覚めた時。目の前に広がるのは先程までの何も無い神秘的な空間ではなく。様々な機器が置かれた人工的な空間であった。

「俺の名は……アウレフ……いや……」

記憶が曖昧となり困惑していると。何もなかった空間に、仮面をつけた顔がホログラ

ムで映し出された

『緊急非常コードの発信は、誤作動ではなかったようだな』

「お前は……？」

『…今、この時に憑依したか…因縁だな』

まるで、イングラムのことを知っているかのような口調の仮面の者は、声からして男のようである。その声に、おぼろげな記憶から何かが引き出されそうになる。

「ガッ!」

『だが、今なら取り込めるやもしれぬ』

まるでそれを遮るように、全身を見えない何かによって拘束されるイングラム。そして、それは徐々に彼の内側に入り込み塗り替えようとしていく。

「ぐッ……ぐ……う……」

『お前に枷を与える。今度こそ我が傀儡となるがいい』

膝を突き悶絶するイングラムに、男は一方的に話しかける。

『禁断の地より踏み出し者がいる。彼らは自ら結界を破つたのだ。これで我らはあの星に干渉できる……』

ホログラムに、ヒリユウ改の前身である艦影が映し出された。

『だが、愚帝や監察官より先に手を打たねばならぬ。切り札を手に入れるのは、我らゴッ

ゾオであらねばならぬ。任務を遂行せよアウレフ・バルシエム。我らは遠き地よりそれを見守ろう…」

ホログラムが消え、残されたイングラムは苦しみに苛まれながら、1つのポッドの元に辿り着く。

「俺の…代わりとなる者を…。生成プログラムに修正を…」

薄れゆく意識の中で、コンソールを操作していくイングラム。そのポッドにはヴィレッタと同じ姿をした女性が納められていた。

「今なら…せめてお前だけでも…枷を…」

『くッ…』

『まだ動くのか…!?!』

腹部から胴体の大半と片腕が抉り取られても動くリヴァーレに、リュウセイとイサムは強張った声を漏らす。

『…よくやったリュウセイ、イサム。これで俺は…枷から解き放たれた…』

『少佐!?!』

『イングラム隊長…あんたもやつぱり操られて…』

『少し違う…俺は地球人でもバルマー人でもない。任務遂行のためだけに造られた虚ろ

な存在に過ぎないからな』

そう話す間にも、リヴァーレの全身に亀裂が広がっていく。

『生と死の狭間にのみその自我を確立できる宿命……。だが……それも当然の報いか』

そして、亀裂は彼自身にまでも及んでいた。

『リュウセイ。心のまま進め、お前の母に育てられた心にままにな』

『！』

『ライ、後を頼む。己の能力を疑うな』

『隊長……』

『……アヤ。これからは過去に囚われず、新しい道を歩め』

『……イングラム……少佐……』

イングラムの本心は、リュウセイらの心に確かに刻まれていくのであった。

『イサム、お前と過ごした時間。あの時だけは、俺は自分として過ごせた礼を言う』

『少佐……。俺も楽しかったです……』

『……この先、何があっても挫けるな。お前なら必ず乗り越えられる』

その言葉を最後に、イングラムはリヴァーレ共々砕け散ってしまう。残ったのは大破

したR—GUNだけであった。

「(イングラム……。後は任せて、安らかに眠って……)」

その光景を見守っていたヴィレッタは、涙を流しながら一人黙禱を捧げるのであった。

『最終宣告を申し渡す。耐え切れぬ者は死ぬ』

ジュデツカは全ての手からビームを放ち、対峙しているハガネ・ヒリユウ隊に次々と被害が出ていく。

『壱式必殺剣ッ』

『貳式必殺剣ッ』

ブルックリンの駆るグルンガスト2号機と、クスハの駆るグルンガスト貳式がそれぞれ剣を手にし構える。

『計都羅喉（瞬獄）剣！』

互いに振るった刃は、それぞれ片手に掴まれ止められてしまう。

『八方的殺曼事凶天に目叩く凶ツ星ッ』

その間にイルムガルドの駆るグルンガスト1号機が、上昇しながら剣を構える。

『その名も！計都羅喉剣、暗・剣・殺！』

降下しながら必殺の刃を振るうも、これも手に掴まれ防がれる。

『悪くない。だが、私とジユデツカに魅入られたら終わりだよ?』

ジユデツカは変形を始め、その形を変えていく。

『最終地獄を見せてやろう』

蛇型に変形したジユデツカは縦横無尽に駆け巡り、その巨体を持つて押しつぶそうと襲い掛かって来た。

『糞オつ止まれッ。ジガンテ・ウラガーノツツ!!』

『各機集中砲火! 胴体: 頭部へ収束させろ!』

『はっはっはっはっ。足掻け! 足掻け!』

ジガンスクードは質量で押し止めようとし、他の機体は一斉に火器を浴びせるも。ジユデツカの勢いを衰えることはなかった。

『マサキ!』

『今ニヤ!』

『地獄は手前エが見てきやがれッ! コ・ス・モ・ノヴァ!!!』

シロとクロの合図に、マサキはチャージしていたエネルギーを開放させる。

サイバスターの周囲に展開された4つの魔法陣から放たれたエネルギーが、ジユデツカを挟み込むように光球を生み出し、そこから巨大な爆発を発生し巨体を飲み込む。

『カツ、私の念ごと…ズフィルード・クリスタルが…ジユデツカが焼かれる…?!』

爆発がまるで檻のようにジューテッカを包んでゆく。

『足りんなあ!』

だが、それを突き破り人型に戻ったジューテッカがサイバスターに迫る。

そんなジューテッカへ、零式とアリオール、ヴァルシオーネが立ちはだかる。

『やれ、リユーン!』

『どうなつても知らないからね!クロスマッシュャー!!』

前に並ぶアリオールに、ヴァルシオーネが手から螺旋状のエネルギーを放ち。それをブレイクフィールドで受けると、推進力にして加速するアリオール。

『零式斬艦刀、疾風ツ怒涛ツツ!!』

『貫け、ソニック・スマッシュャーツ!!』

斬艦刀を構え、フルブーストで突撃する零式と。機体を水平にし、横方向に回転しながらフィールドを弾丸状に収束させ両手のブレードを突き出して突撃するアリオール。

『チェストオオオオオオ!!』

アリオールに胴体を貫かれた上に、零式に両断されたジューテッカは遂に力尽き倒れ伏した。

『我らに絶てぬもの無し』

『終わりだな。手こずらせやがって』

ジユデツカの装甲が再生しようとするも、すぐに崩れ落ちやがて再生すらされなくなる。

『再生が…かからない？ジユデツカの自己修復能力を超過した？』

『マイ！』

敗北を受け入れられず啞然とするレビに、駆け付けたSRXからアヤが語り掛ける。

『思い出して！あなたの本当の名前はマイ・コバヤシ！私の妹なのよ、地球人なのよ！』

『愚かな…このネビーイームをジユデツカを操る私が地球人などと。私はレビ・トラー生粋のバルマー人であるぞ…』

『…やはり、他の奴ら同様に手遅れ、だな』

アリオールが止めを刺そうとすると、レオーネがそれを制止する。

『待てよ！そこまでしなくても…』

『生かしたところで、他の奴らのように『壊れる』だけだ。楽にしてやる方が幸せだろうよ』

『そうと決まった訳じゃない！元に戻る可能性だって…！』

『ふ、フフ…』

イサムとケンが言い争っていると、レビは嘲笑うように声を漏らす。

『…本当に愚かだお前達地球人類は。我らが兵器として在ることを拒むならば、この

ジユデツカを超える野卑な力を持つならば、お前達には滅びだけが与えられる……。そう、最後の審判者が目覚める』

『セプタギン、だと?』

ケンが疑惑の声を漏らすと、ジユデツカが突如浮かび上がり、地球目がけて飛び去ってしまう。

『空間転…位? いや違う何か引き寄せられて…。一体何に…』

その光景を見ていたりユウセイが、唾然とした声を漏らすと。地球内から現れた物体に、ジユデツカは取り込まれてしまった。

『何だ、あのでっかいのは!?!』

『間違いない、あれはメテオ3だッ』

仰天するイサムにケンが答える。

そうしている間にも、メテオ3の表面から結晶体が生えていきその姿を変えていった。

そして、メテオ3はその結晶体を一同と本隊へと次々と撃ち出していく。

『各機迎撃ッ!』

カイが叫ぶと、各々結晶体を迎撃するも。余りの物量に撃ち漏らした結晶体が本隊の艦艇や機体に突き刺さっていく。

『ヒツ!?!』

『何だ、機体が浸食されて——ッ』

突き刺さった結晶体は瞬く間に増殖していき、対象を飲み込んでしまう。

『これは、機体も搭乗員も諸共に金属結晶化されている!? 一体?』

『エアロゲイターの偵察機には、未知の自立・自覚型金属細胞が組み込まれていたそうよ』

ギリアムの疑問に、ヴィレッタが推測を述べる。

『レビ・トローラーが口にしていた、『ズフィルド・クリスタル』というのが恐らくその金属細胞のこと。そしてそのネットワーク中枢であり、収集した情報の集積システムがあの『ジユテツカ』』

『そうか、あのメテオ3そのものも『ズフィルド・クリスタル』の塊…。一切の選別もなく何もかも無差別に取り込む殲滅兵器!』

『…:ビアンのおっさんは、アレがただ情報が詰め込まれただけの技術の種ではなく。万が一エアロゲイターにとって、想定外の事態が起きた際に発動するカウンタープログラムも仕込まれていると見ていた。だから監視するために、軍事拠点として不便なアイドネウス島にDCの本拠を構えた。とはいえ、あんなモノでは意味もなかったか…』

面積を増大させていくメテオ3に、苦虫を噛み潰したような顔をするケン。巨大化する

るにつれ、撃ち出される結晶体の数も増加していた。

そして、遂には地球へも結晶体が撃ち出されてしまう。

『不味いよマサキ、あの弾地球にも!』

『くっ!リユウネ着いて来い!何とかサイフラッシュユで…』

『無理ニヤ!この位置からじゃ間に合わないニヤ!』

サイバスターとヴァルシオーネが慌てて追いかけてしようとすると、地球へ放たれた結晶体が全て消滅していった。

『な…グランゾン!?!』

『地表方向への攻撃は私とグランゾンが引き受けましょう。まあ、いつまででもという訳にはいきませんが』

『シユウ!テメエツ…!』

『どういうつもりだ…などと、今更言わないで下さいよマサキ。勿論この星を護っているのですよ見ての通り』

『ぐっ』

突然現れたシユウに不信感をあらわにするも、正論に何も言い返せなくなるマサキ。
「(滅びられては困るのですよ。少なくとも今はまだ)」

とはいえ、彼にも何らかも思惑はあるようではあるのだが。

『つーても、あんなのどうすんねん？』

『ジユデツカとやらがホワイトスターの中枢——心臓であったのなら、メテオ3にも核となる物がある筈だ。それを叩く』

『でも、質量が大き過ぎて特定のための観測を阻害していて…』

『ど真ん中にあるもんじゃない？そういうのってさ』

『構造的にも機能的にも、その確率は高いけど…』

イサムの推測に、自信があまり持てない様子で答えるラトウ二。

『これまでのことを考えれば、アレを仕向けた奴がここにきて小細工などしまい。遠距離攻撃では埒が明かん、殴り込んで直接叩く。来いイサム、フィールド持ちならある程度結晶体の浸食を抑えられるらしい。俺達の機体なら小回りが利く、突っ込むのに適任だ』

『ああ、分かった』

『エール、ヒリユウに残存戦力全てに援護させるよう要請しろ』

『ん、もうしてる。それでいくってさ』

相方の返答に、ケンは満足そうに口角を釣りあげる。

『うっしやるか、援護頼むラト』

『うん、信じてるからねイサム』

揺るぎない信頼を寄せてくれるパートナーに、通信越しにサムズアップで応えるイサム。

そして、全ての艦艇と機体から集中砲火が加えられ、メテオ3の一部が削り取られていく。

『イサム!』

『いつけえええレオーネエ!』

フルブーストで、その箇所目がけて突撃していくレオーネとアリオール。

『生きて帰って来いイサム!』

『あなたの人生、これからなんだからね!』

『可愛い弟君のために、お姉さん奮発しちゃうわよオ!』

ジャーダとガーネット、それにエクセレンがレオーネを援護していく、

『行けケン、兄貴分がケツ持ってやるからよ!』

『頼みます特務大尉!』

アリオールにはイルムガルド、リョウトが援護に入り、他のハガネ・ヒリユウ・クロガネ隊の面々もそれに続いていく。

次々と押し寄せる結晶体を粉碎していくと、レオーネとアリオールはメテオ3内部へと突入する。

両機はフィールドを最大出力で展開しながら突き進んでいくと、細胞のように結晶体が張り巡らされた空間へと出る。

『核は!?!』

『あれだ!』

空間の中心にある脳のような物体目がけ突貫すると、両機はブレードにフィールドを収束させる。

『砕けるオ!グラビティ・スラッシュャー!!』

『終われ、ソニック・スレイヤー!』

同時に構えた刃が核に振られる瞬間、核を突き破った腕が手をかざすと、見えない何かに弾き飛ばされる両機。

『なッ!?!』

『歪曲フィールド、だと!?!』

予想外の展開に、イサムとケンが驚愕していると、核に変化が起こる。まるで、卵が孵化するように核全体に亀裂が走り、左右に割れると中から何かの姿を現す。

『…よもや、ここまで至るとは。よかろう、褒美に我自ら絶望を与えよう。この『ズフィールド』でな』

リヴァールと対峙した時、イングラムを介していた声と共に、結晶体と同じ装甲素材

で構成された30mサイズの人型の機動兵器が立ちはだかるのであった。

第二十九話

『ライ、まだかッ』

『強制冷却した所で、これ以上の戦闘機動に耐えられるかどうか…』

イサムとケンがメテオ3内部に突入するより時を遡る。ホワイトスター表面にて、SRX内で焦れた声で急かすリユウセイに、各種モニタリングしているライデイスは険しい声で答える。

現状のSRXは、合体できたこと自体が奇跡とも言える程突貫の調整しかされておらず、これまでの強引な運用によって、いつ自壊してもおかしくない状態となっていたのだ。

『！外からのデータ転送？一体どこから』

突然送られてきた謎のデータを追跡すると、崩壊したりヴァーレの残骸の中に、大破状態で残されていたR-GUNから送信されているものであった。

『ツイン・ドライブ・トロニウム・バスターキャノンの試作制御プログラム…イングラム少佐の遺した…』

『それじゃー！』

『無理だ。あのR―GUNの状態で変形などできる訳ない』

差し込んだ一筋の光明に、リュウセイは歓喜の声を上げるも、ライデイスに現実的な問題を突きつけられる。

『リュウ、ライ。ここにはもう一基、トロニウム・バスターキャノンがある筈よ』

そんな二人に、アヤは側に落着している、ホワイトスター突入時、要塞を覆っていたフィールドを破壊した際にパージされたハガネの艦首を示すのであった。

『さあ、絶望せよ。圧倒的な力の前にッ』

ズフィールドが両腕を突き出すと、腕部と一体化している砲口から無数のレーザーが放たれる。

『イサムッ』

『わかつてる!』

レオーネとアリオールは散開しながら回避すると、左右から同時に斬りかかるが、フィールドに阻まれて本体には届かない。

それでも2体は攻撃の手を緩めず攻めようとする。

退路は既に再生した結晶によって塞がれていることもあるが、いずれにせよ命運を託してくれた者達のためにも、この場で後退という選択肢はどちらにもありえなかった。

『トロニウム搭載機ならともかく、貴様ら程度ではこのズフィールドに傷一つつけられんよ』

嘲笑うかのような声と共に、ズフィールドは両手を広げてそれぞれに向けると、放たれた衝撃波によって2機とも吹き飛ばされてしまう。

更にズフィールドの両肩にある突起物が射出されると、それが合わさり両刃剣へと変形し、それを手にすると一瞬でアリオールへと肉薄し上段から斬りつける。

『チッ！』

刃をシシオウブレードで受け止め、その反動を利用しながら機体を回転させながら逸らすと。カウンターで斬りつけるが、ズフィールドの姿がかき消えてしまう。

『ッ！』

咄嗟に振り返ると、ズフィールドがブレードを振り上げており、両手のブレードを交差させると、受け止めるも軽々と吹き飛ばされ刃に亀裂が入ってしまう。

『ケンツ!!』

レオーネが援護しようとするも、ズフィールド全身の突起物が分離し、レオーネを囲むとエネルギー波を受け拘束されてしまった。

『うああああああ!!?』

『そこで見ているがいい。己の無力さを』

そう言いながら斬りつけてきたアリオールを殴り飛ばすと、ズフィールドは巨体に見合わぬ速度でブレードによる連撃を加えていく。

アリオールは辛うじて耐えるも、完全に防戦一方となり、受けきれなかった刃が機体を斬りつけていく。

『足掻くな、受け入れよ己が運命をッ』

ズフィールドが突き出したブレードがアリオールの防御を崩すと、止めを刺さんと大きくブレードを振り上げた。

刃が触れる瞬間、今度はアリオールの姿がかき消える。

『ム?！』

相手を見失ったズフィールドの背後に衝撃が走った。

背後に回ったアリオールが横薙ぎに振るったブレードが、フィールドごとズフィールドを浅くだが斬りつけていた。

『凶に乗るなッこのド三流が!!』

反撃で振るわれたレーザーを、残像が残る程の速度が回避すると、四方に移動しながら攪乱しつつ次々と斬りつけていくアリオール。

『…ジエネレーターをオーバロードさせたか』

悪足掻きをと言いたそうに呟くズフィールド。

アリオールの手にしているブレードの刃には、今まで以上の出力のフィールドが覆っていた。だが、機体各部は無理やりに高められたエネルギーによる廃熱に耐えられず、徐々に融解を始めていた。

『うおらああああああ!!!』

『!』

アリオールと同じく、ジエネレーターをオーバロードさせて拘束を抜け出したレオーネが、突撃の勢いを乗せた蹴りを叩きつけると、フィールドに阻まれるもその衝撃で押し出される態勢が崩れるズフィールド。

その隙に、シシオウブレード改に備えられたスラストターも含め、全ての推進器を最大まで吹かしながら加速させた斬撃を叩きつけると、フィールドを破りズフィールドの左腕を斬り落とすことに成功する。

『叩き潰すツ!!』

距離を取ろうとするズフィールドをアリオールが先回りし抑え、そこにレオーネが確実に一撃を加えていく。

ダメージが蓄積され各部が破損してくズフィールド。右腕も切断し、最後の一押しと思われた瞬間。レオーネとアリオールにスパークが走ると動きが鈍っていく。

『限界か。特異能力を持たないクラス・ギボルにしては楽しませてもらったぞ』

まるで余興を楽しんでいたかのような嘲笑と共に、ズフィルードの破損部が本体から生えた結晶に包まれると再生していき、ダメージなどなかったかのように元通りとなつてしまった。

『動けッ動いてくれレオーネー…このままじゃラトが皆が!!』

『……』

必死に機体を動かそうとするイサムに、沈黙してしまったケン。

ズフィルードは右腕をレオーネへ向けると、砲口にエネルギーがチャージされていく。

『さあ、アウレフの後を追うが良い』

砲口からビームが放たれる寸前、アリオールが最後の力を振り絞るようにレオーネ目かけ加速し、そのまま蹴り飛ばすと、ズフィルードから放たれたビームに飲み込まれていく。

『ケンッ!!』

イサムが慌てて呼びかけるも、ビームが過ぎ去った後にはアリオールの姿は跡形もなく消え去っていた。

『無駄なことを…。順序が変わるだけで、結果は変わらぬのに』

『貴様ッアアアアアアアア!!』

哀れむように言い放つズフィールドに、激昂したイサムは、強制冷却させ動けるようになった機体を動かし突進させる。

だが、アリオールに蹴り飛ばされた際にブレードを手放してしまっており、今のレオーネには何も武装がなかった。

『無手とは野蛮な。やはり原始的種族だな』

蔑むように言いながらブレードを手にしたズフィールドは、向かってくるレオーネにタイミングを合わせ振り下ろす。

それを、レオーネは両手にフィールドを纏わせ、右手の手刀で受け流すと、左拳でズフィールドの頭部を殴りつけるも、フィールドに弾かれてしまう。

『そのような状態で足掻くか』

『ウラアアアアアアアアアア!!』

ズフィールドの言葉など意に返さず、ひたすらに殴り続けるレオーネ。しかし、ことごとくフィールドに阻まれ本体には届くことは――

『ム?』

ないと思われていた拳がフィールドを突き破り、ズフィールドの頭部に突き刺さる。そのことにズフィールドは僅かだが驚嘆しているようである。

『オオオオオオオ!!』

再びジェネレーターをオーバロードさせ、その負荷で自壊しながらも連続で殴り続けるレオーネ。その出力は先程以上のものであった。

『このプレッシャー。もしか、こやつ…』

鬼気迫る威圧感を放つイサムから、何かを感じ取った様子のズフィルード。その間にも猛攻は止まず、次々とレオーネの拳が突き刺さりダメージを受けていく。

『ッ！』

しかし、負荷に耐えられなくなったレオーネの左腕が肘から先から千切れ飛んでしまふ。その反動で動きが鈍った隙に、ズフィルードに頭部を掴まれてしまふ。

そして、流し込まれた電流がイサムに直接襲い掛かった。

『ウアアアア!!』

『この個体がアレに連なるものであれば、我が計画は大いに飛躍しようぞ』

イサムが気を失い、完全に沈黙したレオーネを見分するように掲げながら、高らかに笑うズフィルード。

そんなズフィルードを、外壁を突き破って来た膨大なエネルギーの奔流が襲い掛かった。

『！・ヌウウウウ!!』

空いている片手を突き出しフィールドで受け止めるも、その衝撃に押し込まれていく

ズファイルド。

やがてエネルギーの奔流が収まると、ズファイルドの纏っていたファイルドは剥がされ、焼かれた全身の装甲が溶解し亀裂が走っていく。

忌々し気に風穴の空いた外壁の先に視線を向けると、ハガネの艦首を破損した右腕に無理やり接続させたSRXがいた。

『トロニウムを用いた砲撃……。アウレフか！どこまでも私の邪魔をしてくれるッ!!』

これまでの尊大さが崩れた様に激昂するズファイルド。

メテオ3に指令を送り、外部にいる者達諸共排除しようとした瞬間、SRXに変わるように赤い機影が内部に突入してくる。

『キョウスケ中尉!』

『ああ、この賭け引き継がせてもらおうッ!』

リュウセイの声に応えるように、キョウスケは愛アルトアイゼン機を加速させていく。

欠損した脚部には大型のロケットブースターと一体化したものに換装されており、従来以上の加速力を持ってズファイルド目がけて突撃していくが、それを阻むように再生した結晶が襲い掛かる。

『俺もアルトも、これでは止まらない』

両手にそれぞれ保持したショットガン、弾倉を無理やり増加させたクレイモアとマシン

ンキャンオンで、右腕以外の四肢を引き裂かれながらも強引に押し通っていく。

『ただ、撃ち貫くのみツツッ!』

想定外の事態に動きを止めているズフィールドの胸部に、ありつたけのステークを叩きこんでいくアルトアイゼン。

その衝撃に亀裂が更に広がっていき、レオーネを手放すズフィールド。

『この、蛮族があ!!』

その身を形成する結晶が所々崩壊していくも、未だ健在のズフィールドは、アルトアイゼンのコックピット部を殴りつけ弾き飛ばす。

『羽虫どもめ。アウレフの悪足掻き諸共、因果地平の彼方へ消えよツツッ』

ズフィールドの全身から禍々しいエネルギーが放たれると、それがメテオ3にも伝播するように広がり周囲の空間が歪んでいく。

『己が罪を悔いて逝ねイツ。ジーベン・ゲバウトツ……!』

エネルギーを開放しようとしたまきにその時、背後から突き立てられた刃がズフィールドの胸部を——その内部に納められているコアごと刺し貫いた。

何が起きたのか理解できないズフィールドが背後を振り返ると、左腕と脚、翼を失ったアリオールがブレードを突き立てていた。

『地球の虫にはな、人間くらい簡単に殺せるのもいるんだよ。もつと勉強してから来な

!!』

『貴様アツ!』

ズフィールドから発せられていたエネルギーが減少し、空間の歪みが遅滞する。だが、ズフィールドは未だ活動を続けておりアリオールを排除しようとする。

今の一撃で、突き立てたブレードはいつ折れてもおかしくない程亀裂が走っており、推進器も機能しなくなったアリオールには成す術がなかった。

『エールウ!!』

『どっせいッ!』

ケンの呼び声に応えるように内部に突入してきたデイバイソンが、アリオールごとズフィールドに突進し押し出していく。

『!』

ケンの意図が読めずにいたズフィールドだが、進路上に動かないままのレオーネがいることに気がつく。

『イサム!!』

デイバイソンと共に突入していたビルドラプターが、主の手を離れ漂っていたシシオウブレード改を手にするるとレオーネ目がけて投げける。

そして、ラトウーニの呼び声に応えるように覚醒したイサムは、ブレードを手にする

と迫るズフィールドへ構える。

それを見計らったようにデイバイソンが自身だけ制動をかけると、残ったアリオールとズフィールドのみが慣性に従い突き進む。

『じゃあな、クソ野郎!!』

アリオールが蹴り飛ばすと、更に加速されたズフィールドがレオーネ目がけ押し出される。

『ガアアアアアアアアアアア!!』

渾身の力を振り絞りながら横薙ぎに振るわれたブレードを、ズフィールドは両腕を交差して受け止める。

『この程度で、このズフィールドがツツ』

『!!』

イサムは機体进行操作しようとするも、力が入らず視界が霞んでいく。

「(もう何も感じられない…。ここまで来たのに、指一つ動かせない…。俺は——)」
朦朧とする意識の中、諦観が心を支配しようとした瞬間——

——
イサム、
負けないで!!
生きて
帰って
来てツ
!!!

『!!!』

脳に直接響くような大切な人の声に、意識を引き戻されたイサム。レバーを握り締めると、両手にそれぞれ2人分の手が添えられた感覚を覚える。

「おばあちゃんと、それに誰だろう？でも、凄く暖かい——」

片方はとても懐かしい感覚であるが、もう片方はそれとは異なるもどこか懐かしさを覚える暖かさを持つていた。

それらの手からまるで力を分けてもらったようにイサムはレバーを動かし、機体を動かす。

それに応えるように、レオーネの停止しかけていたジエネレーターが最大値を超えて稼働していく。

『馬鹿な、このようなことが——』

受け止めていた腕部に刃が食い込んでいく光景に、驚愕を隠せない声を漏らすズフィールド。

『俺は、帰るんだアアアアアアアアアア!!!』

『!!!』

イサムから放たれたプレッシャーにズフィールドが怯むと、刃は更に食い込んでいく。

『チエストオオオオオオオツツツ!!!』

レオーネがブレードを振り抜くと、腕部を、そして腹部を両断されたズフィールドが崩壊を始めていく。

『この力…やはり、守護者のモリ…びと、の——』

塵となって消滅していく。ズフィールド。それを見届けると、イサムの意識は再び遠のいていくのであった。

エピローグ

ホワイトスター宙域

ジュデツカを失ったことでホワイトスターは機能を停止し、それに伴いエアロゲイターの起動兵器の全てがその機能を停止。そして、最終兵器であるメテオ3が崩壊したことで地球人類の勝利でオペレーションSRWが幕を閉じた。

現在は残存戦力による生存者の捜索と救助が行われており、ハガネ・ヒリュウ隊も参加していた。

そんな中、ラトウーニは自機のコックピットを開放すると、外部へ出る。

傍らには四肢を失い辛うじて原型を留めているレオーネがおり、自機を足場にして蹴ると無重力特有の浮遊感を感じながらコックピット目がけて跳ぶ。

レオーネへ辿り着き、手動開放用のコックを回すとハッチが開かれ、内部を覗き込むラトウーニ。

内部はモニターの殆どが死んでいるも、生き残っているモニターの光源が搭乗者であるイサムを照らし出していた。

眠っているかのように反応のない彼に身を寄せるラトウーニ。送られてくるバイタ

ルサインから異常は見られないも、一抹の不安は拭えず恐る恐るといった様子で外傷等を確認していく。

『んう…』

すると、イサムの瞼が薄つすらと開き寝惚け眼がラトウーニを捉える。

「んあラトおはよ〜」

のへ〜という擬音が聞こえそうな顔をしているイサムを見て、普段と変わらぬ彼にラトウーニは安堵の余り抱きしめるとああ…と感涙の声を漏らす。

『イサムツ良かった…！』

突然のことにイサムは何事かと困惑するも、脳が覚醒していくと共に目覚める前のことを徐々に思い出していく。

『勝ったんだよね俺達？』

『うん。ジャーダにガーネット、皆無事だよ。それに…』

『——ウオオオオよくやったケエン！流石あたしが惚れた男ヤツ!!!』

『暑苦しいんだよポケツ！おい！勝手にヘルメットを取るな、うむう…!?!』

通信機からケンとエールの愛の語らい（○）が聞こえてきたのでとりあえず切る2人。

『ねえ、ラト』

『何イサム？』

『戦いの最後、もう駄目だつて諦めそうになった時間こえたんだ。ラトの応援してくれる声だ。だから頑張れたんだ、ありがとう』

そういうとイサムは、ラトウーニの背中に両腕を回すとそっと抱きしめた。

突然のことにラトウーニは最初は驚き顔を赤くするも、すぐに受け入れて緊張を解く。

『それで気づいたんだ。君がいたから頑張つてこれたんだつて。君が俺にとって大切な人なんだつてことが』

『それつて…』

『イサム・トウゴウはラトウーニ・スウボータのことを愛しています。だから、その、これからも君の側にいたいんだ。駄目、かな？』

その言葉に感極まったラトウーニは思わず涙を流す。そのことに嫌われたのかとイサムがギョツとするも、ラトウーニは慌てて首を横に振る。

『ごめん違うの。同じなんだつてわかつて嬉しくて、だから』

『えつと、じゃあ…』

『私もイサムのことが好き、大好き。ずっと一緒にいたい』

イサムの背に両腕を回し抱き着くラトウーニ。

互いの存在を確かめ合う2人を、地球の陰から顔を出した太陽の光が祝福するように

照らすのであつた。

伊豆基地 食堂

ホワイトスター攻略戦から暫しの時が流れ。ハガネ・ヒリユウ隊は解散となり、軍属の者は元居た所属に戻るか、新設される部隊への移動。民間人であつた者は皆軍に留り所属していた部隊で活動するか、民間組織へ出向する等それぞれが新たな道を歩みだしていた。

そんな中。イサムもまた、己の道を決めようとしていた。

カイに呼び出されて向かうと。ジャーダ、ガーネット、それにラトウーニもいた。

「妊娠?!」

「うん、そうなんだ。だからあたしとジャーダは軍を離れることにしたの」

ガーネットからの告白に素つ頓狂な声をあげるイサム。

作戦後病院送りとなり、退院して早々にこのようなことを言われれば無理もないが。

「おめでとうございます! 式はいつですか!」

「とりあえず、落ち着いてからってことだな。皆招待するよ」

「はい! 絶対行きます!」

我がことのように喜んでくれるイサムに、ジャーダとガーネットは揃って笑みを浮かべる。

「あれ？お2人が軍を止めるとしてラトは??？」

「私は軍に残るの。オウカ姉様やアラド、ゼオラ。スクールで一緒にいた人達を探したいの。多分、私みたいに機動兵器のパイロットになっているだろうから、軍にいる方が見つけられる確率が高いと思うの…」

イサムの隣に座るラトウーニは俯きながら話す。軍を離れても引き取ってくれると言ってくれたジャーダとガーネットに、罪悪感を感じてしまっているようであった。そんな彼女の手に、イサムは自分の手をそつと重ねた。

「そんな顔をしないでラトウーニ。あなたが自分で生き方を選んでくれてあかし達は嬉しいんだから。例え離れ離れになってもあかし達は家族よ。ね、ジャーダ」

「当たり前さ。お前は俺達の…かけがえのない娘さ」

「ジャーダ、ガーネット。…ありがとう」

2人からの暖かい言葉に、思わず涙が流れるラトウーニ。そのやりとりを見ていたイサムは号泣していた。

そんな彼に、カイが話しかける。

「そういうこともあり、ラトウーニは俺が隊長を務めることになった教導隊で預かるこ

とになってな」

「教導隊？再編されるんですか？」

「ああ。エアロゲイターを退けたとはいえ、同じようなことが起きんとも限らんし、未だ抵抗を続けるDC残党もいるからな。TC—OSの更新は必須と上は判断したんだ。それでイサム、お前もウチに来ないか？」

「俺が教導隊に？軍属じゃないですよ？」

「そこはリュウセイらと同様の扱いにするよう、レイカー指令も取り計らってくれるそうだ。お前が構築している近接——特に剣戟モーションはPTの発展に大いに貢献できる。是非とも来てもらいたい。それにお前さんらとしてもその方が都合が良かろう？」

な、とカイが意味深な目でラトウーニを見ると、彼女は顔を赤くして恥ずかしそうに俯いた。

「そういうことなら喜んで！よろしく願いますッ！」

「イサム。ラトウーニのこと頼むな。俺達の分まで守ってやってくれ」

「はい、ジャーダさん！ラトは俺が絶対に守ります、いつまでもずっと！」

「~~~~~」

力強さを感じさせられるイサムの言葉に、茹で上がりそうな程に顔が赤く染まるラ

トウーニ。

「お願いねイサム。もう、あなたも私達の家族だからね。ラトウーニと一緒に帰って来るのを待つてるわ」

「ありがとうございます、ガーネットさん！必ず2人で帰ってきます!!」

家族という言葉に余程嬉しいのか、今にも飛び跳ねんばかりに満面の笑みをイサムは浮かべるのであった。

日本九州

イサムはリシユウ、そしてラトウーニと共に故郷の地にある霊園を訪れていた。

整然と並ぶ墓石の内、稲郷家と刻まれた墓石の前で手を合わせ黙祷を捧げる3人。

「あのね、おばあちゃん。俺ねケンに会ったよ。一発ぶん殴ってやるつもりだったけど、あいつなりに色々考え直しておばあちゃんのこと償おうとしているみたいなんだ。だから、全部って訳じゃないけどできる限りは赦そうって思う。∴それでいいんだよねおばあちゃん」

「ああ。シノもそうすべきだと言ってくれるさ」

「そういえば、おじいちゃんはクロガネにいた時ケンと話したの?」

「いや、どうにも避けられていたようでの。まあ、時が来れば自ずとそういう機会もある
うよ」

顎を撫でながらカッカカッカと笑うリシュウ。

「では、僕は住職殿と話すことがあるので」

「うん、わかった」

離れて行く祖父を見送ると、イサムはラトウニと共に再び墓石に向き合いながら
しゃがむ。

「それとねおばあちゃん。俺人生をかけて護りたい大切な人ができたんだ。紹介する
ね」

「ラトウニ・スウボータです。イサムのおかげで今の自分が好きになれて、こんな私で
も生きていていいんだって思えるようになった。だから、これからずっと彼を支え
ていきます」

語り終わると、どちらともなく手を繋ぎ合うイサムとラトウニ。そこにリシュウが
戻って来た。

「報告は終わったかの2人とも。そろそろ帰ろうか」

「はーい。じゃあ、また来るねおばあちゃん。行こうラト」

「うん、イサム。それではシノさん」

立ち上がると、寄り添うようにして歩いていく2人。その姿を見て、リシユウは満足そうに微笑みながら後に続こうとすると、何かに気づき振り返る。

墓石の前に自分と同じように微笑んでいる妻が何かを語り掛ける。

「ああ、そうじゃのシノ……。『あの子達』がどのような人生を送つていくか、楽しみよな。出来る限りそれを見送つてから、儂もそちらに行くでの」

リシユウは、誰もいない木影に視線を向け感慨に耽つていると、孫が自分を呼ぶ声が聞こえ、それに応えると歩み出すのであつた。

イサムらが霊園を去ろうとしていた時刻。近くにある歩道を2人の男女が歩いていった。

「ねえ、花くらい添えても良かったんじゃない？」

「いらん。目的は十分に果たした」

両手を頭の後ろで組みながらばやくエールに、ケンは素っ気なく答える。

「こそこそ隠れて立って、お爺様には気づかれてたわよ、あれ」

「だろうな」

「いい加減頭くらい下げに行つたら？」

「やることをやったら斬られに行く。そう長くもかからん」

変わらず意地を張る恋人に、エールはやれやれと言いたそうに溜息をつきながら話題を変える。

「てか、顔も見せないのに何しに来た訳よ？」

「お前の顔を見せに来ただけだ。あの婆さんなら気づいてるだろうよ」

「にや!？」

予想外の告白に目を点にして足を止めるエール。そんな彼女に、ケンは一瞬呆れたような表情で横顔だけ向ける。

「何ボサツとしてやがる。それくらいでいちいち驚くな」

「いやいや無理言うなって、って置いてくなく!」

抗議を無視して歩き続けるケンに、エールは慌てて駆けだし、追いつくと勢いよく腕に抱き着いた。

「んで、このままバン大佐と合流すんの？」

「ああ。色々和我儘を聞いてもらったからな。何か土産を見繕っていかんとな」

「ふ〇つしー人形とかどうよ？」

「好きだなお前…」

「ええやん!あのずんぐりむっくりした体形で、キビキビ動いて体張るところなんて最

「高やん!!」

拳を握り締めて熱く語る相方の感性に呆れながら、無視すると面倒なので一応聞いておくケン。

「あんたが行くならどこでも行くけど。エルザム少佐やクロガネの人達と別れるのは寂しいよねー。ご飯美味しかったし」

「あの人がDCでやれることはもうないからな。俺はただくだらんプライドを捨てきれんだけだ」

「弟君——ライバルに負けたまままでいたくないんでしょ? いいじゃん、男ならそれくらいハングリーでなきや」

にしし、とにこやかに笑うエールに、釣られるように口角を僅かに吊り上げるケン。

「ありがとうな…」

「お? 今何だった、ねー何だったよ!!」

「何も」

抱き着いていた腕を振り回しながら騒ぎ出す相方を、好きにさせながら、ケンは人々の喧騒に紛れていくのであった。

????

辺り一面に美しき花が咲き誇る平原を、晴れ渡る空から暖かな日差しが降り注ぎ、様々な動物がのどかに暮らしており。まるで桃源郷を思わせる異世界のような空間、その中心に天高くそびえる山の頂に、数人の男女の姿が見えた。

「彼女が目覚めたとな？」

「はい、ほんの僅かな瞬間ではありましたが……」

禿頭と蓄えた白い髭が印象的な、いかにもな仙人の格好といった老人の言葉に、狐の尾のような髪と、蓄えた髭の壮年の男が跪きながら答える。

「それと同時に、『彼の者』に近しい反応も確認できました」

「……そうか。あの者の血を引く者が生きておったか。それは善哉、善哉」

どこか感慨深そうに髭の撫でる老人。すると、中性的な容姿の青年が不快そうに鼻を鳴らす。

「禁忌を破り『守り人』の使命を捨て裏切った男の子など、今すぐ処分すべきではないのか？」

「まあ、そう急くこともないんじゃないかい？『アレ』を扱えるのは守り人の血筋だけだからね。上手くこちら側に引き込めればこれ以上ない力になる。禁忌を破って生まれただからこそ、今までにない強力な守り人になってくれそうじゃないか」

青年の言葉に、白いスーツを身に纏った紳士然とした青年が、岩場に足を組んで腰かけており、頭にかぶっている白色のシルクハットのつばをいじりながら軽い口調で話す。

仙人を思わせる服装をしており、厳格さを感じさせる威厳を放つ一団の中でも、身に纏う雰囲気も合わせ一際異彩を放っていた。

「何を馬鹿な！穢れきつた存在を我らの内に入れようと言うのか!？」

「しかし、かつての『大戦』で我らの力が弱まっているのも事実。新たな『巫女』もおらぬ現状、それも一つの手ではあろう」

「しかし……!」

「我らも目覚めたばかり。下界の情勢を見極めながら、暫し様子を見ても良かろう。彼の者が我らが同志に加えるに足るかそれとも断罪すべき者か、な」

「僕達が力を蓄えるまで、この星の守りは暫し下界の者達に委ねないといけないからね。今すぐ処分するより『百邪』なんかと戦わせていた方が有意義だろうさ。その方が我らが『神』への償いになると思うけど?」

憤慨する中性的容姿の青年に、老人とシルクハットの青年が諭すように語り掛ける。

「……いいだろう、刻が来るまでは待とう。だが、断罪が必要であるならば——」

「無論、その刻は彼の者同様裁きを与えよう」

老人の言葉に、中性的容姿の青年は一応は納得した様子であった。

「『友』よ。そなたが命をかけて遺したのは、果たして『希望』か『災厄』か。願わくば——」

老人は瞑想するように目を伏せながら、一人心中で思いを馳せるのであった。

?????

仙人を思わせる集団がいる山の内部。その中心部にある空間に、クリスタル上の六角形の物体が宙に浮いていた。

その内部には一人の女性が眠るように納められ、クリスタルの真下の地面には五芒星が描かれており、壁には同じ模様が描かれた札が無数に張り巡らされていた。その様相はまるで、クリスタルをひいてはその中身を封じ込めているかのようであった。

クリスタルから発せられる、僅かな光だけが照らす薄暗い空間。そこにただ一人存在している女性の容姿は、イサムと瓜二つのものであった——